

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(96)

— 新種子島空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集 —

SAN KAKU YAMA

# 三角山遺跡群(3)

(三角山 I 遺跡)

## 第 1 分冊

縄文時代草創期 編

2006年1月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書  
(96)

三角山遺跡群(3)  
(三角山 I 遺跡)

第1分冊

二〇〇六年一月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

## 序 文

この報告書は、新種子島空港建設に伴って、発掘調査された熊毛郡中種子町に所在する三角山Ⅰ遺跡の記録です。三角山Ⅰ遺跡は中種子町の北端に位置し、種子島で最も高い分水嶺の尾根上に立地する、主に、縄文時代草創期から前期にかけての複合遺跡です。石蒸し料理の跡と思われる集石や、石器製作跡などが多数発見されたことから、狩猟採集をしていた人々の根拠地であったことがうかがえます。特に、約1万年前の住居跡や土器は、土器を使い始めた頃の生活や縄文時代人の行動パターンを知る上に極めて重要で、マスコミ等にもたびたび取り上げられ、全国的に注目を集めています。

こうした遺跡の成果が積み上げられることによって、種子島の、ひいては全国における歴史像の解明に結び付いていくものと期待します。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた県土木部、中種子町教育委員会、ならびに発掘調査に従事された地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成18年1月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 上 今 常 雄



## 報告書抄録

ふりがな	さんかくやまいせきぐん (3) さんかくやまいちいせき							
書名	三角山遺跡群 (3) (三角山 I 遺跡)							
副書名	新種子島空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第2集							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第96集							
編著者名	藤崎光洋・中村和美							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号							
発行年月日	2006年1月10日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査起因
		市町村	遺跡番号					
さんかくやまいちいせき 三角山 I 遺跡	かこしまけん 鹿児島県 くまげけん 熊毛郡 なかつねちょう 中種子町 すななか 砂中 さんかくやま 三角山	4680	58	30° 36' 20"	130° 59' 35"	19950123~19950324 19950509~19960321 19960508~19970318 19970421~19970521 19980506~19980924 19990510~19990921 20001004~20010226 20010703~20011127 20020902~20030128	58,620m <sup>2</sup>	新種子島 空港建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
三角山 I 遺跡		縄文時代草創期  縄文時代早期  縄文時代前期  古墳時代 古代	竪穴住居跡 集石 土坑 石器製作跡 集石 石器製作跡  集石 土坑	隆帯文土器, 打製石鏃, 磨製石鏃, 楔形石器, 打製石斧, 磨製石斧, 礫器, 石核, 砥石, 磨石・敲石, 石皿 土器 (塞ノ神式, 平椀式, 苦浜式ほか), 打製石鏃, 磨製石鏃, 石匙, 石錐, 楔形石器, スクレイパー, 磨製石斧, 礫器, 磨石・敲石, 石皿, 台石, 剥片, 玦状耳飾, トロトロ石器 土器 (轟式, 曾畑式, 深浦式, 南島系), 打製石鏃, 石匙, スクレイパー, 石槍状製品, 打製石斧, 磨石, 石皿, 石錘, 砥石, 剥片 能野式 土師器				
要約	三角山 I 遺跡では縄文時代草創期から古代までの遺構・遺物が発見された。特に草創期の竪穴住居跡と豊富な遺物量は、この時期の生活を考察する上で貴重な遺跡となった。また、早期の遺構・遺物も豊富で、早期後葉から前期前葉にかけての土器の変遷を確認することができ、胎土の状況や石材の多様性から島外との交流も活発であったことがうかがえる。							



第1図 三角山I遺跡の位置 (1:25,000)

## 例 言

- 1 本報告書は、新種子島空港建設に伴う三角山 I 遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。同事業に関しての報告書刊行は2回目となるが、平成14年度に、「新種子島空港建設による主要地方道西之表・中種子線付替え道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 三角山 I 遺跡 (P 地点)」を刊行しているため、通算して「新種子島空港建設に伴う三角山 I 遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 三角山遺跡群(3)(三角山 I 遺跡)」とした。
- 2 発掘調査は、鹿児島県土木部空港対策室からの受託事業として、平成6～14年度に鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センターと略す）が実施した。
- 3 発掘調査については、中種子町教育委員会や熊毛支庁土木課空港建設室の協力を得た。
- 4 本報告書の執筆は、藤崎光洋と中村和美が担当した。ただし、付録の「化学分析・同定の結果」については、平成17年度以外は民間委託である。なお、平成17年度については、小林謙一氏（国立歴史民俗博物館）のご厚意によるものである。
- 5 出土遺物の整理復元作業等は、埋文センターの担当職員と整理作業員が行い、実測・製図の一部とデジタルデータ作成は民間委託した。
- 6 本報告書で使用した写真図版のうち、発掘調査現場の撮影は、各年度の調査担当職員が行い、遺物撮影については、鶴田静彦・福永修一・吉岡康弘・横手浩二郎・西園勝彦が行った。
- 7 本報告書に用いたレベル数値は海拔絶対高である。遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・図版の番号は一致し、掲載した遺構・遺物の縮尺はそれぞれの挿図に呈示してある。また、遺物の色調は「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）2001年度版による。
- 8 本遺跡の出土遺物は、埋文センターが一括して保管し、一部は鹿児島県上野原縄文の森展示館に展示している。



目 次  
本文目次

(第1分冊)

序 文	1
報告書抄録	2
遺跡位置図	3
例 言	4
目 次	5
第I章 発掘調査の経過	
第1節 調査に至るまでの経過	9
第2節 調査の組織	
1 発掘調査の組織	9
2 報告書作成事業の組織	9
第3節 日誌抄	10
第4節 整理作業の概要	
1 報告書作成業務の経緯	12
2 発掘調査及び報告書作成業務従事者	12
第II章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的・自然的環境	13
第2節 歴史的環境	13
第III章 発掘調査の概要	
第1節 確認調査の概要	18
第2節 本調査の概要	
(1) 三角山I遺跡	18
(2) 基本土層	21
第3節 遺構・遺物の概要	
1 遺跡全体について	27
2 遺構・遺物の番号・分類について	27
3 縄文時代草創期(V層)の概要	27
4 縄文時代早期(III層)の概要	28
5 縄文時代前期(IIa層)の概要	29
6 古墳時代以降(I・IIa層)の概要	30
第4節 縄文時代草創期(V層)	
(1) 遺 構	33
(2) 遺 物	
① 土 器	84
② 石 器	115

(第2分冊)

第5節 縄文時代早期(III層)	
(1) 遺 構	3
(2) 遺 物	
① 土 器	41
② 石器・石製品	72
第6節 縄文時代前期(IIa層)	
(1) 遺 構	147
(2) 遺 物	
① 土器・土製品	160
② 石 器	171
第7節 古墳時代以降(I・IIa層)	
(1) 遺 構	206
(2) 遺 物	210
① 土 器	210
第IV章 発掘調査のまとめ	211
付 録 科学分析・同定の結果	241
あとがき	

(第3分冊)

写真図版

挿図目次

(第1分冊)

第1図 遺跡位置図	3
第2図 周辺遺跡位置図	15
第3図 三角山遺跡群(新種子島空港建設予定地)	17
第4図 三角山I遺跡トレンチ配置図(1)	19
第5図 三角山I遺跡トレンチ配置図(2)	20

第6図 土層柱状図	21
第7図 土層断面図(1)	22
第8図 土層断面図(2)	23
第9図 土層断面図(3)	24
第10図 土層断面図(4)	25
第11図 土層断面図(5)	26
第12図 グリッド図	31
第13図 遺物分布図・立面図位置	32
第14図 縄文時代草創期遺構配置図(A地区)	34
第15図 縄文時代草創期遺構配置図(B・C地区)	35
第16図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図	36
第17図 1号竪穴住居跡(1)	37
第18図 1号竪穴住居跡(2)	38
第19図 2号竪穴住居跡(1)	39
第20図 2号竪穴住居跡(2)	40
第21図 竪穴住居跡内の遺物(1)	41
第22図 竪穴住居跡内の遺物(2)	42
第23図 竪穴住居跡内の遺物(3)	43
第24図 竪穴住居跡内の遺物(4)	44
第25図 竪穴住居跡内の遺物(5)	45
第26図 ビット群1	46
第27図 ビット群2	47
第28図 土坑1・遺構内遺物	48
第29図 土坑2	49
第30図 礫群(1)	50
第31図 礫群(2)・遺構内遺物	51
第32図 礫群(3)	52
第33図 礫群(4)・遺構内遺物	53
第34図 礫群(5)・遺構内遺物	54
第35図 礫群(6)・遺構内遺物	55
第36図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況全体図	56
第37図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(1)	57
第38図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(2)	58
第39図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(3)	59
第40図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(4)	60
第41図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(5)	61
第42図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(6)	62
第43図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(7)	63
第44図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(8)	64
第45図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(9)	65
第46図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(10)	66
第47図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(11)	67
第48図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(12)	68
第49図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(13)	69
第50図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(14)	70
第51図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(15)	71
第52図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(16)	72
第53図 縄文時代草創期(V層)遺物出土状況図(17)	73
第54図 遺物分布立面図(1)	74
第55図 遺物分布立面図(2)	75
第56図 遺物分布立面図(3)	76
第57図 遺物分布立面図(4)	77
第58図 遺物分布立面図(5)	78
第59図 遺物分布立面図(6)	79
第60図 遺物分布立面図(7)	80
第61図 遺物分布立面図(8)	81
第62図 縄文時代草創期土器分類(1)	82
第63図 縄文時代草創期土器分類(2)	83
第64図 縄文時代草創期の土器(1) 1-a類	85
第65図 縄文時代草創期の土器(2) 1-b類	86
第66図 縄文時代草創期の土器(3) 1-c類	87
第67図 縄文時代草創期の土器(4) 2-a・2-b・2-c・3-a類	88
第68図 縄文時代草創期の土器(5) 3-a類	89
第69図 縄文時代草創期の土器(6) 3-a類	90
第70図 縄文時代草創期の土器(7) 3-b類	91
第71図 縄文時代草創期の土器(8) 3-b・3-c類	92

第72図	縄文時代草創期の土器 (9) 4-a類	93
第73図	縄文時代草創期の土器 (10) 4-a類	94
第74図	縄文時代草創期の土器 (11) 4-b・4-c類	95
第75図	縄文時代草創期の土器 (12) 4-c類	96
第76図	縄文時代草創期の土器 (13) 5-a類	97
第77図	縄文時代草創期の土器 (14) 5-a類	98
第78図	縄文時代草創期の土器 (15) 5-a類	99
第79図	縄文時代草創期の土器 (16) 5-b類	100
第80図	縄文時代草創期の土器 (17) 6-a類	101
第81図	縄文時代草創期の土器 (18) 6-b類	102
第82図	縄文時代草創期の土器 (19) 6-b類	103
第83図	縄文時代草創期の土器 (20) 6-b類	104
第84図	縄文時代草創期の土器 (21) 6-b類	105
第85図	縄文時代草創期の土器 (22) 6-c類	106
第86図	縄文時代草創期の土器 (23) 7-a類	107
第87図	縄文時代草創期の土器 (24) 7-b・7-c・8-a・8-b類	108
第88図	縄文時代草創期の土器 (25) 9類	109
第89図	縄文時代草創期の土器 (26) 10類	110
第90図	縄文時代草創期の土器 (27) 11,12,13-a・13-b,14類	111
第91図	縄文時代草創期の土器 (28) 15類	112
第92図	縄文時代草創期の土器 (29) 15類	113
第93図	縄文時代草創期の土器 (30) 15類	114
第94図	縄文時代草創期の石器 (1)	117
第95図	縄文時代草創期の石器 (2)	118
第96図	縄文時代草創期の石器 (3)	119
第97図	縄文時代草創期の石器 (4)	120
第98図	縄文時代草創期の石器 (5)	121
第99図	縄文時代草創期の石器 (6)	122
第100図	縄文時代草創期の石器 (7)	123
第101図	縄文時代草創期の石器 (8)	124
第102図	縄文時代草創期の石器 (9)	125
第103図	縄文時代草創期の石器 (10)	126
第104図	縄文時代草創期の石器 (11)	127
第105図	縄文時代草創期の石器 (12)	128
第106図	縄文時代草創期の石器 (13)	129
第107図	縄文時代草創期の石器 (14)	130
第108図	縄文時代草創期の石器 (15)	131
第109図	縄文時代草創期の石器 (16)	132
第110図	縄文時代草創期の石器 (17)	133
第111図	縄文時代草創期の石器 (18)	134
第112図	縄文時代草創期の石器 (19)	137
第113図	縄文時代草創期の石器 (20)	138
第114図	縄文時代草創期の石器 (21)	139
第115図	縄文時代草創期の石器 (22)	140
第116図	縄文時代草創期の石器 (23)	141
第117図	縄文時代草創期の石器 (24)	142
第118図	縄文時代草創期の石器 (25)	143
第119図	縄文時代草創期の石器 (26)	144
第120図	縄文時代草創期の石器 (27)	145
第121図	縄文時代草創期の石器 (28)	146
第122図	縄文時代草創期の石器 (29)	147
第123図	縄文時代草創期の石器 (30)	148
第124図	縄文時代草創期の石器 (31)	149
第125図	縄文時代草創期の石器 (32)	150
第126図	縄文時代草創期の石器 (33)	151
第127図	縄文時代草創期の石器 (34)	152
第128図	縄文時代草創期の石器 (35)	153
第129図	縄文時代草創期の石器 (36)	154
第130図	縄文時代草創期の石器 (37)	155
第131図	縄文時代草創期の石器 (38)	156
第132図	縄文時代草創期の石器 (39)	157

**(第2分冊)**

第1図	土坑 1	3
第2図	縄文時代早期遺構配置図 (A地区)	4
第3図	縄文時代早期遺構配置図 (B地区-1)	5
第4図	縄文時代早期遺構配置図 (B地区-2)	6

第5図	縄文時代早期遺構配置図 (C地区)	7
第6図	集石 (1)	8
第7図	集石 (2)	9
第8図	集石 (3)	10
第9図	集石 (4)	11
第10図	集石 (5)	12
第11図	集石 (6)	13
第12図	集石 (7)	14
第13図	集石 (8)	15
第14図	集石 (9)	16
第15図	集石 (10)	17
第16図	集石 (11)	18
第17図	集石 (12)	19
第18図	集石 (13)	20
第19図	集石 (14)	21
第20図	集石 (15)	22
第21図	集石 (16)	23
第22図	集石 (17)	24
第23図	集石 (18)	25
第24図	集石 (19)	26
第25図	集石 (20)	27
第26図	石坂式土器集中遺構	28
第27図	石坂式土器	29
第28図	縄文時代早期 (Ⅲ・Ⅳ層) 遺物出土状況全体図	31
第29図	縄文時代早期 (Ⅲ・Ⅳ層) 遺物出土状況図(1)-1	32
第29図	縄文時代早期 (Ⅲ・Ⅳ層) 遺物出土状況図(1)-2	33
第30図	縄文時代早期 (Ⅲ層) 遺物出土状況図 (2)	34
第31図	縄文時代早期 (Ⅲ層) 遺物出土状況図 (3)	34
第32図	縄文時代早期 (Ⅲ層) 遺物出土状況図 (4)	35
第33図	縄文時代早期 (Ⅲ層) 遺物出土状況図 (5)	36
第34図	縄文時代早期 (Ⅲ層) 遺物出土状況図 (6)	37
第35図	縄文時代早期 (Ⅲ層) 遺物出土状況図 (7)	38
第36図	縄文時代早期 (Ⅲ層) 遺物出土状況図 (8)	39
第37図	遺物分布立面図	40
第38図	縄文時代早期の土器 (1)	43
第39図	縄文時代早期の土器 (2)	44
第40図	縄文時代早期の土器 (3)	45
第41図	縄文時代早期の土器 (4)	46
第42図	縄文時代早期の土器 (5)	47
第43図	縄文時代早期の土器 (6)	48
第44図	縄文時代早期の土器 (7)	49
第45図	縄文時代早期の土器 (8)	50
第46図	縄文時代早期の土器 (9)	51
第47図	縄文時代早期の土器 (10)	52
第48図	縄文時代早期の土器 (11)	53
第49図	縄文時代早期の土器 (12)	54
第50図	縄文時代早期の土器 (13)	55
第51図	縄文時代早期の土器 (14)	56
第52図	縄文時代早期の土器 (15)	57
第53図	縄文時代早期の土器 (16)	58
第54図	縄文時代早期の土器 (17)	59
第55図	縄文時代早期の土器 (18)	60
第56図	縄文時代早期の土器 (19)	61
第57図	縄文時代早期の土器 (20)	62
第58図	縄文時代早期の土器 (21)	63
第59図	縄文時代早期の土器 (22)	65
第60図	縄文時代早期の土器 (23)	66
第61図	縄文時代早期の土器 (24)	67
第62図	縄文時代早期の土器 (25)	68
第63図	縄文時代早期の土器 (26)	69
第64図	縄文時代早期の土器 (27)	70
第65図	縄文時代早期の土器 (28)	71
第66図	縄文時代早期の石器 (1)	73
第67図	縄文時代早期の石器 (2)	74
第68図	縄文時代早期の石器 (3)	75
第69図	縄文時代早期の石器 (4)	76

第70図	縄文時代早期の石器 (5)	77	第136図	縄文時代早期の石器 (71)	145
第71図	縄文時代早期の石器 (6)	78	第137図	縄文時代早期の石器 (72)	146
第72図	縄文時代早期の石器 (7)	79	第138図	縄文時代前期遺構配置図	147
第73図	縄文時代早期の石器 (8)	80	第139図	土坑1・メンヒル?	148
第74図	縄文時代早期の石器 (9)	81	第140図	土坑1の遺構内遺物	149
第75図	縄文時代早期の石器 (10)	82	第141図	土坑2	150
第76図	縄文時代早期の石器 (11)	83	第142図	集石 (1)	151
第77図	縄文時代早期の石器 (12)	84	第143図	集石 (2) 遺構内遺物	152
第78図	縄文時代早期の石器 (13)	85	第144図	集石 (3) 遺構内遺物	153
第79図	縄文時代早期の石器 (14)	86	第145図	集石 (4)	154
第80図	縄文時代早期の石器 (15)	87	第146図	縄文時代前期 (IIa層) 遺物出土状況全体図	155
第81図	縄文時代早期の石器 (16)	88	第147図	縄文時代前期 (IIa層) 遺物出土状況図 (1)	156
第82図	縄文時代早期の石器 (17)	89	第148図	縄文時代前期 (IIa層) 遺物出土状況図 (2)	157
第83図	縄文時代早期の石器 (18)	90	第149図	縄文時代前期 (IIa層) 遺物出土状況図 (3)	158
第84図	縄文時代早期の石器 (19)	91	第150図	縄文時代前期 (IIa層) 遺物出土状況図 (4)	159
第85図	縄文時代早期の石器 (20)	92	第151図	縄文時代前期の土器 (1)	161
第86図	縄文時代早期の石器 (21)	93	第152図	縄文時代前期の土器 (2)	162
第87図	縄文時代早期の石器 (22)	94	第153図	縄文時代前期の土器 (3)	165
第88図	縄文時代早期の石器 (23)	95	第154図	縄文時代前期の土器 (4)	166
第89図	縄文時代早期の石器 (24)	96	第155図	縄文時代前期の土器 (5)	167
第90図	縄文時代早期の石器 (25)	97	第156図	縄文時代前期の土器 (6)	168
第91図	縄文時代早期の石器 (26)	98	第157図	縄文時代前期の土器 (7)	169
第92図	縄文時代早期の石器 (27)	99	第158図	縄文時代前期以降の土器・土製品	170
第93図	縄文時代早期の石器 (28)	100	第159図	縄文時代前期の石器 (1)	172
第94図	縄文時代早期の石器 (29)	101	第160図	縄文時代前期の石器 (2)	173
第95図	縄文時代早期の石器 (30)	102	第161図	縄文時代前期の石器 (3)	174
第96図	縄文時代早期の石器 (31)	103	第162図	縄文時代前期の石器 (4)	175
第97図	縄文時代早期の石器 (32)	104	第163図	縄文時代前期の石器 (5)	176
第98図	縄文時代早期の石器 (33)	105	第164図	縄文時代前期の石器 (6)	177
第99図	縄文時代早期の石器 (34)	106	第165図	縄文時代前期の石器 (7)	178
第100図	縄文時代早期の石器 (35)	107	第166図	縄文時代前期の石器 (8)	179
第101図	縄文時代早期の石器 (36)	108	第167図	縄文時代前期の石器 (9)	180
第102図	縄文時代早期の石器 (37)	109	第168図	縄文時代前期の石器 (10)	181
第103図	縄文時代早期の石器 (38)	110	第169図	縄文時代前期の石器 (11)	182
第104図	縄文時代早期の石器 (39)	111	第170図	縄文時代前期の石器 (12)	183
第105図	縄文時代早期の石器 (40)	112	第171図	縄文時代前期の石器 (13)	184
第106図	縄文時代早期の石器 (41)	113	第172図	縄文時代前期の石器 (14)	185
第107図	縄文時代早期の石器 (42)	114	第173図	縄文時代前期の石器 (15)	186
第108図	縄文時代早期の石器 (43)	115	第174図	縄文時代前期の石器 (16)	187
第109図	縄文時代早期の石器 (44)	116	第175図	縄文時代前期の石器 (17)	188
第110図	縄文時代早期の石器 (45)	117	第176図	縄文時代前期の石器 (18)	189
第111図	縄文時代早期の石器 (46)	118	第177図	縄文時代前期の石器 (19)	190
第112図	縄文時代早期の石器 (47)	119	第178図	縄文時代前期の石器 (20)	191
第113図	縄文時代早期の石器 (48)	120	第179図	縄文時代前期の石器 (21)	192
第114図	縄文時代早期の石器 (49)	121	第180図	縄文時代前期の石器 (22)	193
第115図	縄文時代早期の石器 (50)	122	第181図	縄文時代前期の石器 (23)	194
第116図	縄文時代早期の石器 (51)	123	第182図	縄文時代前期の石器 (24)	195
第117図	縄文時代早期の石器 (52)	124	第183図	縄文時代前期の石器 (25)	196
第118図	縄文時代早期の石器 (53)	125	第184図	縄文時代前期の石器 (26)	197
第119図	縄文時代早期の石器 (54)	126	第185図	縄文時代前期の石器 (27)	198
第120図	縄文時代早期の石器 (55)	129	第186図	縄文時代前期の石器 (28)	199
第121図	縄文時代早期の石器 (56)	130	第187図	縄文時代前期の石器 (29)	200
第122図	縄文時代早期の石器 (57)	131	第188図	縄文時代前期の石器 (30)	201
第123図	縄文時代早期の石器 (58)	132	第189図	縄文時代前期の石器 (31)	202
第124図	縄文時代早期の石器 (59)	133	第190図	表採資料 (1)	203
第125図	縄文時代早期の石器 (60)	134	第191図	表採資料 (2)	204
第126図	縄文時代早期の石器 (61)	135	第192図	表採資料 (3)	205
第127図	縄文時代早期の石器 (62)	136	第193図	古墳時代以降の遺構配置図	207
第128図	縄文時代早期の石器 (63)	137	第194図	土坑 (1)	208
第129図	縄文時代早期の石器 (64)	138	第195図	土坑 (2)	209
第130図	縄文時代早期の石器 (65)	139	第196図	古墳時代と古代の土器	210
第131図	縄文時代早期の石器 (66)	140			
第132図	縄文時代早期の石器 (67)	141			
第133図	縄文時代早期の石器 (68)	142			
第134図	縄文時代早期の石器 (69)	143			
第135図	縄文時代早期の石器 (70)	144			

表 目 次

(第1分冊)

第1表	周辺遺跡地名表	16
第2表	確認トレンチ結果表	19



第3表	縄文時代草創期(V層)の竪穴住居跡・土坑観察表	38
第4表	縄文時代草創期(V層)の礫群観察表	48
第5表	縄文時代草創期の遺構内土器観察表	49
第6表	縄文時代草創期の遺構内石器観察表	52
第7表	縄文時代草創期の土坑観察表	158
第8表	縄文時代草創期の石器観察表	162
<b>(第2分冊)</b>		
第9表	縄文時代早期の土坑観察表	27
第10表	縄文時代早期の遺構内土器観察表	28
第11表	縄文時代早期の遺構内石器観察表	28
第12表	縄文時代早期の集石観察表	30
第13表	縄文時代前期の土坑観察表	148
第14表	縄文時代前期の集石観察表	150
第15表	縄文時代前期の遺構内石器観察表	150
第16表	石器組成詳細(破片数)	217
第17表	グリッド・石材別製作破片等の数	220
第18表	土器観察表(縄文時代早期以降)	223
第19表	石器観察表(縄文時代早期以降)	233

PL45	縄文時代草創期の土器(遺構内2)
PL46	縄文時代草創期の土器(遺構内3)
PL47	縄文時代草創期の土器(遺構内4)
PL48	縄文時代草創期の土器(遺構内5)
PL49	縄文時代草創期の土器(遺構内6)
PL50	縄文時代草創期の土器・石器(遺構内7)
PL51	縄文時代草創期の土器・石器(遺構内8)
PL52	縄文時代草創期の土器(1)
PL53	縄文時代草創期の土器(2)
PL54	縄文時代草創期の土器(3)
PL55	縄文時代草創期の土器(4)
PL56	縄文時代草創期の土器(5)
PL57	縄文時代草創期の土器(6)
PL58	縄文時代草創期の土器(7)
PL59	縄文時代草創期の土器(8)
PL60	縄文時代草創期の土器(9)
PL61	縄文時代草創期の土器(10)
PL62	縄文時代草創期の土器(11)
PL63	縄文時代草創期の土器(12)
PL64	縄文時代草創期の土器(13)
PL65	縄文時代草創期の土器(14)
PL66	縄文時代草創期の土器(15)
PL67	縄文時代草創期の土器(16)
PL68	縄文時代草創期の土器(17)
PL69	縄文時代草創期の土器(18)
PL70	縄文時代草創期の石器(1)
PL71	縄文時代草創期の石器(2)
PL72	縄文時代草創期の石器(3)
PL73	縄文時代草創期の石器(4)
PL74	縄文時代草創期の石器(4)
PL75	縄文時代早期の土器(1)
PL76	縄文時代早期の土器(2)
PL77	縄文時代早期の土器(3)
PL78	縄文時代早期の土器(4)
PL79	縄文時代早期の土器(5)
PL80	縄文時代早期の土器(6)
PL81	縄文時代早期の土器(7)
PL82	縄文時代早期の土器(8)
PL83	縄文時代早期の石器(1)
PL84	縄文時代早期の石器(2)
PL85	縄文時代早期の石器(3)
PL86	縄文時代早期の石器(4)
PL87	縄文時代早期の石器(5)
PL88	縄文時代早期の石器(6)
PL89	縄文時代早期の石器(7)
PL90	縄文時代早期の石器(8)
PL91	縄文時代早期の石器(9)
PL92	縄文時代早期の石器(10)
PL93	縄文時代早期の石器(11)
PL94	縄文時代早期の石器(12)
PL95	縄文時代早期の石器(13)
PL96	縄文時代早期・前期以降の石器
PL97	縄文時代前期の土器(1)
PL98	縄文時代前期の土器(2)
PL99	縄文時代前期の土器(3)
PL100	縄文時代前期の土器(4)
PL101	縄文時代前期の土器(5)
PL102	縄文時代前期の石器(1)
PL103	縄文時代前期の石器(2)
PL104	縄文時代前期の石器(3)
PL105	縄文時代前期の石器(4)
PL106	土師器・発掘作業員
PL107	調査風景(1)
PL108	調査風景(2)

### 写真図版一覧

#### カラーグラビア

PL1	三角山I遺跡全景(空撮)
PL2	縄文時代草創期竪穴住居跡(1)
PL3	縄文時代草創期竪穴住居跡(2)完掘
PL4	土層断面・縄文時代草創期遺物出土状況
PL5	縄文時代草創期～前期遺構
PL6	縄文時代草創期の土器(1)
PL7	縄文時代草創期の土器(2)ほぼ原寸
PL8	縄文時代草創期の土器(3)
PL9	縄文時代草創期の土器(4)
PL10	縄文時代草創期の土器(5)
PL11	縄文時代草創期の土器(6)
PL12	縄文時代草創期の土器(7)
PL13	縄文時代草創期の土器(8)
PL14	縄文時代草創期の土器(9)
PL15	縄文時代草創期の土器(10)
PL16	縄文時代草創期の土器(11)
PL17	縄文時代草創期の土器(12)
PL18	縄文時代草創期の土器(13)
PL19	縄文時代草創期の土器(14)ほか
PL20	縄文時代草創期の土器(15)胎土
PL21	縄文時代草創期の土器(16)胎土
PL22	縄文時代草創期の土器(17)胎土
PL23	縄文時代草創期の石器、早期の土器・石器
PL24	縄文時代早期の土器
<b>モノクロ写真</b>	
PL25	縄文時代草創期遺物出土状況(A地区・平成8年度)
PL26	縄文時代草創期遺物出土状況(A地区)
PL27	縄文時代草創期遺物出土状況(A地区)
PL28	縄文時代草創期遺物出土状況(A地区)
PL29	1号竪穴住居跡遺物出土状況(B-8区・検出時)
PL30	竪穴住居跡調査状況(B・C-8区)
PL31	縄文時代草創期遺物出土状況A・B-1地区
PL32	縄文時代草創期遺物出土状況B地区
PL33	縄文時代草創期礫群・早期集石、A・B地区
PL34	縄文時代早期遺物出土状況・B地区(1)
PL35	縄文時代早期遺物出土状況・B地区(2)
PL36	縄文時代早期遺物出土状況・B地区(3)
PL37	縄文時代早期遺物出土状況・B地区(4)
PL38	縄文時代早期遺物出土状況・B地区(5)
PL39	縄文時代早期遺物ほか出土状況・C地区(1)
PL40	縄文時代早期遺物出土状況・C地区(2)
PL41	縄文時代前期遺物出土状況・B地区(1)
PL42	縄文時代前期遺物出土状況・B地区(2)
PL43	古墳時代以降の土坑・土師器出土状況
PL44	縄文時代草創期の土器(遺構内1)

# 第Ⅰ章 発掘調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県教育委員会文化課（以下県文化課）は、埋蔵文化財の保護・活用を図るため、工事着手前に当該事業区内における埋蔵文化財の有無、およびその取り扱いについて各開発関係機関と協議し諸開発との調整を行っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県土木部空港対策室（以下空港対策室）は、熊毛郡中種子町砂中地内において、新種子島空港建設を計画していたが、工事予定地内の埋蔵文化財の有無について県文化課（平成8年4月以降県文化財課）に照会した。これを受けて文化課は、平成2年4月に工事予定地内の分布調査を実施したところ、土器片等の遺物の散布がみられた。これらが三角山Ⅰ遺跡、三角山Ⅱ遺跡であるが、ほかに分布調査不可能地でその後確認調査の実施が必要な区域6箇所が確認された。

分布調査の結果を受けて、空港対策室、熊毛支庁土木課、文化課、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）で遺跡の取り扱いについて協議を行った結果、対象地域内の遺跡の把握するために当該地域において確認調査を実施することとし、調査は埋文センターが担当することになった。

調査は、まずはじめに三角山Ⅰ遺跡から行われた。最初の確認調査は平成7年1月23日から行われ、予定地内において遺跡が残存していることが確認された。そこで、空港対策室、熊毛支庁土木課、文化課、埋文センターは再度協議し、現状保存や設計変更が不可能であることから、記録保存のための発掘調査（本調査）を実施することとなった。その結果緊急度の高いと判断された地点から一部本調査に切り替えて3月24日まで調査が行われた。

## 第2節 調査の組織

### 1 発掘調査の組織

事業主体者 鹿児島県土木部空港対策室  
(熊毛支庁土木課空港建設室)

調査主体者 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化課（平成7年度）・  
文化財課（平成8年度から）

調査責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 内村 正弘（平成7年度）  
吉元 正幸（平成8・9年度）  
吉永 和人（平成10・11年度）  
井上 明文（平成12～14年度）

調査企画者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

次長兼総務課長 川原 信義（平成7年度）  
尾崎 進（平成8～10年度）  
黒木 友幸（平成11～13年度）  
田中 文雄（平成14年度）

主任文化財主事兼調査課長 戸崎 勝洋（平成7～11年度）  
新東 晃一（平成12～14年度）

課長補佐 新東 晃一（平成7～11年度）  
立神 次郎（平成12～14年度）

課長補佐兼第一調査係長 新東 晃一（平成9～11年度）

主任文化財主事兼第一調査係長 青崎 和憲（平成12・13年度）  
池畑 耕一（平成14年度）

主任文化財主事兼第二調査係長 立神 次郎（平成8年度）

主任文化財主事 新東 晃一（平成7年度）  
青崎 和憲（平成10年度）  
中村 耕治（平成11～14年度）

調査担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財主事 井ノ上秀文（平成7年度）  
大久保浩二（平成8・10～13年度）  
藤崎 光洋（平成14年度）

文化財研究員 大久保浩二（平成7年度）  
中原 一成（平成7年度）  
中村 和美（平成8・9年度）  
前田 誠（平成9年度）  
桑波田武志（平成10年度）  
西園 勝彦（平成11年度）  
菅牟田 勉（平成12年度）  
上床 真（平成13～14年度）

調査事務担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

総務係長 有村 貢（平成11・12年度）  
前田 昭信（平成13・14年度）

主 査 成尾 雅明（平成7～9年度）  
前屋敷裕徳（平成8～10年度）  
政倉 孝弘（平成9・10年度）

主 事 追立ひとみ（平成7～9年度）  
溜池 佳子（平成10年度）

### 2 報告書作成事業の組織

事業主体者 鹿児島県土木部空港対策室  
(熊毛支庁土木課空港建設室)

調査主体者 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 井上 明文（平成13・14年度）  
木原 俊孝（平成15・16年度）



上今 常雄 (平成17年度)

調査企画者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

次長兼総務課長 黒木 友幸 (平成13年度)

田中 文雄 (平成14・15年度)

賞雅 彰 (平成16年度)

有川 昭人 (平成17年度)

次長兼調査第一課長 新東晃一 (平成17年度)

主任文化財主事兼調査課長

新東 晃一 (平成13~16年度)

課長補佐 立神 次郎 (平成13~16年度)

主任文化財主事兼第一調査係長

青崎 和憲 (平成13年度)

池畑 耕一 (平成14~17年度)

主任文化財主事 中村 耕治 (平成13~17年度)

調査担当者 鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財主事 大久保浩二 (平成13年度)

藤崎 光洋 (平成14~17年度)

三垣 恵一 (平成15年度)

中村 和美 (平成16~17年度)

文化財研究員 上床 真 (平成13~15年度)

調査事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

主幹兼総務係長 平野 浩二 (平成17年度)

総務係長 前田 昭信 (平成13・14年度)

平野 浩二 (平成15・16年度)

主査 栗山 和己 (平成13・14年度)

脇田 清幸 (平成14~16年度)

寄井田正秀 (平成17年度)

主事 池 珠美 (平成13~15年度)

福山恵一郎 (平成15~17年度)

竹ノ内 有里 (平成16年度)

田之畑 美幸 (平成17年度)

報告書作成検討委員会

平成17年10月11日 所長ほか9名

報告書作成指導委員会

平成17年10月5日 調査第一課長ほか4名

企画担当者

黒川 忠広 (平成15・16年度)

前迫 亮一 (平成16年度)

### 第3節 日誌抄

調査の経過は日誌抄により以下略述する。調査指導者等の所属については当時のものとした。

#### ◎ 平成6年度

<1月~3月> 1月24日 I 遺跡及び①地点の確認調査開始。3月24日調査終了。

調査指導/成尾英仁 (串木野高校教諭・2月24日)

#### ◎ 平成7年度

<5月> 10日から調査開始。I 遺跡の確認調査。

初日から隆帯文土器出土。

<6月> I 遺跡の確認調査。⑦地点の確認調査 (詳細分布調査)。遺構・遺物なし。

<7月> I 遺跡の確認調査。航空写真撮影 (26日)

II 遺跡の調査。・III 遺跡の調査。(III 遺跡調査終了)

田平祐一郎 (中種子町教育委員会) 長期研修の現地実習 (3日~14日)。

<8月> I・II 遺跡の確認調査。

空港建設に伴う県道改良事業予定地 (P 地点) の分布調査実施。

成尾英仁 (串木野高校教諭)・杉山真二 (古環境研究所) 来跡。(22・23日)。

<9~3月> I 遺跡・II 遺跡・IV 遺跡の確認調査。

調査指導/岡村道雄 (文化庁記念物課・11月7・8日)

調査指導/河口貞徳 (鹿児島県考古学会会長・2月13・14日) 上村俊雄 (鹿児島大学・2月27・28日)

平成7年度の調査終了 (21日)。

#### ◎ 平成8年度

<5月> 7日荷物搬入。9日から I 遺跡調査開始。

C-5・6・7区III~V層掘り下げ。C-6区から塞ノ神式土器出土。C-7区から隆帯文土器出土。

<6月> F-7・8・9区III~V層掘り下げ。F-7区で隆帯文土器出土。C-5・6区, G-4区・6区III~V層掘り下げ。古環境研究所による土壌サンプル採取 (6日)

<7月> F・G-4・5区III~V層掘り下げ。E-8・9区表土~V層掘り下げ。

中種子町立納官小学校5・6年生体験学習 (15日)。

台風6号 (18日)。特に被害なし。

<8月> F-5・6区III~V層掘り下げ。G-5区V層掘り下げ。

中種子町文化財少年団体験学習。(8日)

調査指導/大塚達朗 (東京大学・26・27日)

<9月> E-6・7区, F-5・6区III~V層掘り下げ。

D-7・8区表土~V層掘り下げ。F・G-7区・G-5区V層掘り下げ。

調査指導/河口貞徳 (鹿児島県考古学会会長・9・10日) 上村俊雄 (鹿児島大学・19日)

<10月> D-7・8区, E・F-5・6区V層掘り下げ。D-5・6区III~V層掘り下げ。

調査指導/森脇広 (鹿児島大学・3・4日)

<11月> D-6~8区V層掘り下げ。

I 遺跡の空中写真撮影。(22日)

IV 遺跡の調査。I 遺跡からプレハブを移動し, 21日から調査開始。

<12月> IV 遺跡の調査。

調査指導/小林達雄 (國學院大學・13日)

<1～3月> IV遺跡の調査と平行して、II遺跡E地点の調査を29日より開始。

今津節生の指導によりI遺跡の縄文時代草創期の2号礫群取り上げ(4～7日)。

平成8年度の調査終了(IV遺跡の調査終了)(18日)。  
調査指導/今津節生(奈良県立橿原考古学研究所・4～7日)

◎ 平成9年度

<4月> 21日調査開始。I遺跡の確認調査。1～12トレンチの調査。

<5月> I遺跡の確認調査。1～19トレンチの調査。21日撤収。

◎ 平成10年度

<5月> 6日調査開始。I遺跡の調査。C・D-12・13区の調査。

大阪府立弥生文化博物館友の会(金関恕以下30人)見学(19日)。大石出土。

<6月> C・D・E-12・13区, D-11区・C-8区の調査。

<7月> C・D-12・13区, C-8区の調査。

I遺跡の調査と平行して、II遺跡E地点の調査を2日から開始。

縄文時代草創期の磨製石鏃について電話取材(3日)。4日付けで新聞掲載。

<8月> I遺跡の調査。B・C-7・8区の調査。F・G-11区, B-10～13区, C-13区確認トレンチの調査。

II遺跡の調査。集石実測。一部埋め戻し。

中種子町少年団20名発掘体験(10日)。

<9月> I遺跡の調査。F・G-10・11区, B-8区, C-13区の調査。

E・F地点の確認調査。

II遺跡の調査。集石実測。

平成10年度の調査終了(II遺跡の調査終了)(24日)。

◎ 平成11年度

<5月> 10日調査開始。I遺跡H地点の確認調査。G・L地点の調査。

<6月> G・L地点の調査。

<7月> G・L地点の調査。

<8月> G・L地点の調査。南日本新聞社の取材(25日)。

<9月> 7日空中写真撮影。南日本新聞社の取材(8日)。21日新聞に掲載(三角山音頭)。

21日調査終了。

◎ 平成12年度

<10月> 4日調査開始。三角山I遺跡県道部分(P地点)の調査。P2～5地点の確認調査。

<11月> 三角山I遺跡県道部分(P地点)の調査。

P2～4地点の確認調査。P4地点は細石核が出土したためそのまま全面調査に移行。

三角山I遺跡の調査。C・E・F地点の調査。

<12月> 三角山I遺跡県道部分(P地点)の調査。P4・5地点の調査。

三角山I遺跡の調査。E・F・K・O地点の調査。町道部分B-10・11区の調査。F地点の縄文時代早期の包含層から金環形の珧状耳飾出土。

調査指導/小林哲夫(鹿児島大学・5・6日)

<1月> I遺跡の調査。E・F・K・O地点の調査。町道部分の調査。珧状耳飾りについて新聞取材(10日)。11日南日本新聞に掲載。12日朝日新聞に掲載。

<2月> 三角山I遺跡の調査。E・F・K・O地点の調査。町道部分の調査。中種子町立納官小学校体験学習(13日)空中写真撮影・会計監査(22日)。調査終了(23日)。

調査指導/本田道輝(鹿児島大学・7・8日)

◎ 平成13年度

<7月> 3日調査開始。I遺跡県道部分(P地点)の調査。P1地点の確認調査。

三角山I遺跡の調査。B地点・D地点の確認調査。町道部分C-12区, C・D-13区, B・C-7・8・9区, D-8区の調査。B-8区の縄文時代草創期の遺物包含層で竪穴住居跡2基検出。

<8月> B-10・15区, C-13～15区, D-13・14区の調査。竪穴住居跡の調査。

野平裕樹(中種子町教育委員会)長期研修の現地実習(1日～10日)。

<9月> B-10区, C-10・11区, C-13～15区, D-13・14区の調査。草創期竪穴住居跡の調査。簡易ウォーターフローテーションを行う。

2日の集中豪雨により各地で被害がみられたが、遺跡内には被害はみられなかった。

<10月> B・C-9～11区, C・D-13・14区の調査。A地点の確認調査。草創期竪穴住居跡の調査。遺構内埋土を乾燥させ簡易ウォーターフローテーションを行う。

11日に宮崎県埋蔵文化財センター永野高行・藤木聡・金丸史絵が見学。

調査指導/上村俊雄(鹿児島国際大学・16日)

本田道輝(鹿児島大学・23日)

<11月> C-9～11区の調査。草創期竪穴住居跡の調査。遺構内埋土の簡易ウォーターフローテーション。パリノ・サーベイによる住居跡内の土壌サンプル採取。鶴田静彦(埋セ)による写真撮影。空中写真撮影(21日)。調査終了(22日)

調査指導/小畑弘己(熊本大学・8・9日)

稲田孝司(岡山大学・12・13日)

◎ 平成14年度

<9月> 2日調査開始。I遺跡(旧県道部分)の調査。N~Q-10区の調査。

各所に確認トレンチを設定し、調査。そのまま本調査へと移行。

<10月> D-14区~F-12区, G-11・12区, H・I-10・11区, J-10区, K・L-9・10区, D・E-13・14区, N~Q-10区の調査

G-11区Ⅲ層(縄文時代早期)でトトロ石器出土。

<11月> D~F-13・14区, G-11区, J-9・10区, K-9区, N~Q-10区の調査。NTT電柱移設工事(14日)

<12月> E・F-13区, F・G-11・12区, H-9区, I-10区, J-9・10区, N~Q-10区の調査。南日本新聞社の取材(10日・17日・21日)。20日・23日に新聞掲載。21日現地説明会。約130名の見学者。

<1月> D-13・14区, E・F-12・13区, F・G-11・12区, H-9~11区, I-10・11区の調査。草創期の竪穴住居跡の調査。(昨年度からの継続分)。空中写真撮影(8日)。竪穴住居跡の土壌サンプル採取(17日)。調査完全終了(28日)。

調査指導/本田道輝(鹿児島大学・7日)

## 第4節 整理作業の概要

### 1 報告書作成業務の経緯

三角山遺跡の発掘調査報告書作成に伴う整理作業については、平成6年度から平成14年度の発掘作業中に、遺物の水洗・注記作業を並行して行い、本格的な整理作業は鹿児島県立埋蔵文化財センターで平成13年4月~平成16年3月まで行った。報告書はI遺跡県道部分(P地点)を平成14年度、II・III・IV遺跡を平成15年度に刊行した。なお、平成15年度に谷口康浩(國學院大學)、平成16年度に大塚達朗(南山大学)の遺物整理指導を受けた。

### 2 発掘調査および報告書作成業務従事者

#### (1) 発掘調査従事者

秋田 了 朝熊昭一 阿比留ニジ子 有馬喜美枝  
新 文江 有留香代子 池田憲三 石堂文子  
磯俣美千代 岩崎スミ子 岩屋三男 牛原 忍  
宇都美子 浦辺君江 榎原美樹 遠藤京子  
遠藤松代 大坪用子 大山勇一 尾方教子  
奥田和子 奥田直治 奥村アイ子 奥村圭一  
門之園瀬津子 鎌田イツエ 鎌田加奈子  
鎌田みち子 上敷領重俊 神近さち子  
上村フユ子 川下広子 北園幸広 木原慎二  
木原桃子 金城京子 金城サエ子 久木原幸子

久木原フサ子 隈崎タエ子 黒田キリ子  
桑原一欽 小山田タミ 坂本盛安 笹川玲子  
阪上修司 佐々木歌子 下平アツ子 城木峯子  
末吉孝一 関 憲子 園田エツ 揃 昭雄  
武田みどり 玉城みどり 月野イツ子 政 洋一  
遠矢紀三枝 戸田和代 戸畑多要子 豊 コノエ  
長田よし子 長野テイ 中村武雄 中村 忠  
中島タカエ 中馬隆信 成 京子 西田和子  
沼田民江 野辺ます子 昇 篤四郎 萩原良則  
橋野いず子 橋野さつえ 橋野奈々子  
蓮子よし子 畠中栄子 林 昭代 馬場常子  
馬場フミ子 馬場 勝 羽生イツ子 濱田 勝  
春田政子 春田光男 日高カズエ 日高誠子  
日高平太郎 深田スミエ 福 シヅ 藤原ナラ子  
古市靖子 古田辰夫 本鍋田敏子 前田昭人  
前田カツ子 前田幸子 牧瀬君代 牧元ソノ  
松下国夫 松下友子 松下弘子 松田スヤ子  
真戸原幸子 松原育代 峯下久美子 峯下ナミ子  
美坐まち子 三原オリ子 向井一男 向井トシ子  
武藤奈美枝 村添智代 森口瑤子 八木タエ  
山口みつ子 山口由美子 山下早苗 山下数代  
山本早志 吉留千恵美 吉永良秀 和田則子  
和田満博

#### (2) 報告書作成業務従事者

石原啓子 市蘭厚子 井手康代 岡部安代  
川路加代子 川東美登里 北上千津子 北住靖子  
木村仁美 黒木弘海 郷田千秋 齊藤千鶴  
迫田かおり 篠原香代子 志和池和恵 新徳より子  
田中周子 中内洋子 中野智子 鶴みつ子  
中村ひろみ 篠原香代子 末廣みゆき 西 清子  
西川直美 古江藤美 松平ひとみ 四丸久美子

#### (3) 報告書作成の過程でお世話になった方々

石堂和博 今泉克己 岩崎厚志 上杉彰紀  
大久保浩二 沖田純一郎 北原實徳 桐原修司  
柴畑光博 小金澤保雄 後藤信祐 小林謙一  
坂本 彰 佐藤亜聖 重留康宏 菅牟田勉  
杉山真二 鈴木正博 角南聡一郎 立神勇志  
田平祐一郎 徳田有希乃 中川二美 中原一成  
野平裕樹 萩谷千明 深野信之 藤尾慎一郎  
松村和夫

<50音順>

## 第II章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的・自然的環境

三角山遺跡群の所在する種子島は、佐多岬から南東に約40kmの海上に位置しており、鹿児島県内の離島としては甕島と並んで鹿児島県本土に近い。また、開聞岳からは約60km、屋久島からは約20kmの位置にあり、それぞれ目視が可能である。

この周辺は黒潮が対馬海流と分かれる所で、太古の昔からさまざまな物がうち寄せられてきたと考えられる。有名などころではポルトガル人漂着による鉄砲伝来、ドラメルタン号救助の返礼としてのインギー鶏伝来などがあげられる。面積は453.83km<sup>2</sup>、南北約50km、幅6～12kmの細長い島で、北から西之表市・中種子町・南種子町の1市2町がある。

種子島の地形は、丘陵性の山地、海岸段丘、河川付近の沖積低地から成っている。島の最高点は西之表市古田の十三番の中種子町との境界付近で、標高282.3mである。その中で中種子町は海岸面に緩やかな丘陵を呈し、北部はほとんどが山林地帯である。ちなみに三角山遺跡が所在する地点も島内では5指に入るほど標高の高い地点である。

種子島北部の基盤岩としては古第3期の熊毛層群が広く分布している。主に砂岩・頁岩・砂岩頁岩互層からなり、一般に走向は島軸とほぼ平行で、北西方向へ急角度で傾斜している。海岸段丘はこの熊毛層群を浸食して発達している。三角山遺跡群周辺は砂岩優勢で遺跡の基盤となっている。その上を新第3紀中新世の荃永層群（田代層・河内層・大崎層）が中部以南を中心に不整合に覆っている。鮮新世～更新世の増田層は中種子町から南種子町にかけて分布し、更新世の竹之川層は中種子町の西海岸沿いに分布している。また、西之表市住吉の形之山には、ナウマンゾウや豊富な魚類・植物化石を産する中期～後期更新世の形之山層がみられる。なお、北部を除いた海岸沿いは、古期および新期の厚い砂丘堆積物によって覆われている。

火山噴出物としては、中期～後期更新世と考えられる小瀬田火砕流堆積物や約10万年前の阿多火砕流堆積物が点々と分布し、約8万年前の西之表テフラ（＝西之表火砕流・西之表軽石）が全島の広い範囲に分布している。さらに、これらを覆って種Ⅰ～Ⅳ火山灰・A T火山灰・アカホヤ火山灰等が堆積している。

三角山遺跡群は、鹿児島県熊毛郡中種子町砂中・十八番ほかに所在する。西之表市十六番に隣接する町の北端部にあたる。先述したが、この周辺は種子島で最も標高の高い地域である。その中でも三角山Ⅰ遺跡は

標高約240mで太平洋と東シナ海との東西分水嶺にあたる。また、この遺跡から南東方向に谷を越えた台地上に三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡が存在する。三角山遺跡群の所在する台地にはいくつかの小さな谷が入り、いわゆる「八つ手状」を呈しており、尾根部分を中心とした生活が営まれたことが想定される。

なお、〇〇番という地名は県道76号（主要地方道西之表・中種子線、地元では「なかせん」と呼ばれる）建設時に付けられた地名で、それ以前もしくは開拓前にはほとんど人家はなく、周辺が牧とされたぐらいであり人々の生活がみられる場所ではなかったという。ただし、特に十八番のあたりは第2次世界大戦中に兵舎があったという記録があり、これに関連して高射砲の基礎が残っている。現在は三角山Ⅰ遺跡に隣接する西之表市十六番には集落がみられ、多くの人々が居を構えている。

### 第2節 歴史的環境

種子島では旧石器時代から歴史時代に至るまでの遺跡が発見されている。

旧石器時代では、南種子町の横峯C遺跡で種子Ⅲ火山灰（約4万年以上前に堆積）と種子Ⅳ火山灰（約3万年以上前に堆積）の間の層で礫群が発見されている。また、中種子町立切遺跡でもほぼ同じ状況でファイヤーピットなど生活に関係すると考えられる遺構も発見されており、当該時期の様相が注目される。

三角山Ⅰ遺跡（P地点）では旧石器時代末期～縄文時代草創期の時期のものと思われる細石核が出土しているが、大中峯遺跡（西之表市）・湊遺跡（西之表市）・立切遺跡（中種子町）・銭亀遺跡（南種子町）に続いて島内で5か所目の発見例となった。

縄文時代では、特に西之表市の奥ノ仁田遺跡で発見された縄文時代草創期の遺構・遺物が注目される。ここでは隆帯文土器が大量に出土しており、南九州圏の縄文文化が早くから栄えていたことを示している。平成11年3月には県の文化財に指定された。また、西之表市安城の鬼ヶ野遺跡でも、縄文時代草創期の竪穴住居状遺構が多量の石鏃・隆帯文土器と共に発見されている。この時期の竪穴住居状遺構は県内でもきわめて発見例が少なく、注目される場所である。なお、島内では草創期の遺跡が数か所確認されているが、三角山Ⅰ遺跡でも同時期の竪穴住居状遺構が発見され、周辺から多くの隆帯文土器が出土している。

早期の遺跡は数多く存在しており、三角山遺跡群近隣の遺跡を挙げると、前葉では前平式土器出土の中平寺遺跡（中種子町）・吉田式土器・倉園B式土器・下剥峰式土器・桑ノ丸式土器出土の日守A・B・C遺跡



(西之表市)・今平・清水遺跡(中種子町)がある。なお、三角山Ⅰ遺跡でも石坂式土器が出土しており、この土器文化が少なくとも種子島までは及んでいたことがわかる資料である。中葉では下剥峯式土器の標識遺跡である下剥峯遺跡(西之表市)、後葉では塞ノ神式土器出土の牛の原遺跡(西之表市)・苦浜式土器出土の苦浜貝塚(中種子町)・横峯遺跡(南種子町)などがある。

前期では轟式土器出土の下剥峯遺跡(西之表市)・大園遺跡(中種子町)、曾畑式土器出土の二十番遺跡(中種子町)・千草原遺跡(同)などがある。

中期では春日式土器出土の宮田遺跡(中種子町)があるが、この時期は資料数・遺跡数ともに少ない。

後期では指宿式土器出土の梶ノ本遺跡(中種子町)・大園遺跡(同)、市来式土器や丸尾式土器・一湊式土器出土の奥嵐遺跡(西之表市)などがある。そのなかで特に注目されるのは藤平小田遺跡(南種子町)で、66基の配石遺構が発見され、環状列石の可能性も指摘されている。

上記の縄文時代の各時期の土器については三角山遺跡群でもおおそ出土しており、縄文時代草創期の隆帯文土器、縄文時代早期の吉田式土器・塞ノ神式土器・苦浜式土器、縄文時代前期の轟式土器・曾畑式土器、縄文時代中期の春日式土器などがみられる。

弥生時代から古墳時代にかけては、縄文時代晩期から弥生時代にかけての生活跡である阿嶽洞穴(中種子町)、古墳時代後期の上能野式土器の標識遺跡で埋葬遺跡でもある上能野貝塚(西之表市)・鳥ノ峯遺跡(中種子町)などがある。特に広田遺跡(南種子町)は古代中国の青銅器に施されたものに酷似した文様をもつ貝札が出土し、全国的に著名な埋葬遺跡である。他に上能野式土器が多く出土した遺跡としては嶽ノ中野遺跡(西之表市)がある。なお、この時代の集落跡については島内では未だ発見されていないようである。

古代では西俣遺跡(西之表市)があり、灰釉陶器を用いた蔵骨器と越州窯青磁・長沙窯青磁が出土している。天長7年(824年)までは、種子島・屋久島周辺を含めた多嶽国が置かれていたので、国府(嶋府)・国分寺(嶋分寺)も種子島に置かれていたことが考えられる。その所在地については諸説あり解明に至っていないが、これらの出土品から中央に関係する人物の存在が考えられる。

また、この時期の遺跡としては他に松原遺跡(南種子町)があり、越州窯系青磁・須恵器・土師器が出土している。初期輸入陶磁器が出土する地域としては種子島が日本最南端であり、古代の様相を考えるうえで

これらの遺跡は注目される場所である。

中世では前半から後半にかけての遺構・遺物が発見された大園遺跡(中種子町)、後半の土師器等の遺物が多く出土した本村丸田遺跡(南種子町)、中世後半の遺構・遺物が発見された藤平小田遺跡(南種子町)がある。

近世においては調査事例が少なく、明らかでない部分が多い。その中で窯業に目を向けると能野焼・野間焼(中種子焼)が当該時期の著名なものとしてあげられるが、詳細については明らかでない。

戦時中の昭和17年(1942)には中種子村(現在の中種子町)増田において海軍飛行場の建設が着手され、翌18年の末には未完成のまま海軍航空隊が開設されている。現在はこの飛行場は集落となっているが、当時の炊事場の煉瓦作りの煙突が現在も残されており、記念碑的なものとなっている。これ为代表例で、その他にも終戦までに種子島にもいくつかの部隊が陣地を構え駐屯している。三角山遺跡群周辺では、昭和20年6月に西之表古田において、西部第7074部隊の独立混成部隊第10109部隊(約12,000人)が陣地を構築し、駐屯している。

現在では海の玄関・経済の中心地区としての西之表市、空の玄関としての中種子町、宇宙への玄関としての南種子町として1市2町それぞれが役割を担い、日々新たな歴史を刻んでいる。

#### 参考文献

- 広田遺跡学術調査研究会『種子島広田遺跡』鹿児島県歴史資料センター黎明館 2003
- 鹿児島県教育委員会『指辺・横峯・中ノ峯・上焼田遺跡』鹿児島県教育委員会報告書(5)1977
- 鹿児島県教育委員会『牛ノ原遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(18)1996
- 鹿児島県教育委員会『柿内・大園・西俣遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(24)1999
- 鹿児島県教育委員会『三角山Ⅰ遺跡(P地点)』鹿児島県立埋蔵文化財センター報告書(46)2002
- ほか各報告書
- 河口貞徳『日本の古代遺跡38鹿児島』保育社 1988
- 橋口尚武『種子島の考古学』九州上代文化論集
- 中種子町郷土誌編集委員会『中種子町郷土誌』1971
- 南種子町郷土誌編纂委員会『南種子町郷土誌』1987
- 徳永和喜『種子島の史跡』和田書店 1983

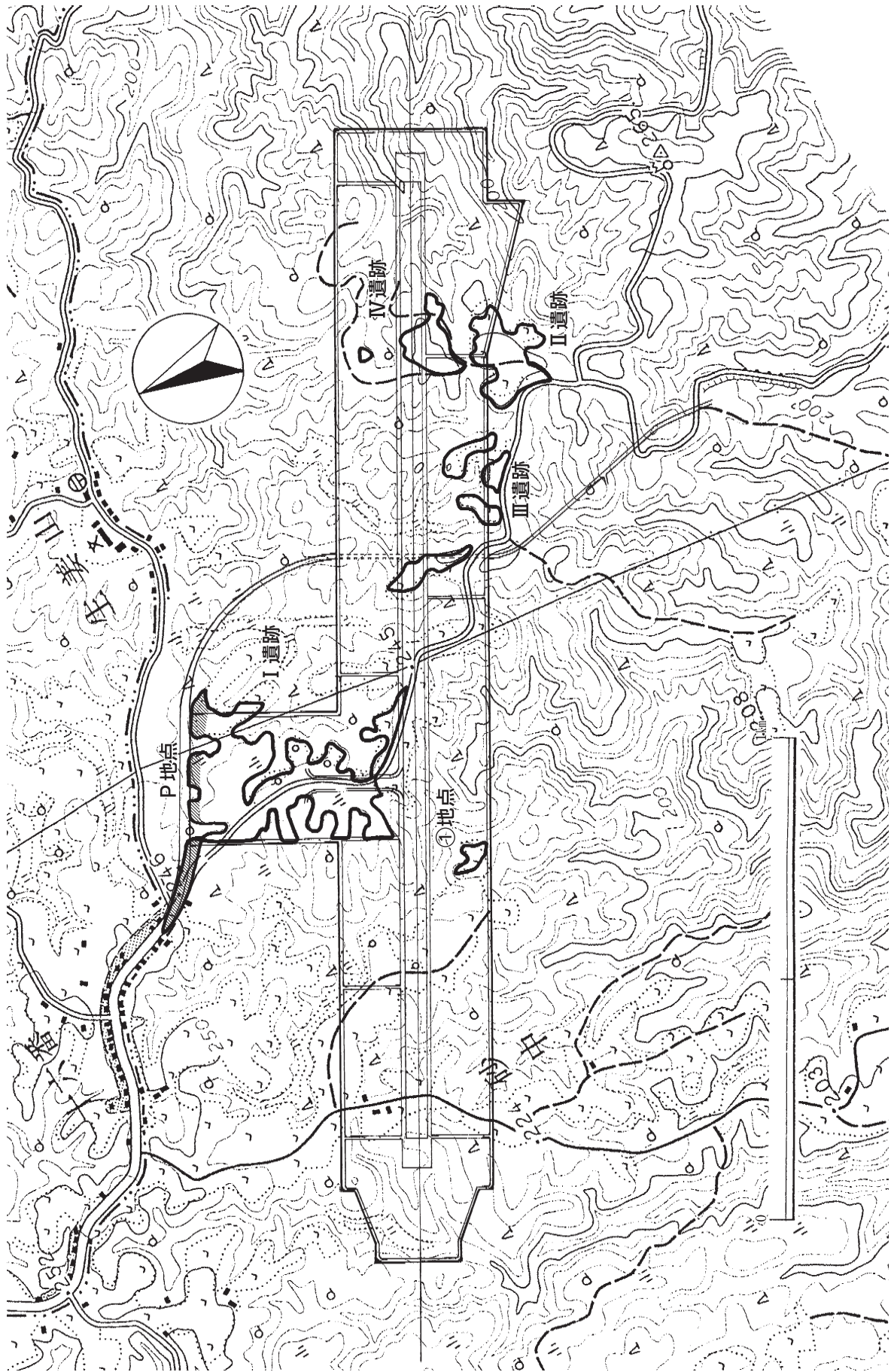


第2図 周辺遺跡位置図 (1 : 50,000)



第1表 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	県遺跡番号
1	三角山Ⅰ	中種子町砂中	台地	縄文(創・早・前)	住居跡・集石・隆帯文・塞ノ神式・苦浜式・轟式・トトロ石器・耳飾りほか	80-58
2	三角山Ⅱ	中種子町砂中	台地	縄文(早)・古代・近代	集石・吉田式・塞ノ神式・天道ノ尾式・手向山式・石鏃・耳栓・須恵器ほか	80-59
3	三角山Ⅲ	中種子町砂中	台地	縄文(早)	貝殻炭痕文	80-60
4	三角山Ⅳ	中種子町砂中	台地	縄文(早・中)	集石・塞ノ神式・苦浜式・春日式・石鏃・石斧・スクレイパーほか	80-61
5	保江	西之表市住吉深川	台地	縄文	土器片	13-90
6	青野原	西之表市住吉深川	台地	縄文	土器片	13-91
7	高峯	西之表市住吉深川	台地	縄文(早・前)	塞ノ神式・轟式・磨石・敲石・石皿	13-46
8	深川	西之表市住吉深川	台地	縄文(早)	塞ノ神式	13-4
9	古田城跡	西之表市古田村之町	丘陵	中世		13-44
10	二本松	西之表市古田二本松	台地	縄文(創・早)	隆帯文・塞ノ神式・平橋式	13-5
11	中割	西之表市中割万波	台地	弥生	土器片	13-62
12	鬼ヶ野A	西之表市安城上之町	台地	縄文	土器片	13-96
13	鬼ヶ野B	西之表市安城上之町	台地	縄文	土器片	13-97
14	鬼ヶ野C	西之表市安城上之町	台地	縄文(創・早)・古墳	土器片・石鏃	13-98
15	三本松	西之表市安城川脇	台地	縄文	土器片	13-107
16	仮屋園	西之表市安城平山	台地	縄文	土器片	13-89
17	日守A	西之表市安城川脇	台地	縄文(早)	集石・吉田式・下刺斧式・桑ノ丸式・石鏃・石斧・磨石・敲石・石匙・石皿	13-68
18	日守B	西之表市安城川脇	台地	縄文(早)	土器片	13-69
19	日守C	西之表市安城川脇	台地	縄文(早)	土器片・石鏃	13-70
20	通利山	西之表市安城上之町	台地	縄文	土器片	13-115
21	長迫	西之表市安城川脇	台地	縄文	土器片	13-106
22	東前平	西之表市安城大野	台地	縄文	土器片	13-108
23	芦野	西之表市立山芦野	台地	縄文	土器片	13-109
24	九郎又門	西之表市立山芦野	自然堤防		土器片	13-67
25	奥ノ仁田	西之表市立山植松	台地	縄文(創・早)	集石・隆帯文・苦浜式・平橋式・石鏃・石斧・磨石・敲石・石皿ほか	13-66
26	奥嵐	西之表市立山植松	台地	縄文(早・後)	土器片	13-104
27	尾呂ノ平	西之表市立山御牧	台地	縄文	土器片	13-110
28	長崎	西之表市立山御牧	台地	縄文	土器片	13-111
29	中園A	西之表市立山立山	台地	縄文	土器片	13-112
30	中園B	西之表市立山立山	台地	縄文	土器片	13-113
31	下ノ平	西之表市立山立山	台地	縄文	土器片	13-114
32	福丸A	中種子町牧川	山頂緩斜面	縄文	縄文土器	80-63
33	福丸B	中種子町牧川	山腹緩斜面	縄文	縄文土器	80-64
34	太田尾	中種子町牧川	海岸段丘	縄文(早)	天道ノ尾式・塞ノ神式	80-65
35	太田尾B	中種子町牧川字太田尾	海岸段丘	縄文	縄文土器・石斧	80-32
36	赤豆野	中種子町牧川	山腹緩斜面	縄文・古墳	縄文土器・成川式	80-66
37	落ノ下	中種子町牧川	山腹緩斜面	縄文	縄文土器	80-67
38	中野	中種子町納官	山腹緩斜面	縄文	縄文土器	80-68
39	園田	中種子町納官	山腹緩斜面	縄文(創・早)	岩木式・塞ノ神式・石槍	80-77
40	油久後	中種子町納官	海岸段丘	縄文	轟式土器・石斧・磨石・石皿	80-69
41	大園	中種子町納官坂元・大園	台地	縄文(前・後・晩)・弥生(中)・中世	轟式・市来式・一湊式・磨製石器・打製石斧・石皿・凹石	80-3
42	大中峯	中種子町納官	山腹緩斜面	縄文・中世	土器片	80-78
43	塩釜神社	中種子町納官竹之川	海岸段丘	縄文	縄文土器	80-25
44	伏之平A	中種子町納官字伏之平	海岸段丘	縄文(早)	塞ノ神式	80-30
45	伏之平B	中種子町納官字伏之平	海岸段丘	縄文(早)	縄文土器	80-31
46	広野	中種子町納官字広野	海岸段丘	縄文	縄文土器	80-35
47	二十番	中種子町増田二十番・西川原	山腹緩斜面	縄文(早・前・後)・弥生(後)	曾畑式・一湊式・磨製石斧・凹石・敲石・弥生土器	80-6
48	中平地	中種子町中平地	台地	縄文(早)	縄文土器	80-53
49	瀬戸口	中種子町増田字瀬戸口	台地	縄文(創)	隆帯文	80-33
50	本願寺	中種子町本願寺	台地	縄文	縄文土器	80-57
51	増田大石野	中種子町増田大石野	台地	縄文(早)	塞ノ神式・磨製石斧・石匙	80-45
52	大石野	中種子町秋佐野大石野	台地	縄文(早)	塞ノ神式・石皿・叩石	80-46
53	中野大石野	中種子町秋佐野中野大石野	台地	縄文	土器片	80-47
54	東松原山	中種子町秋佐野東松原山	台地	縄文	土器片	80-48
55	梶ノ本	中種子町増田梶ノ本	台地	縄文(後)・弥生	縄文土器・弥生土器・石斧・石皿・磨石	80-56
56	下ノ平	中種子町増田下ノ平	台地	縄文(後)	縄文土器・磨石・石斧	80-54
57	苅里塚	中種子町増田苅里塚	台地	縄文(早)	縄文土器	80-55
58	牛之原	中種子町増田向井町・牛之原	台地	縄文(早・晩)	塞ノ神式・苦浜式・打製石斧	80-7
59	増田城跡	中種子町増田古房・城ノ鼻	丘陵	中世		80-21
60	内山	中種子町増田内山	台地	縄文	縄文土器・石斧	80-82
61	東内園	中種子町増田東内園	山頂緩斜面	縄文	無文土器	80-83
62	前田	中種子町増田東前田・釜多田	低地	縄文・弥生	縄文土器・弥生土器	80-84
63	鳥ノ峯	中種子町野間	台地	縄文(早)・弥生(後)	完形弥生土器・土攪20基・人骨	80-18
64	西ノ園	中種子町増田	低地	縄文・弥生		80-85
65	下ノ園	中種子町増田下ノ園	砂丘	縄文・古墳・室町	縄文土器・成川式・青磁・土師器	80-52
66	野間太郎坊	中種子町野間太郎坊	台地	中世室町	須恵器・青磁	80-51
67	的場	中種子町野間	海岸段丘	中世	土師器	80-70
68	竹原田	中種子町野間	谷底平野	中世	青磁	80-71
69	千草原	中種子町増田郡原・千草原	台地	縄文(早・前)	塞ノ神式・轟式	80-13
70	太平園	中種子町野間太平園	山腹緩斜面	縄文		80-62
71	伏之前	中種子町野間伏之前	海岸段丘	縄文(後)	一湊式	80-15
72	上大角	中種子町野間	台地	縄文	縄文土器	80-79
73	畠田	中種子町野間畠田・明石牟田	台地	縄文(早)	苦浜式	80-1
74	常牧	中種子町野間	台地	縄文(早)	塞ノ神式・天道ノ尾式・石鏃	80-80
75	池ノ久保	中種子町野間	台地	縄文(早)	塞ノ神式	80-81
76	上ノ平	中種子町野間上ノ平	台地	縄文(早)	縄文土器・石斧・凹石・磨石	80-34
77	高峯	中種子町野間高峯・東牧塚	台地	縄文(早)・弥生(後)	塞ノ神式・苦浜式・弥生土器	80-8



第3図 三角山遺跡群（新種子島空港建設予定地）



## 第三章 発掘調査の概要

### 第1節 確認調査の概要

三角山遺跡群の調査は平成7年1月23日～平成7年3月24日（36.5日間）、平成7年5月9日～平成8年3月21日（191日間）、平成8年5月8日～平成9年3月18日（161日間）、平成10年5月6日～9月24日（83日間）、平成11年5月10日～9月21日（76日間）、平成12年10月4日～平成13年2月26日（83日間）、平成13年7月3日～11月27日（81日間）、平成14年9月2日～平成15年1月28日（74日間）の期間中に埋文センターが実施した。

三角山遺跡群の確認調査は平成6年度から実施した。用地買収の遅れや、調査工程の都合により、平成7年度以降はほとんどの場合において確認調査から引き続き本調査を実施することとなった。以下、確認調査の概要を述べる。なお、三角山Ⅱ遺跡・Ⅲ遺跡・Ⅳ遺跡については、平成15年度刊行の三角山遺跡群（2）で報告済みであるので、参照されたい。

#### （1）三角山Ⅰ遺跡

平成6年度に21か所のトレンチを設定し、掘り下げた結果、ほとんどの場所が整地や掘り下げなどによって削平されてしまっていたが、三角山Ⅰ遺跡の21号トレンチで遺物包含層が確認され、縄文時代早期の土器片4点、礫11点が出土した。この時点で三角山Ⅰ遺跡は遺物が出土する範囲が200㎡と想定された。

平成7年度には12,520㎡を対象に4×2.5mを基本としたトレンチを29か所設定した。その結果、1・2・4・5・22・52の各トレンチで遺物が出土し、縄文時代草創期の遺物が出土する範囲約6,000㎡、縄文時代前期の遺物が出土する範囲約700㎡（縄文草創期と重複）の存在が確認された。

平成8年度には約2,000㎡について4か所のトレンチを設定し調査を行った結果、4トレンチで縄文時代草創期・縄文時代早期・縄文時代前期の3文化層から遺物が出土し、約1,000㎡の遺物出土範囲が確認された。

平成9年度には約13,000㎡について18か所のトレンチを設定し確認調査を行った結果、10・11・13・14・15の各トレンチで遺構・遺物が発見された。これらのトレンチ周辺約4,000㎡に遺物包含層が残存していることが確認された。

平成10年度には15か所のトレンチを設定し、約5,300㎡について調査した。このうち7か所で遺構・遺物が発見された。その結果あわせて2,100㎡の面積に遺物包含層が確認された。

平成11年度にはK～R-9～15区において約2,500㎡を対象範囲として確認調査を実施したが、遺構・遺物は発見されなかった。

平成12年度には約600㎡について確認調査を実施した。1か所のトレンチを設定して調査を行ったが、遺構・遺物は発見されなかった。

平成13年度には約9,000㎡について確認調査を実施した。23か所のトレンチを設定して調査を行ったところ、6か所から遺構・遺物が発見された。D地点の緩斜面部分については周辺の調査結果から遺構・遺物の存在することが容易に判断できたためそのまま本調査に移行し、急斜面部分のみトレンチ調査を行った。

### 第2節 本調査の概要

#### （1）三角山Ⅰ遺跡

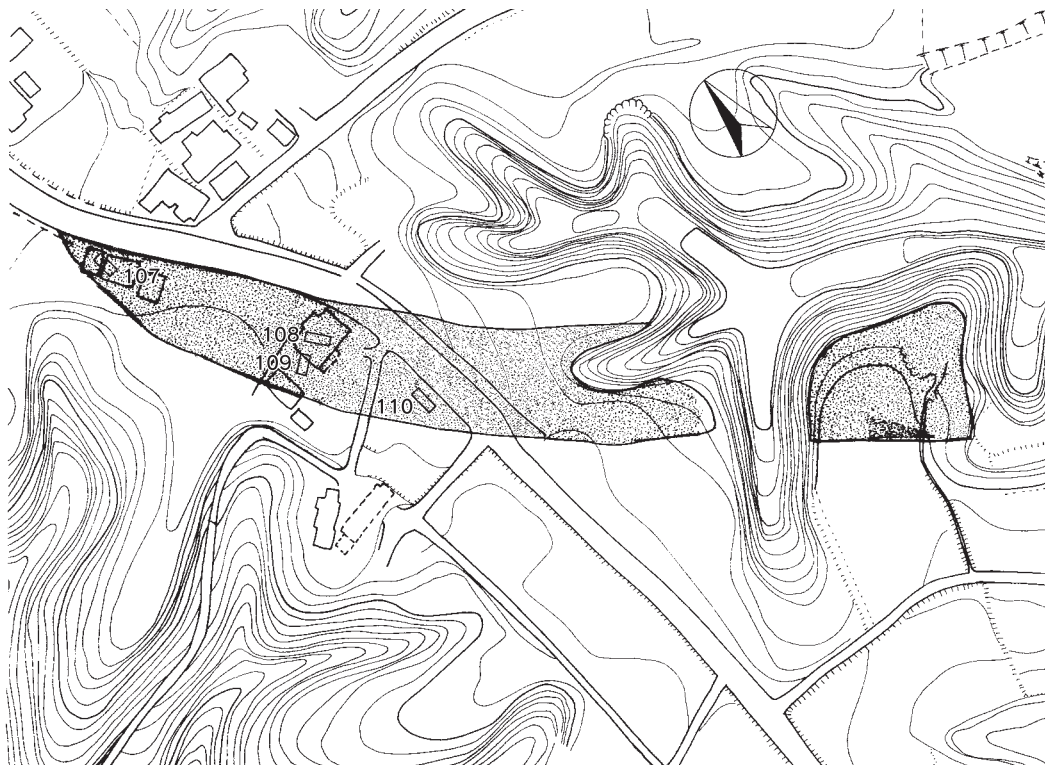
本調査は平成8年5月8日～11月22日、平成10年5月6日～9月24日、平成11年5月10日～9月21日、平成12年10月4日～平成13年2月26日、平成13年7月3日～11月27日、平成14年9月2日～平成15年1月28日の期間中に実施した。

縄文時代草創期・早期・前期の遺構・遺物が発見されているが、中でも特に注目されるのが縄文時代草創期の竪穴住居状遺構と隆帯文土器・磨製石鏃などの遺物である。特に隆帯文土器については明確にサツマ火山灰層の下から出土したものとしては種子島では初めてのもので、かつ県内でもこれだけの量が出土する遺跡は少なく、重要なものである。

また、この他にも縄文時代早期の玦状耳飾り（県内では確実にアカホヤ火山灰の下から確認されたものとしては初の例）・トロトロ石器（平成14年12月時点での日本最南端の出土例）・磨製石鏃なども出土しており、数回にわたって新聞報道がされるなど三角山遺跡群の中でも特に注目される遺跡である。

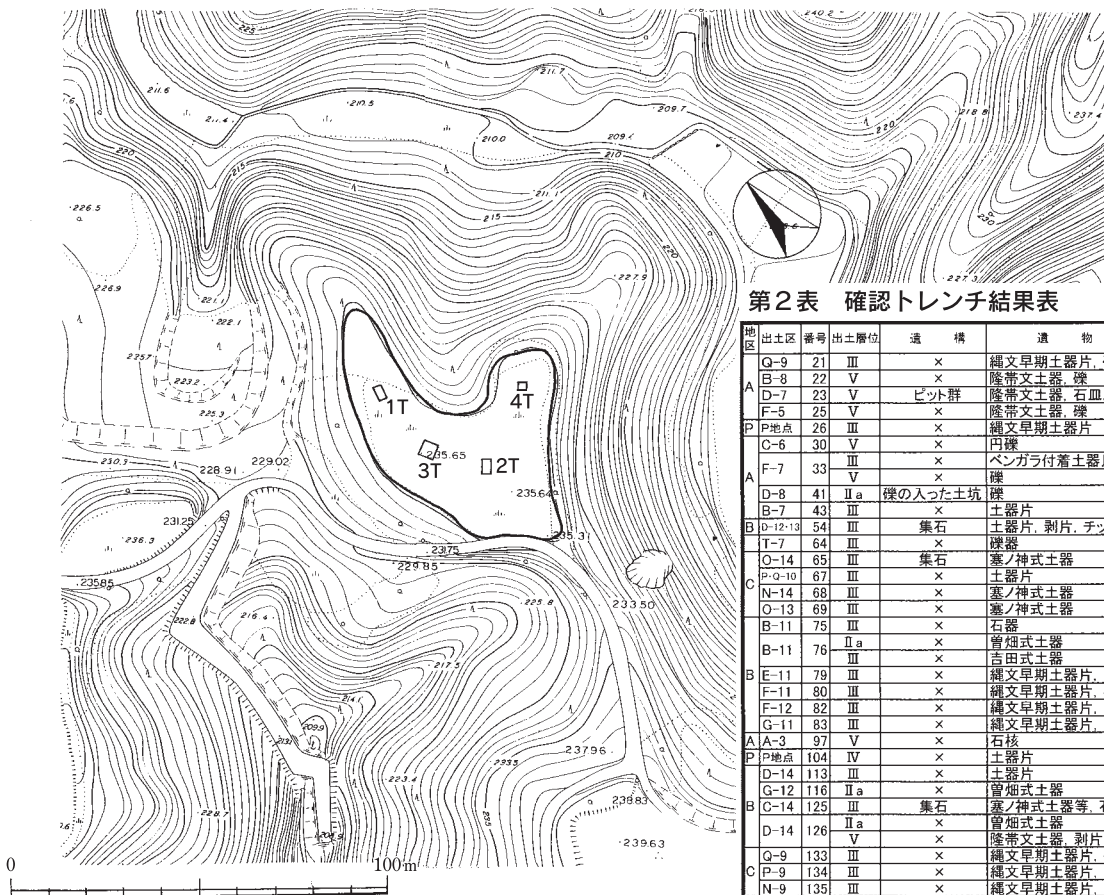
調査最終年度の平成14年12月21日には現地説明会を実施し、約140名の見学者を迎えて好評を得ることができた。

なお、平成12年度に調査を行った三角山Ⅰ遺跡のP地点（県道付け替え部分）については平成14年度に報告書が刊行されている。



▲ P地点 (西側)

▼ ①地点

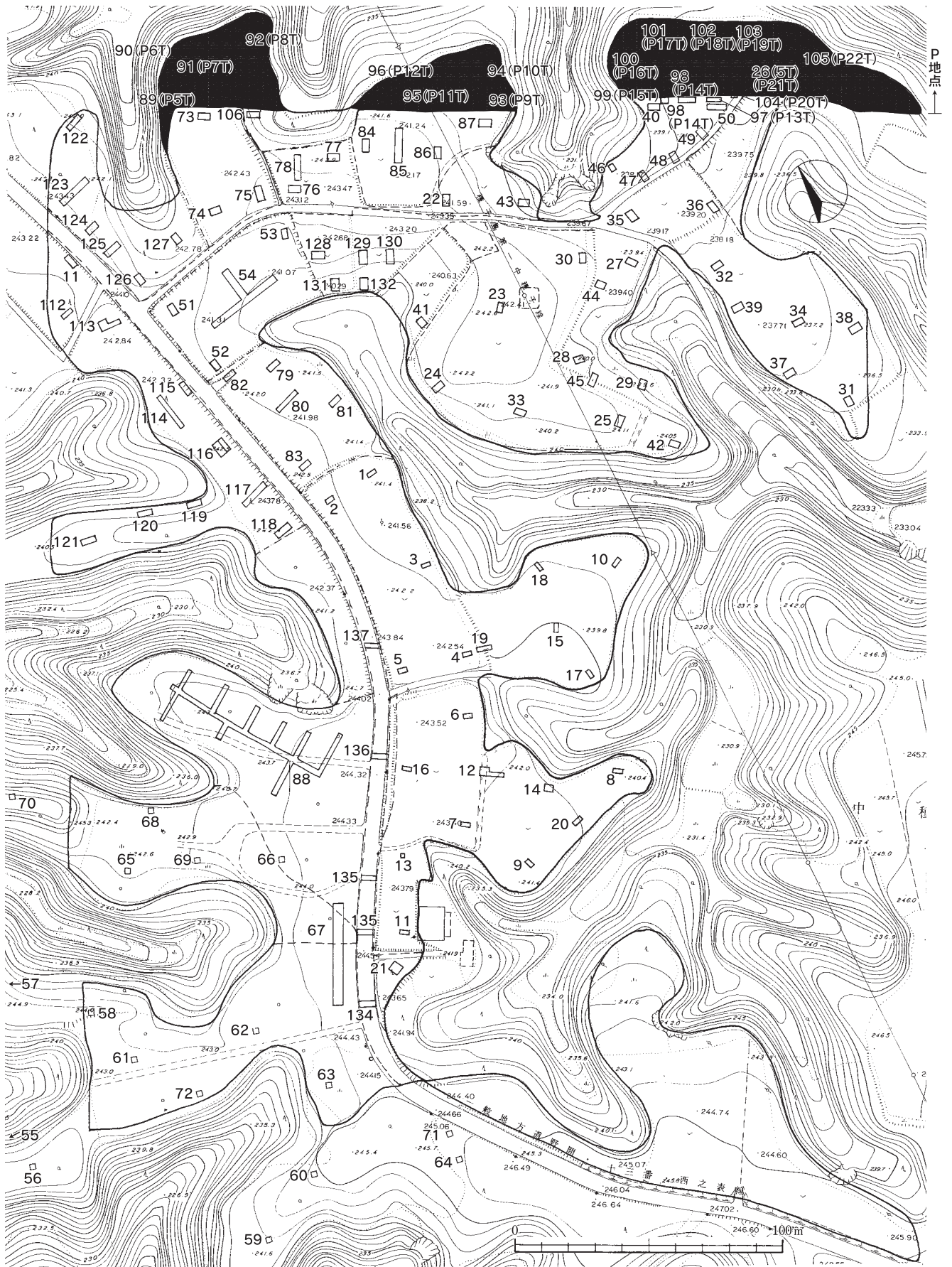


第2表 確認トレンチ結果表

地区	出土区	番号	出土層位	遺構	遺物	調査年度
A	Q-9	21	Ⅲ	x	縄文早期土器片, 礫	H 6
	B-8	22	V	x	隆帯文土器, 礫	H 7
	D-7	23	V	ピット群	隆帯文土器, 石皿, 礫	H 7
	F-5	25	V	x	隆帯文土器, 礫	H 7
	P地点	26	Ⅲ	x	縄文早期土器片	H 7
P	C-6	30	V	x	円礫	H 7
	F-7	33	V	x	ベンガラ付蓋土器片, 礫	H 7
A	D-8	41	Ⅱa	礫の入った土坑	礫	H 7
	B-7	43	Ⅲ	x	土器片	H 7
B	D-12-13	54	Ⅲ	集石	土器片, 剥片, チップ	H 8
	T-7	64	Ⅲ	x	礫器	H 9
	O-14	65	Ⅲ	集石	塞/神式土器	H 9
C	P-Q-10	67	Ⅲ	x	土器片	H 9
	N-14	68	Ⅲ	x	塞/神式土器	H 9
	O-13	69	Ⅲ	x	塞/神式土器	H 9
B	B-11	75	Ⅲ	x	石器	H10
	B-11	76	Ⅱa	x	骨燻式土器	H10
B	B-11	76	Ⅲ	x	吉田式土器	H10
	E-11	79	Ⅲ	x	縄文早期土器片, 石器	H10
	F-11	80	Ⅲ	x	縄文早期土器片, 石器	H10
	F-12	82	Ⅲ	x	縄文早期土器片, 石器	H10
	G-11	83	Ⅲ	x	縄文早期土器片, 石器	H10
A	A-3	97	V	x	石核	H12
	P地点	104	Ⅳ	x	土器片	H12
D	D-14	113	Ⅲ	x	土器片	H13
	G-12	116	Ⅱa	x	骨燻式土器	H13
B	C-14	125	Ⅲ	集石	塞/神式土器等, 石器	H13
	D-14	126	Ⅱa	x	骨燻式土器	H13
C	D-14	126	V	x	隆帯文土器, 剥片, チップ	H13
	Q-9	133	Ⅲ	x	縄文早期土器片, 礫	H14
P	P-9	134	Ⅲ	x	縄文早期土器片, 石器	H14
	N-9	135	Ⅲ	x	縄文早期土器片, 石器	H14

第4図 三角山I遺跡トレンチ配置図 (1)





第5図 三角山I遺跡トレンチ配置図(2)

## (2) 基本土層

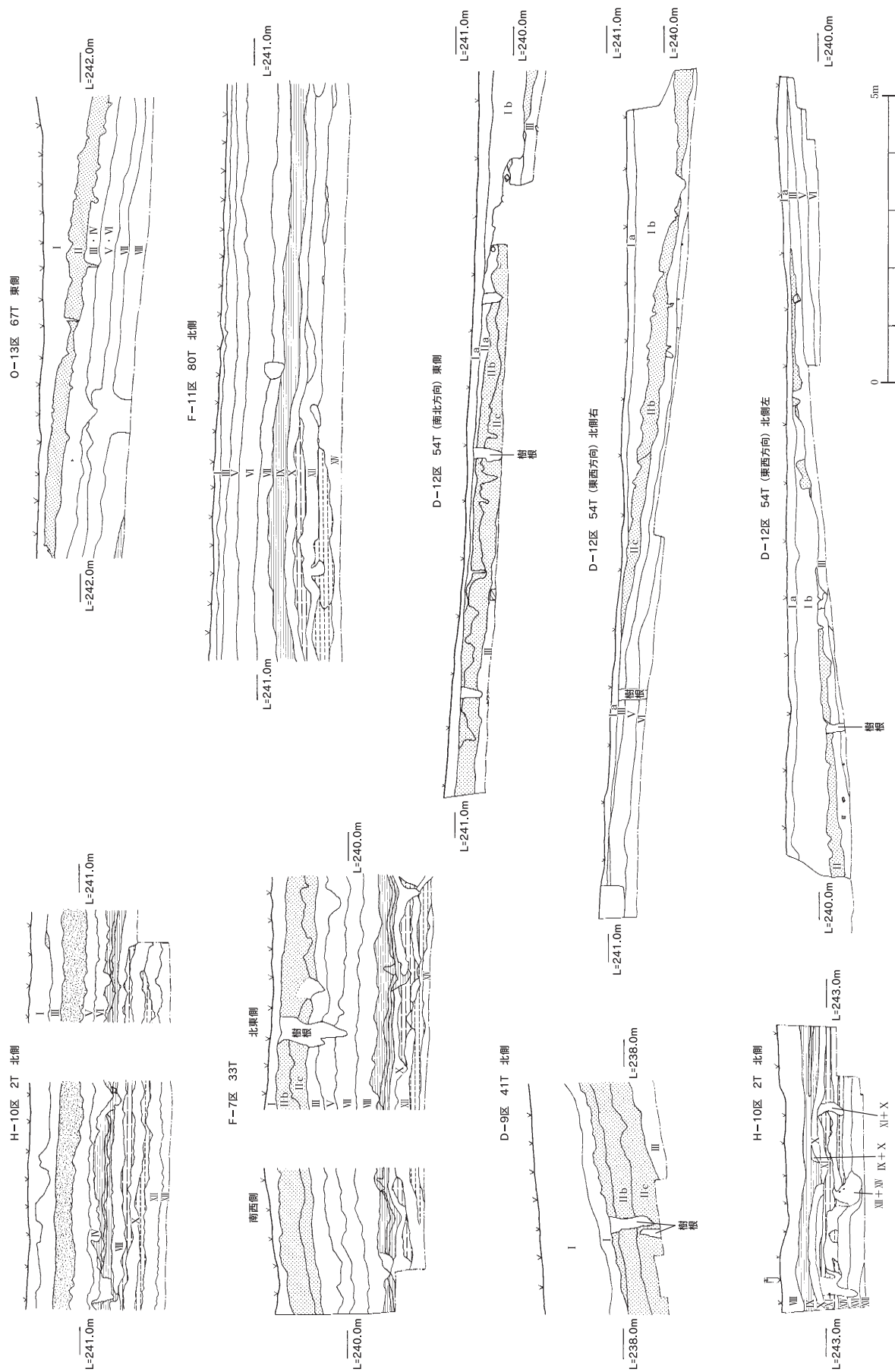
本遺跡は古第3紀の熊毛層群の砂岩を基盤とした台地上に、指宿火山唐山起源とされる種Ⅰ・Ⅱ火山灰、鬼界カルデラ起源の可能性のある種Ⅲ・Ⅳ火山灰、始良カルデラ起源(24,000y.B.P)のA T火山灰、桜島起源(11,500y.B.P)の薩摩火山灰、鬼界カルデラ起源(6,400y.B.P)のアカホヤ火山灰など時代や噴出源の異なる火山噴出物が堆積している。この中で

も薩摩火山灰は、本遺跡において種子島島内で初めて確認された物である。まばらなブロック状に産出し、はっきりした堆積層が見られる場所は少ない。これに対してアカホヤ火山灰は、数十cmの厚さでほぼ全域にわたって堆積している。これらの火山灰は本遺跡の性格を明らかにする上で貴重な資料となっている。

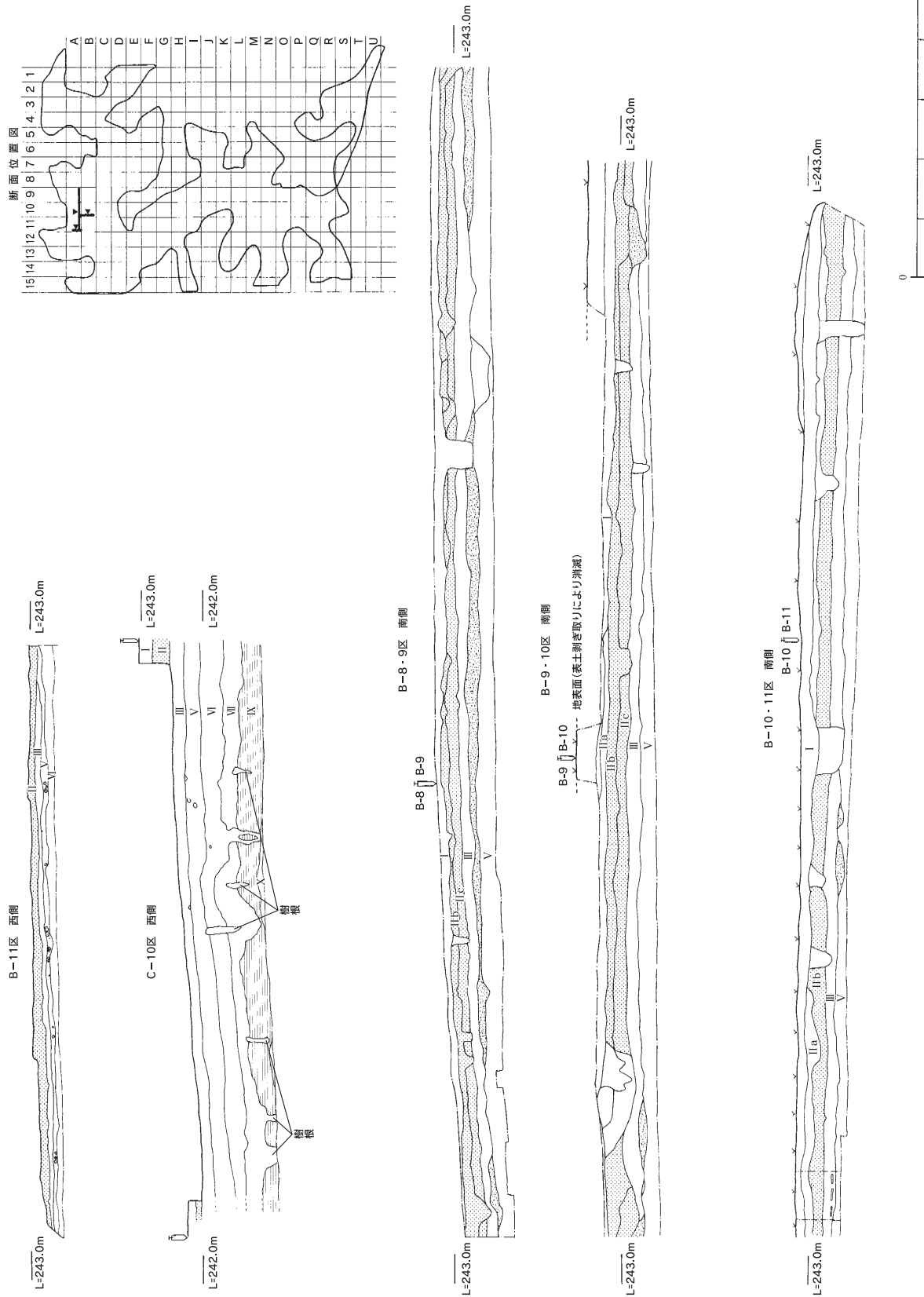
以下は基本的な層位である。

I	I層 表 土 (造成土)
★ IIa	II層 黄 橙 色 火 山 灰 土 : アカホヤ火山灰。鬼界カルデラ起源の約6,400年前の噴出物。堆積物の状態で a. b. c の3層に分けられる。IIa 層は縄文時代前期の包含層である。
IIb	
IIc	
★ III	III層 茶 褐 色 粘 質 土 : やや粘質をもつ。縄文時代早期の包含層である。
IV	IV層 黄 褐 色 粘 質 土 : 薩摩火山灰。桜島起源の約11,500年前の噴出物。全体に広がらず、ブロック状に観察される。
★ V	V層 茶 褐 色 粘 質 土 : 層厚が15~20cm程で、三角山I遺跡では縄文時代草創期の包含層である。
VI	VI層 淡 茶 褐 色 粘 質 土 : 未詳火山灰。若干の砂を含み、ブロック状に観察される。
VII	VII層 淡 茶 褐 色 粘 質 土 : VI層と色調は同じだが、砂を含まず粘質が若干強い。
VIII	VIII層 淡 茶 褐 色 強 粘 質 土 : 粘質が強い。
IX	IX層 明 黄 褐 色 火 山 灰 土 : 始良丹沢火山灰。始良カルデラ起源の約24,000年前の噴出物。
X	X層 淡 茶 褐 色 強 粘 質 土 : 粘質が強く軟質である。
XI	XI層 淡 茶 褐 色 火 山 灰 土 : 種Ⅳ火山灰。鬼界カルデラ起源の約30,000年前の噴出物。非常に硬く締まっている。
XII	XII層 淡 茶 褐 色 強 粘 質 土 : 粘質が強く、硬く締まっている。
XIII	XIII層 黄 褐 色 火 山 灰 土 : 種Ⅲ火山灰。鬼界カルデラ起源の約38,000年前の噴出物。明瞭な堆積である。
XIV	XIV層 淡 茶 褐 色 強 粘 質 土 : 非常に粘質が強い。
XV	XV層 黄 褐 色 火 山 灰 土 : 種Ⅰ・Ⅱ火山灰。場所によっては確認されない。
XVI	XVI層 淡 茶 褐 色 強 粘 質 土 : 粘質が強い。
XVII	XVII層 砂岩混じり淡茶褐色強粘質土 : XVI層とXVIII層の混在する層。
XVIII	XVIII層 赤 色 風 化 砂 岩 礫 : 基盤層が風化してできた層。
XIX	XIX層 基 盤 層 : 熊毛層群の砂岩。

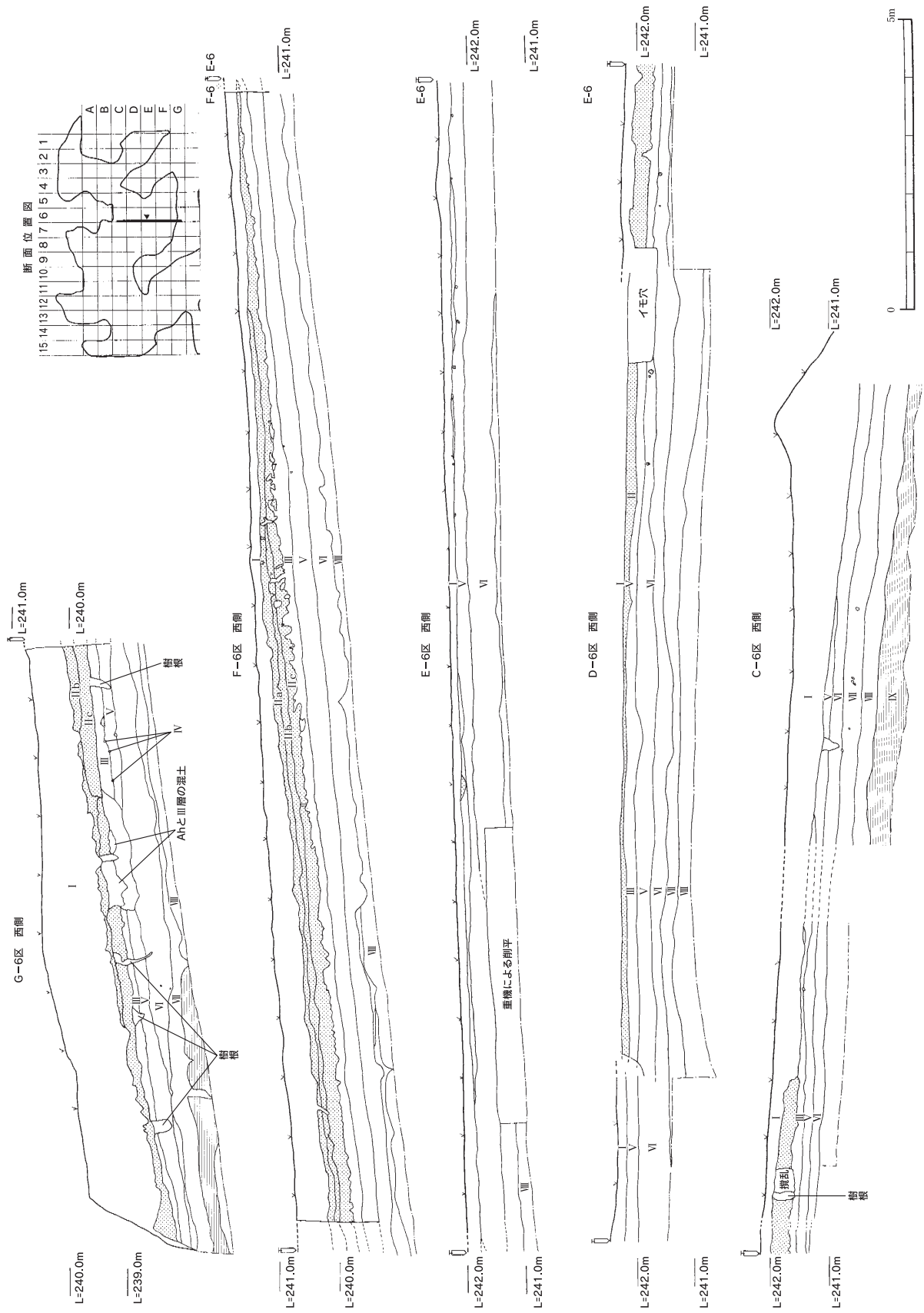
第6図 土層柱状図



第7図 土層断面図(1)

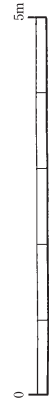
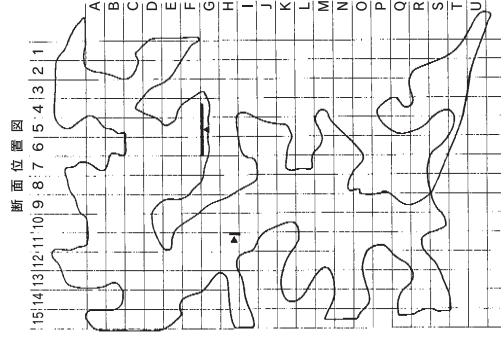
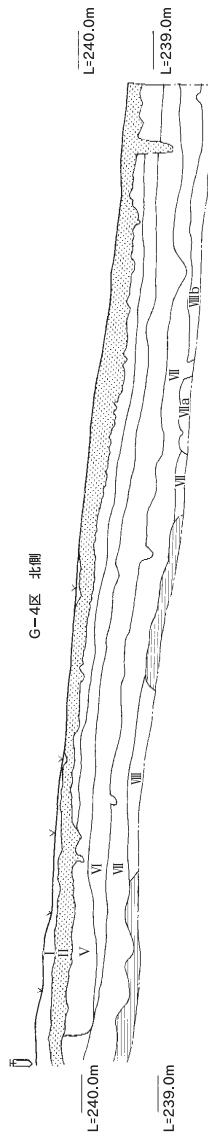
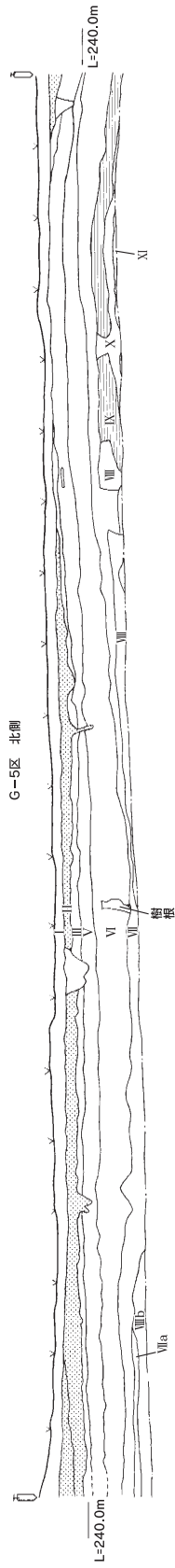
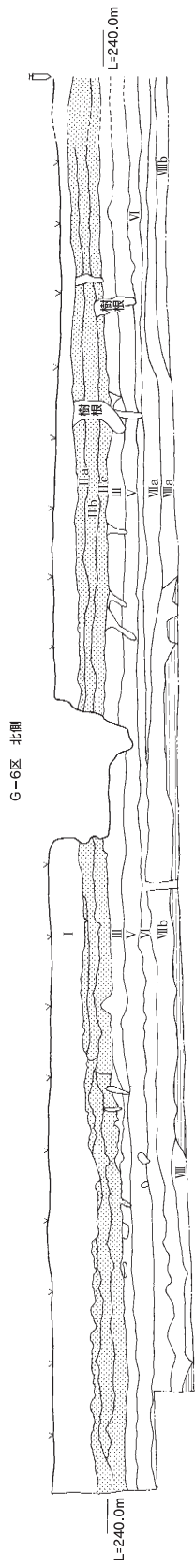


第8図 土層断面図(2)



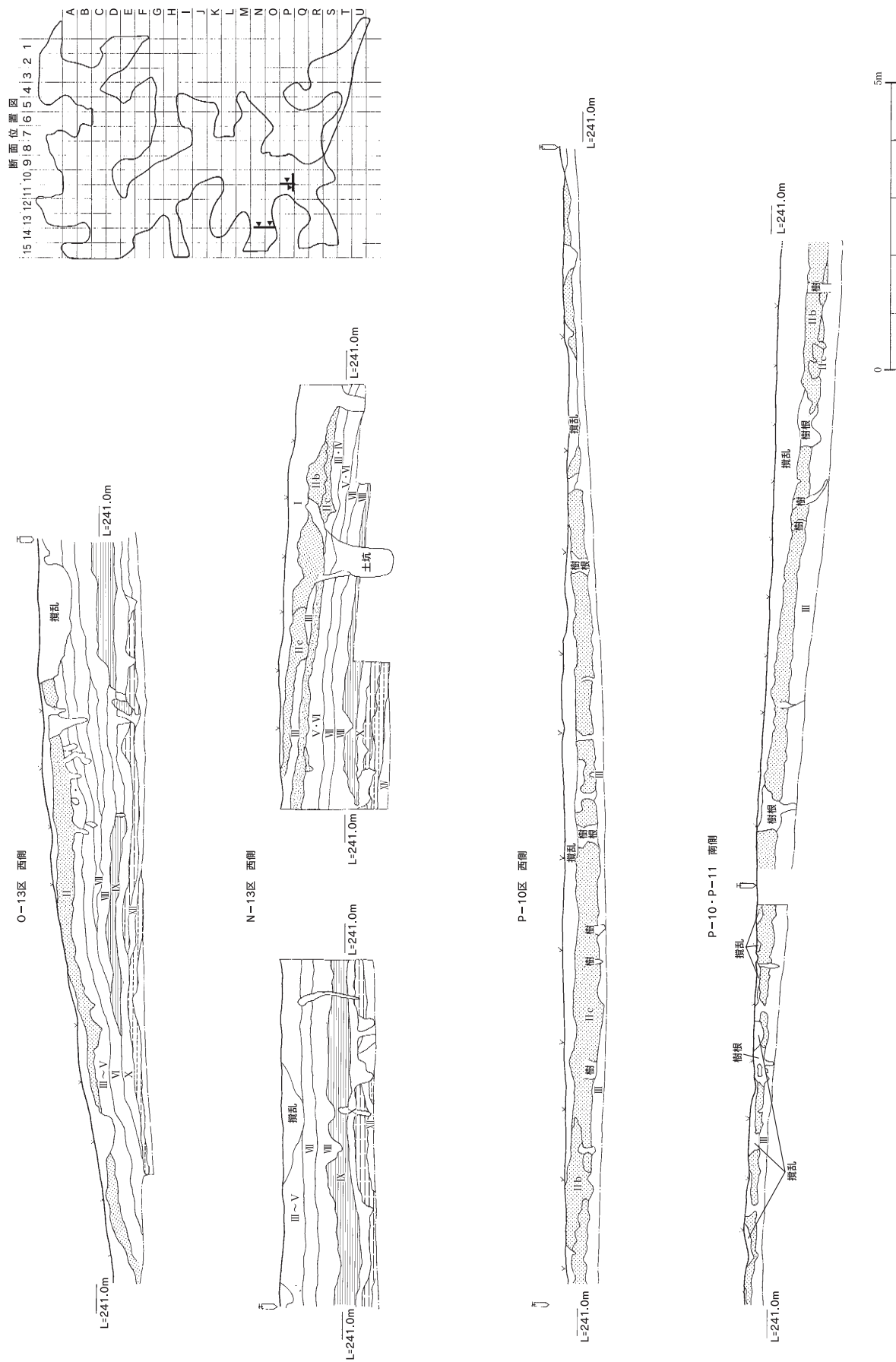
第9図 土層断面図(3)





第10図 土層断面図 (4)





第11图 土層断面图 (5)

### 第3節 遺構・遺物の概要

#### 1 遺跡全体について

遺構の分布と遺物出土状況から、遺跡全体を大きく3つの地区に分けた。A地区はA～J-3～8区、B地区はA～J-9～14区、C地区はL～Q-9～14区の範囲である。

#### 2 遺構・遺物の番号・分類について

##### (1) 遺構

###### ア 竪穴住居跡

三角山I遺跡で発見された竪穴住居跡は2基である。調査時の遺構番号をそのまま用いた。

###### イ 土坑

三角山I遺跡で発見された土坑は総数で10基である。礫群・集石同様に番号を振り直した。

###### ウ 礫群・集石

三角山I遺跡で発見された礫群・集石は、総数で52基である。調査が長期にわたり、かつ遺構番号も年度ごとに検出順に付されたため、検索しづらい状態となった。そのため、本報告を行うに当たって、形態により1～7類まで分類し、改めて番号を振り直した。方針は以下の通りである。

##### ① 分類の概念

1類 礫が集中せず、掘り込み部も確認できないもの。

2類 礫が集中するが、掘り込み部が確認できないもの。

3類 礫が集中し、掘り込み部が確認できたもの。

4類 礫が集中し、掘り込み部が確認できないもので、掘り込み部のない小数礫の集中が隣接して付随するもの。

5類 礫が集中し、掘り込み部が確認できたもので、掘り込み部のない小数礫の集中が隣接して付随するもの。

6類 礫が集中し、掘り込み部が確認できたもので、掘り込み部のある小数礫の集中が隣接して付随するもの。

7類 礫が集中し、掘り込み部が確認できたもので、掘り込み部のある小数礫の集中が複数隣接するもの。

② 遺構番号は時期別に、A区域から1～7類の順に付した。

###### エ その他の遺構

草創期ではピット群2基、焼土域1基が確認されている。早期では石坂式土器の集中が1基認められた。また、石器制作跡も多数分布している。

#### (2) 遺物の概要

##### ア 土器

###### ① 分類基準

三角山遺跡群における土器は、表土からV層にわたって出土した。出土状況は層ごとに単独で出土する土器である縄文時代草創期の隆帯文土器（三角山I遺跡のV層出土）と、そうでないものとに区別される。よって土器は器形や文様などの属性分析を主に分類を行った。なお、三角山I遺跡では縄文時代草創期以降の土器が、三角山II・III・IV遺跡では縄文時代早期以降の土器が出土したことから、ここでは便宜上縄文時代草創期の土器を第1群とし、縄文時代早期以降の土器を第2群、縄文時代前期以降を第3群などとして区分することとする。第2群4類の土器は今回報告する三角山I遺跡ではみられない。

##### イ 石器

石鏃や石皿など狩猟採集生活を同わせる石器類が多量に出土している。小型の剥片石器から、大型の礫石器まで、順に説明することとした。

#### 3 縄文時代草創期（V層）の概要

##### (1) 遺構の概要

###### ア 竪穴住居跡

2基検出された。いずれも円形の掘り込みがあり、うち1基は焼土を持つ。

###### イ ピット群

2基検出された。竪穴住居跡周辺のものもあるが確実なものではない。

###### ウ 土坑

土坑は2基である。うち1基は薩摩火山灰が埋土になっており、同遺構内出土の土器片が住居跡出土の土器片と接合した。

###### エ 礫群

礫群は8基である。いずれも掘り込みがあり、3類が4基、5類が2基、6類が2基である。

###### オ その他の遺構

住居跡以外に焼土域1基、石器製作跡が数か所確認されている。

##### (2) 遺物の概要

###### ア 土器（第1群）

1～15類まで類別した。隆線文土器（1・7類）、無文土器（2類）、隆帯文土器（3～6・8～12類）などが多量に出土している。

###### 1類

器形は、口縁部が外反し、口唇部は舌状で丸

平底である。口縁部に隆線を3条貼り付け、指頭で施文している。既存の土器型式では隆線文土器に該当する。

## 2類

器形は、口縁部がやや外傾または内弯し、口唇部は舌状で一部土器は平丸底である。無施文もしくは、口唇部に刻み目が入る。既存の土器型式では無文土器に該当するが3～9類に含まれる可能性がある。

## 3類

器形は、口縁部が外傾して開く鉢形で、口唇部は舌状で丸底または丸平底である。口縁～胴部に隆帯を薄く1～4条貼り付け、指頭や工具等で施文している。既存の土器型式では隆帯文土器に該当する。

## 4類

器形はサラダボール状の鉢形や深鉢があり、口縁部がやや外傾または直立し、口唇部は舌状で丸平底である。口縁～胴部に隆帯を2～4条貼り付け、指頭や貝殻等で施文している。既存の土器型式では隆帯文土器に該当する。

## 5類

器形は、口縁部がやや内弯し、口唇部は舌状から平頂で胴部下半分から徐々にすぼまり平丸底となる。口縁～胴部に隆帯を2～4条貼り付け、指頭や貝殻等で施文している。既存の土器型式では隆帯文土器に該当する。

## 6類

器形は、口縁部が直立から内弯し、口唇部は基本的に角丸平頂で平丸底である。口縁～胴部に隆帯を1～6条貼り付け、指腹や貝殻等で施文している。既存の土器型式では隆帯文土器に該当する。

## 7類

器形は、口縁部がやや外傾または内弯し、口唇部は平頂で平丸底である。口縁～胴部に隆帯を1～6条貼り付け、楊枝状工具等で施文している。口唇部内側にも刻み目が入るものもある。既存の土器型式では隆線文土器に該当する。

## 8類

器形は、口縁部がやや外傾または直立し、口唇部は厚い舌状で平丸底である。口縁部に隆帯を1条貼り付け、爪等で施文している。口唇部内側にも刻み目が入る。既存の土器型式では隆帯文土器に該当する。

## 9類

器形は、口縁部がやや内弯し、口唇部は平頂

である。胴部が屈曲し、底部は上げ底または平底である。口縁・胴屈曲部・底部に隆帯を貼り付け、指腹で施文している。口唇部内側にも刻み目が入る。既存の土器型式では隆帯文土器の志風頭タイプに該当する。

## 10類

口縁部は確認されていないが、器形は、胴部がやや外傾または外反し、完全な平底である。口縁～胴部に隆帯を数条貼り付け、2本の爪先で「ハの字」状に施文している。既存の土器型式では隆帯文土器に該当する。

## 11類

小片のため器形は不明であるが、口唇部に直接刻み目を施すものである。他の類に含まれる可能性がある。

## 12類

小片のため器形は不明であるが、口唇部は平頂である。口縁部に指腹で2段、交互に施文している。既存の土器型式では隆帯文土器に該当する。

## 13類

小片のため器形は不明であるが、口唇部は平頂である。口縁～胴部に爪等で施文している。既存の土器型式では爪形文土器に該当する。

## 14類

1類から13類までにはいないものを一括した。1個体程度の出土であるので、詳細は各地点ごとに報告書中で述べたい。

## 15類

完形品と類別可能なもの以外の胴部と底部を一括した。

### イ 石器

磨製石鏃、打製石鏃、磨製石斧、打製石斧、石核、砥石、磨石、石皿などが多量に出土している。

## 4 縄文時代早期(Ⅲ層)の概要

### (1) 遺構の概要

#### ア 土坑

土坑は1基である。県道建設のため大半が削平されており、確実なことは分からない。

#### イ 集石

集石は40基である。1類が17基、2類が3基、3類が8基、4類が1基、5類が7基、6類が1基、7類が1基である。なお、残り2基分はセット関係にあるとして、4類と5類に含めた。

#### ウ その他の遺構

石坂式土器1個体分が、集中して出土している土器片集中遺構が1基、石器製作跡が多数確認さ

れている。

## (2) 遺物の概要

### ア 土器 (第2群)

土器分類は、『三角山遺跡群 (2)』(以下「報告I」とする。)に基づいているが、新たに認められた類もあるので整理した。

#### 1類

円筒形を呈し、口縁端部に規則的な刻みを施す。その下に波状の貝殻条痕紋を施すものである。岩本式土器に比定される。

#### 2類

前平式土器に該当する。(「報告I」では1類とした。)

#### 3類

石坂式土器に該当する。遺構として取り上げている。

#### 4類

器形は、口縁部が外反する。口縁部や胴部に刺突をめぐらせ、部分的にフジツボ状の瘤状突起が付着する。紋様は、沈線紋・刺突紋を組み合わせた多様な紋様パターンがみられる。

妙見・天道ヶ尾式土器をはじめとする平椀式の前段階について一括している。(「報告I」では5類とした。)

#### 5類

平椀式土器に該当する。

器形は、口縁部が外反する。口縁部外面に粘土紐を貼付するなどして肥厚させ、紋様帯をつくりだしている。紋様は、口縁部に沈線紋を羽状に施し、胴部には結節縄紋が施紋されている。(「報告I」では6類とした。)

#### 6類

撚糸文系の塞ノ神式土器(塞ノ神A式)に該当する。器形は口縁部がラッパ状に外反し、短筒状の胴部を呈する。底部は比較的薄手で若干上げ底状を呈している。文様は網目撚糸文を、間隔をおいて縦位に施すものと、幾何学的に撚糸紋を施し、その上と下を沈線で区画する2つのタイプがみられる。(「報告I」では7類とした。)

#### 7類

貝殻系系の塞ノ神式土器(塞ノ神B式)に該当する。器形は口縁部が外反し胴部内面に稜線を残すものと直行し胴部がわずかにふくらむものがある。文様は貝殻腹縁による刺突連点紋、貝殻腹縁またはへら描きによる菱形格子紋を口縁部および胴部に施すものなどが

ある。なお、形態的な特徴を考慮して無紋の塞ノ神式土器についても7類としている。(「報告I」では8類とした。)

#### 8類

苦浜式土器に該当する。器形は平底で、口縁部・頸部などについてはバリエーションがみられる。口縁部は外反するものと内湾気味のものがみられる。頸部はゆるくしまるものと直線的なものがみられる。紋様は口縁部にへらまたは貝殻腹縁による刻みを施し、胴部には貝殻による直線または波状の条線紋を施す。縦位あるいは横位に短突帯や瘤状突帯を持つ。(「報告I」では9類とした。)

#### 9類

器形は8類(苦浜式土器)に類似し、口唇部にはへらまたは貝殻腹縁による刻みを施し、胴部には頸部の痕跡と考えられるゆるいしまりがわずかにみられる。紋様は胴部(口縁部下施紋帯)に棒状工具による鋸歯状紋を施す。(「報告I」では10類とした。)

#### 10類

既存の土器型式では轟1式土器または右京西タイプとされるものに該当する。(「報告I」では12類とした。)

#### その他

1類から10類までにはいないものを一括した。

### イ 石器・石製品

トロトロ石器、玦状耳飾り、磨製石鏃、打製石鏃、磨製石斧、石槍状石製品、石匙、磨石、石皿などが多量に出土している。

## 5 縄文時代前期(Ⅱ層)の概要

### (1) 遺構の概要

#### ア 土坑

土坑は2基である。うち1基は巨石を伴うためメンヒルの可能性がある。

#### イ 集石

集石は4基で、いずれも3類である。

### (2) 遺物の概要

#### ア 土器 (第3群)

#### 1類

既存の土器型式では轟式土器に相当する。貝殻条痕紋を施すもの(a)と微隆起突帯を付けるもの(b)とがある。



## 2類

既存の土器型式では曾畑式土器に相当する。  
紋様は刺突連点と沈線によって施される。

## 3類

既存の土器型式では深浦式土器に相当する。

## 4類

南西諸島を主な分布とするものを一括して南島系土器とした。

## その他

1～4類に当てはまらないものを一括する。

## イ 石器

打製石鏃、打製石斧、石槍状石製品、石匙、磨石、石皿などが出土している。

## 6 古墳時代以降（Ⅰ・Ⅱ層）の概要

### （1）遺構の概要

#### ア 土坑

土坑は5基である。時期を示す遺物がないため、埋土の状況等から古墳時代以降とした。

### （2）遺物の概要

#### ア 土器（第4群）

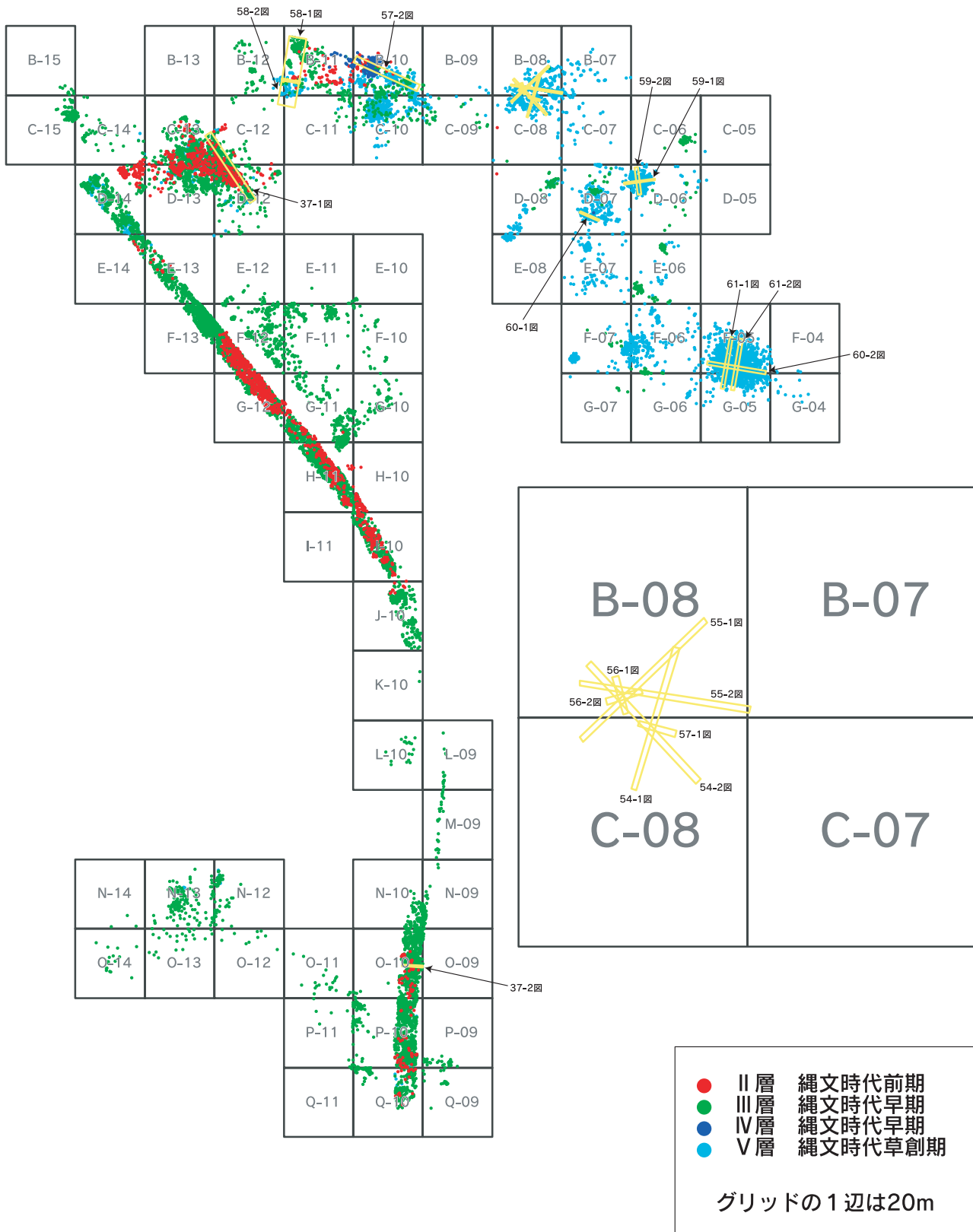
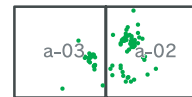
古墳時代以降の土器は古墳時代相当の能野式土器や古代相当の土師器が出土している。



北東上空より南東方向を望む（平成12年度）



第12図 グリッド図



第13図 遺物分布図・立面図位置

#### 第4節 縄文時代草創期

三角山Ⅰ遺跡ではⅤ層に該当し、竪穴住居跡を初めとする縄文時代草創期の遺構が15基、遺物は土器や石器が多量に出土している。地形や遺物出土状況等から、おおむね5つの地区に分けられる。

A地区はもっとも東に位置する。グリッドではA～G-3～8区の範囲である。当該地は遺跡内において舌状に張り出した部分にあたる。西から東にかけてゆるやかに傾斜し、最高地の標高が242.6m、最低地の標高が240.5mの値を示す。遺構は、竪穴住居跡2基、ピット群2か所、土坑1基、礫群4基、焼土1か所(住居跡と礫群以外)である。遺物の集中は稜線上を中心にある程度の広がりを持って分布していた。

B地区は北西に位置する。グリッドではA～J-9～14区の範囲である。草創期に関しては遺構・遺物の分布状況から、さらに2つに分けられる。

B-1地区はA地区とB-2地区をつなぐ稜線上に位置する。最高地の標高が243.35m、最低地の標高が242.68mの値を示す。遺構は、土坑1基、礫群1基である。遺物の集中は稜線上にみられた。

B-2地区はもっとも北西に位置する。東西分水嶺の稜線上に位置し、北東側から入り込んだ谷の下り口にもあたる。最高地の標高が244.0m、最低地の標高が241.4mの値を示す。遺構は、礫群3基である。遺物の集中は稜線上と谷口にみられた。

C地区は南西に位置する。グリッドではL～Q-9～14区の範囲である。草創期の遺構は検出されていないが、遺物の分布状況から、B地区同様2つに分けられる。

C-1地区はA地区につながる東西分水嶺の稜線上に位置している。最高地の標高が244.33m、最低地の標高が243.65mの値を示す。遺物の集中は稜線上にみられた。

C-2地区はもっとも西に位置する。東西分水嶺のC-1地区から西に舌状に張り出した部分にあたる。最高地の標高が242.9m、最低地の標高が242.0mの値を示す。遺物の集中はほぼ中央部にみられた。

##### (1) 遺構

###### ① 竪穴住居跡

A地区のⅤ層上面で、隣り合うような形で2基検出された。当初、土坑として取り扱っていたが、形態や遺物出土状況等から住居跡と判断した。なお、明確な硬化面は確認されていない。

ピットと思われるものは、竪穴内では確認できなかった。周辺の精査では27基が検出されたが、住居跡に伴うと考えられるような明確なものではない。

遺物と炭化材のほとんどは検出面に集中している。完全品やそれに類似した状態で出土した土器はなく、すべて破片である。しかも、少なくとも3時期にわたる土器片が、炭化材と共に混在している状態であった。これに似た現象は、住居跡周辺の土器片集中ブロックにも見られる。遺物量は2号より1号の方が圧倒的に多いが、土器に接合関係があり、石器の材質にも共通性があるため、まとめて呈示することにした。

##### 1号竪穴住居跡 (B-8区)

Ⅴ層上面で検出された。長径248cm、短径240cm、検出面からの深さ24cmで、粘質土であるⅤ層まで掘り込んでいる。平面形は円形を呈する。北側の一部は樹根と考えられる大きな落ち込みで攪乱を受けている。床面はおおよそ平坦で、壁はほぼまっすぐに立ち上がっている。中心部に焼土があるが、検出面のものと床面のものがある。この2つは平面では重なっているが、上下関係で見ると完全に分離しているため、本住居跡が使用された時期は少なくとも2期にわたると考えられる。<sup>14</sup>C年代測定(補正<sup>14</sup>C年代)の結果では、炭化材が11640±50年BP、床面検出土器付着の炭化物が11940±70年BPであった。

検出面では土器片や打製石鏃などが出土した。このうち土器は5種類に分類される。また、床着でも土器片が出土している。この土器は2種類に分類される。さらに、竪穴外縁部床面南側では、4個の角礫が間隔をおいて出土している。角礫はいずれももろい泥岩で、うち一つは砥石である。その他、粘土塊も1点出土している。

なお、本住居跡出土の土器片と土坑1出土の床面検出土器片が接合した。このことから、本住居跡と土坑1は同時期に存在していた可能性がある。

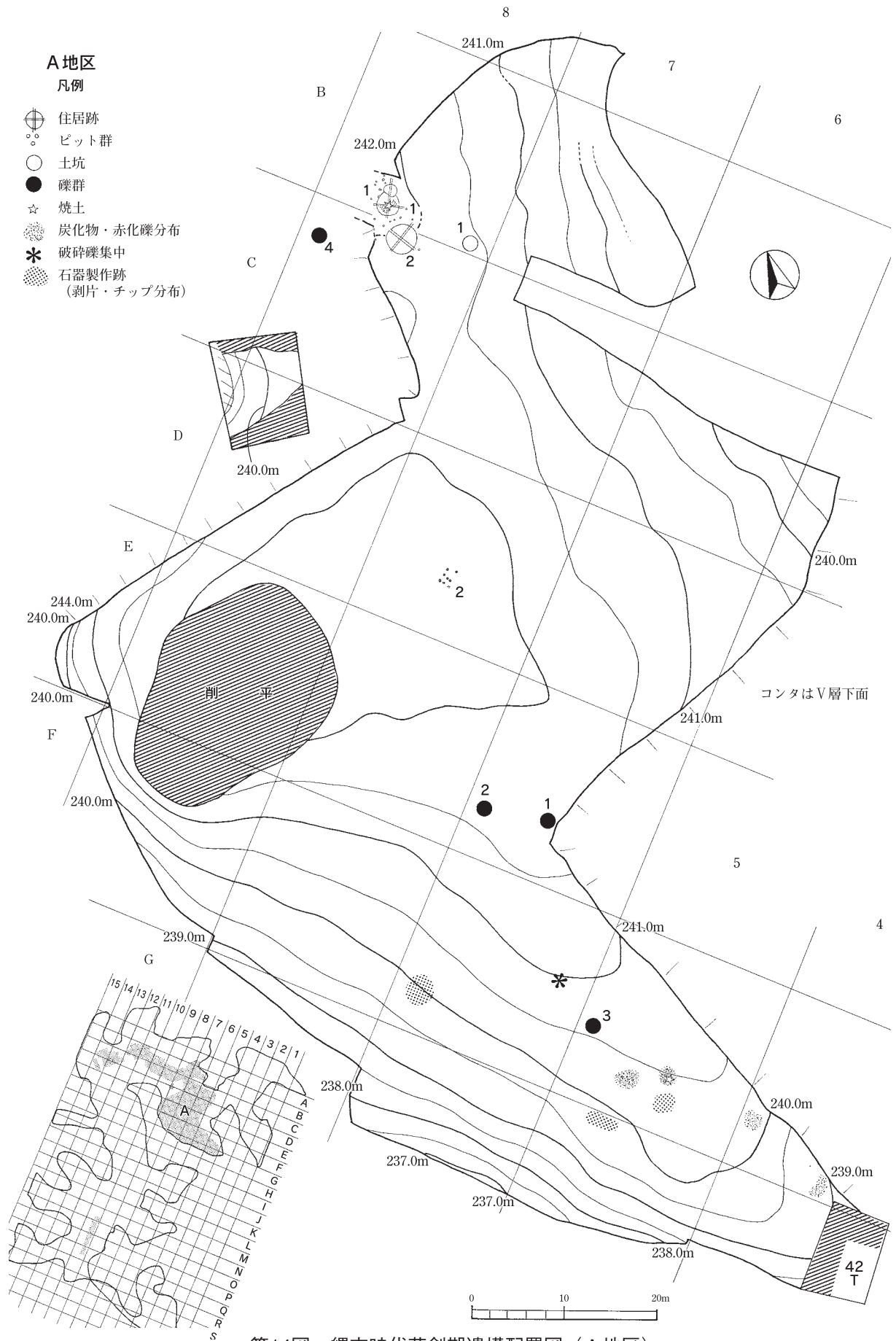
##### 2号竪穴住居跡 (C-8区)

Ⅴ層上面で検出された。1号住居跡よりやや大きい長径336cm、短径328cm、検出面からの深さ28cmで、平面形は円形を呈する。床面や壁は1号住居跡同様であるが、発掘調査の時点では、焼土は検出されなかった。しかし、検出状況を土層断面図や写真から詳細に検討した結果、住居跡が埋まってからも、再度、掘りこみがなされた痕跡が確認された。推定の域を超えるものではないが、焼土が存在していた可能性がある。なお、本住居跡は南北埋土断面を剥ぎ取り保存している。

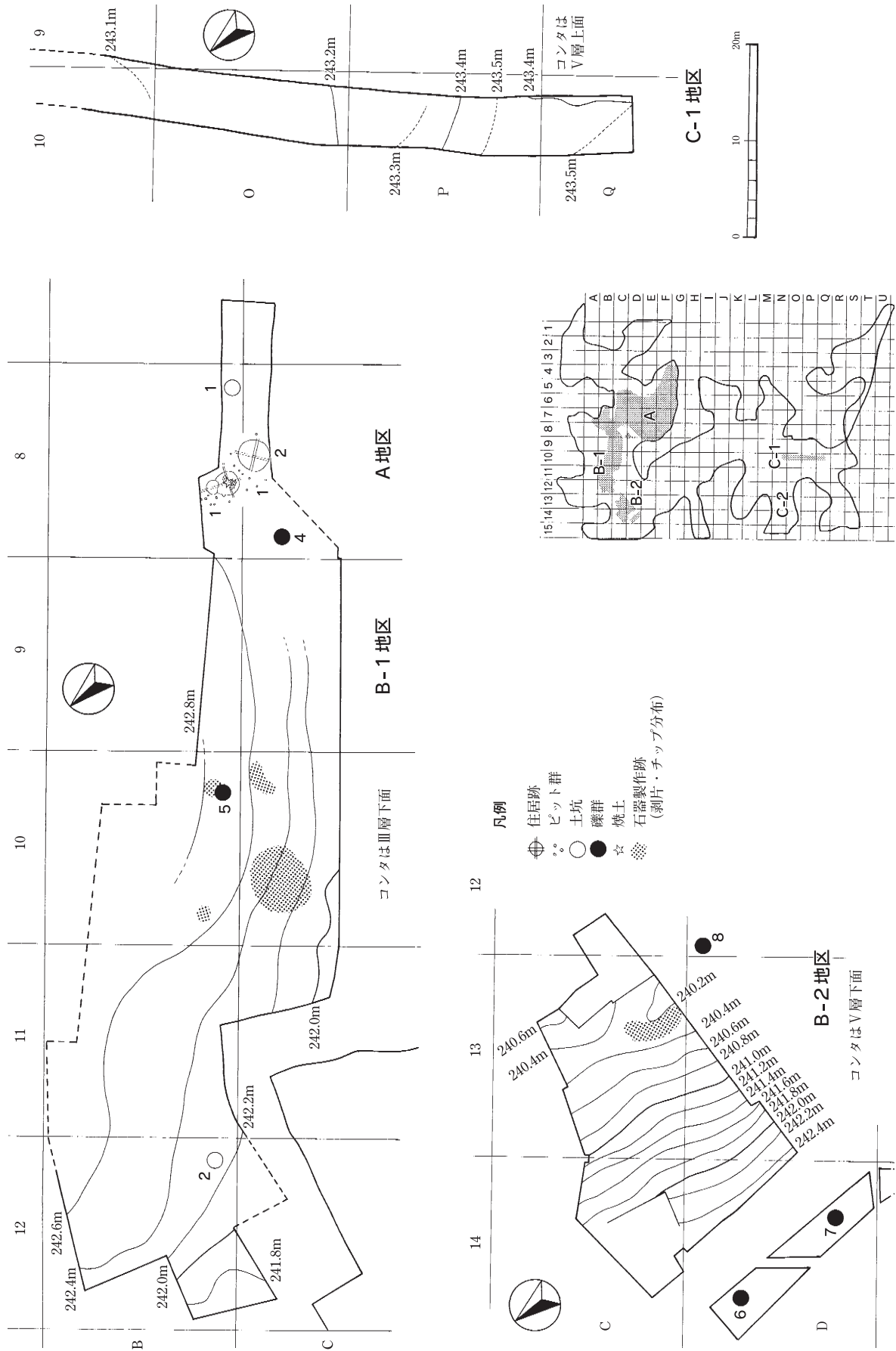
##### 1号・2号両竪穴住居跡内の遺物

1～3は隆帯文土器で本遺跡最大級の鉢形土器である。主に、1号・2号両竪穴住居跡で出土し、土坑1

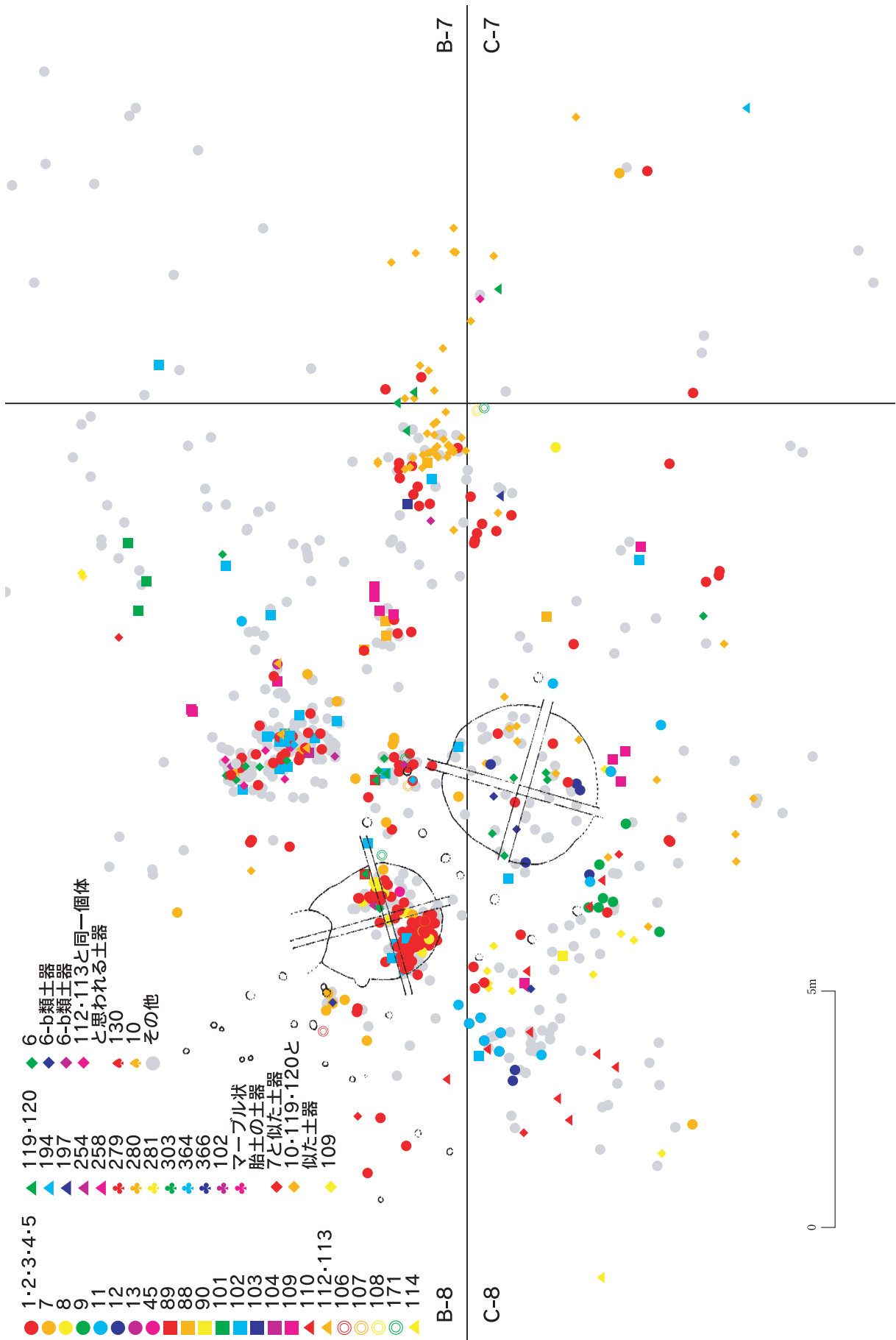




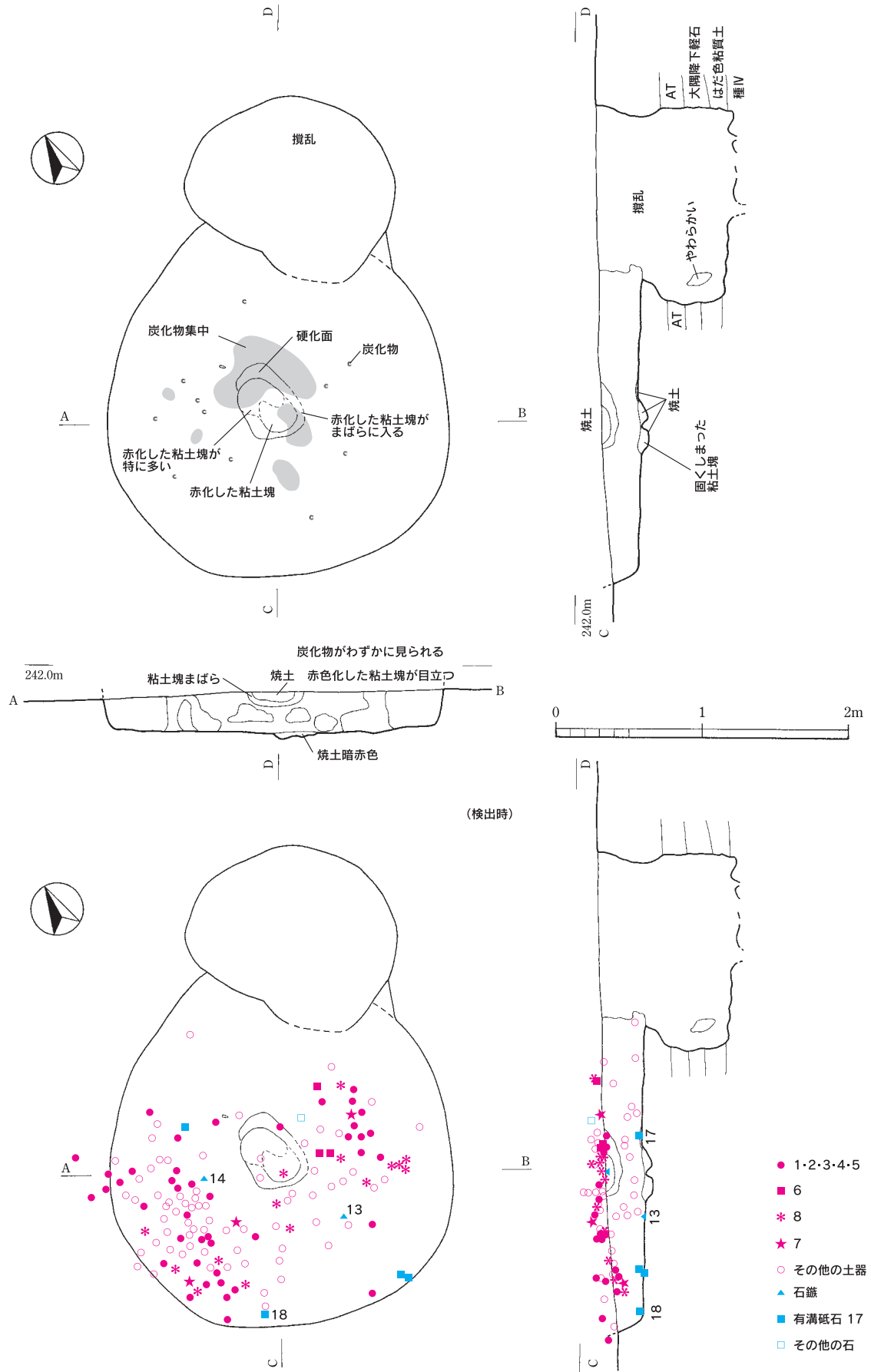
第14図 縄文時代草創期遺構配置図 (A地区)



第15図 縄文時代草創期遺構配置図 (B・C地区)

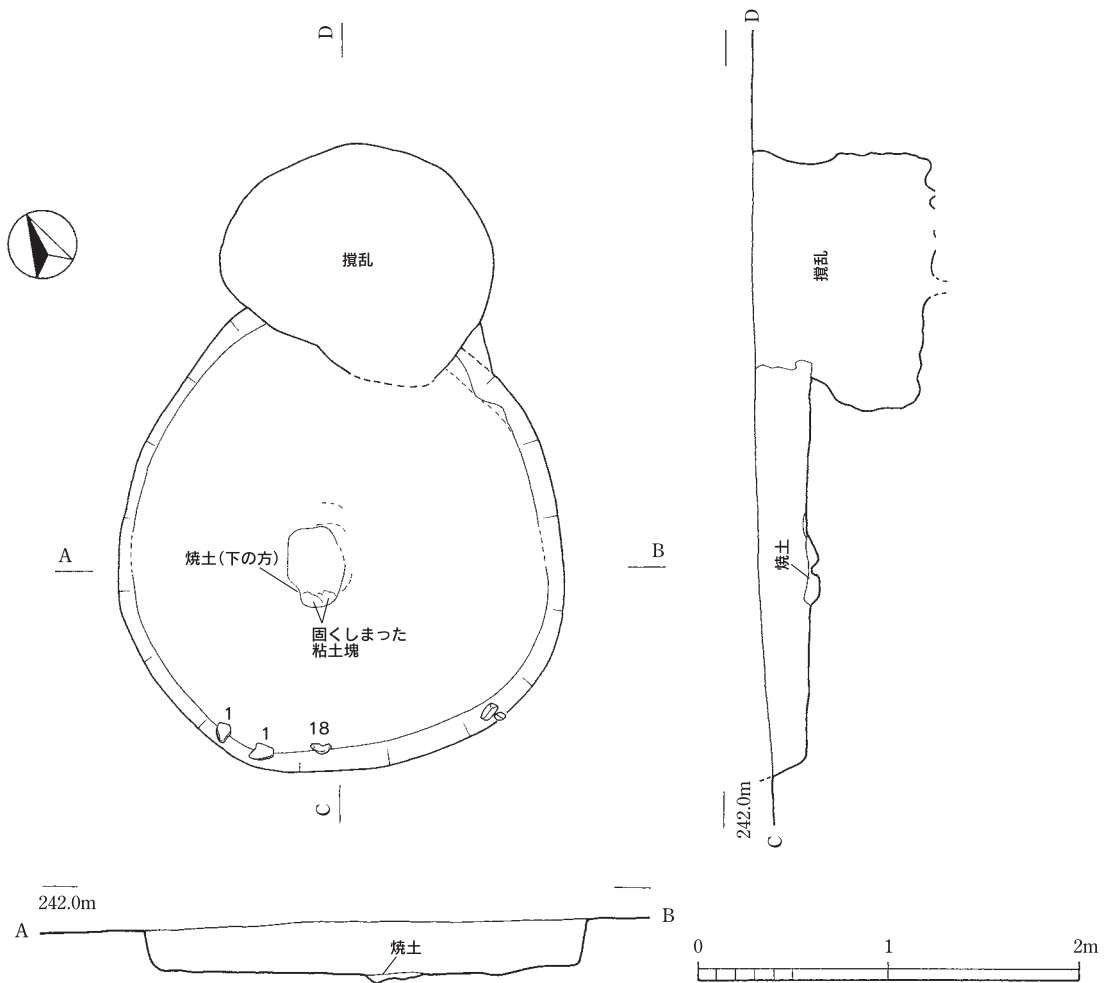


第16図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図



第17図 1号竪穴住居跡(1)

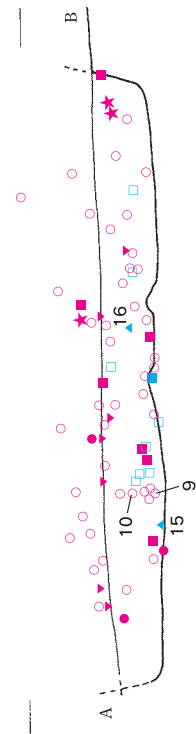
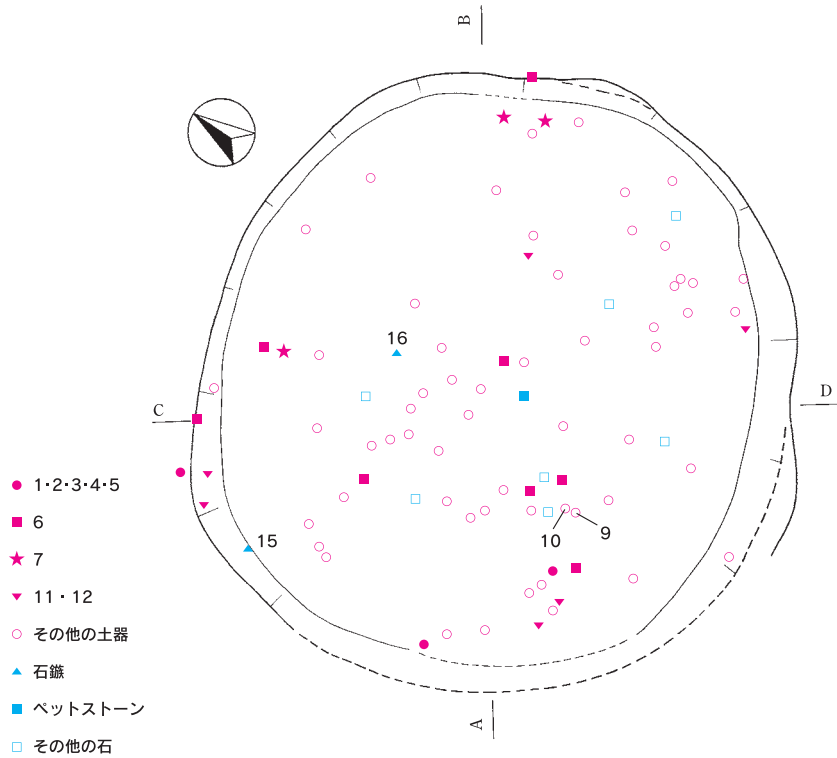
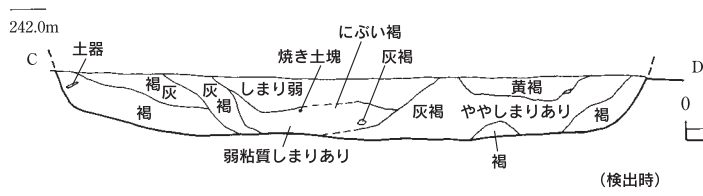
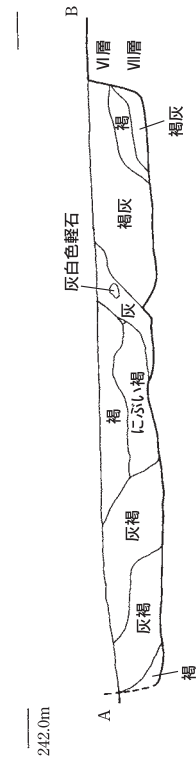
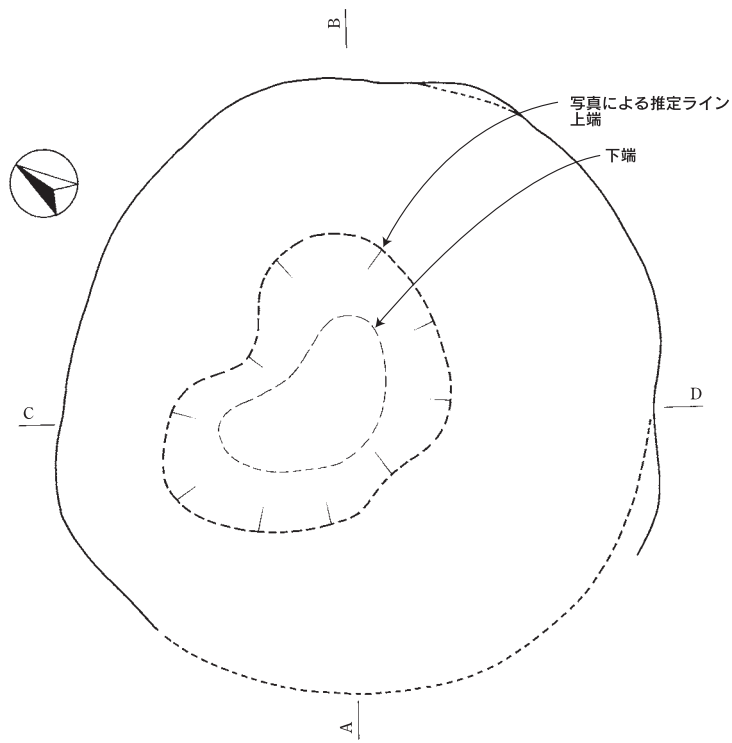




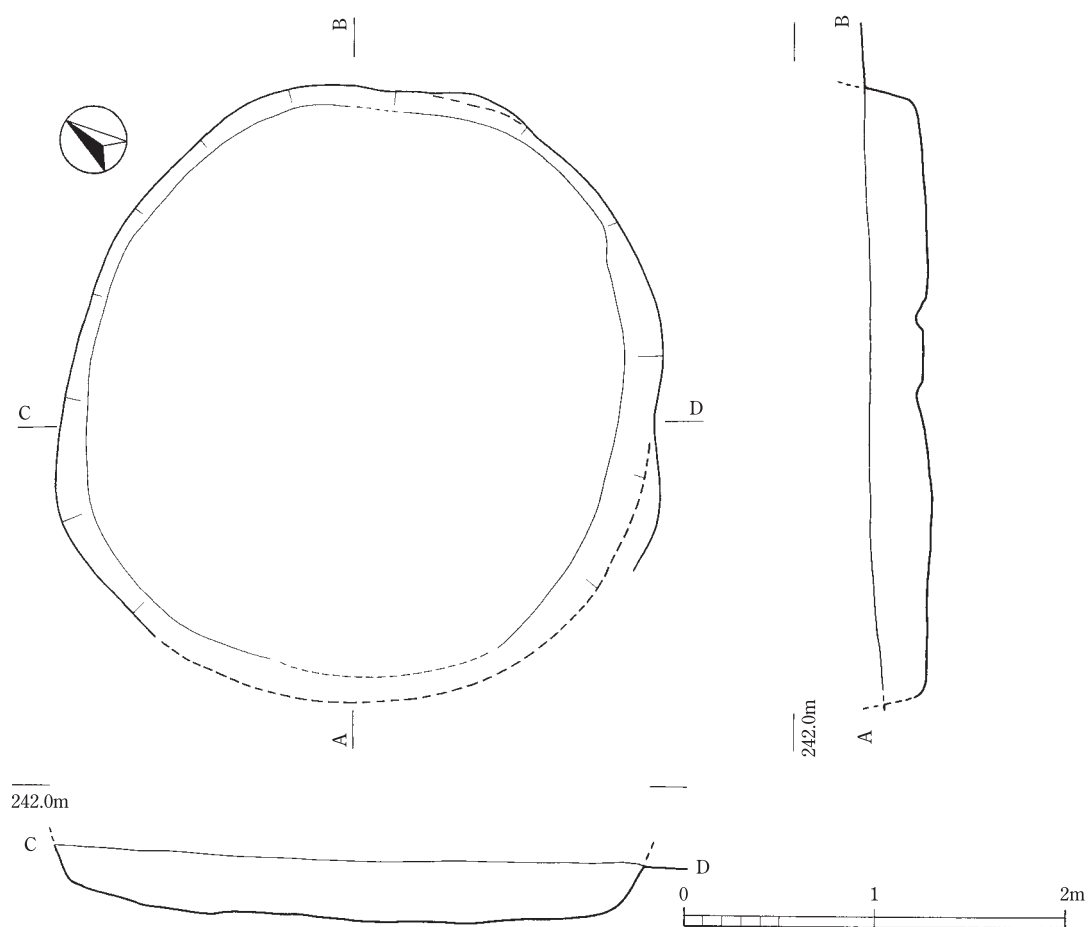
第18図 1号竪穴住居跡(2)

第3表 縄文時代草創期(V層)の竪穴住居跡・土坑観察表

挿図番号	番号	検出区	床面レベル(m)	大きさ(cm)	検出面からの深さ(cm)	備考(遺構内遺物)
17 18	住 1	B-8	241.54	248×240	24	平面形は円形, 焼土は検出面と床の2か所 (隆起文土器片・土坑1の土器と接合, 石器) (炭化材・ <sup>14</sup> C補正11640±50年BP) (土器炭化物・ <sup>14</sup> C補正11940±70年BP)
19 20	住 2	C-8	241.26	226×328	28	平面形は円形, 中央部に掘りこみの痕跡 (隆起文土器片, 石器)
28	1	B-8	241.42	96×79	23	埋土は薩摩火山灰, 剥ぎ取り実施 (隆起文土器片・1号住居跡の土器と接合)
29	2	B-12	242.0	106×61	15	平面形は不定形



第19図 2号豎穴住居跡(1)



第20図 2号竪穴住居跡（2）

出土の土器片と接合した。また、周辺にも破片が散在していた。口縁部外側に2条、間隔をあけて胴上部に2条隆帯を貼り付け、貝殻腹部で右から左へ押圧施文している。さらに、口縁部と腹縁部の隆帯をつなぐように胴部に直接貝殻頂部で押圧施文している。器壁は極めて薄く、輪積み接合部に工具による削り調整痕が認められる。

3は2号竪穴住居跡床面検出の土器である。

4は丸平の底部である。2号竪穴住居跡床面検出の

土器で、1号竪穴住居跡出土の土器片と接合した。胎土や器壁の薄さから、1～3と同一個体と考えられる。

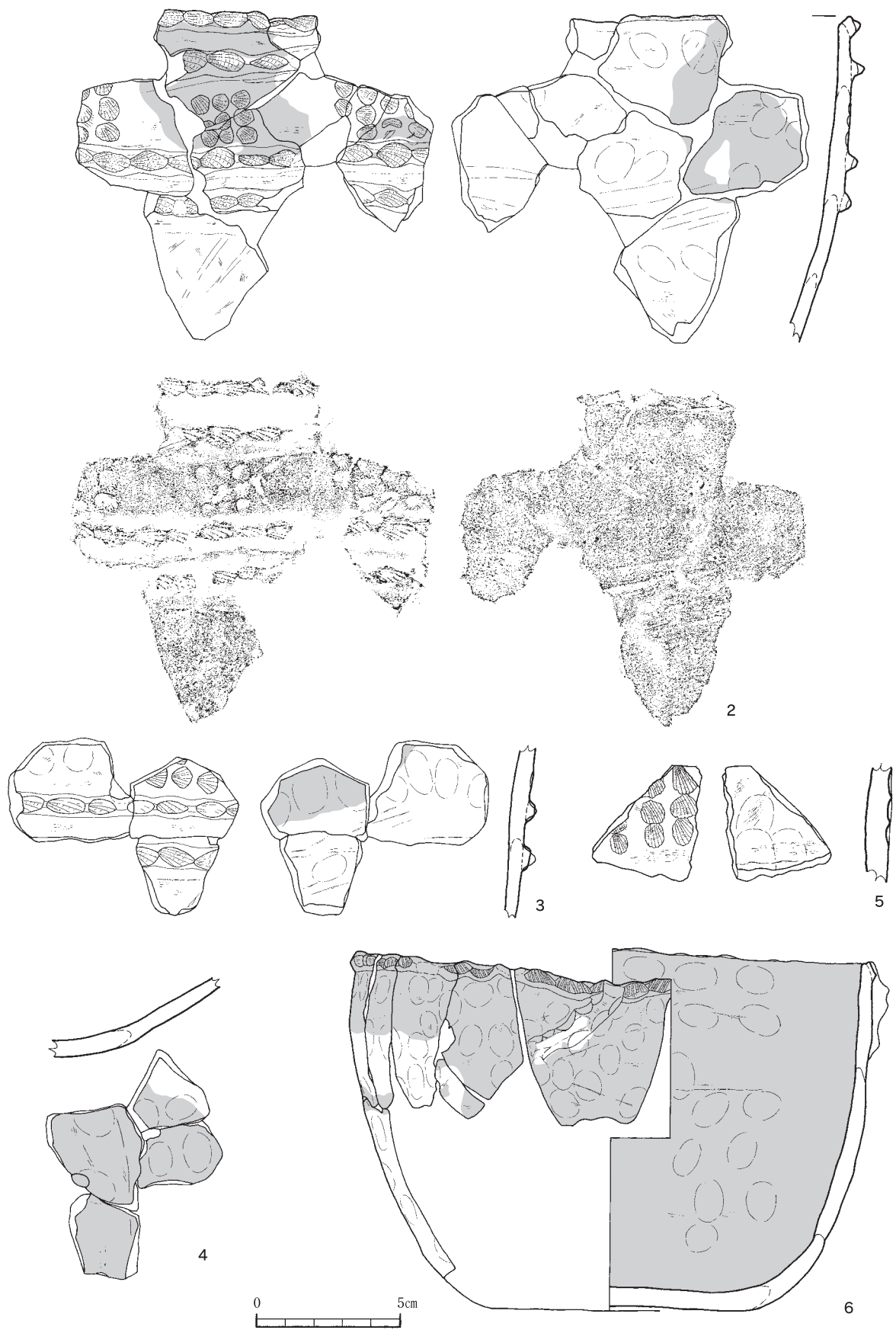
5は1～3と似た文様であるが、器壁が厚く別個体である。同様の厚みを持つ105と同一個体と思われる。

6はやや小さい中型の鉢である。口縁部外側に、隆帯を1条貼り付け、貝殻腹部にて右から左へ押圧施文している。さらに、斜めに下垂する短い隆帯を貼り付けている。4か所あったようで、ここは他より口縁が低くなっている。

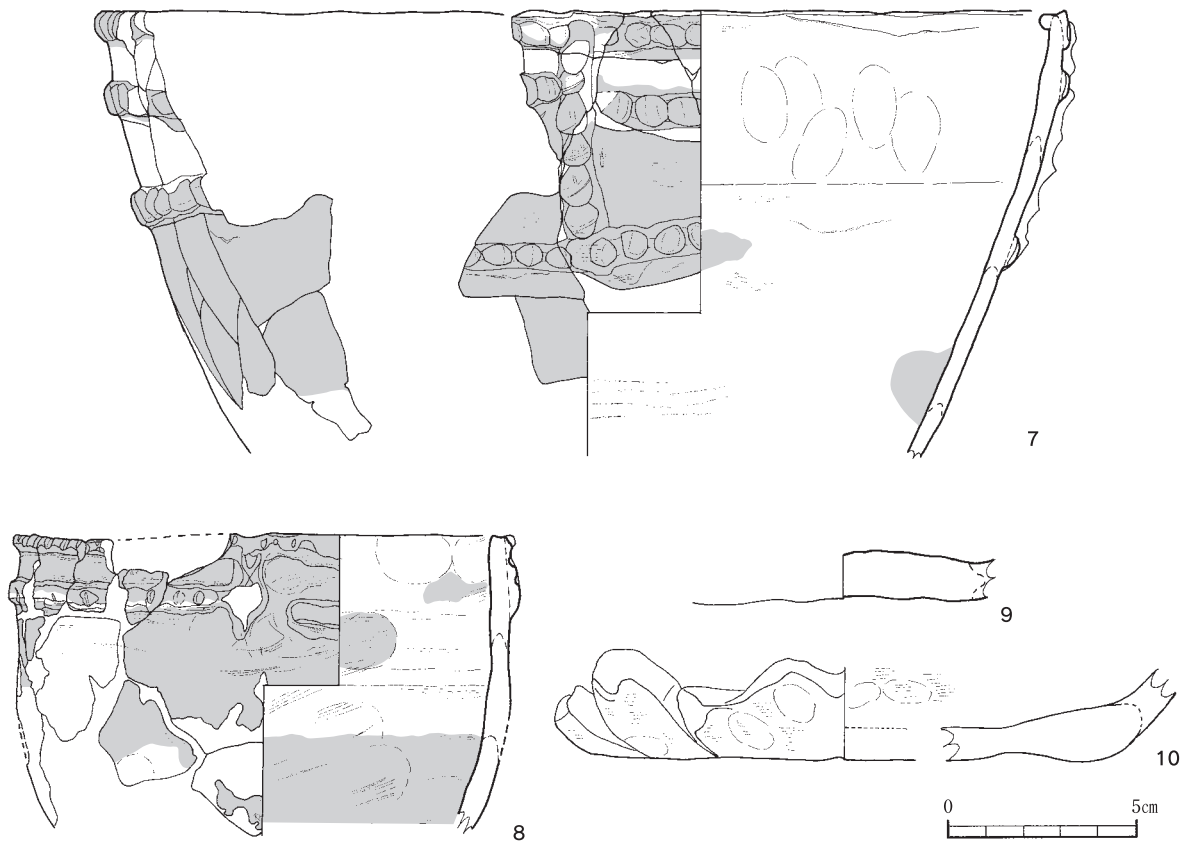


第21図 竪穴住居跡内の遺物（1）





第22図 竪穴住居跡内の遺物（2）



第23図 竪穴住居跡内の遺物（3）

7も中型の鉢である。口縁部外側に、少し間隔を開けて隆帯を3条貼り付け、指腹部にて右から左へ押圧施文している。1か所だけ縦に隆帯を施すが、その口縁内側にもみ凸部がある。また、外面には炭化物が付着している。<sup>14</sup>C年代測定の結果は、11800±50年BP（補正<sup>14</sup>C年代）であった。

8は小型の鉢である。口縁部外側に、少し間隔を開けて隆帯を2条貼り付け、棒状施文具で右から左へ押圧施文している。少なくとも2か所、縦に隆帯を施す。また、外面には炭化物が付着している。<sup>14</sup>C年代測定の結果は、11530±60年BP（補正<sup>14</sup>C年代）であった。この土器は、検出面の焼土付近に集中して出土していることから、同時期の可能性が高い。

9は底部である。中央がやや上げ底になるので平丸であろう。内面に炭化物が付着している。

10は中央がやや上げ底になる平丸の底部である。胎土や器壁は、119と類似している。

11・12は大型の鉢形土器で丸平底である。主に、1号・2号両竪穴住居跡から出土し、周辺にも破片が散在していた。やや内湾する口縁部外側に、少し間隔を開けて隆帯を3条貼り付け、先端の丸い工具で右から左へ押圧施文している。一部の口縁部は縦の隆帯となり、隆帯間に沈線が施される。また、この部分の口縁内側のみ隆帯がある。なお、11と12は接合できな

かったが、胎土や器壁の厚みなどから、同一個体と考えられる。

#### 打製石鏃

打製石鏃は4点出土した。いずれも桑ノ木水流系産の黒曜石製で、主要剥離面を一部に残す。

13は、正三角形に近い抉りの浅いものである。14は、やや大きい長二等辺三角形で、抉りが浅い。15は、左右非対称で、抉りは浅い。16は、二等辺三角形に近いが、抉りが浅い。

#### 有溝砥石

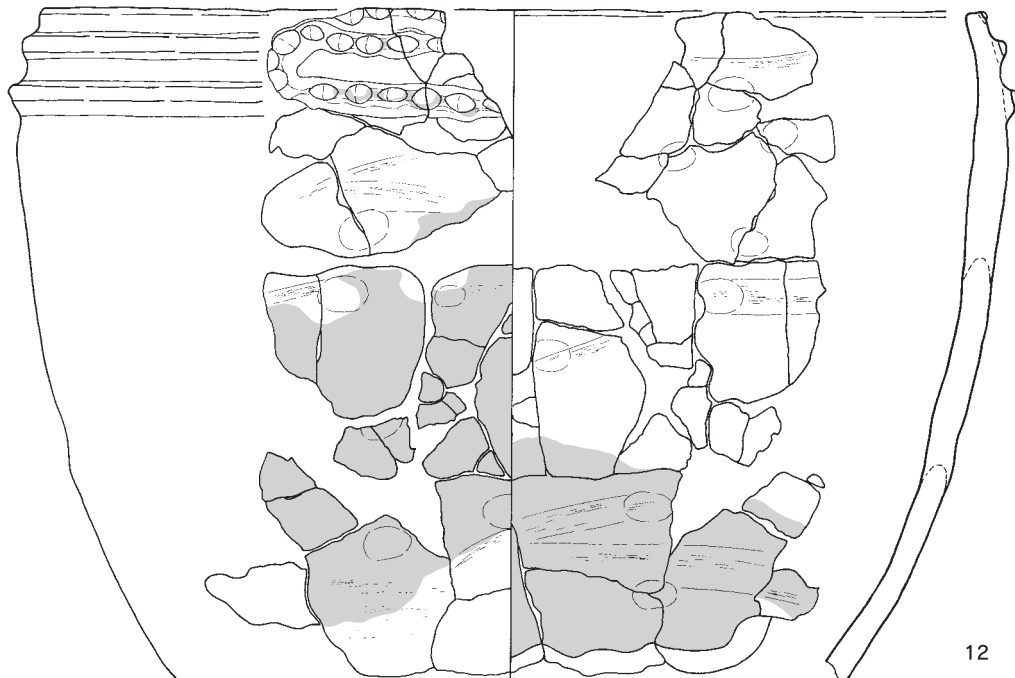
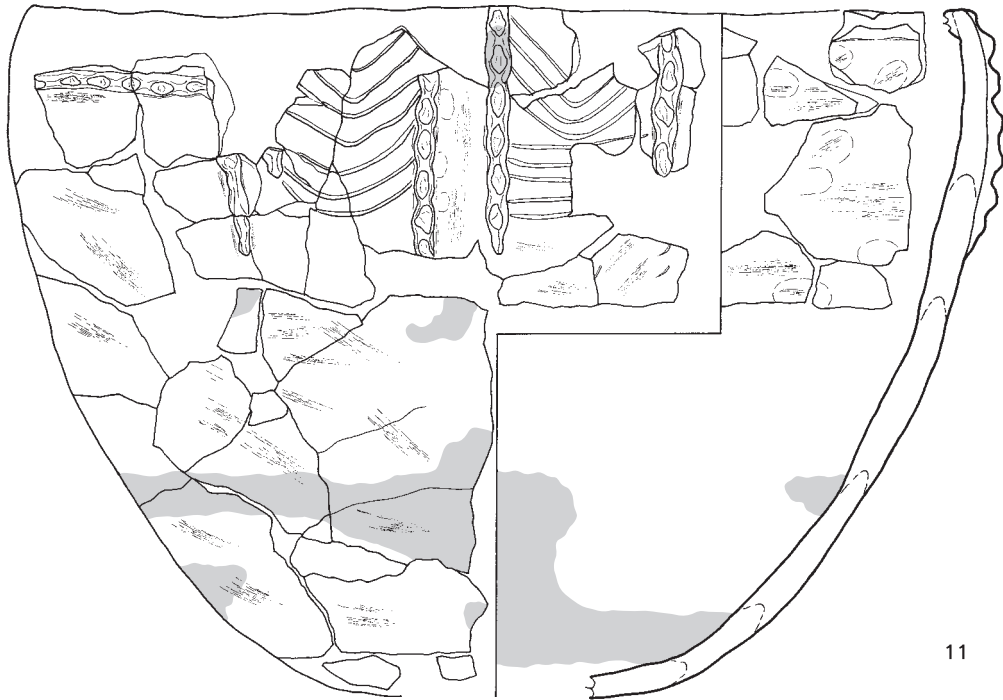
有溝砥石は1号住居跡から1点（17）出土した。軟質の砂岩製で風化が激しい。作業面である幅6～8mmの溝が2条観察される。溝の状況から、作業前に分割されていた可能性がある。

#### 砥石

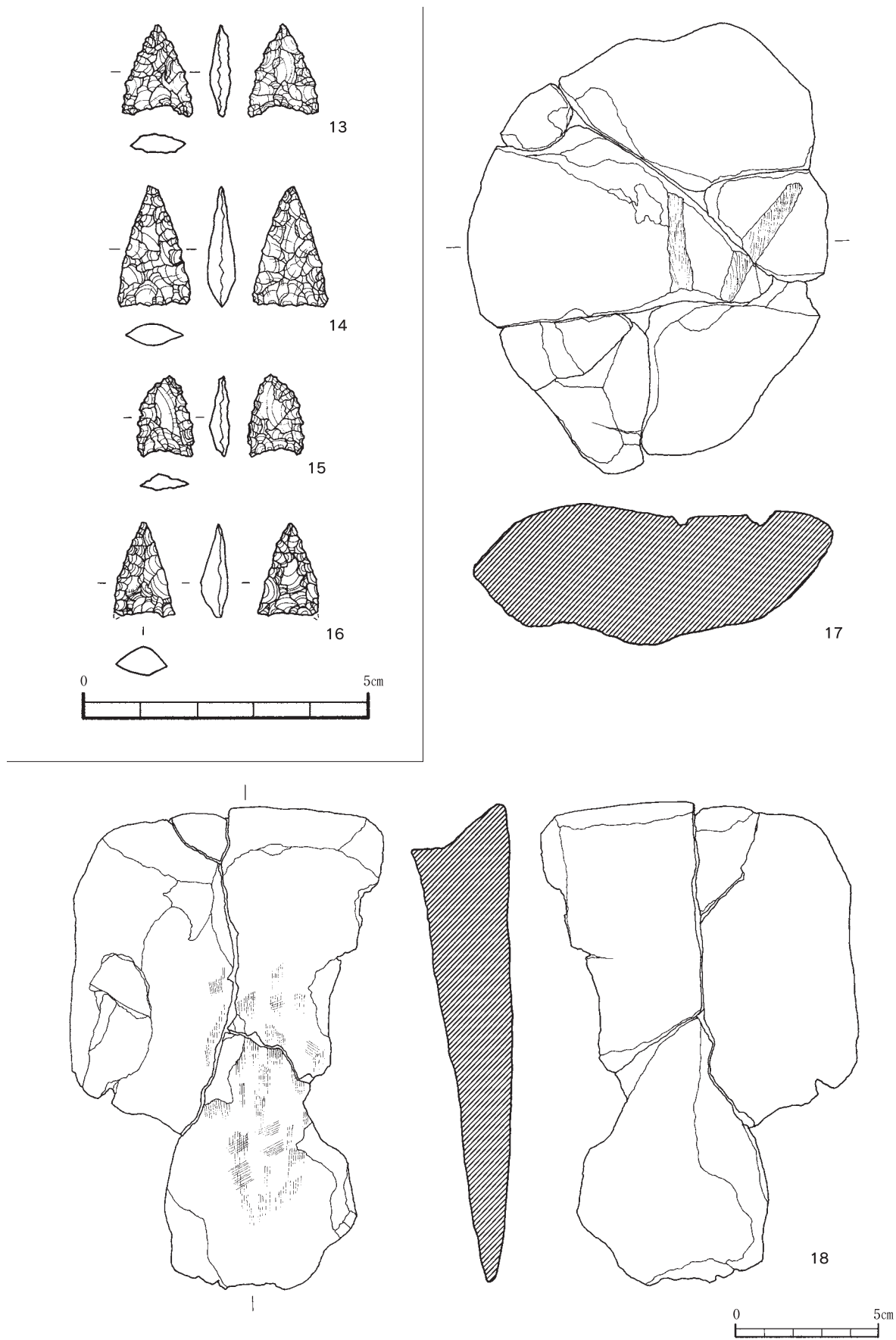
砥石は1号住居跡から1点（18）出土した。破損しており、もろい泥岩製の板石だが、きめが細かい。作業面は片面で、中央部のみ研磨痕が観察される。

#### ペットストーン

図化していないが、角の丸い三角形の小石が1点、1号竪穴住居跡から出土している。長さ2.9cm、幅1.6cmのきめの細かい砂岩である。表面が剥離したところ以外は磨かれたようになっているが、護符のように常に身につけていたのかもしれない。

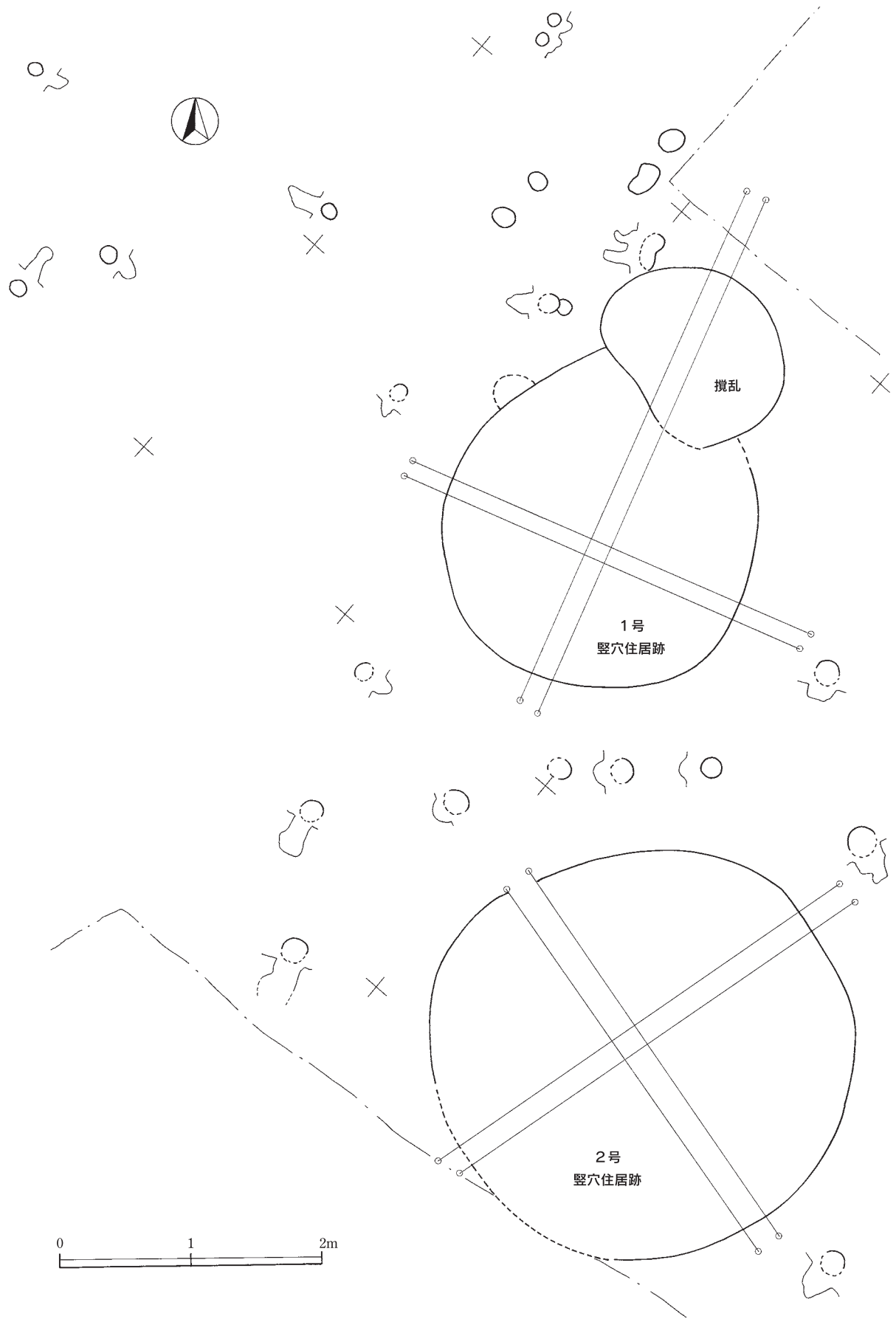


第24図 竪穴住居跡内の遺物（4）

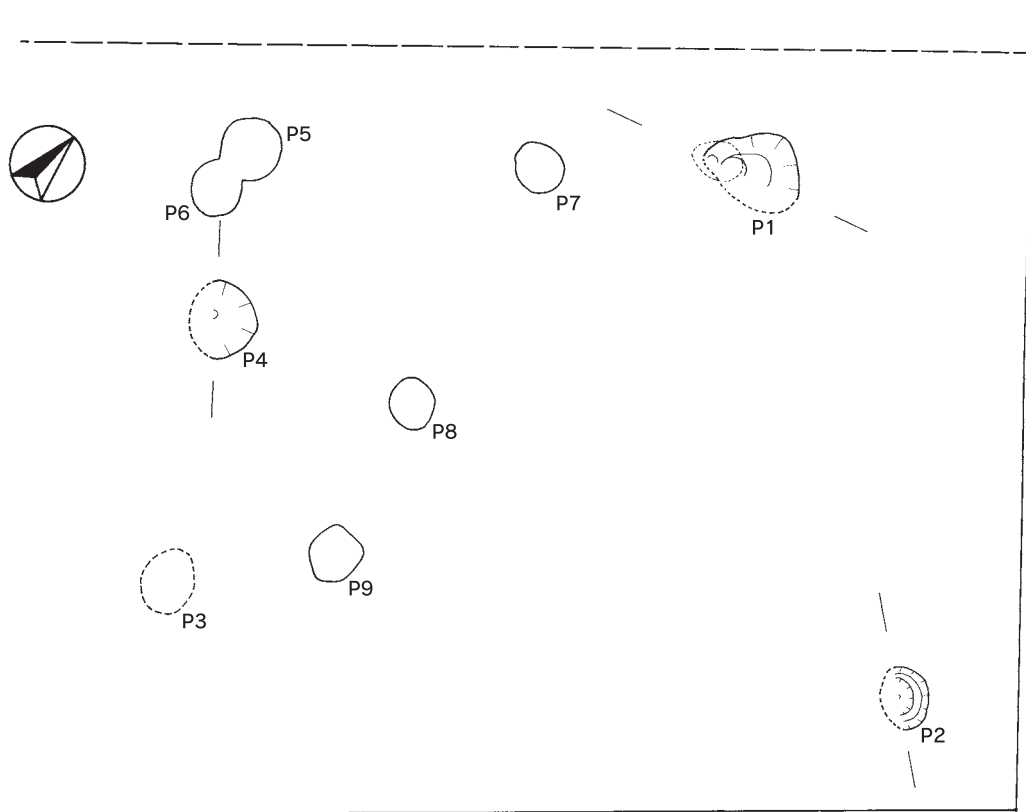


第25図 竪穴住居跡内の遺物（5）

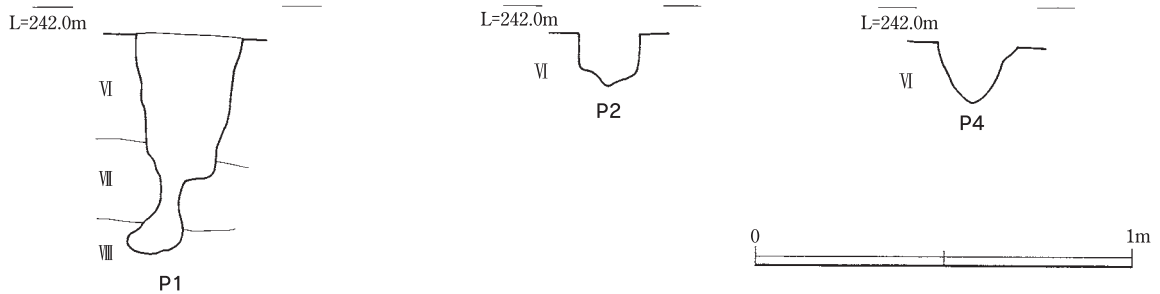




第26図 ピット群1



D-7区 (23トレンチ) VI層上面検出ピット群



D-7区 (23トレンチ) VI層上面検出ピット群

### 第27図 ピット群2

#### ② ピット群

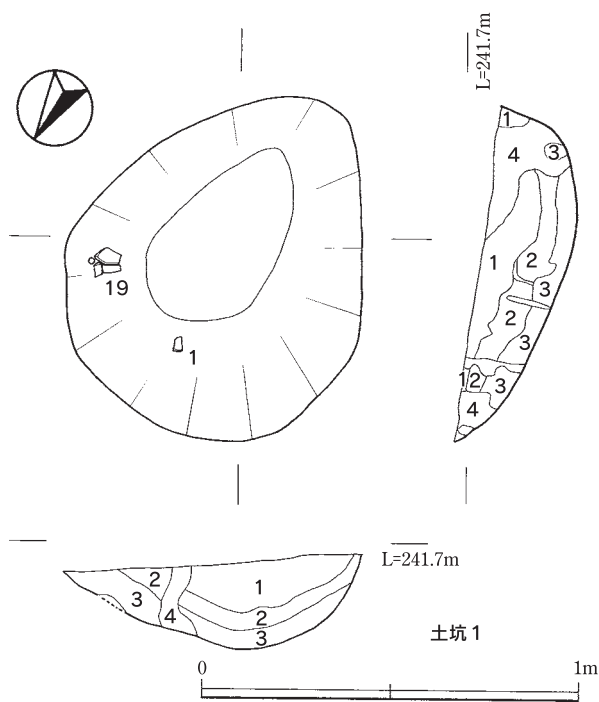
A地区のVI層上面で、2か所検出された。

#### ピット群1 (B・C-8区)

1号及び2号竪穴住居跡周辺のVI層上面で27基検出された。埋土はV層と同様であるが、浅く形状もばらばらで明確なものではない。しかしながら東西方向に並んでいるように見えるものが2列観察でき、何らかの施設であった可能性がある。なお、図化しなかったが、1基から土器片が出土している。

#### ピット群2 (D-7区・23トレンチ)

確認調査時に23トレンチを掘り下げ中、VI層上面で9基検出された。埋土はV層と比べやや硬質で、黄橙色の微細な軽石や角閃石らしき黒い粒子等を含む。VI層と埋土との色調の差は微妙で、明確なラインを引くのは困難であったため、4基を半裁して断面を確認した。P3は浅く不確定だが、それ以外の検出面からの深さは13~35cm程度と違いがあり、P1は樹根の痕跡が観察される。確実に遺構であるとは言えないが、住居跡周辺にも類例があるので記載した。今後の研究に資したい。

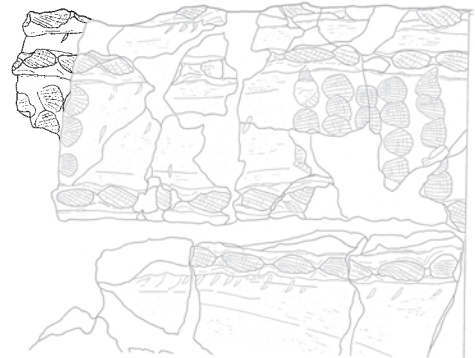


③ 土坑

A地区とB-1地区のVI層上面で2基検出された。

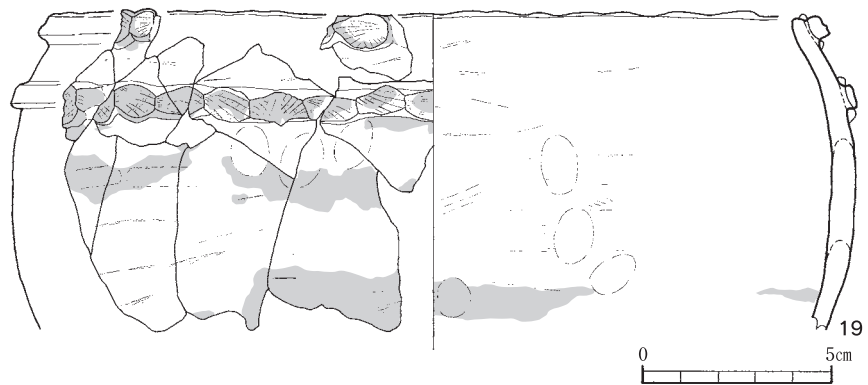
土坑1 (B-8区)

A地区のVI層上面で検出された。埋土が薩摩火山灰であったため、縄文草創期のものであることが確認できた。長径96cm, 短径79cm, 検出面からの深さ23cmで平面形は卵形をしている。床着で2種類の土器片が



1 (再掲)

- 1 淡黄茶褐色火山灰土  
3よりやや色が明るい。  
非常に硬質
- 2 暗黄茶褐色火山灰土  
3にうすい黒を混ぜた感じ。  
非常に硬質
- 3 茶褐色火山灰土  
硬質だが1・2に比べやわらかい
- 4 暗黄褐色土  
2に類似するがやややわらかい。  
樹根跡か?

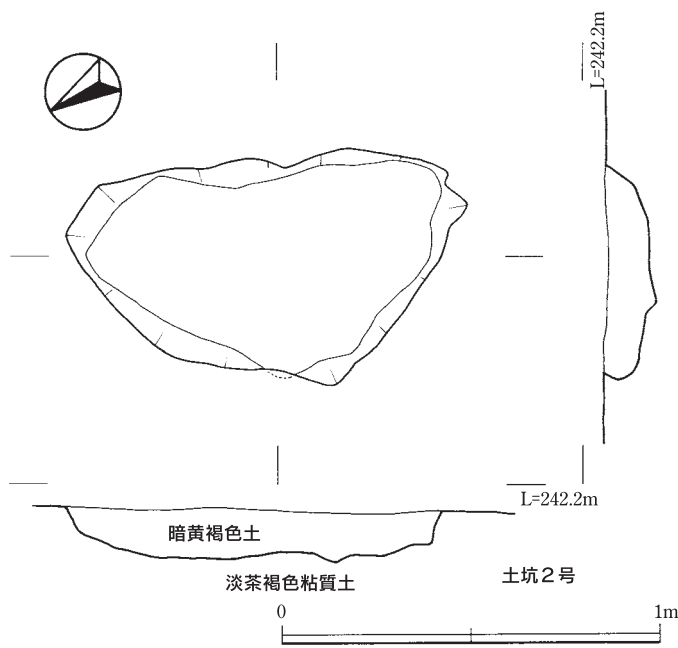


第28図 土坑1・遺構内遺物

第4表 縄文時代草創期 (V層) の礫群観察表

いずれも熱破碎した砂岩礫にて構成

挿図号	番号	分類	地区	検出区	礫数	床面レベル (m)	大きさ (cm)	掘り込み (cm)			備考 (遺構内遺物)
								有無	大きさ	深さ	
30	1	3	A	E-6	136	241.67	133 × 129	有	89 × 69	14	<sup>14</sup> C補11040 ± 80
	2	5		E-6	本 97 離 12 計 109	241.34	125 × 92	有			<sup>14</sup> C補11140 ± 80 埋土サツマ 切り取り移設97.03,04
31	3	5	A	F-5	本 118 離 48 計 166	240.99	88 × 72	有			<sup>14</sup> C補11100 ± 80 (凹石)
	4	3		C-8	86	242.2	121 × 74	有	74 × 63	10~15	
32	5	3	B-1	B-10	82	242.48	105 × 80	有	82 × 67	10	炭化物有り
33	6	3	B-2	D-14	14	243.035	86 × 65	有	82 × 64	10	(隆帯文土器片2)
34	7	6		D-14	B 110 C 85 計 195	242.895 242.85	188 × 95 120 × 59 198 × 168	有 有 有	(50) × ( ) (55) × ( )	(16) (23)	(石皿・有溝砥石)
	35	8	6	D-12	大 50 小 7 計 57	240.07 240.06	120 × 96 63 × 37 160 × 96	有 有	76 × 63 38 × 32	13 14	<sup>14</sup> C補10990 ± 120 (無文土器) ( <sup>14</sup> C補11470 ± 70)



第29図 土坑2

出土した。うち1種1片は1号竪穴住居跡出土の土器と接合した。このことから、本土坑と1号竪穴住居跡は同時期に存在していた可能性がある。

なお、本土坑はウレタンで型取り後、埋土断面を剥ぎ取り保存している。

19は隆帯文土器で中型の鉢である。やや内湾した口縁部外側に、少し間隔を開けて隆帯を2条貼り付け、アナダラ属の貝殻で押圧施文している。内面は条痕のような工具調整痕がくつきり残っている。同様の文様・厚み・胎土を持つ102と同一個体と考えられる。

また、1号竪穴住居跡出土の土器1と接合する口縁部の一部破片も出土したので、図を再掲した。

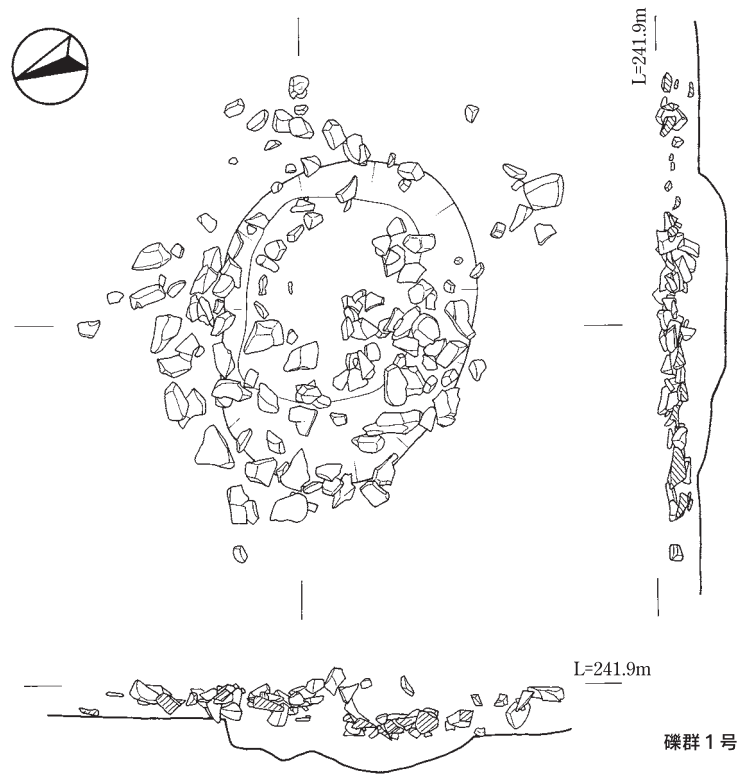
土坑2 (B-12区)

B-1地区のVI層上面で検出された。長径106cm, 短径61cm, 検出面からの深さ15cmで、平面形は不定形である。埋土は周囲の土より硬く、ねばりのある暗褐色土で、薩摩火山灰のブロックを含む。V層の土とは違っているが、成因は用途と共に不明である。

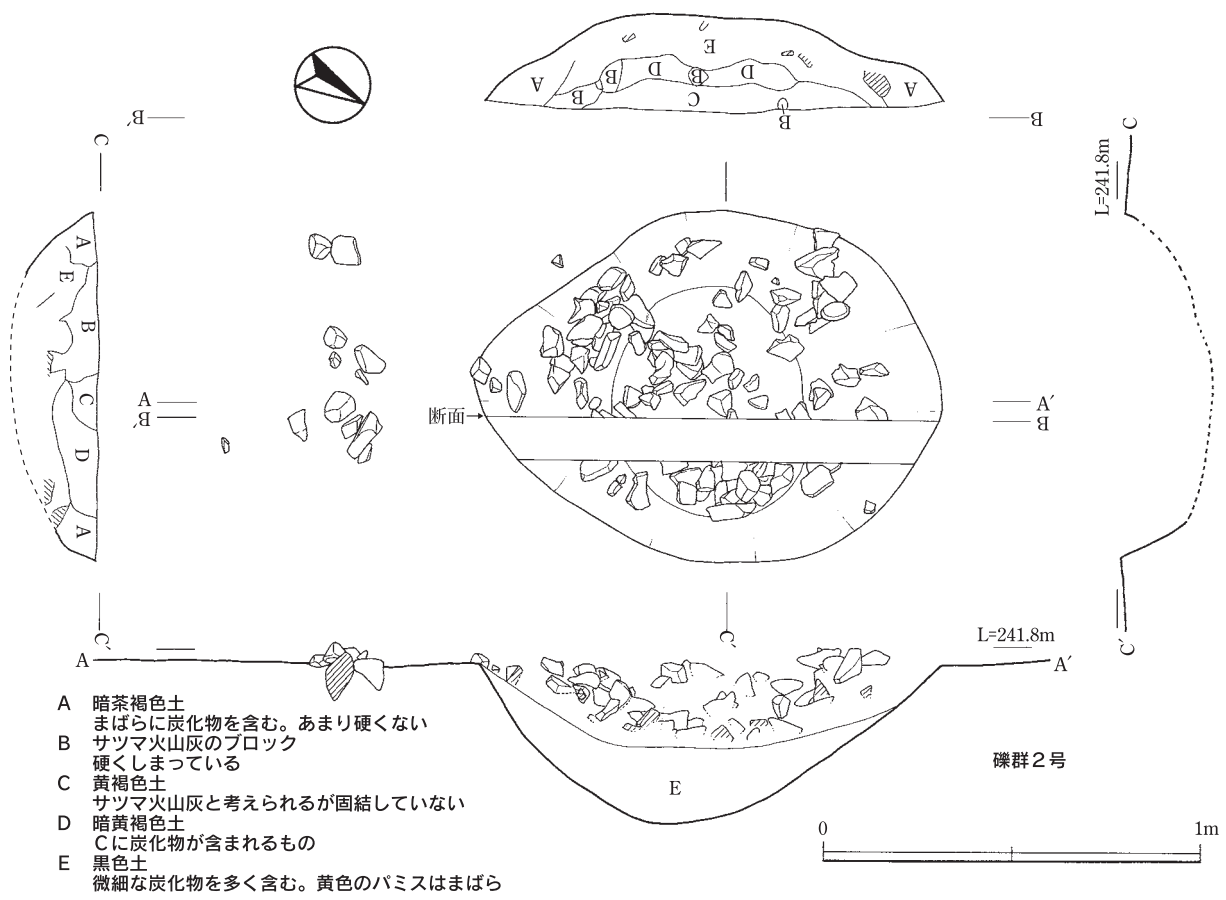
第5表 縄文時代草創期の遺構内土器観察表

挿図	地区	区遺構	番号	類別	器種	部位	調整・文様				色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	口唇部	底部	外面	内面	石英	長石	角閃	その他		
21	A	B-8 1号住居	1	6-b	大鉢	口縁~ 胴	隆帯2+2, ナ デ, 貝腹押圧, 胴部にも	工具ケズリ, ナデ	角丸平 頂, 内湾		橙~ 灰褐 色	橙~ 明黄 褐色	○	○		白粒, 赤 粒	普	接合関係(1号住居+ 土坑1)
							隆帯2+2, ナ デ, 貝腹押圧, 胴部にも	工具ケズリ, ナデ	角丸平 頂, 内湾		橙~ 灰褐 色	橙~ 明黄 褐色	○	○		白粒, 赤 粒	普	1と同一個体
							隆帯2+2, ナ デ, 貝腹押圧, 胴部にも	工具ケズリ, ナデ			橙~ 灰褐 色	橙~ 明黄 褐色	○	○		白粒, 赤 粒	普	1と同一個体 床着
22	A	B-C- 8 1-2号 住居	4	6-b	大鉢	底	ナデ	ナデ	丸平		橙~ 灰褐 色	橙~ 黒褐 色	○	○		白粒, 赤 粒	普	接合関係(1号住居+2 号住居床着)炭 化物有
							ナデ, 胴部貝腹 押圧	ナデ			橙~ 灰褐 色	橙~ 明黄 褐色	○	○		白粒, 赤 粒	良	105と同一個体
							隆帯1+斜, ナ デ, 貝腹押圧	ナデ	角丸平頂	平丸	暗灰褐~暗 黄土色	暗灰褐~黒 褐色	○	○		白粒, ガ ラス	普	接合関係(1号住居+2 号住居床着), <sup>14</sup> C補 11950±70年
							隆帯3+垂下, ナ デ, 指腹押圧	口縁一部隆帯1, ナデ, 指腹押圧	角丸平頂		赤褐~暗赤 褐色	赤褐~暗黄 土色	○	○		白粒, ガ ラス	普	接合関係(1号住居+2 号住居), <sup>14</sup> C補11800 ±50年
23	A	B-8 1号 住居	8	7-a	小鉢	口縁~ 胴	隆帯2+垂下, ナ デ, 工具押圧	ナデ	平頂		赤褐~暗赤 褐色	赤褐~黒褐 色	◎	◎		白粒	やや脆 い	<sup>14</sup> C補11530±60年
							ナデ	ナデ	平丸	明黄褐~灰 黄褐色	にぶい赤褐 ~ 黒褐色	○	○		白粒, 赤 粒	脆い	炭化物有	
							ナデ	ナデ	平丸	黄橙~にぶ い赤褐色	黄橙~にぶ い橙色	○	○		白粒	やや脆 い	120に近い胎土	
							隆帯+垂下, 沈線, ナデ, 丸棒押圧	隆帯1, ナデ, 指 腹押圧	平頂	平丸	灰褐色	暗黄土色	△	○		白粒, 赤 粒	やや脆 い	12と同一個体
24	A	C-8 2号 住居	12	5-b	深鉢	口縁~ 胴	隆帯3+垂下, ナ デ, 丸棒押圧	ナデ	平頂		灰褐色	暗黄土色	△	○		白粒, 赤 粒	やや脆 い	11と同一個体
							隆帯2, ナデ, 貝 腹押圧	工具ケズリ, ナデ	角丸平 頂, 内湾		明赤褐~黒 褐色	橙~ 黒褐 色	○	○		白粒, 赤 粒	普	102と同一個体, 赤色 の主成分はアルミナ
33	B-2	D-14 6号 礫群	21	10		胴	隆帯1, ナデ, 「ハ」の字 押圧	ナデ			橙~にぶい 赤褐色	暗灰褐~黒 褐色	○	○		白粒, 赤 粒, 礫	普	139と同一個体
							隆帯2, ナデ, 「ハ」の字 押圧	ナデ			明黄褐色	明黄褐~灰 黄褐色	○	○		白粒, 赤 粒, 礫	普	139と同一個体, 破損 後被熱
35	B-2	D-12 8号 礫群	25	2-a	深鉢	口縁~ 胴	ナデ	ナデ	やや平頂		橙~灰赤色	橙~にぶい 黄褐色	○	○		白粒, 角 礫, 円 礫,	良	26と同一個体, <sup>14</sup> C補 11470±70年
							ナデ	ナデ	平丸		明赤褐~橙 色	橙~にぶい 褐色	○	○		白粒, 角 礫, 円 礫,	良	25と同一個体





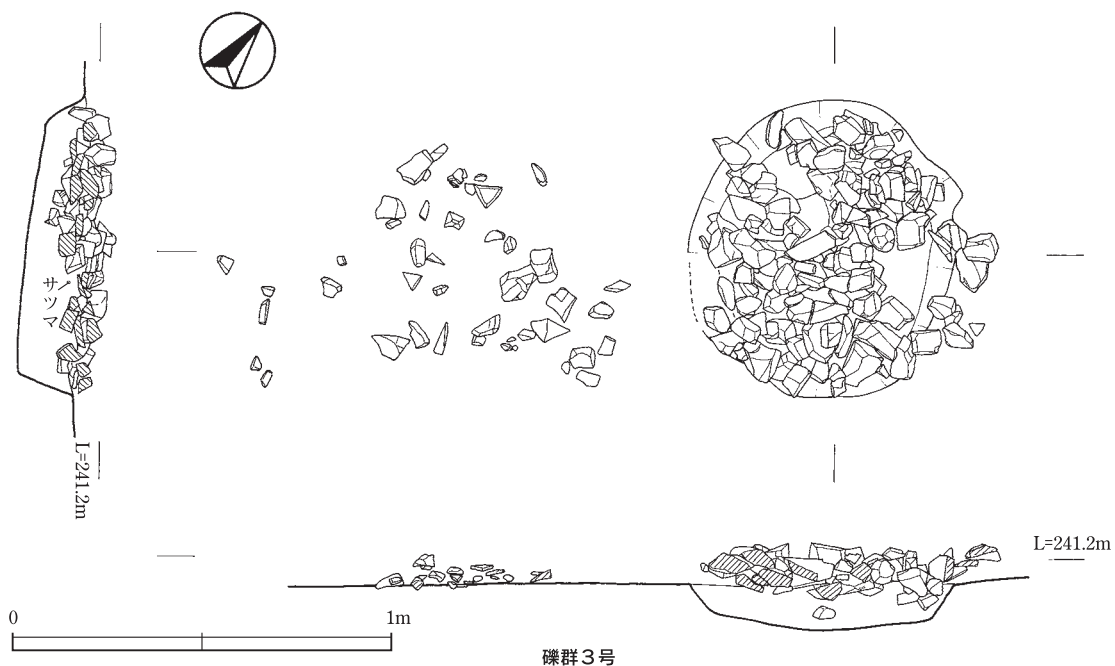
礫群1号



礫群2号

- A 暗茶褐色土  
まばらに炭化物を含む。あまり硬くない
- B サツマ火山灰のブロック  
硬くしまっている
- C 黄褐色土  
サツマ火山灰と考えられるが固結していない
- D 暗黄褐色土  
Cに炭化物が含まれるもの
- E 黒色土  
微細な炭化物を多く含む。黄色のパミスはまばら

第30図 礫群(1)



### ③ 礫群

礫群は8基検出された。石材は砂岩が主である。  
いずれも明確な掘り込みを持つ。

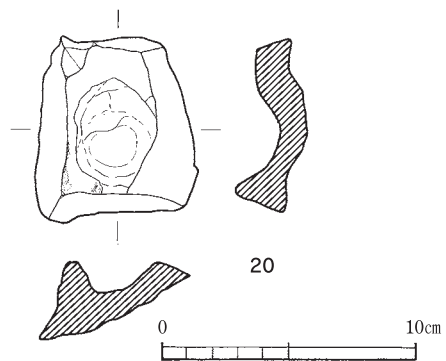
#### A地区

##### 1号礫群 (E-6区) 3類

ほぼ平らな面を皿状に掘り込んで設置している。ただし、境界は漸移的で、掘り込みのラインは不明確であるため、上からの染み込みである可能性もある。直径5~10cmの赤化した角礫で構成されているが、熱破碎したものが多くみられる。礫は掘り込みの中央部には無いが、掘り込みの周囲を囲むように立っているものもあった。埋土は黒灰色で炭化物をまばらに含み、薩摩火山灰のパミスも確認された。炭化物は<sup>14</sup>C年代測定の結果、11040±80年BP (補正<sup>14</sup>C年代)ということが判明している。

##### 2号礫群 (E-6区) 5類

ほぼ平らな面を深く掘り込んで設置している。注目されるのは埋土で、薩摩火山灰の明確な層が確認された。これは本礫群が草創期に使用されたことを証明するもので、極めて貴重な資料となった。なお、埋土はそれを含めて5つに分層でき、黒灰色の部分は炭化物をまばらに含む。礫集中は掘り込みの中と南側に少し離れた位置に見られる。直径5~10cmの赤化した角礫で構成されて、熱破碎したものが多くみられる。炭化物は<sup>14</sup>C年代測定の結果、11140±80年BP (補正<sup>14</sup>C年代)ということが判明している。



第31図 礫群(2)・遺構内遺物

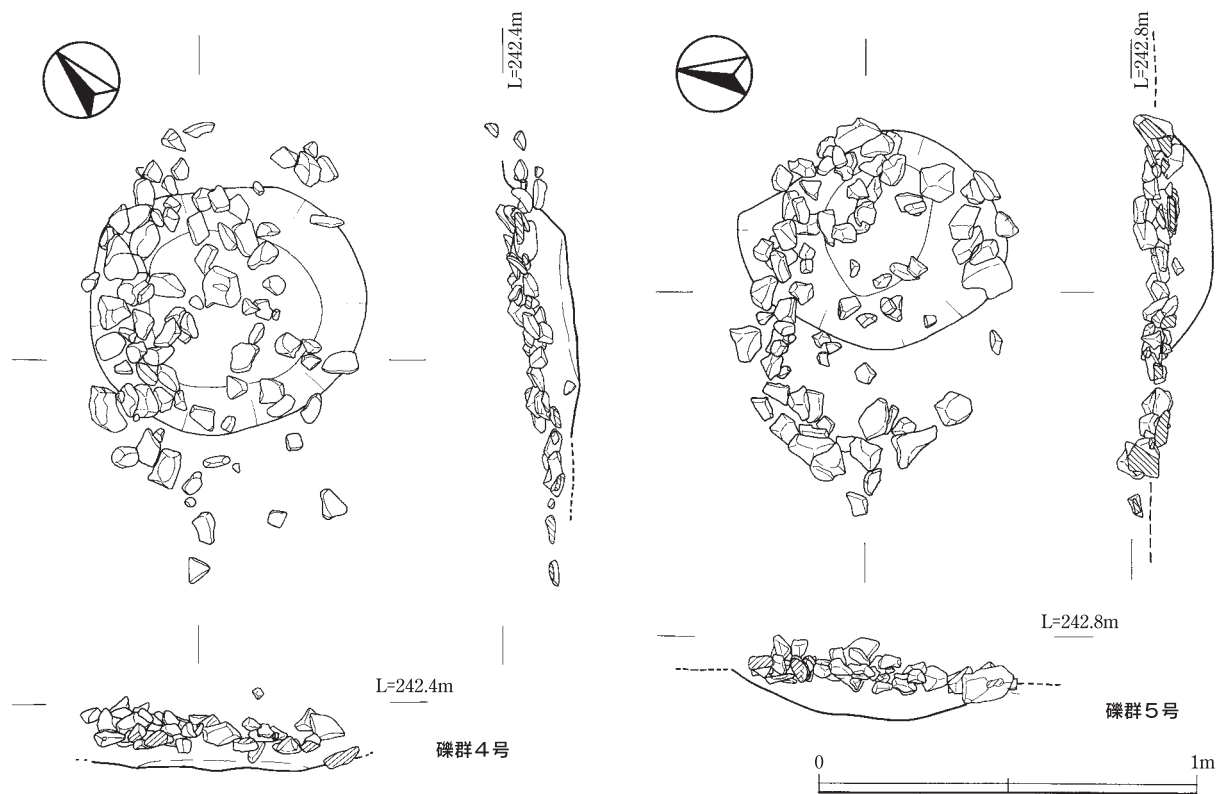
なお、本礫群は薬品で硬化処理後、移設保存し、現在でも見る事ができる。

##### 3号礫群 (F-5区) 5類

ほぼ平らな面を浅く掘り込んで設置しており、南西側にも礫が散在している。埋土には炭化材や薩摩火山灰が含まれる。直径5~15cmの赤化した角礫で構成されているが、熱破碎したものが多くみられる。磨痕のある礫や凹石なども出土した。炭化材は<sup>14</sup>C年代測定の結果、11100±80年BP (補正<sup>14</sup>C年代)ということが判明している。

凹石(20)が1点出土した。硬質の砂岩製で、作業面である深い凹みがあり、片面に観察される。

なお、F-6区にも砂岩の破碎礫が8個程度集中している箇所があったが位置の記録にとどめている。



第32図 礫群（3）

4号礫群（C-8区）3類

ほぼ平らな面を浅く掘り込んで設置している。埋土は周囲の土より黒っぽい。直径5～10cmの赤化した角礫で構成されているが、熱破碎したものが多くみられる。礫は掘り込みの北西側に集中し、他はかき出したように分散している。

なお、本礫群は竪穴住居跡に近接しており、同時期の可能性が高い。

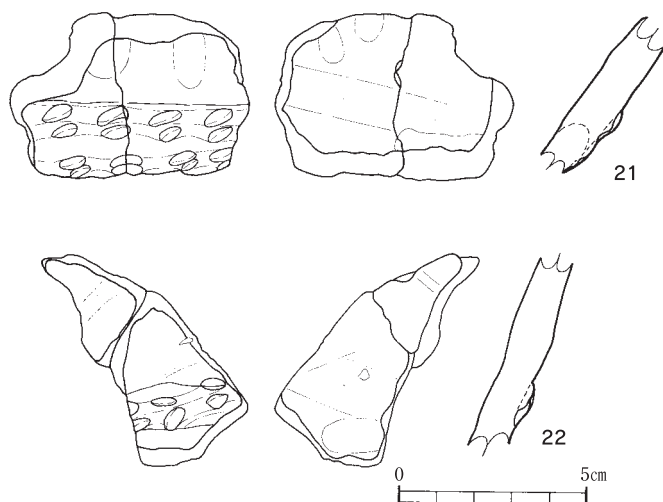
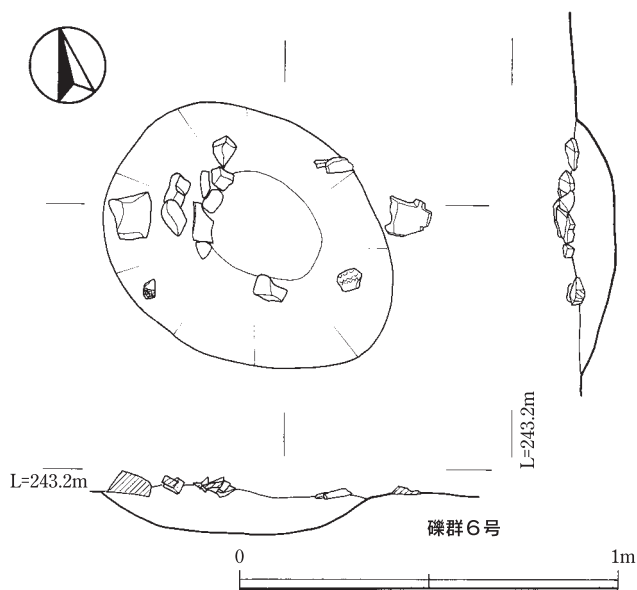
B-1地区

5号礫群（B-10区）3類

ほぼ平らな面を掘り込んで設置している。埋土は炭化物を含み、周囲の土より黒っぽい。直径5～15cmの赤化した角礫で構成されているが、熱破碎したものが多くみられ、掘り込みから西側へかき出したように分散している。

第6表 縄文時代草創期の遺構内石器観察表

挿図	地区	出土区	番号	遺物番号	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
25	A	B-8,1号住居	13	2880	打製石鏃	黒曜石(桑ノ木水流系)	(1.6)	(1.3)	0.4	(0.5)	挟りあり
	A	B-8,1号住居	14	土坑1, 100	打製石鏃	黒曜石(桑ノ木水流系)	2.1	1.3	0.5	0.9	長二等辺三角形
	A	C-8,2号住居	15	土坑2, 87	打製石鏃	黒曜石(桑ノ木水流系)	1.7	1.1	0.5	0.9	挟りあり
	A	C-8,2号住居	16	土坑2, 40	打製石鏃	黒曜石(桑ノ木水流系)	1.4	1	0.4	0.4	長二等辺三角形, 挟りあり
	A	B-8,1号住居	17	土坑1, 143	有溝砥石	軟質砂岩	15.6	12.6	4.6	812	溝2条, 風化が激しい
	A	B-8,1号住居	18	土坑1,	砥石	緑色泥岩	16.9	11	3.4	588	中央に砥いた痕跡, 破損・風化が激しい
31	A	F-5,3号礫群	20	集石2	凹石	硬質砂岩	7.4	6.6	3.1	135	片面に深い凹み
34	B-1	D-14,7号礫群	23	19604	有溝砥石	軟質砂岩	5.6	5.4	2.5	73	溝1条
	B-1	D-14,7号礫群	24	19584	石皿	硬質砂岩	24.2	16.8	3.9	1525	半分に破損(現状は三角形の板状), 中央部に凹み



第33図 磔群（4）・遺構内遺物

## B-2地区

### 6号磔群（D-14区）3類

ほぼ平らな面を掘り込んで設置している。埋土は暗茶褐色で微細な炭化物を含み、周囲の土より黒っぽい。直径5～10cmの赤化した角礫で構成されているが、大きさの割に数は少ない。また、周辺には同様な礫や土器片が散在していた。

21・22は隆帯文土器である。同様の文様・厚み・胎土を持つ141と同一個体と考えられる。口縁部は見つかっていないが、胴部は、隣接して隆帯を2条貼り付け、「ハの字」状の押圧施文をしている。親指と中指の指頭を合わせて、押圧したものと思われる。底部は平底で、ほぼ垂直に立ち上がり、明確に胴部と区別される。胎土や文様から同一個体と考えられるものの、

胴部壁面の傾きが違うものが少なくとも2種類あり、全体形は不明である。今後の資料の増加に期待したい。また、外面には炭化物が付着している。同一個体と思われる141の<sup>14</sup>C年代測定の結果は、11050±70年BP（補正<sup>14</sup>C年代）であった。この土器と礫群とは同時期と見て良いであろう。

### 7号礫群（D-14区）6類

ほぼ平らな面を2か所掘り込んで設置している。ほとんどが直径5～15cmの赤化した角礫で構成されているが、熱破碎したものが多くみられる。なお、この周辺にはⅢ層早期の面から小破碎礫が多く散在していた。関連性については不明である。

有溝砥石（23）が1点出土した。軟質の砂岩製で、作業面である幅6mmの溝が1条観察される。

24は砂岩製の石皿で、赤化していない。ほぼ中央部で破損しており、三角形の板状となっている。中央部はある程度使い込まれて凹んでいる。

### 8号礫群（D-12区）6類

ほぼ平らな面を2か所掘り込んで設置している。掘り込みは大小があり、埋土は暗茶褐色で土質もやや柔らかい。ほとんどが直径5～15cmの赤化した角礫で構成されているが、熱破碎したものが多くみられる。礫はまばらであるが部分的に集中している。床着で無文の土器片が出土し、埋土中の炭化物も採取した。<sup>14</sup>C年代測定の結果は、10990±120年BP（補正<sup>14</sup>C年代）である。

25は無文の鉢形土器である。無文のものでは本遺跡最大級である。口縁外面には炭化物が付着している。<sup>14</sup>C年代測定の結果は、11470±70年BP（補正<sup>14</sup>C年代）であった。誤差を考慮しても、この土器と出土した礫群との年代はやや開きがある。

26は底部で、ほぼ平底を呈す。本礫群内の出土ではないが、胎土や器壁の厚さから、25と同一個体と考えられるため、ここに掲載した。

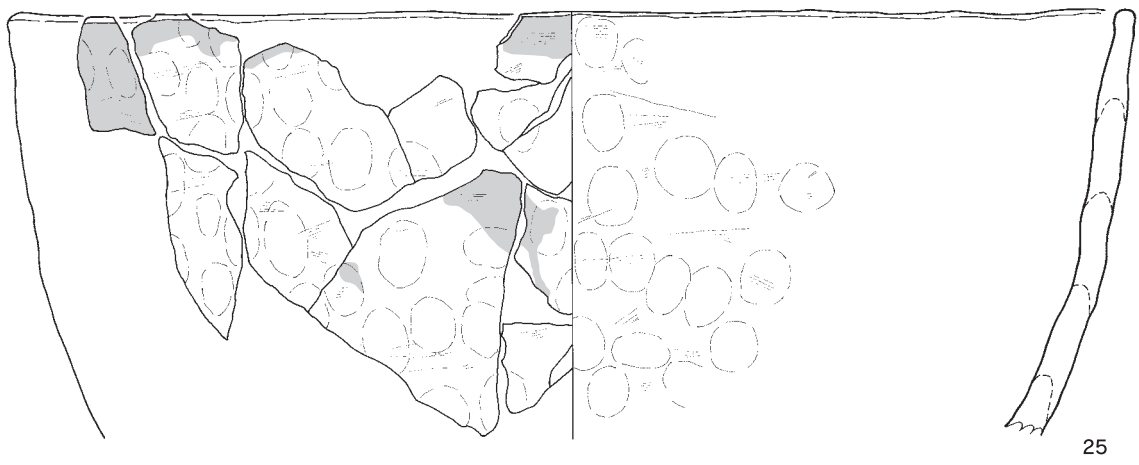
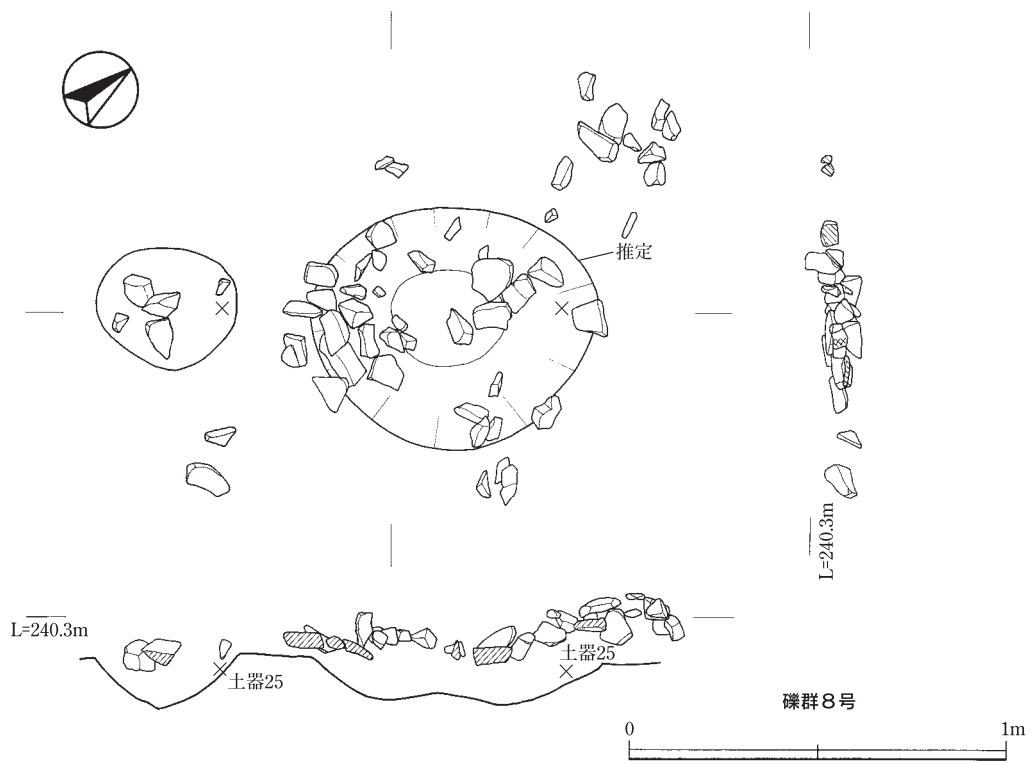
#### ④ その他の遺構

石器製作跡と思われる剥片やチップのブロックが確認されている。また、焼土や炭化物分布域もあった。位置や規模等については14・15図を参照されたい。



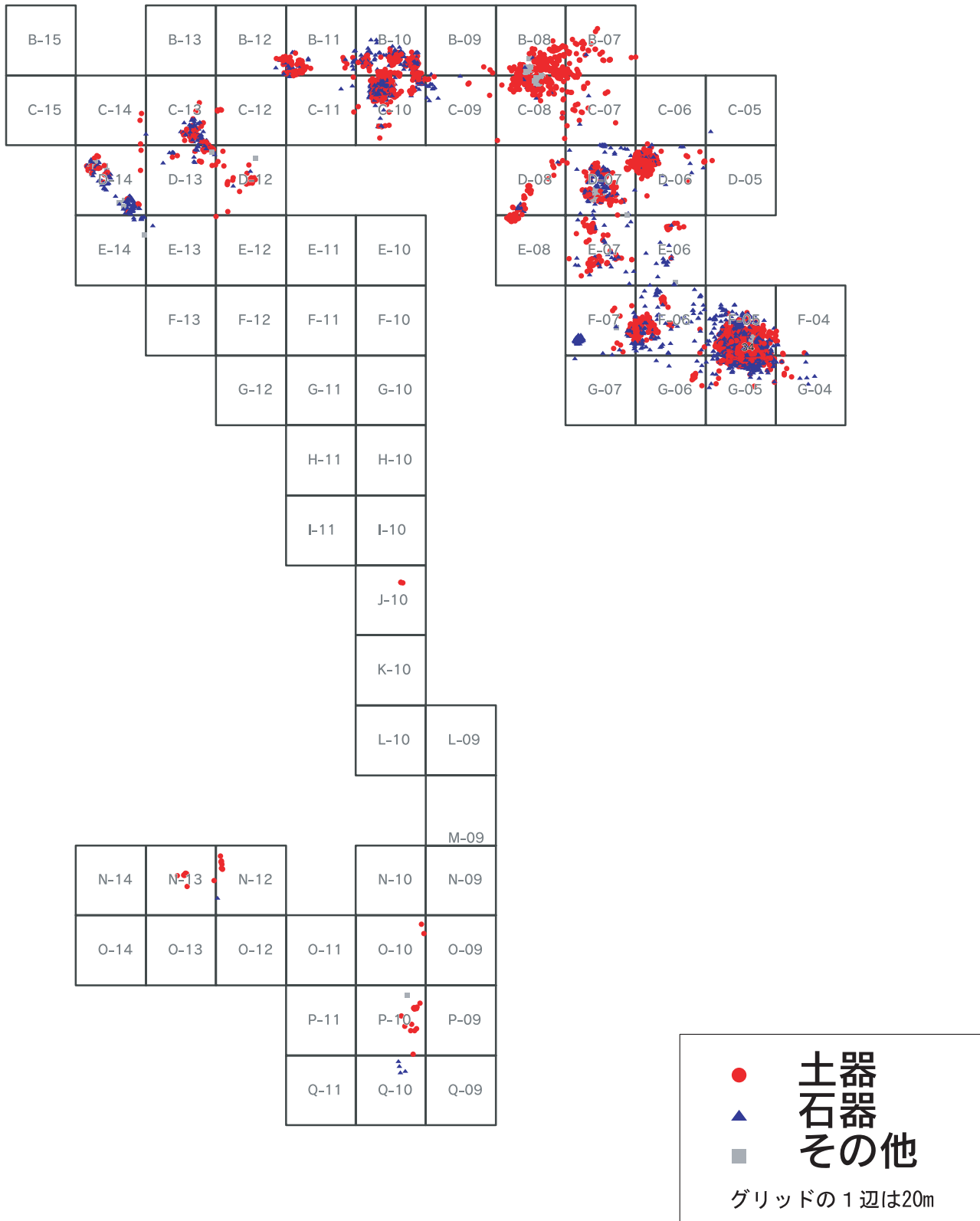


第34図 礫群（5）・遺構内遺物

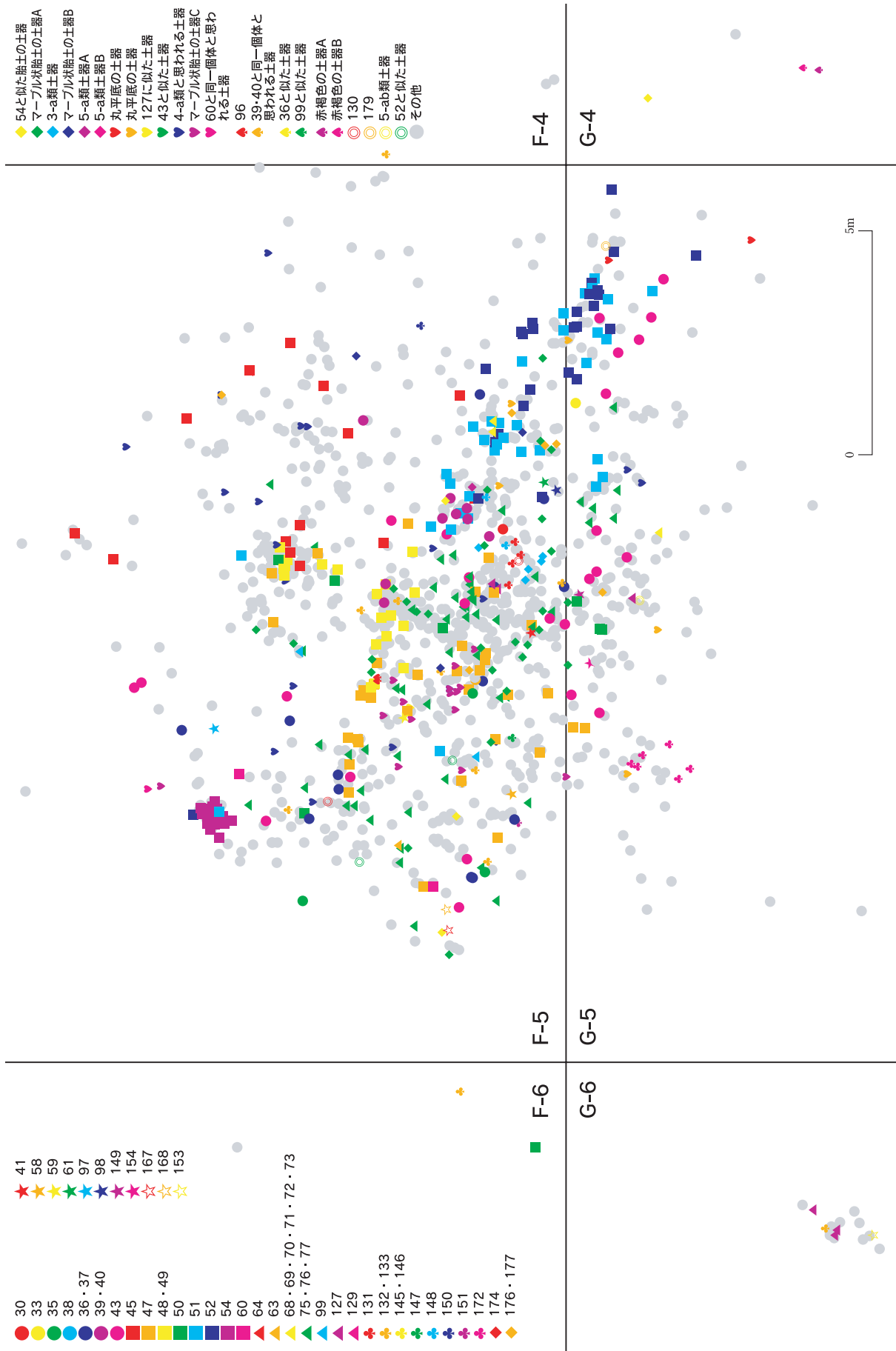


第35図 礫群(6)・遺構内遺物

a-03	a-02
------	------



第36図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況全体図

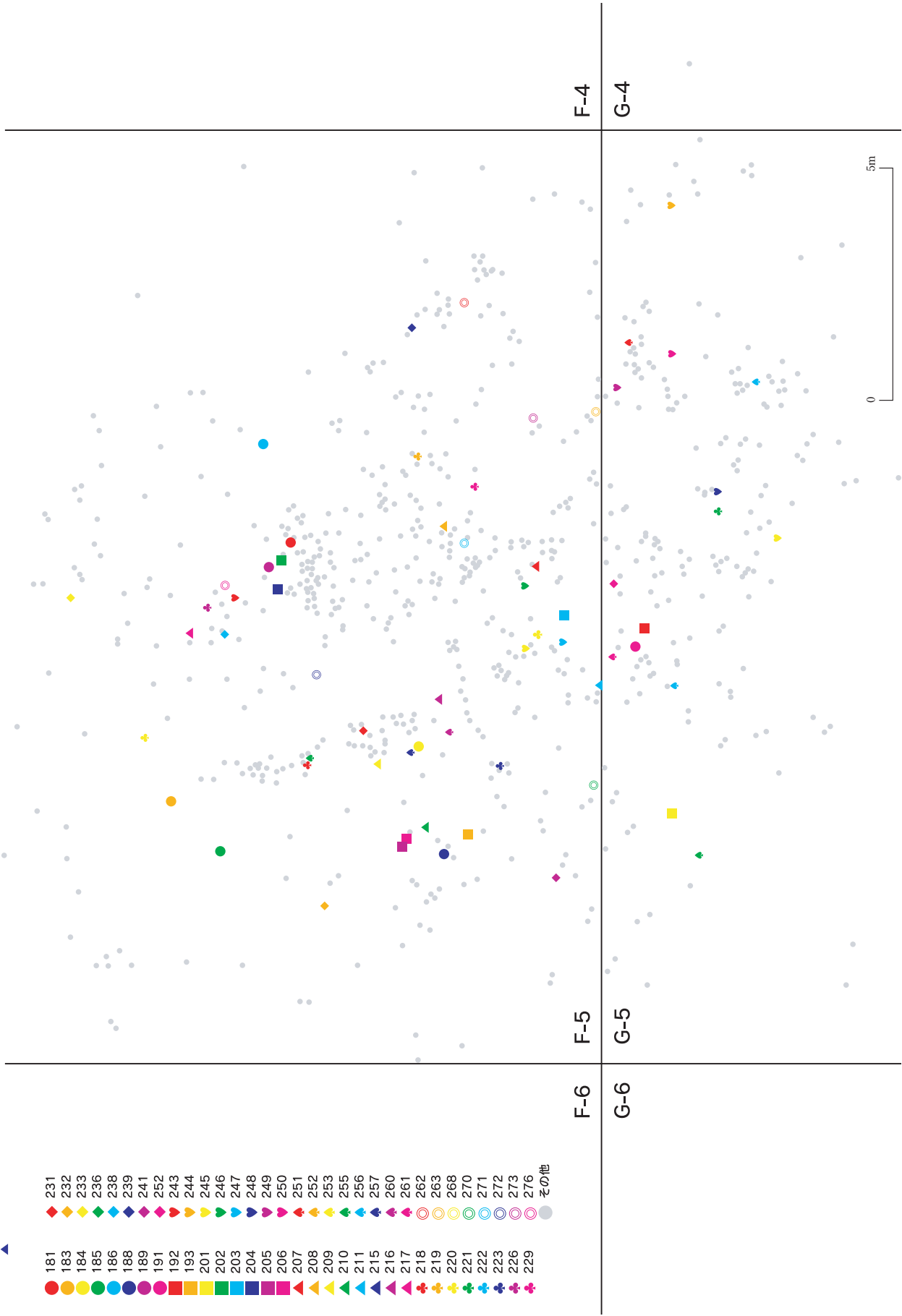


- ★ 41
- ★ 58
- ★ 59
- ★ 61
- ★ 97
- ★ 98
- ★ 149
- ★ 154
- ★ 167
- ★ 168
- ★ 153

- 30
- 33
- 35
- 38
- 36・37
- 39・40
- 43
- 45
- 47
- 48・49
- 50
- 51
- 52
- 54
- 60
- 64
- 63
- 68・69・70・71・72・73
- 75・76・77
- 99
- 127
- 129
- 131
- 132・133
- 145・146
- 147
- 148
- 150
- 151
- 172
- 174
- 176・177

- ◆ 54と似た胎土の土器
- ◆ マーブル状胎土の土器A
- ◆ 3-a類土器
- ◆ マーブル状胎土の土器B
- ◆ 5-a類土器A
- ◆ 5-a類土器B
- ◆ 丸平底の土器
- ◆ 丸平底の土器
- ◆ 127に似た土器
- ◆ 43と似た土器
- ◆ 4-a類と思われる土器
- ◆ マーブル状胎土の土器C
- ◆ 60と同一個体と思われる土器
- ◆ 96
- ◆ 39・40と同一個体と思われる土器
- ◆ 36と似た土器
- ◆ 99と似た土器
- ◆ 赤褐色の土器A
- ◆ 赤褐色の土器B
- 130
- 179
- 5-ab類土器
- 52と似た土器
- その他

第37図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（1） 土器のみ

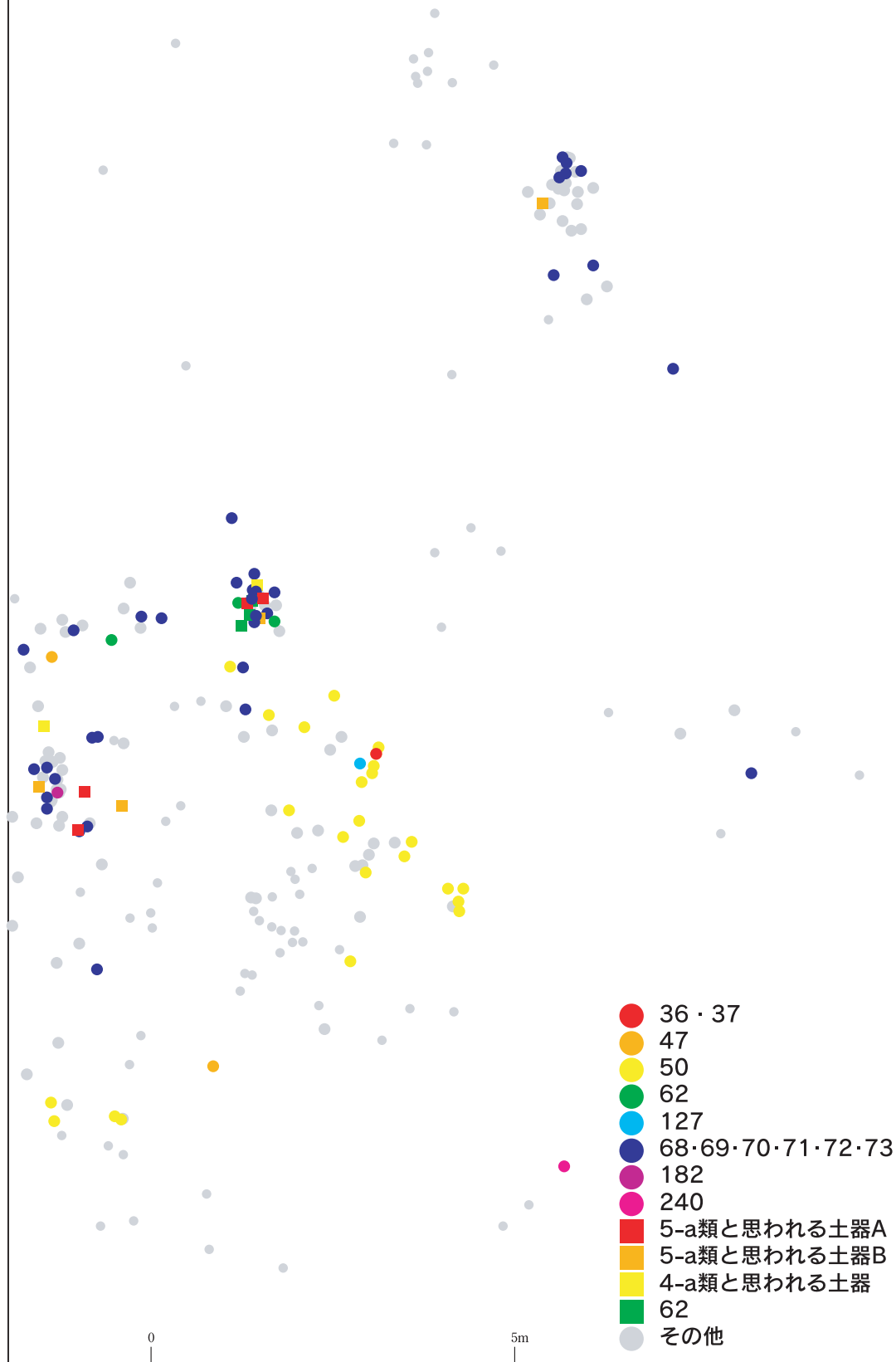


第38図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（2） 石器のみ



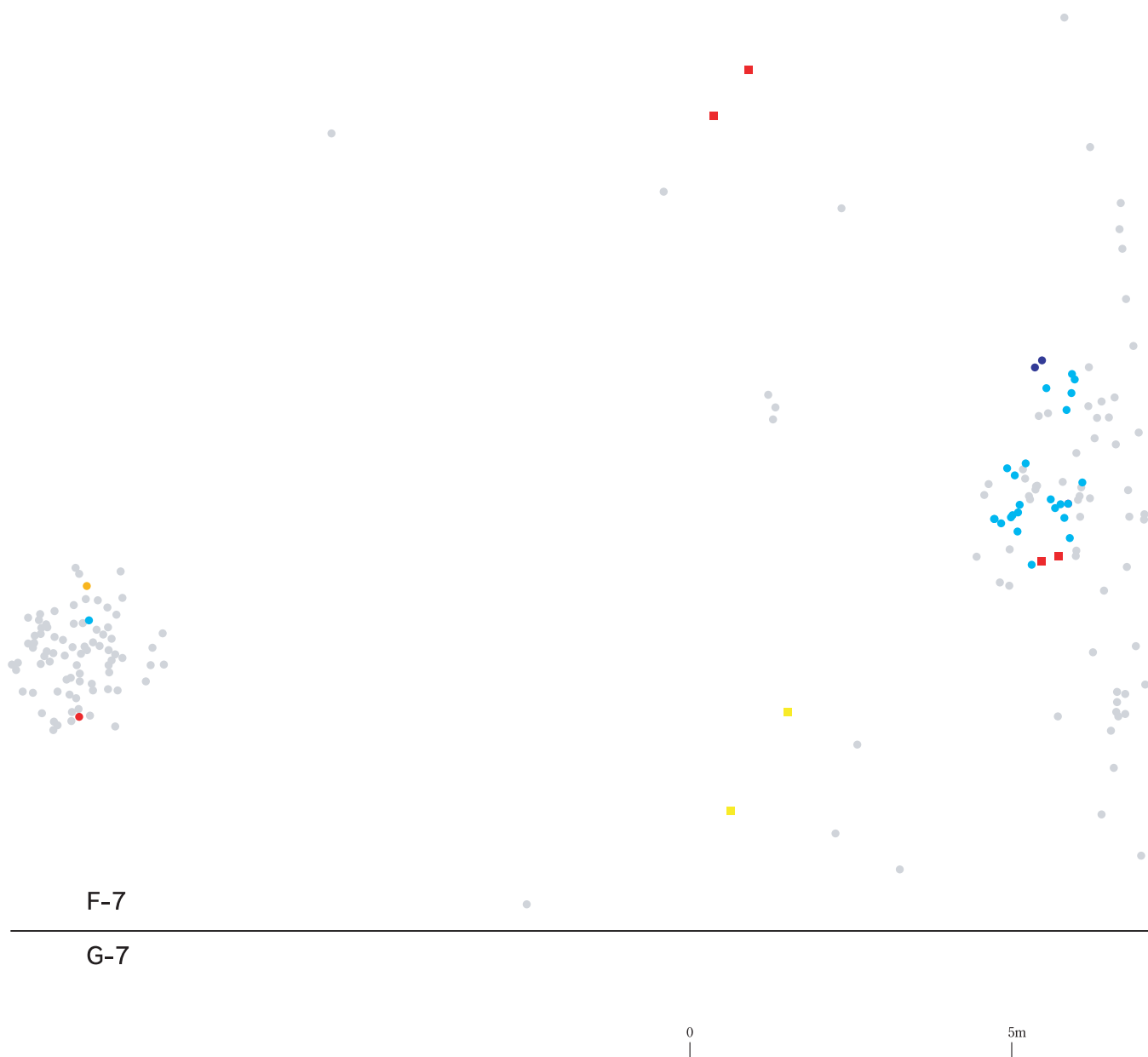
F-7

F-6

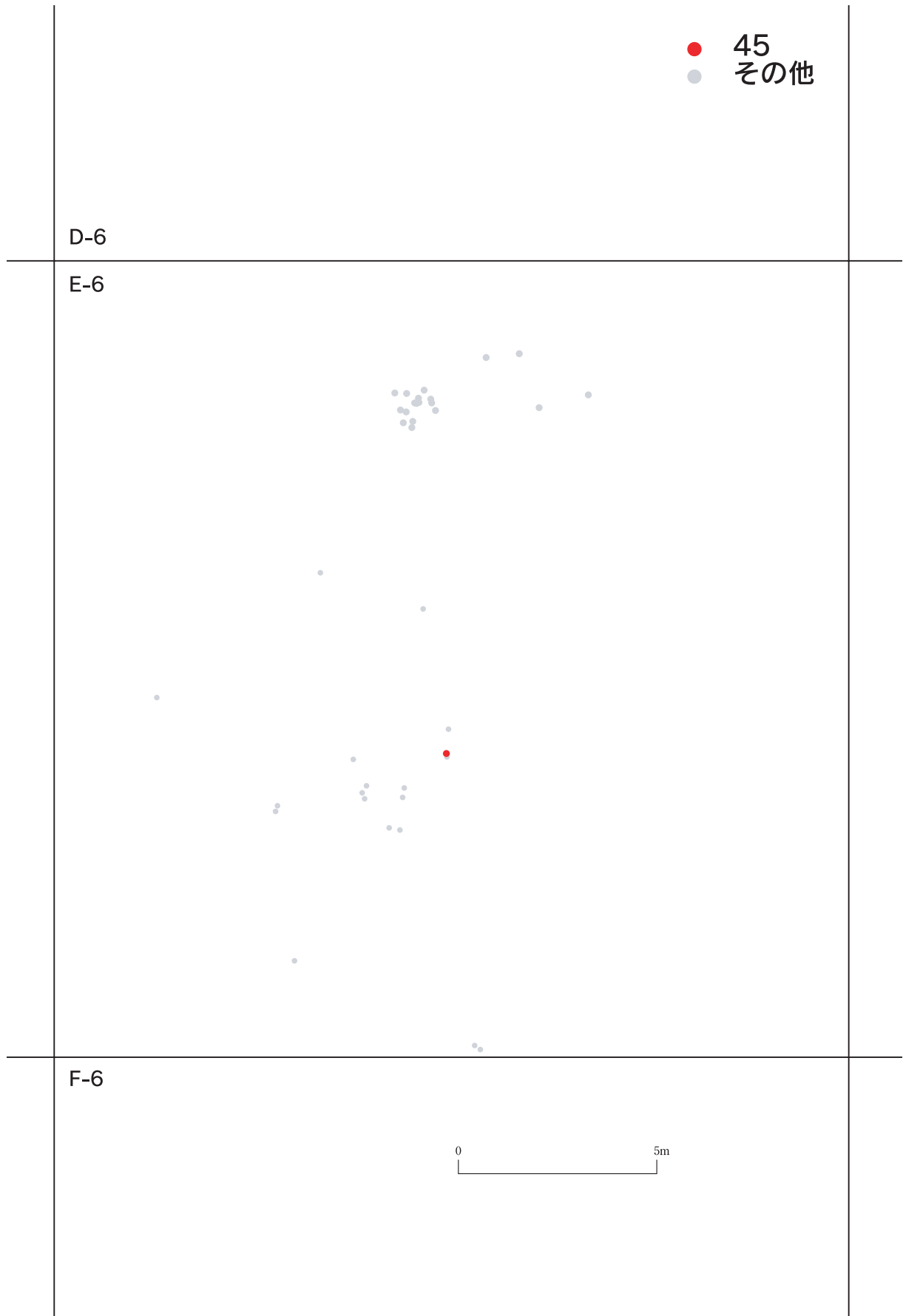


第39図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（3）

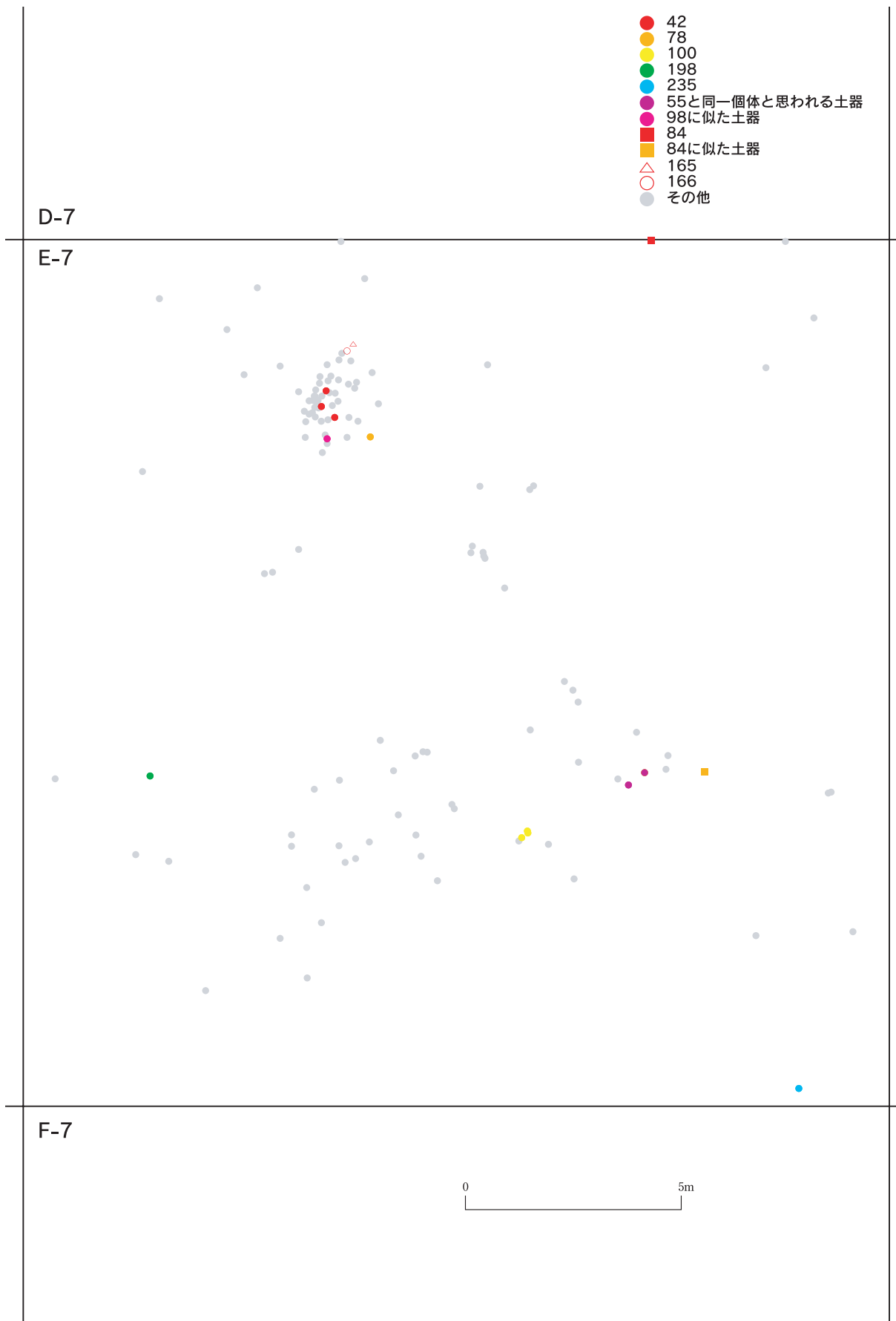
- 199
- 200
- 267
- 274
- 62
- 68・69・70・71・72・73
- 83
- 5-a類と思われる土器B
- 4-a類と思われる土器
- 152
- その他



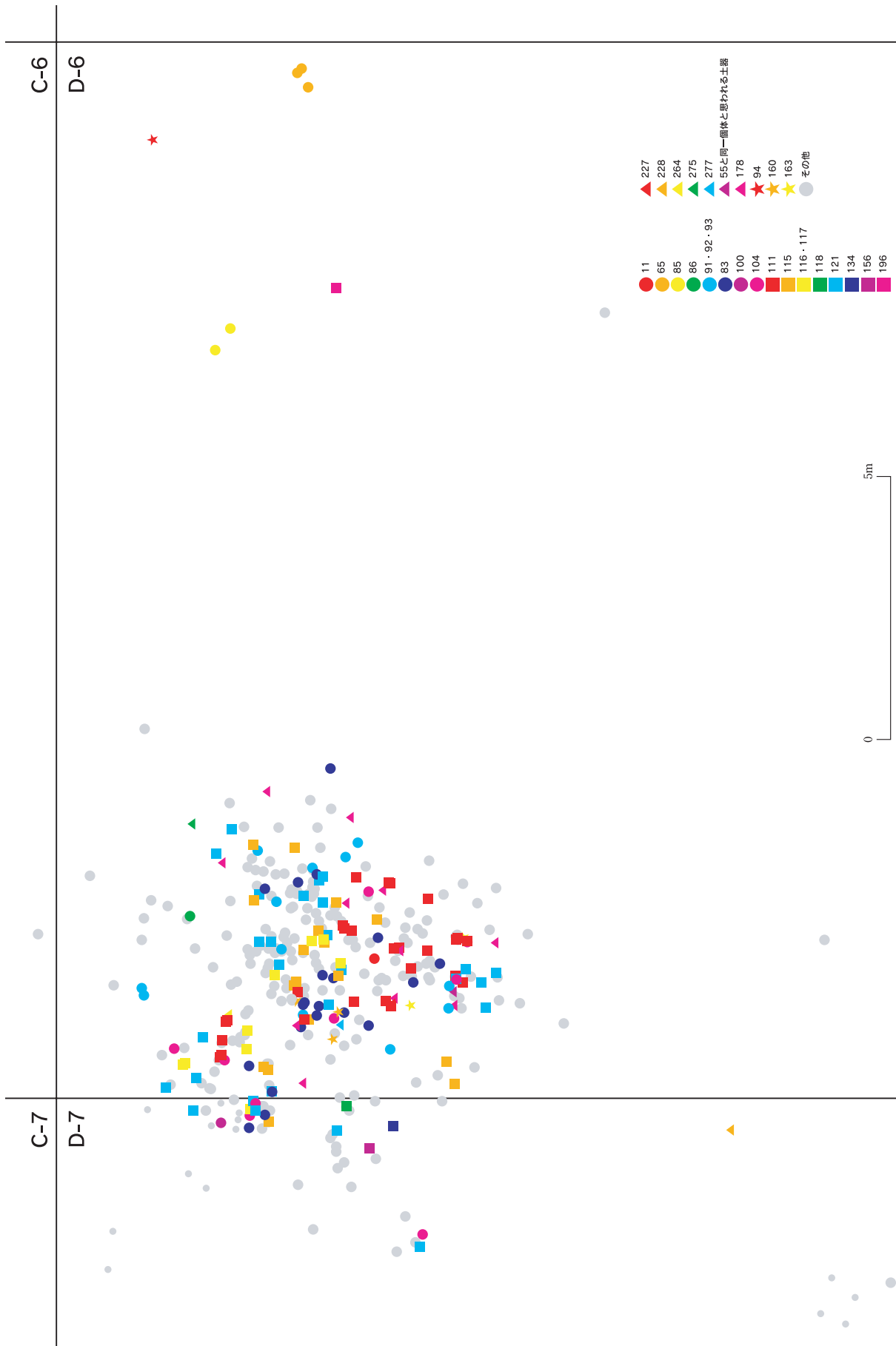
第40図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（4）



第41図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（5）

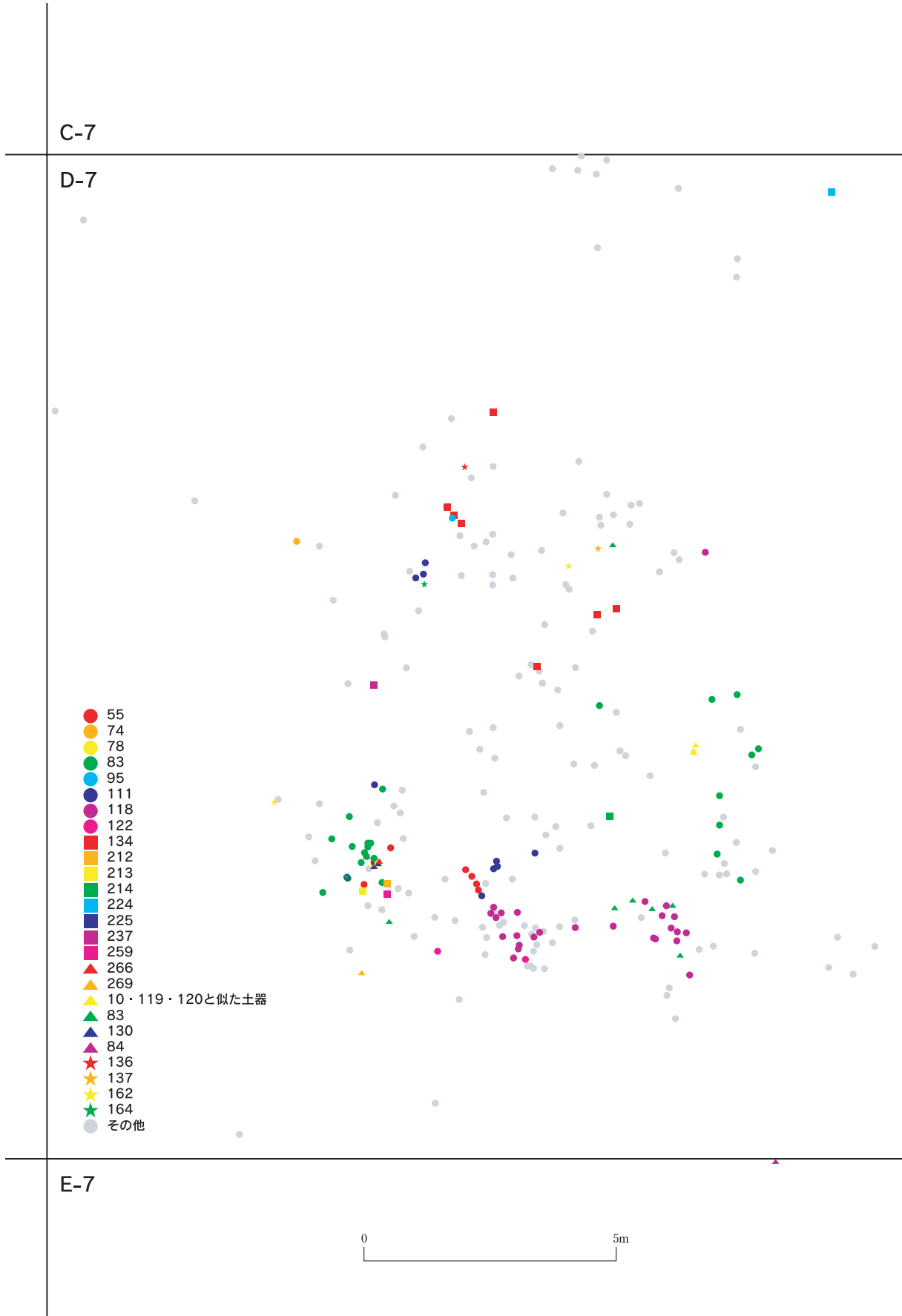


第42図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（6）

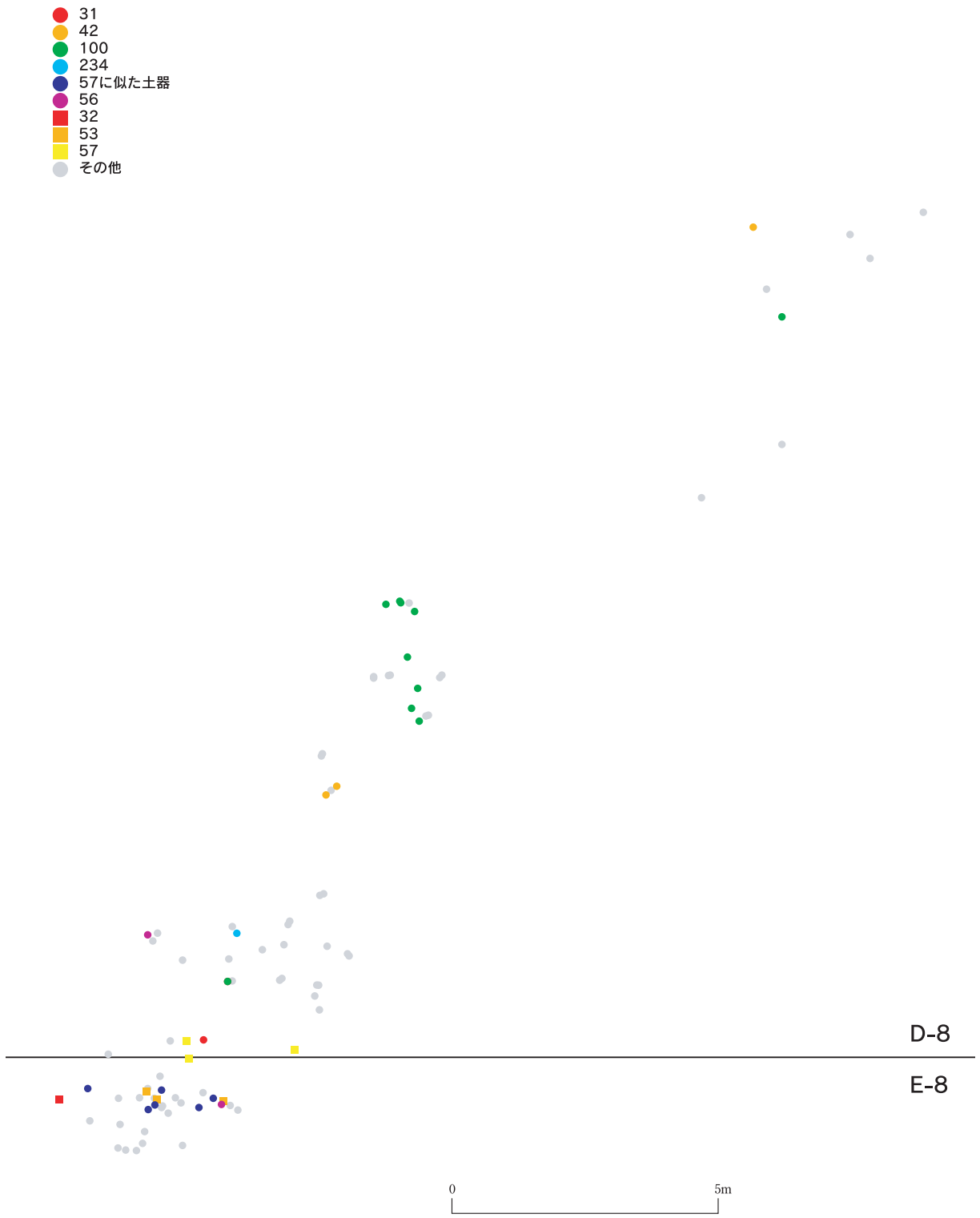


第43図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（7）

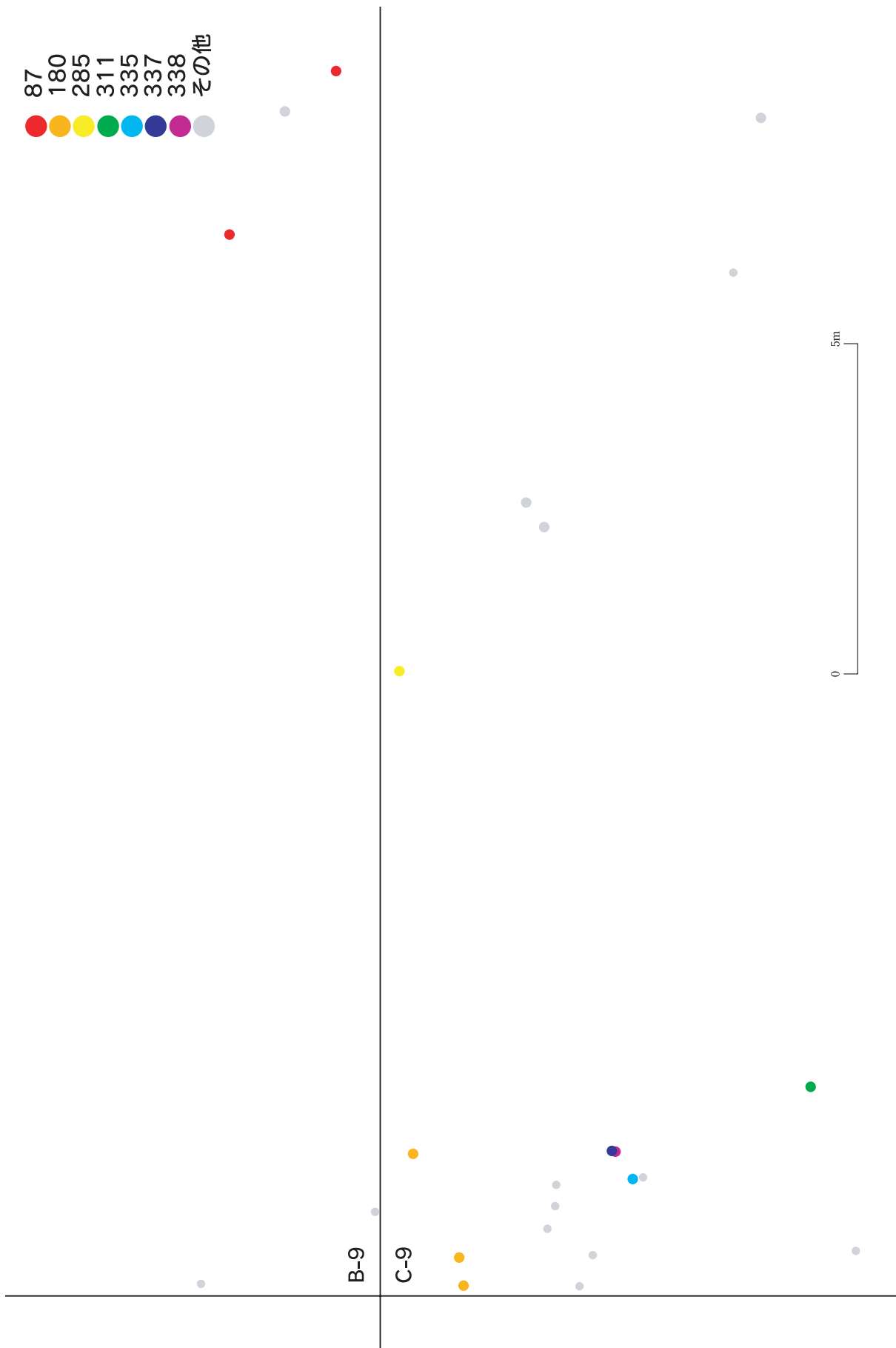




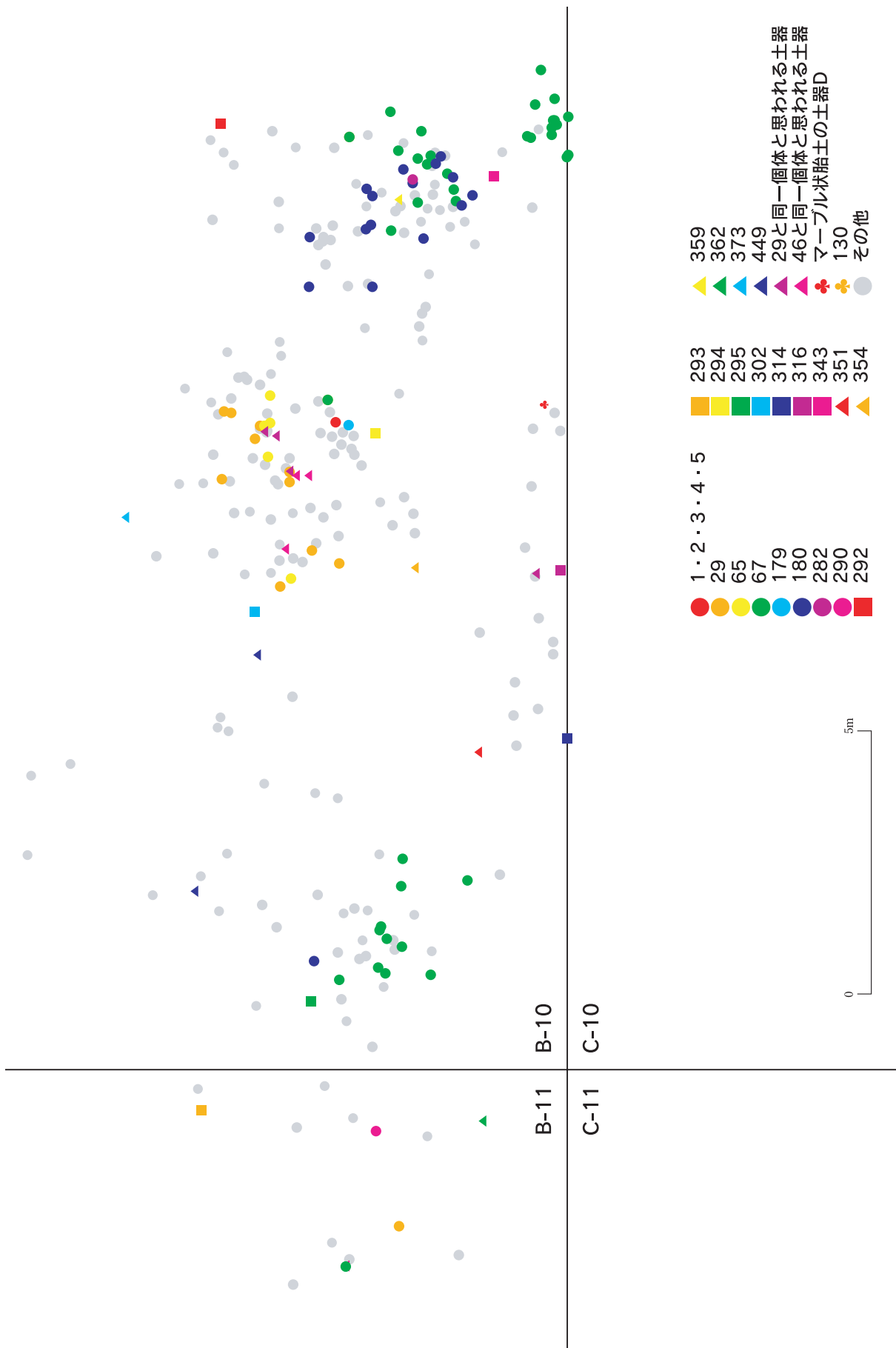
第44図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（8）



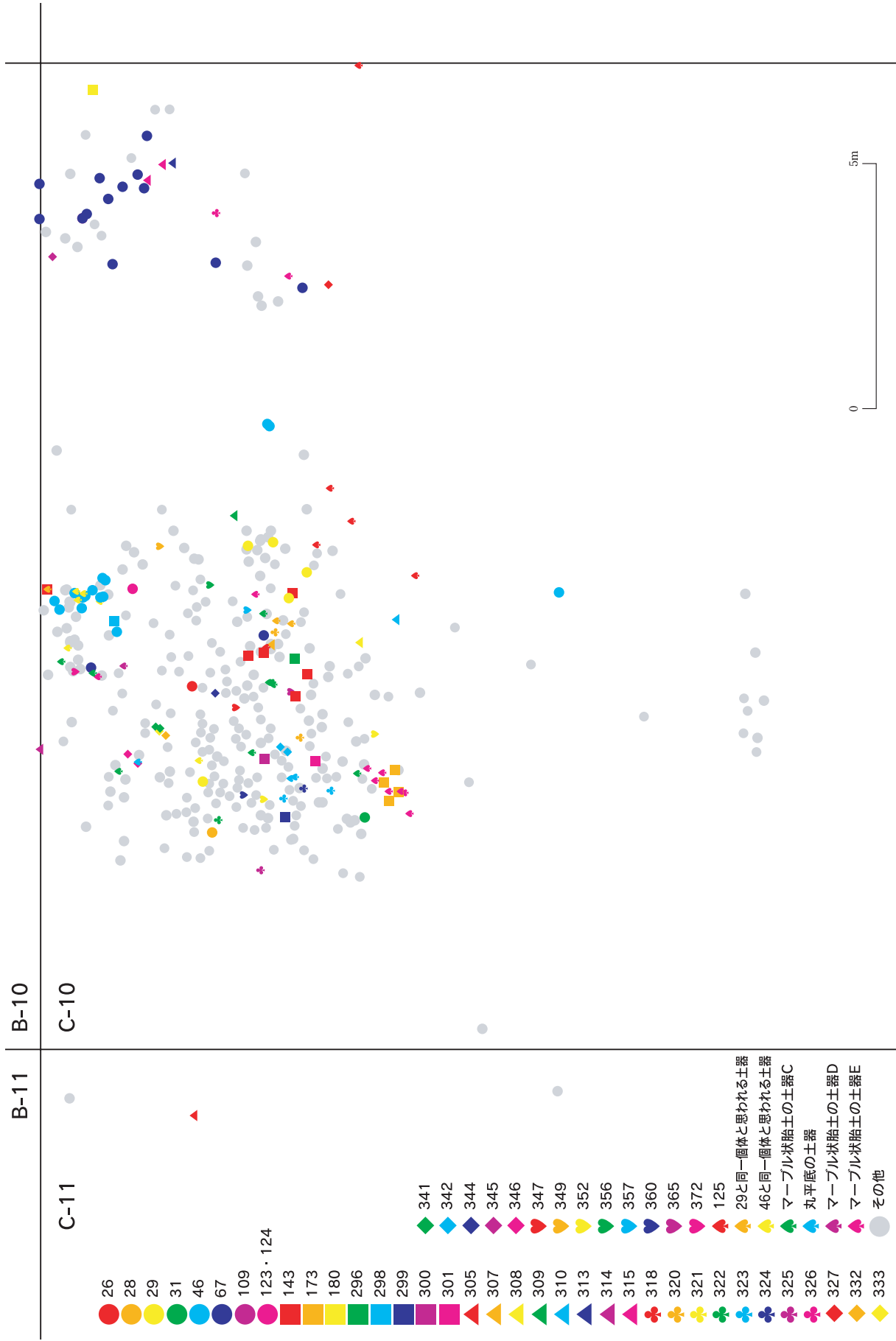
第45図 縄文時代草創期（Ⅴ層）遺物出土状況図（9）



第46図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（10）

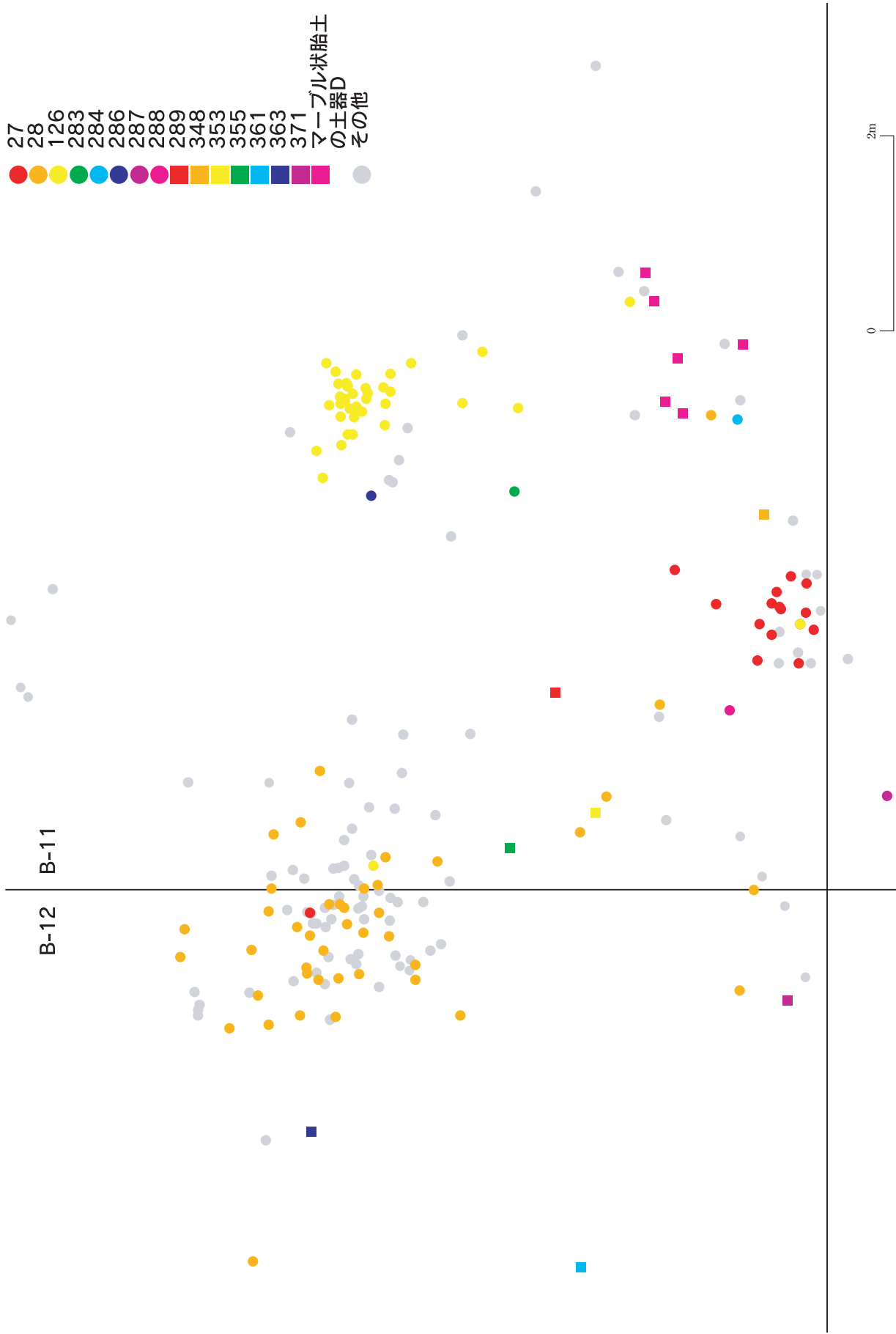


第47図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（11）

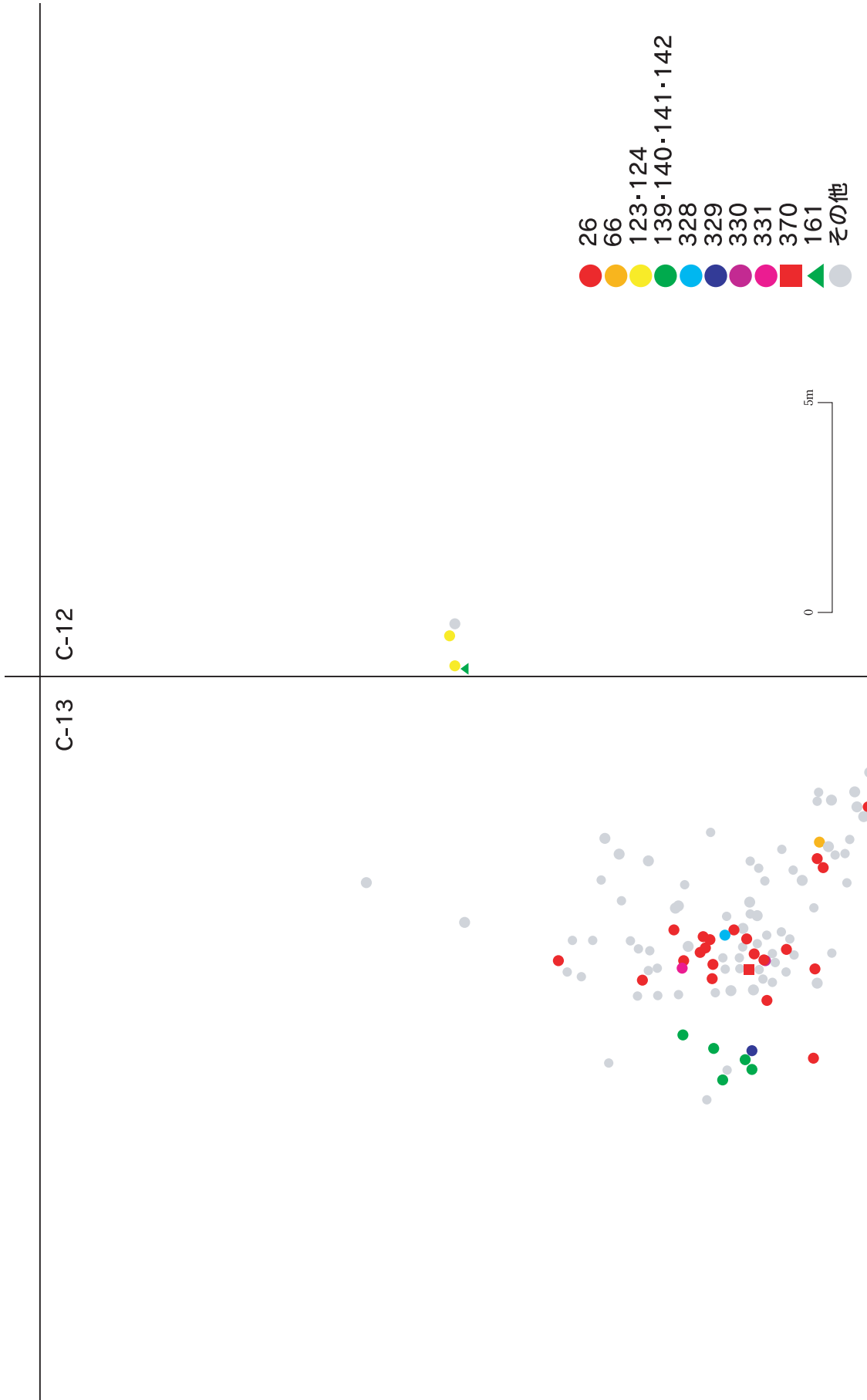


第48図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（12）

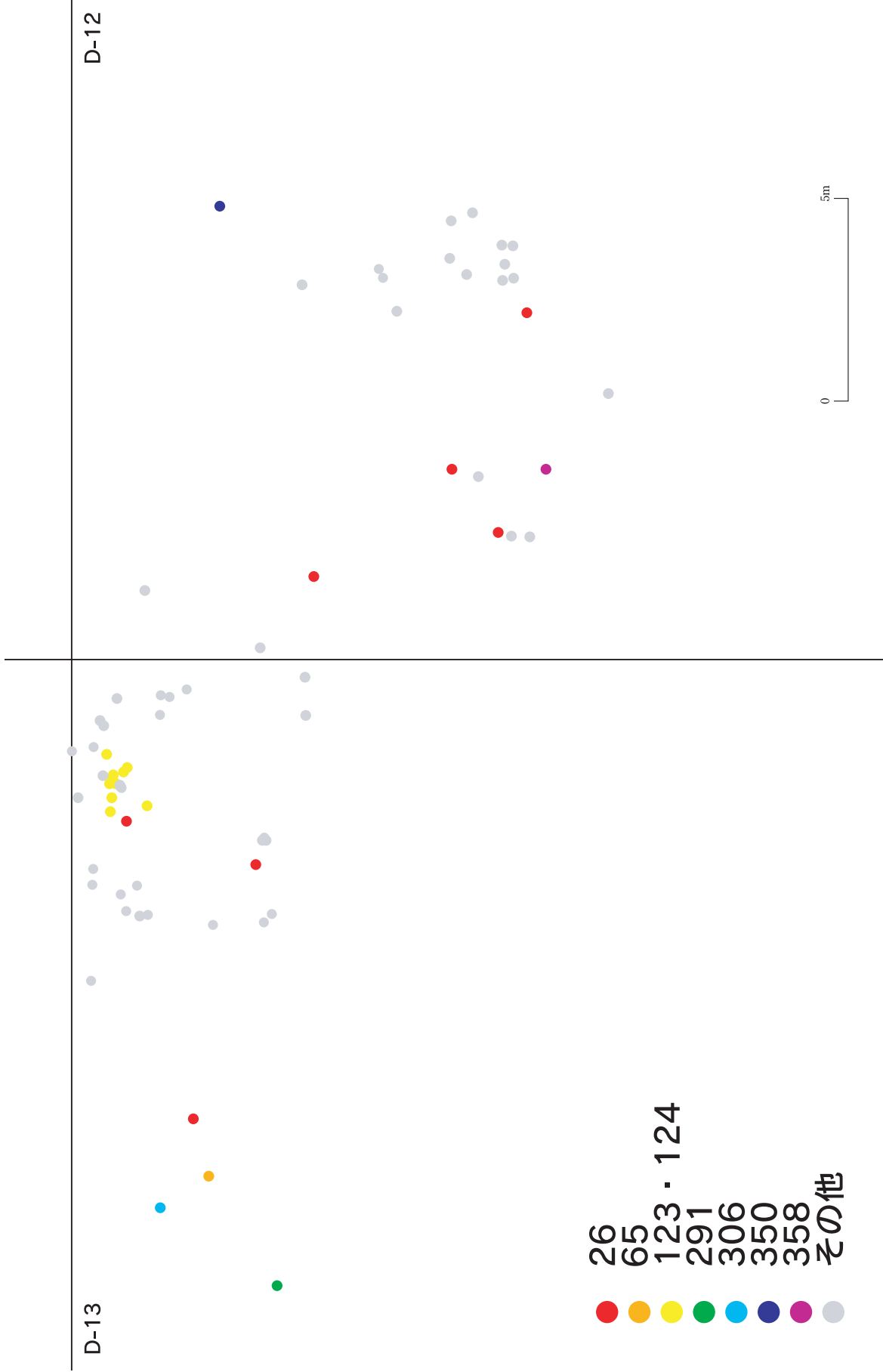




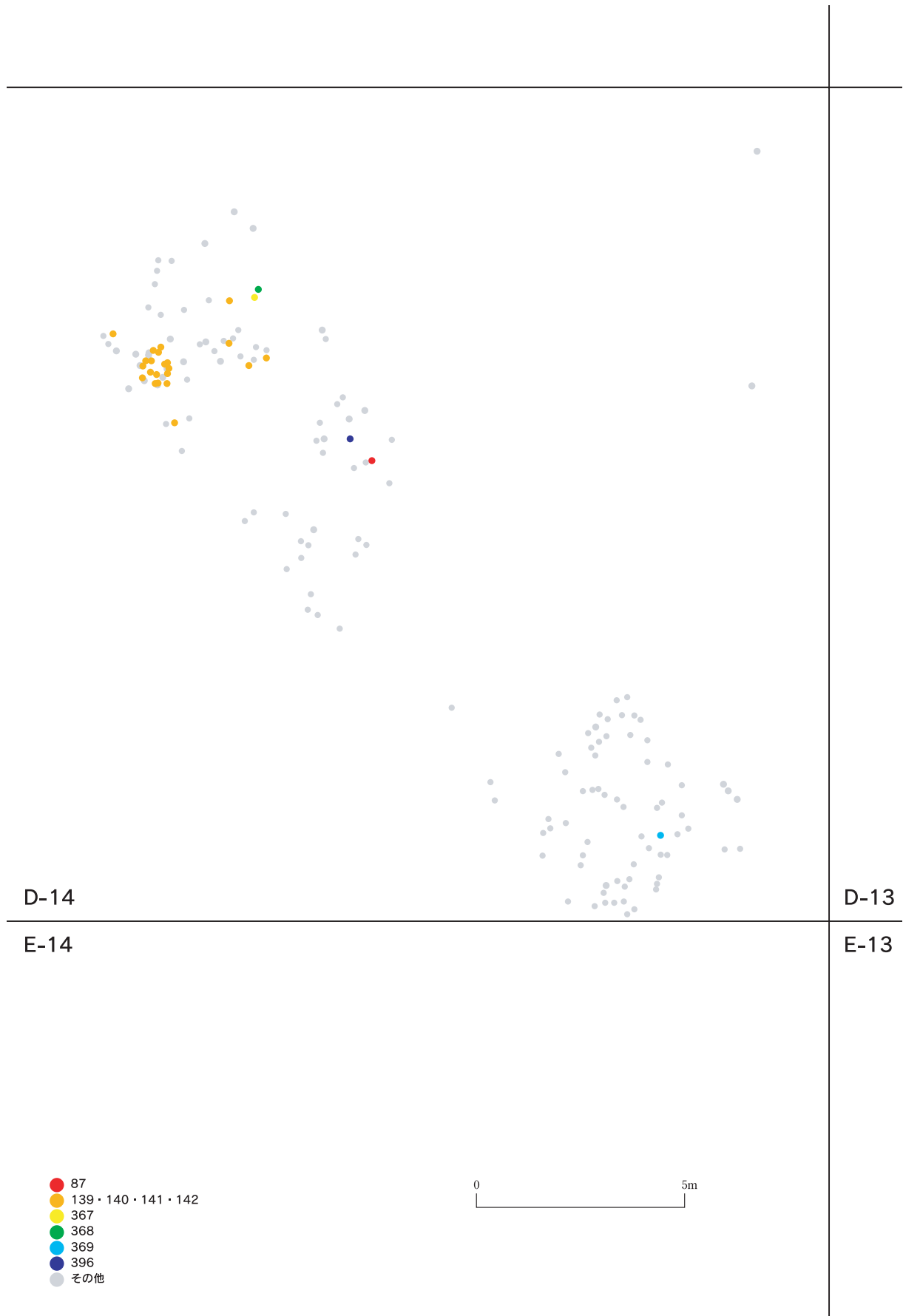
第49図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（13）



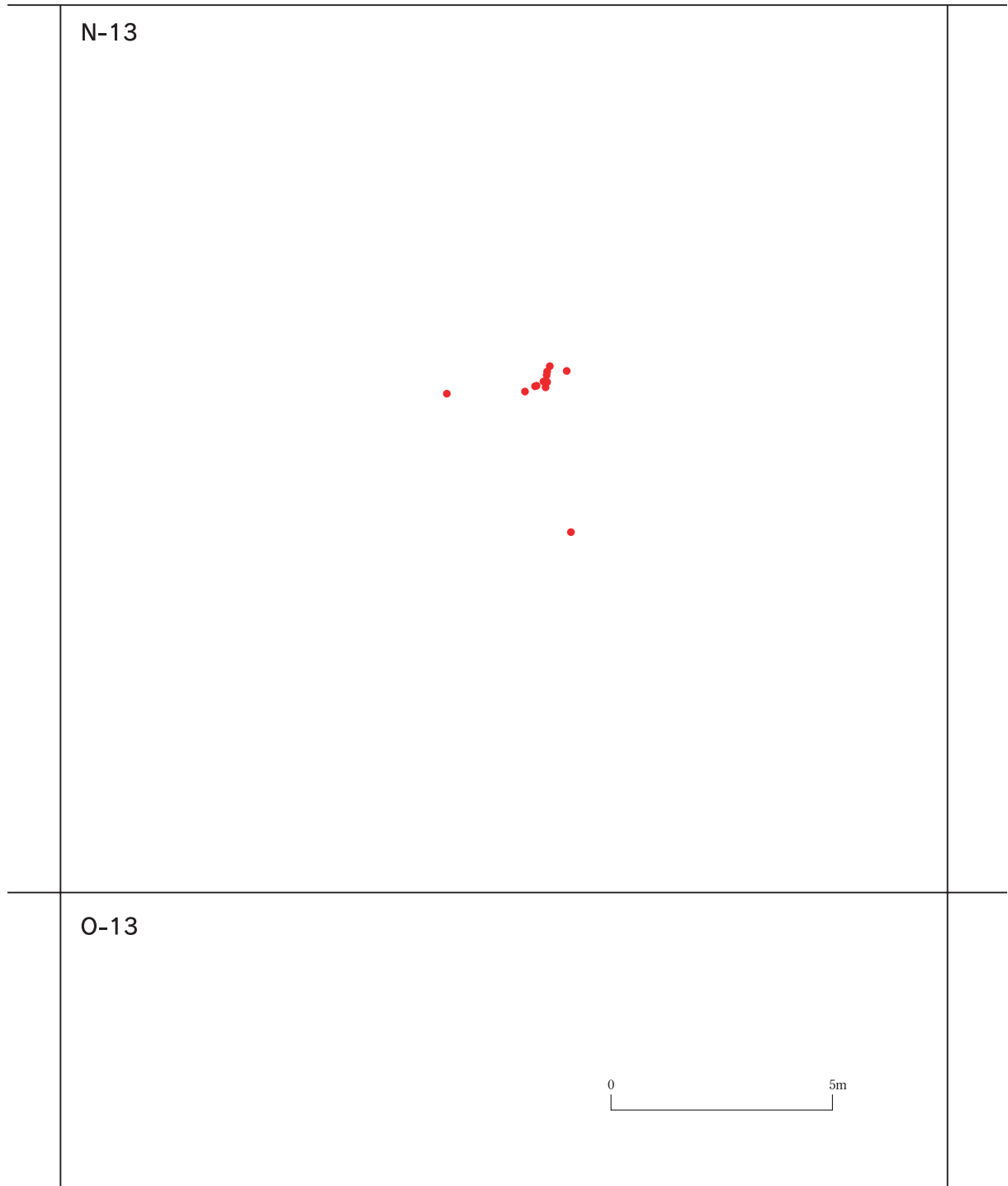
第50図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（14）



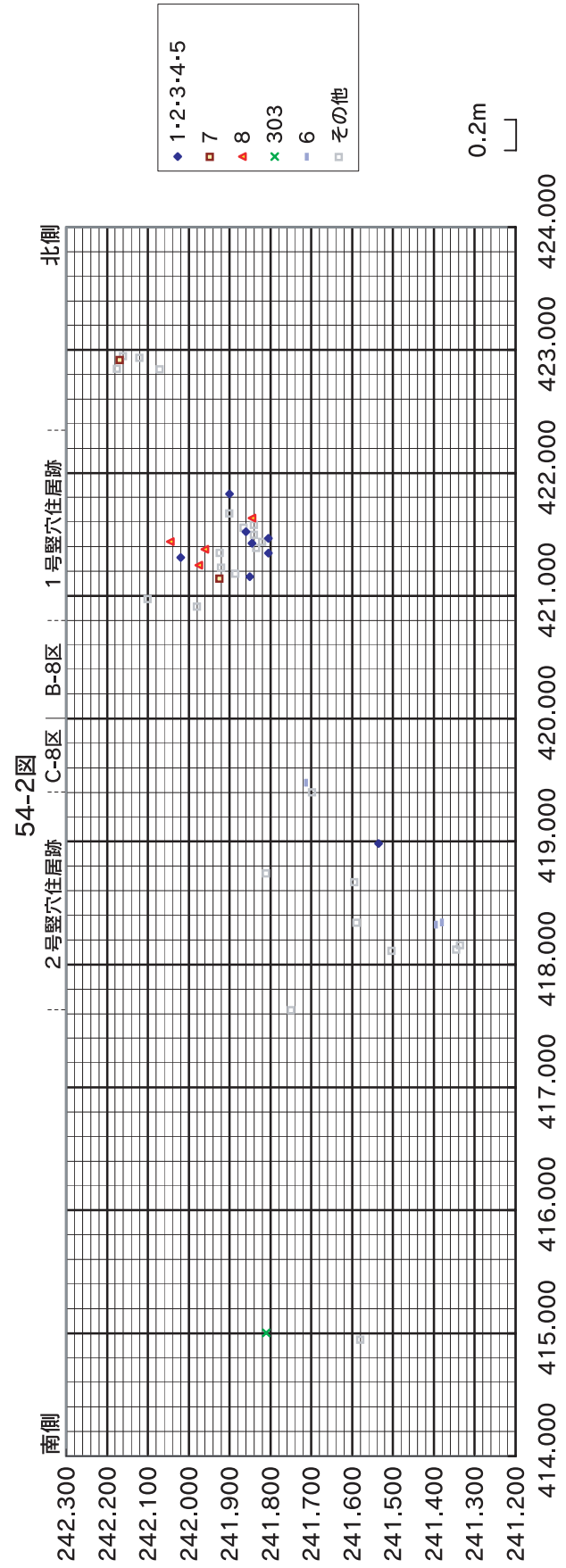
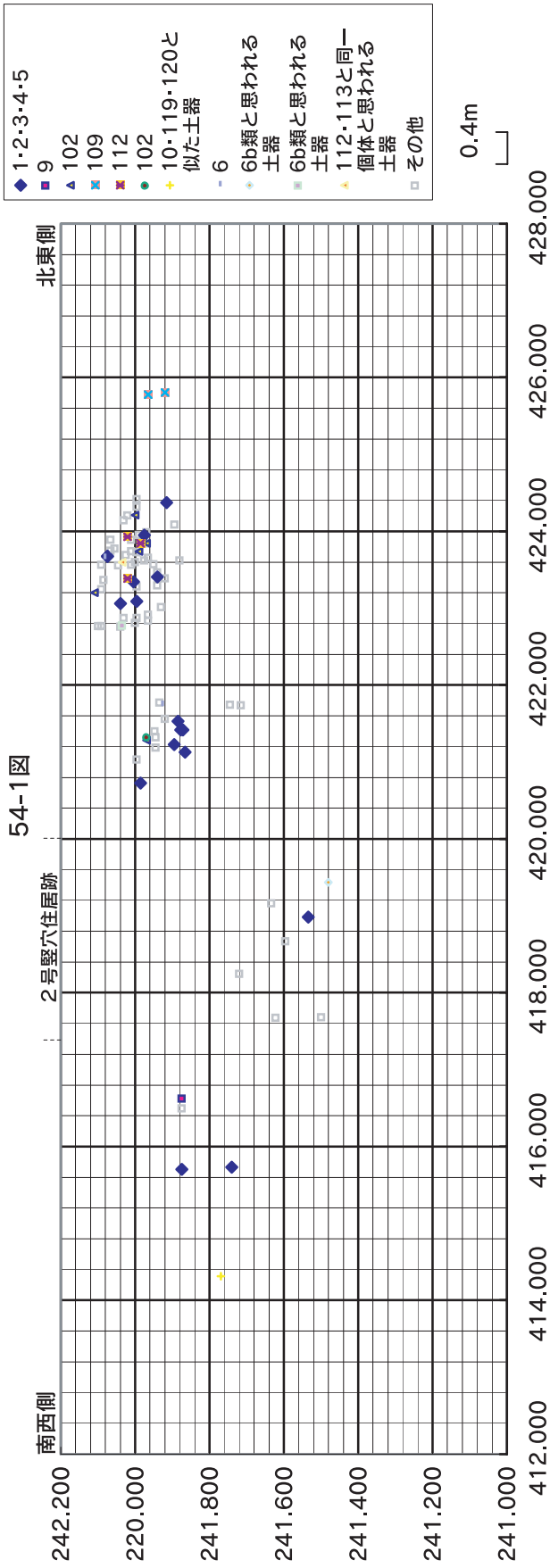
第51図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（15）



第52図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（16）

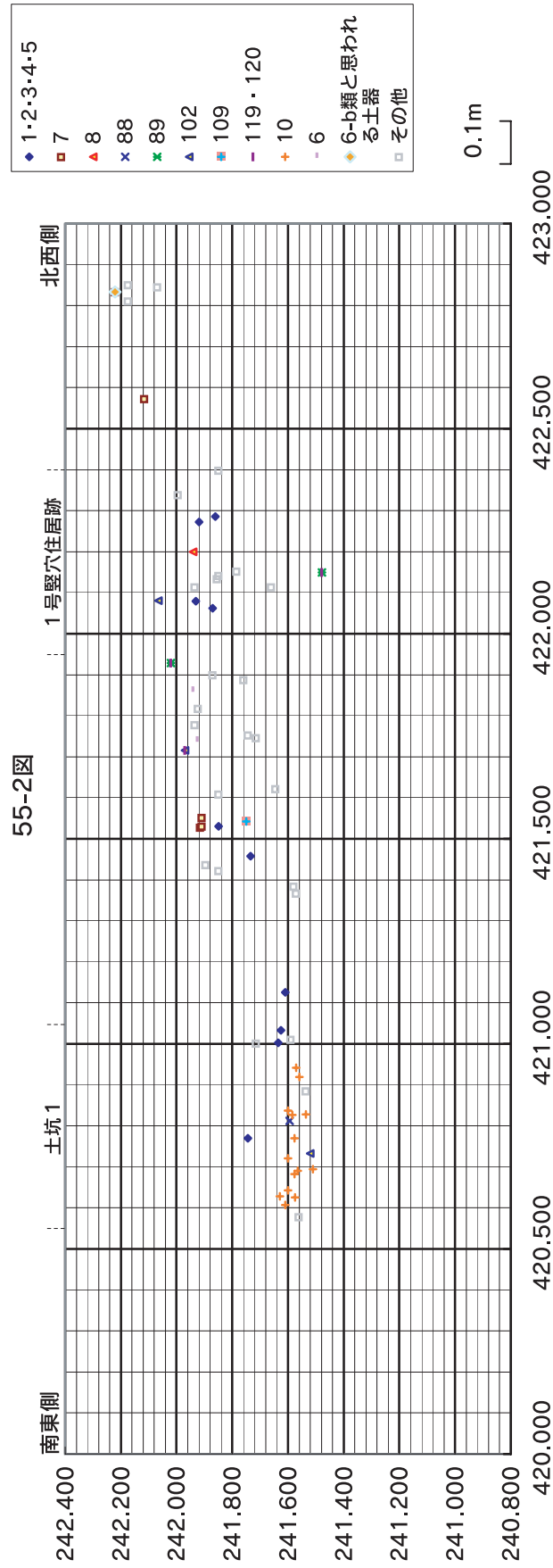
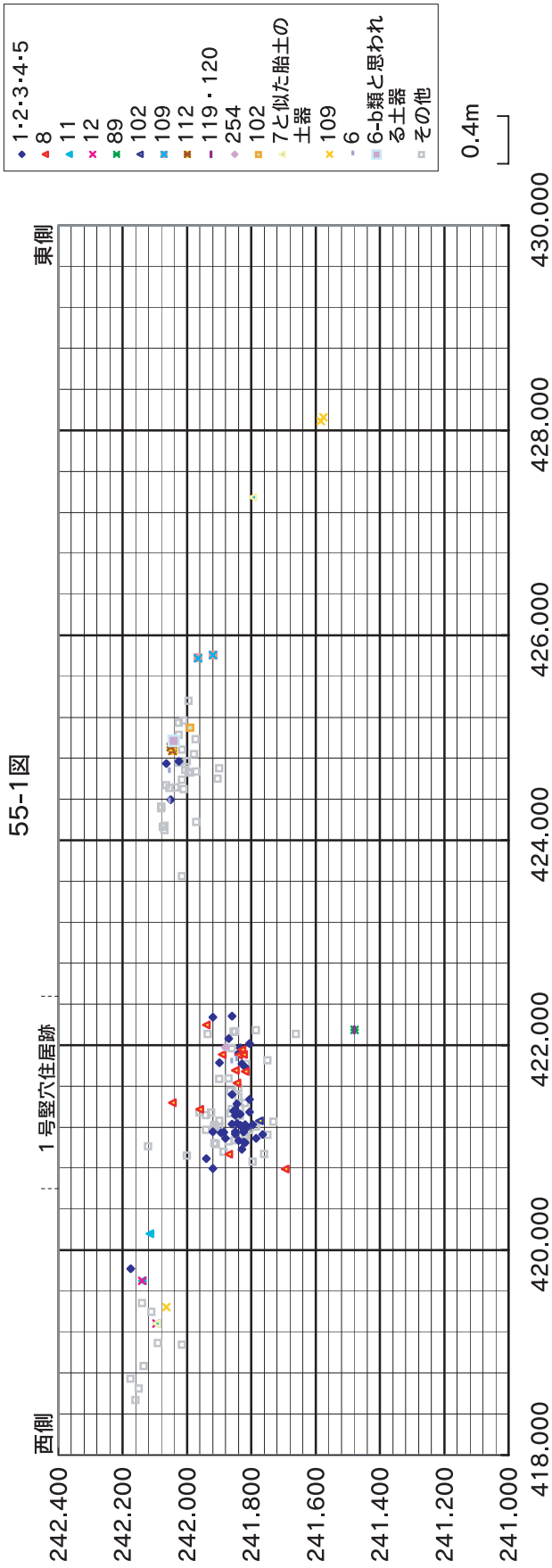


第53図 縄文時代草創期（V層）遺物出土状況図（17）



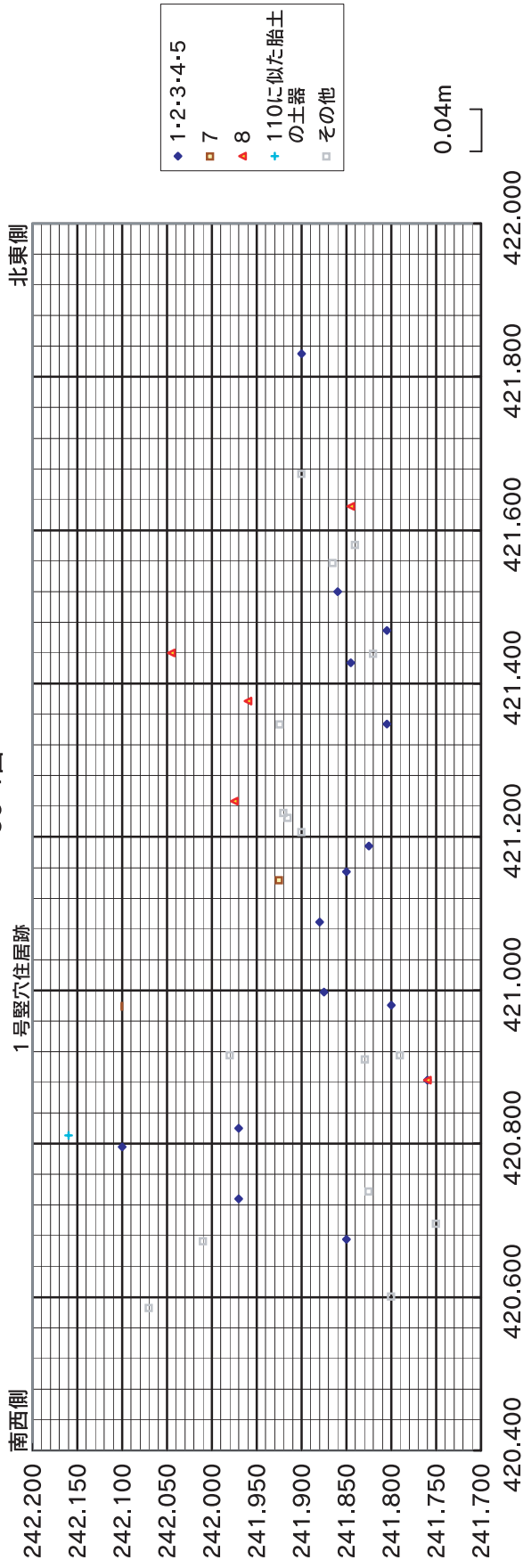
第54図 遺物分布立面図(1)



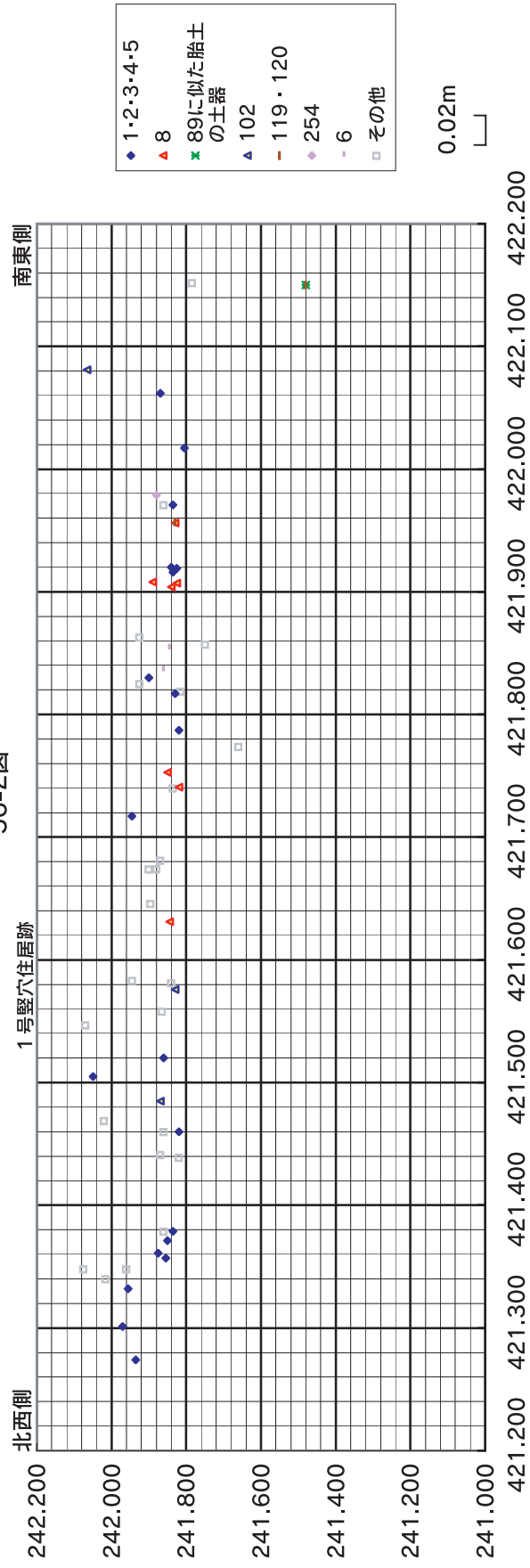


第55図 遺物分布立面図(2)

56-1図

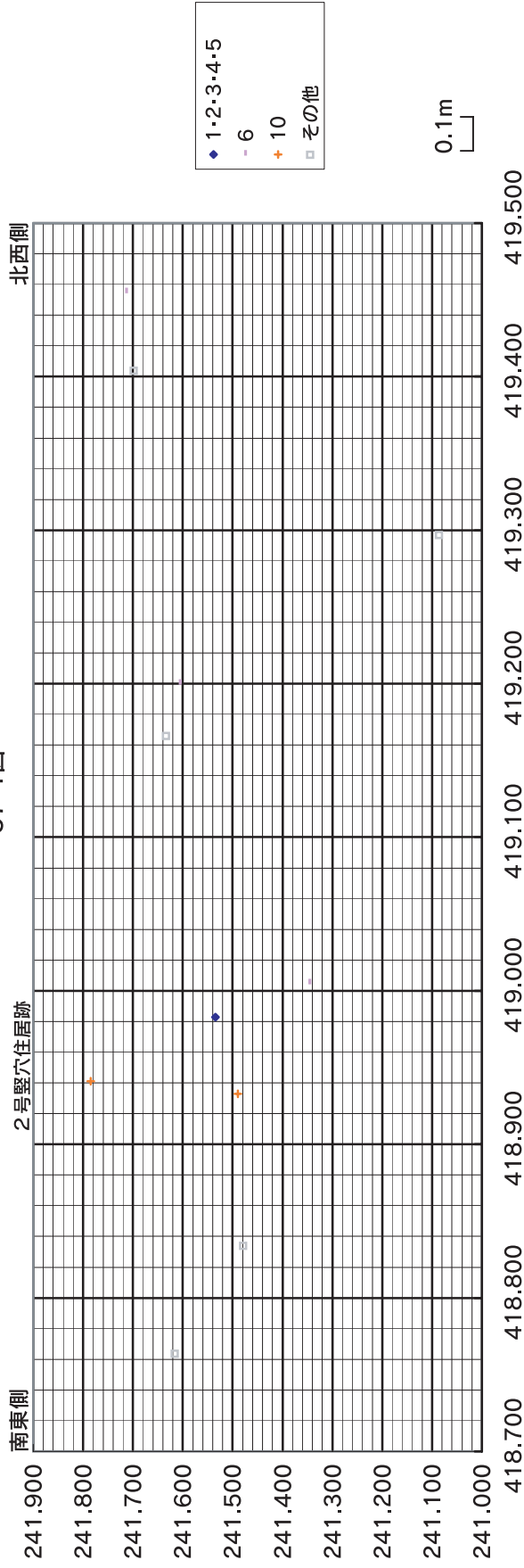


56-2図

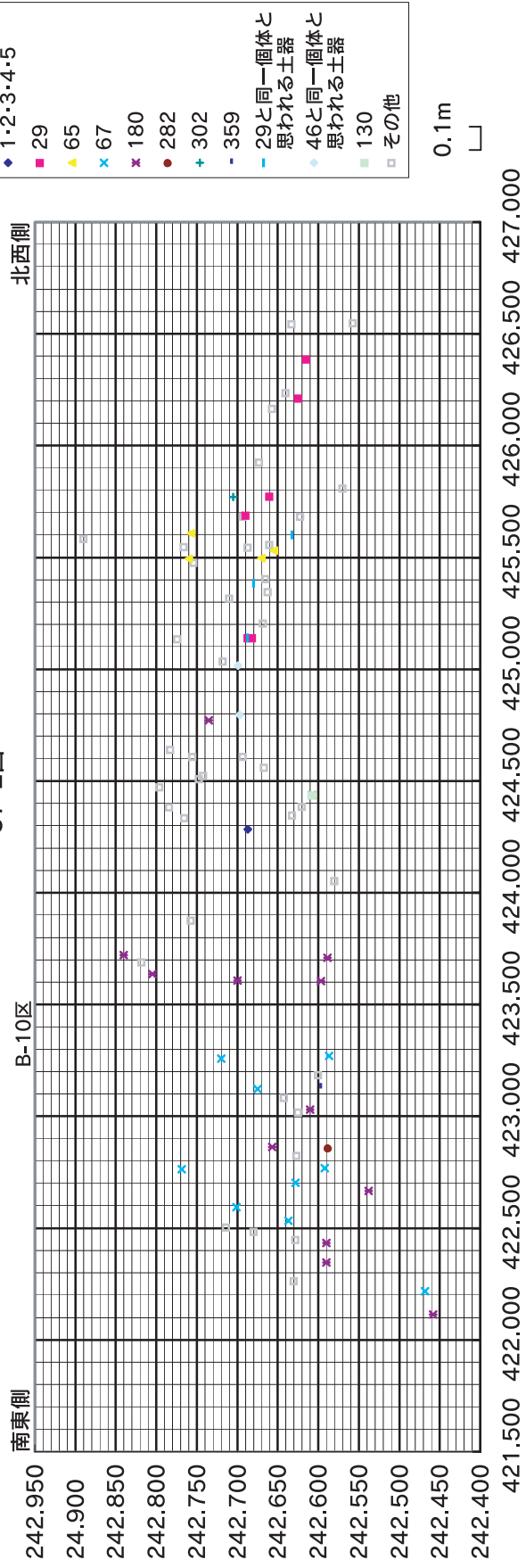


第56図 遺物分布立面図(3)

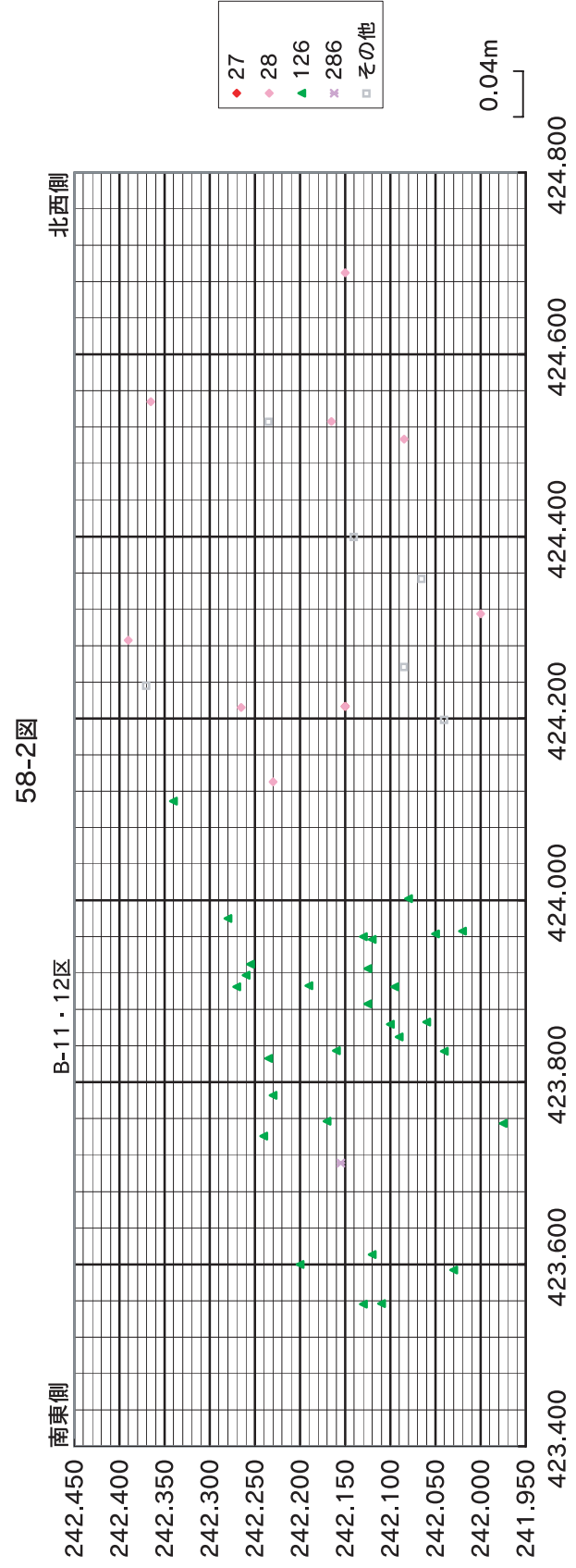
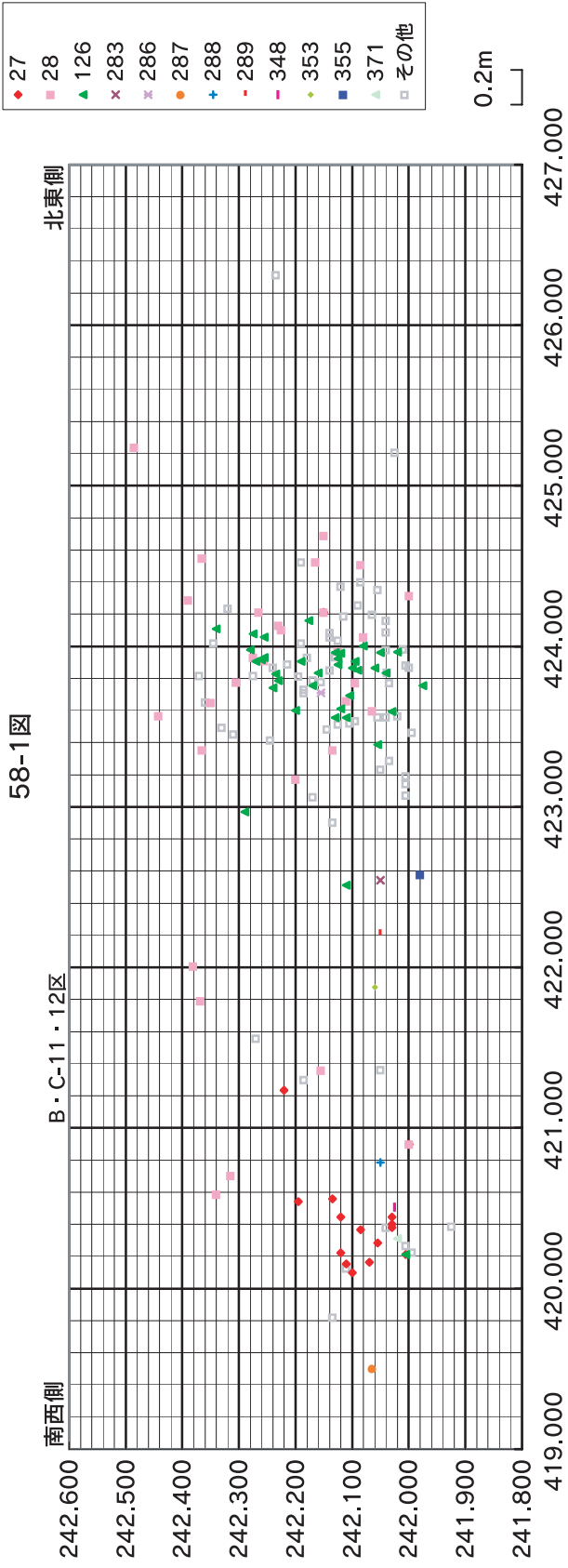
57-1図



57-2図

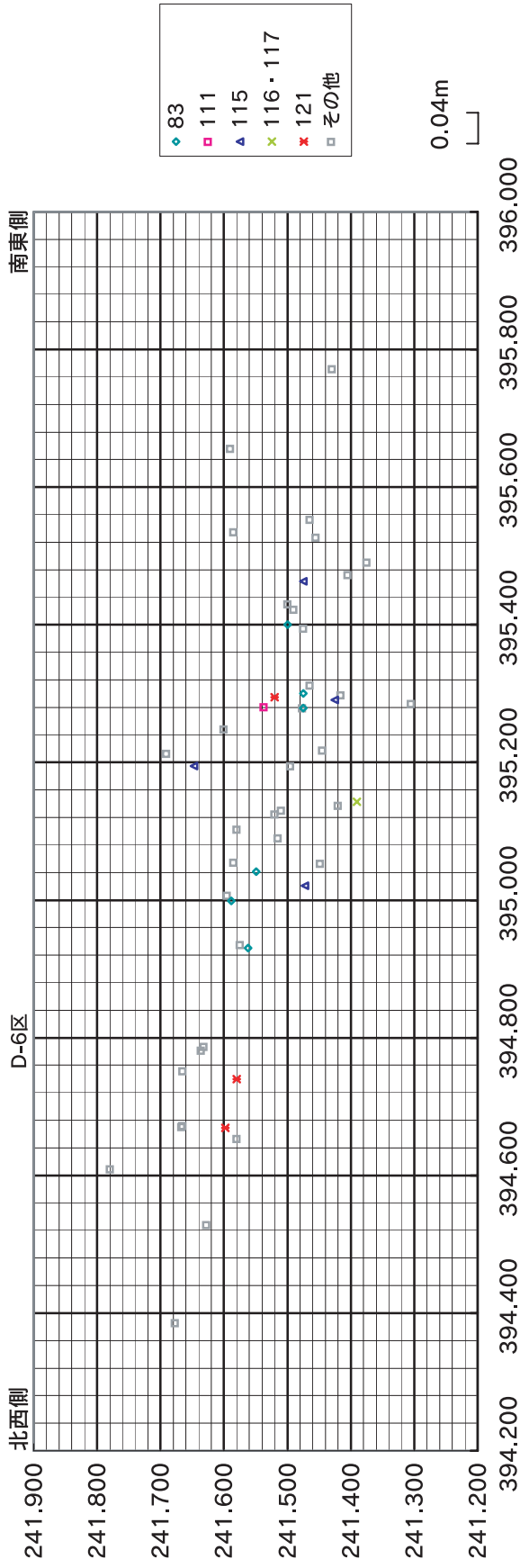


第57図 遺物分布立面図(4)

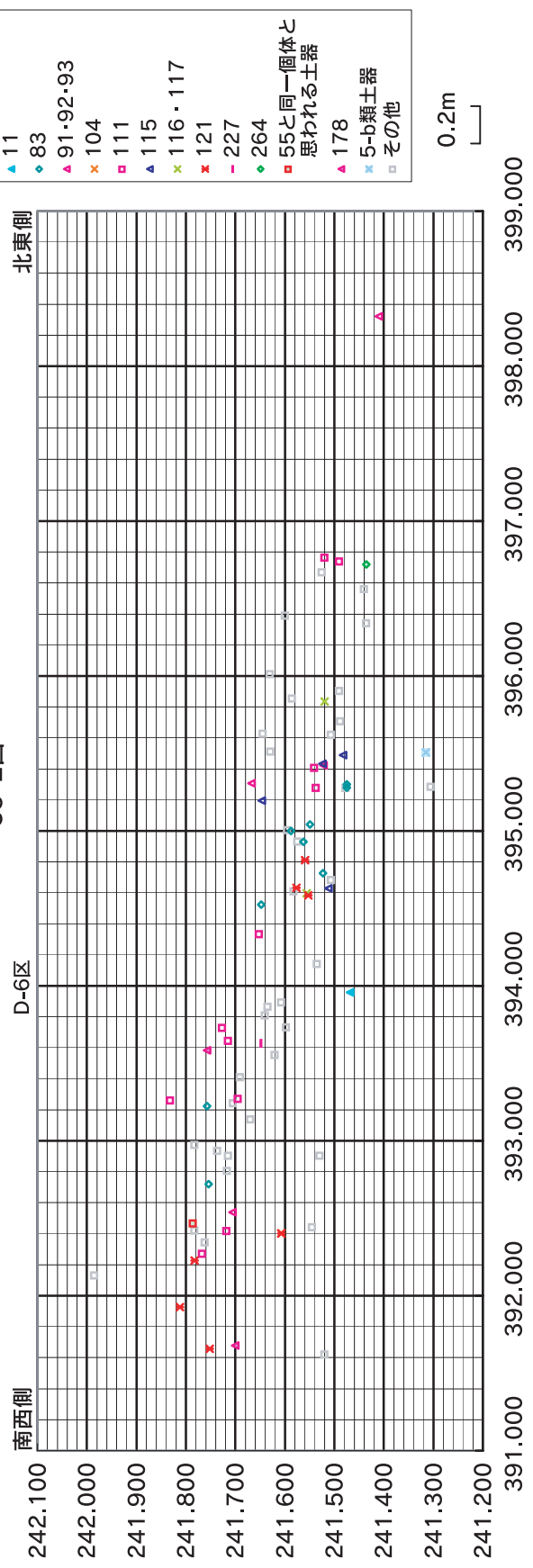


第58図 遺物分布立面図(5)

59-1図

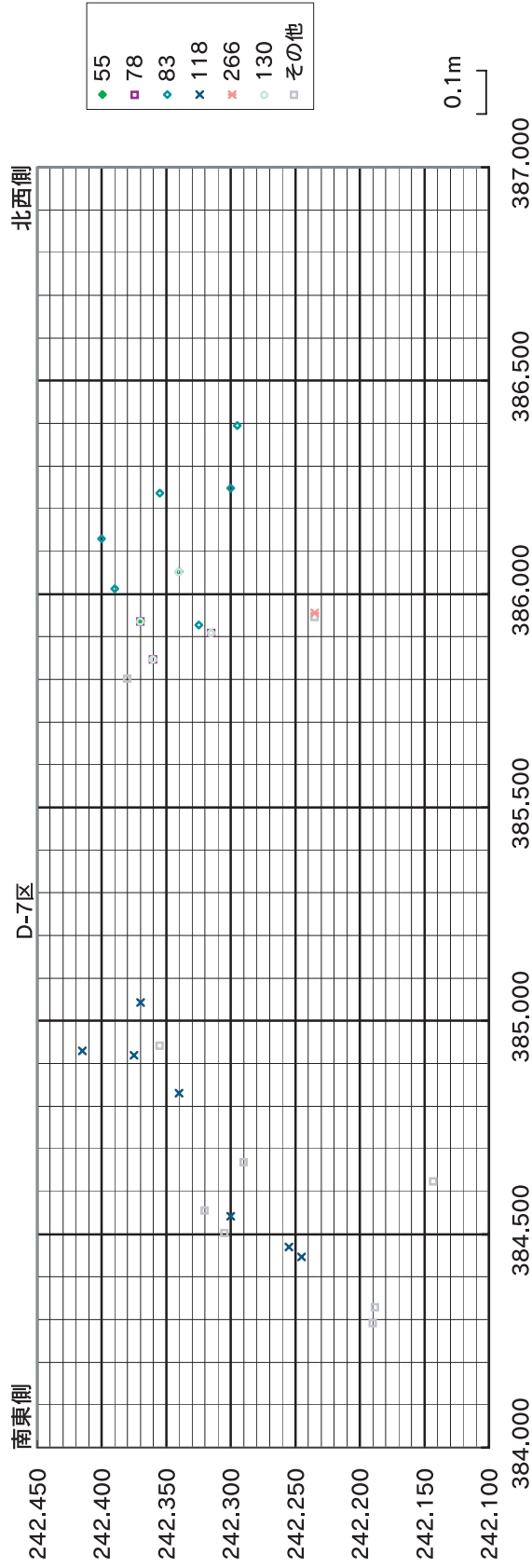


59-2図

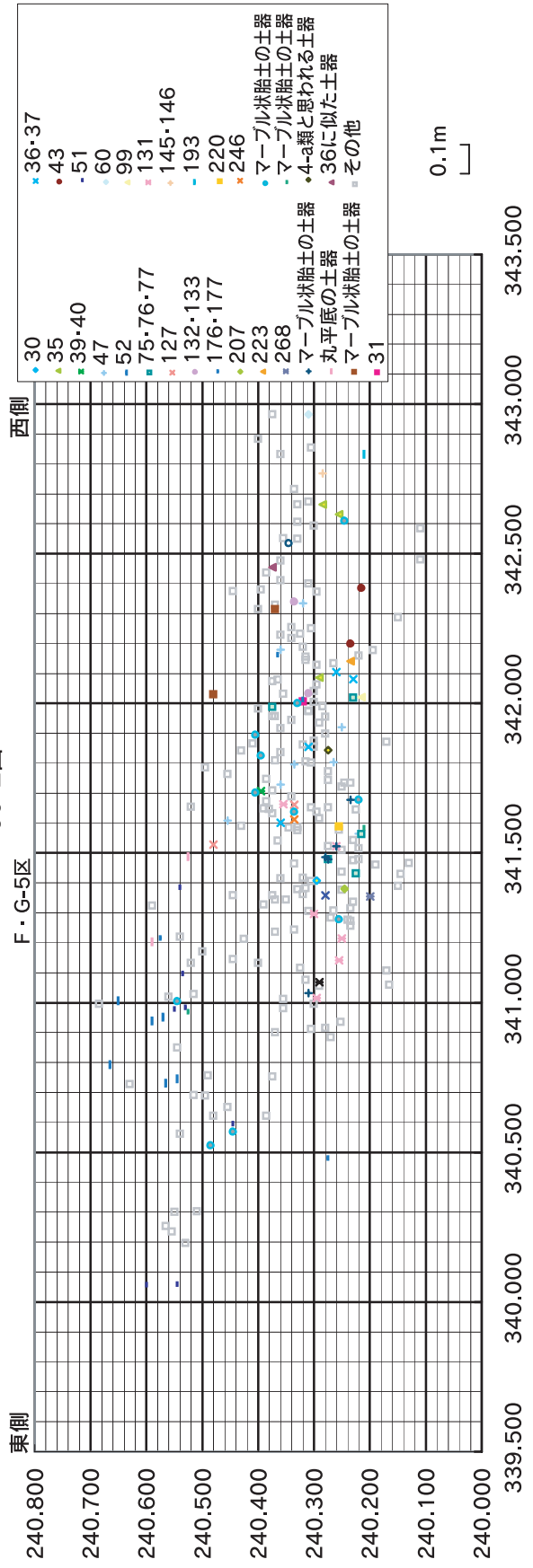


第59図 遺物分布立面図(6)

60-1図

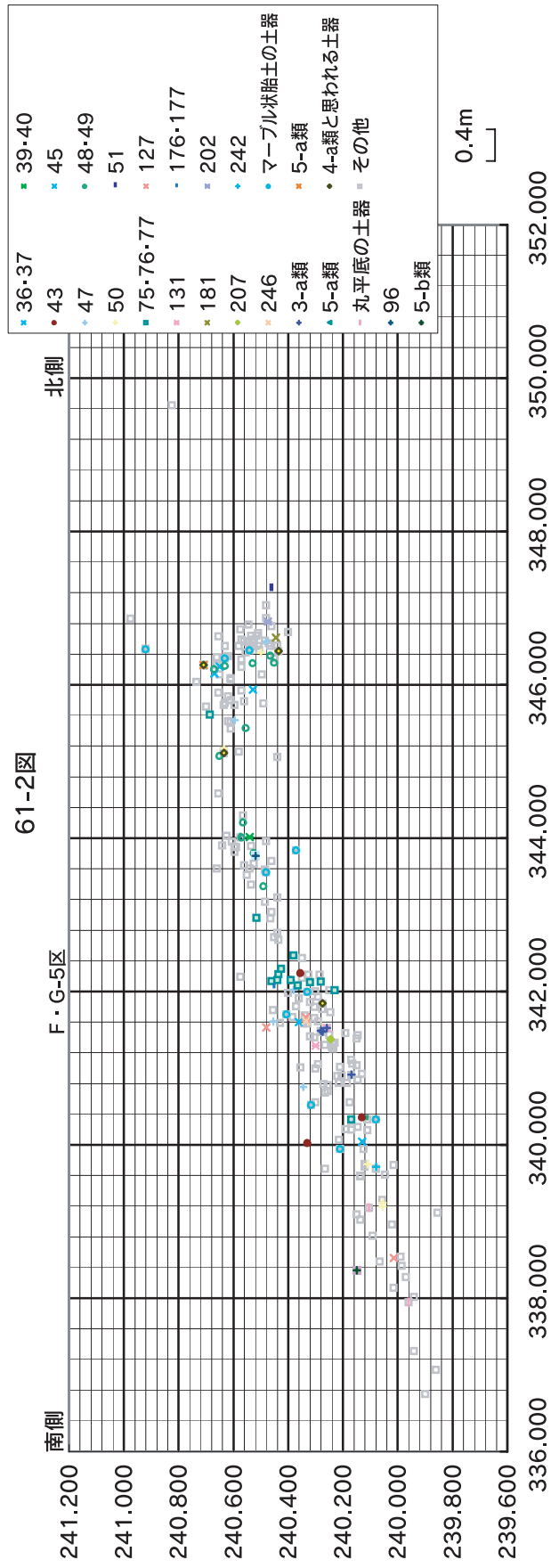
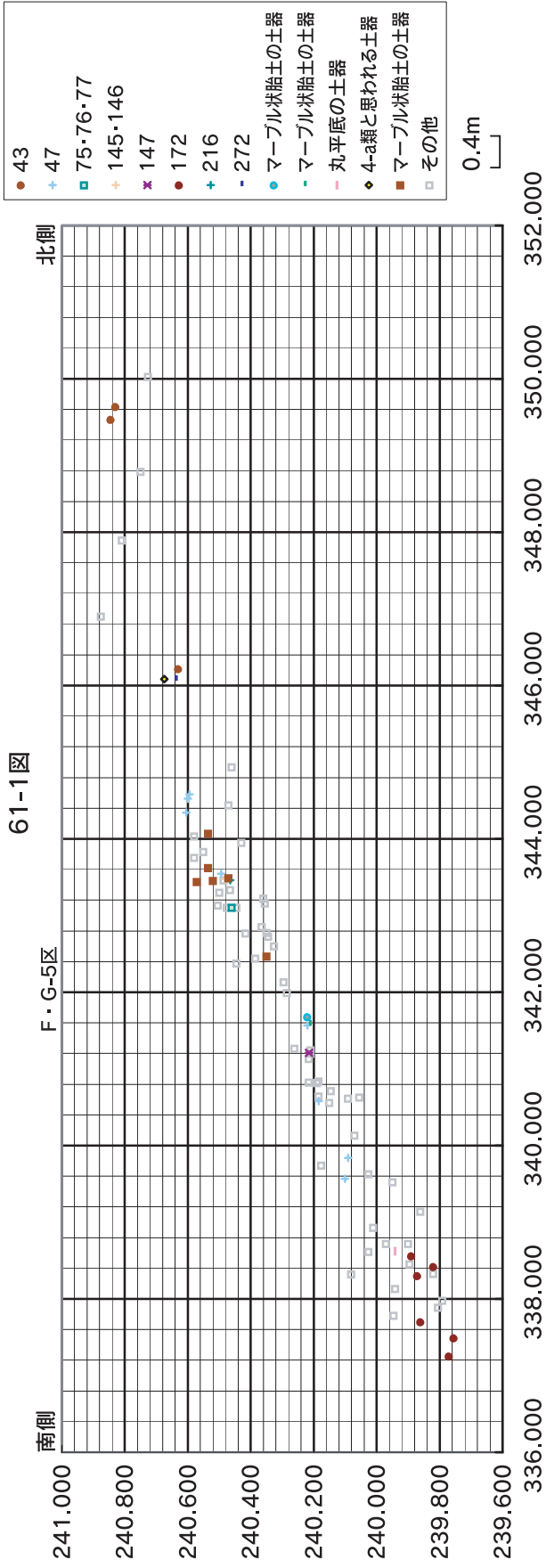


60-2図

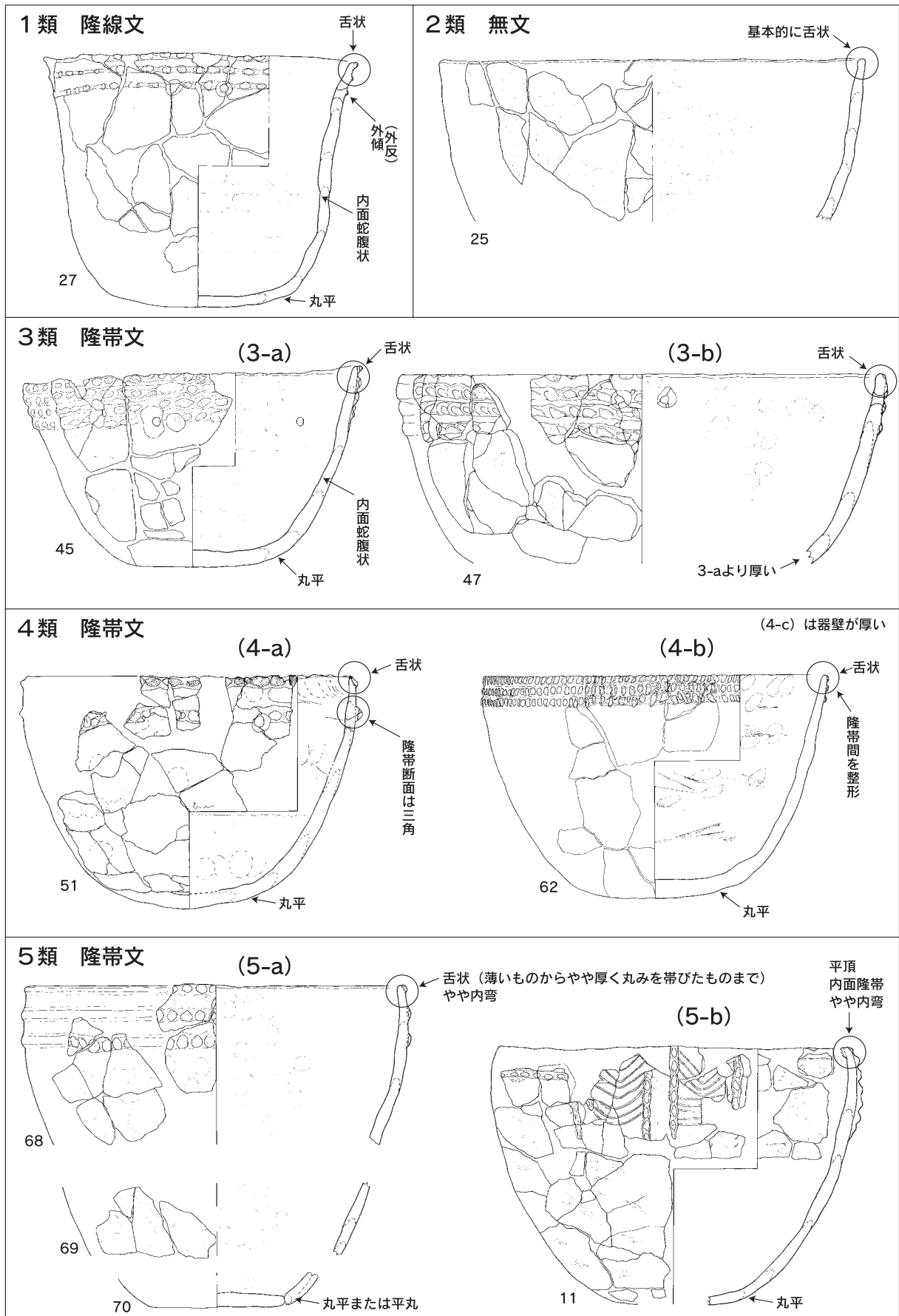


第60図 遺物分布立面図(7)

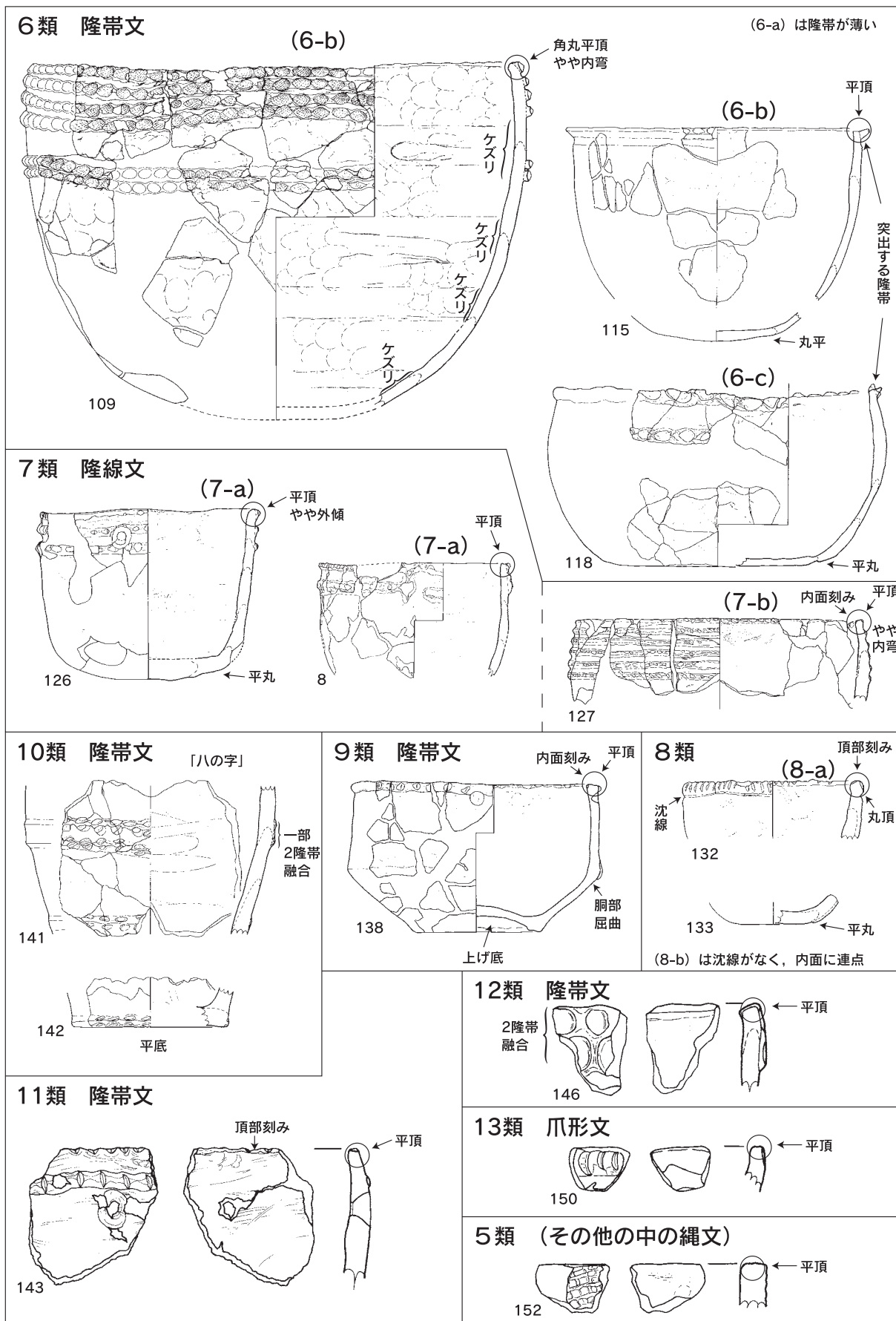




第61図 遺物分布立面図(8)



第62図 縄文時代草創期土器分類 (1)



第63図 縄文時代草創期土器分類 (2)

## (2) 遺物

遺物は土器片と石器等が出土した。出土した層はV層が大部分であるが、若干Ⅲ層出土のものも含まれる。これはV層出土のものと同接合したり、形状等から草創期のものと判断された。取り上げた遺物量はパンケースに詰め込んで200箱余りである。

### ① 土器

出土した土器片は、小粒で計上できないものを除き総数約4000点である。接合作業の結果3303点となり、完形品9点、底部のみを欠く復元品6点を、破片を含め180点を図化した。全体の出土状況は16・36～61図に示したが、A地区とB-1地区の集積が著しい。

製作方法はいずれも輪積みで、接合方法や施文等に技術の変化が見て取れる。

分類は1～15類まで行なった。隆線文土器・無文土器・隆帯文土器・爪形文土器に大別される。無文の胴部と底部については一括して提示した。底部は尖底の可能性のあるものから丸底・丸平底・平丸底・平底・上げ底まであり、変遷をたどることができる。

## 分類

器壁の厚みや断面形状、隆線・隆帯の位置と条数、器形、胎土を中心に、出土層位・共伴関係も考慮して1～15類まで分類した。また、同類の土器でも器壁の厚みなど特定の変化があるため、状況に応じa～dを付して下位区分とした。

1類は、口唇部が舌状を呈する口縁部外側に、細い隆線を3条施す隆線文土器である。施文は、指頭圧痕、器形は深鉢で口縁部が外反し、下半がややすぼまって丸平底となる。製作方法は、輪積みで、上段の粘土を下段の上部を包むように乗せる「ソケット状」になっている。下位区分として、a類は内面が蛇腹状になるなど厚みの変化が激しいもの、b類はa類より厚みを増して変化の少ないもの、c類は口唇部に刻みがあり、内面に隆線のあるものとした。

2類は、無文土器である。3個体が確認されているが断面形状や器形・胎土から以下の3～12類に属するものと考えられる。また、口縁端部の外側に、隆帯を施さず直接施文するものも含めた。基本的に口唇部は舌状を呈する。

3類は、口唇部が舌状を呈する口縁部の外側に、薄い隆帯を施す隆帯文土器である。施文は、指頭圧痕、貝殻の殻頂圧痕、棒状工具の圧痕、ヘラ状工具の圧痕

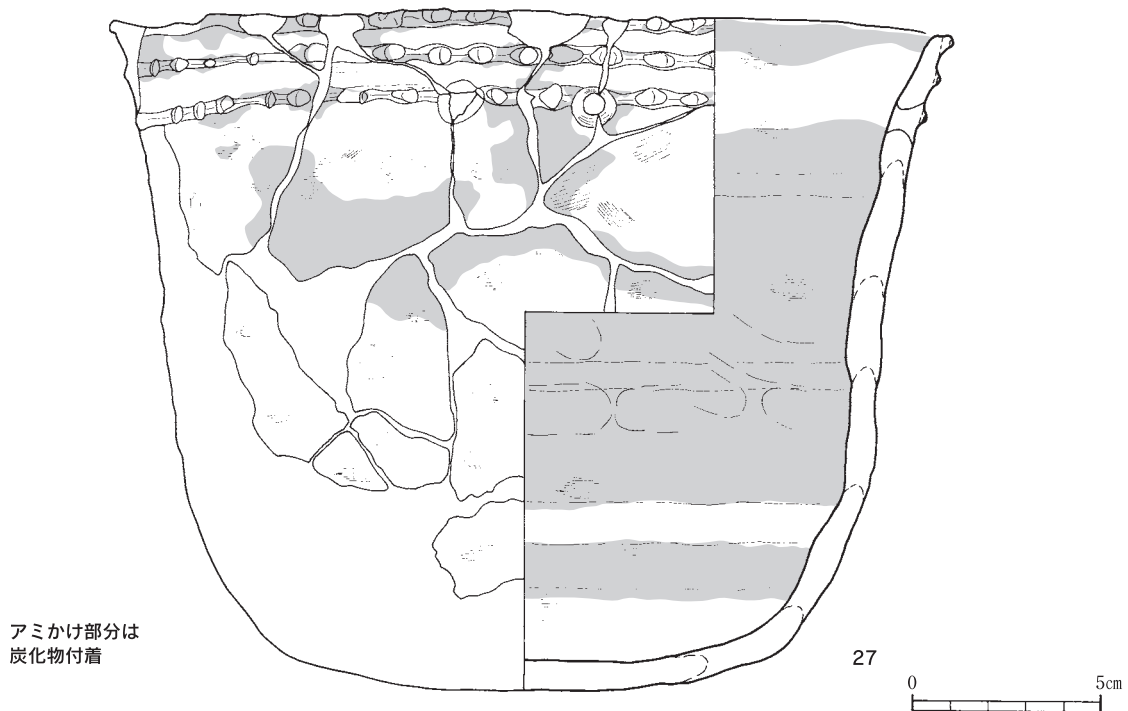
などがある。主な器形は、鉢形である。口縁部が外反し、下にいくにつれて徐々にすぼまり丸平底となる。製作方法は、1類と同様で、厚みの変化も激しい。隆帯の数は、1から4以上あるものもある。また小型の深鉢土器が2例あり、1つは丸底、もう1つは中央部を欠いているが、おそらく尖底であろうと思われる。下位区分として、a類は内面が蛇腹状になるなど厚みの変化が激しいもの、b類はa類より厚みを増して変化の少ないもので、口唇部に刻みがあるものを含む。c類は口唇部が舌状だが、隆帯断面が三角形であることなど、3類と4類の中間的な特徴を持つものである。

4類は、口縁端部の外側に、断面が三角形の隆帯を施す隆帯文土器である。口唇部は頂部のナデによる平坦面が見られるようになる。施文はナデのみ、指頭圧痕、貝殻の殻頂圧痕、棒状工具の圧痕とがある。器形は皿もしくは浅鉢、鉢形と深鉢がある。鉢形は、サラダボール状で、口縁部が垂直またはやや外傾し、下にいくにつれて徐々にすぼまり丸平底となる。深鉢は、口縁部が垂直もしくはやや内湾し、底部に向かってすぼまっていく擬似円筒形がある。a類は隆帯断面が三角形で、皿以外は口縁部が垂直に近くなるもの、b類は口唇部や隆帯間が意識的に整形されるもの、c類は極めて厚い器壁をもつものである。

5類は、口縁部の外側に、3類より厚みを増した隆帯を施す隆帯文土器である。口唇部は薄い舌状からやや厚く丸みを帯びたものまでである。施文は、指頭圧痕、指腹圧痕、貝殻の殻頂圧痕、ヘラ状工具もしくは小円礫の圧痕とがある。器形は、鉢形と深鉢がある。鉢形はサラダボール状で、口縁部がほぼ垂直なものとやや内湾するものがある。下にいくにつれて徐々にすぼまり丸平底となる。深鉢は、口縁部が垂直もしくはやや内湾し、底部に向かってすぼまっていく擬似円筒形となる。a類は口縁部がやや内湾し、b類はa類より隆帯の厚みが増し、口唇部が平らに整形されるものが多くなる。

6類は、口縁部が直立または内湾し、口唇部は基本的に角丸平頂で平丸底である。a類は薄い器壁と隆帯を持つもの、b類はやや厚みを増し、断面が三角形の隆帯を施すものである。また、口唇部内側にも刻み目が入るものがある。

7類は、口縁部がやや外傾または内湾し、口唇部は厚い舌状で平丸底である。口縁～胴部に隆線を1～6条貼り付けている。a類は隆線間隔がやや広いが、b類はより隆線が細く狭くなり、口唇部内側にも刻み目が入るものがある。



第64図 縄文時代草創期の土器（1） 1-a類

8類は、口縁部がやや外傾または直立し、口唇部は厚い舌状で丸平底である。器の大きさの割に器壁が厚く、仕上がりがやや手捏ね風である。隆帯は1条である。口唇部内側にも刻み目が入る。

9類は、胴部に屈曲部を持つコマ形の土器である。口縁部がやや内傾し口唇部は平頂である。底部は平または上げ底で、器壁が斜めに立ち上がる。口縁部・胴屈曲部・底部に隆帯を貼り付けている。口唇部内側にも刻み目が入る。

10類は、隆帯に「ハの字」状の押圧施文を施すものである。口縁部は不明だが、底部は平底ではほぼ垂直に立ち上がる。傾きの違う胴部があるため9類と同様の器形である可能性がある。

11類は、口唇部に隆帯を貼り付けず、直接刻み目を施すものである。小片のため詳細は不明であるが、隆帯の施文や胎土の状況から他の類に含まれる可能性がある。

12類は、指腹による押圧を2段交互に施すものである。2条の隆帯が融合した状態をとらえることもできよう。口唇部は頂部のナデによる平坦面が顕著で断面は四角くなる。

13類は、口縁端部の外側に、隆帯を施さずに直接爪で施文する爪形文土器である。a類は口唇部が舌状

のもので、b類は口唇部は頂部のナデによる平坦面が顕著で断面は四角くなるものである。小破片のため器形は不明である。

14類は、類を確定できない口縁部等を一括したものである。小片のため詳細は不明であるが、重要な特徴を持つものが多く、本遺跡唯一の縄文土器もある。

15類は、類を確定できない胴部と底部を一括したものである。器形は鉢形と深鉢がある。鉢形は、サラダボール状で、口縁部が垂直またはやや外反し、下にいくにつれて徐々にすぼまり丸平底となる。深鉢は、口縁部が垂直もしくはやや内湾し、底部に向かってすぼまっていくコマ形となるものと擬似円筒形がある。底部は平底である。

#### 1類土器（隆線文土器）27～29

27は1-a類で、口縁部に隆線が3条がめぐり、指頭による施文である。口縁部はやや楕円形で外反し、頸部外面がゆるくしまっている。丸平底である。胎土に金雲母を多量に含む。粘土紐の積み上げが比較的明瞭に観察できるものである。

28は1-b類で、口縁部を隆線が3条巡り、その上に指頭による施文がある。頸部外面はゆるくしまっているが、内面に輪積みの稜がみられ、丸平底である。

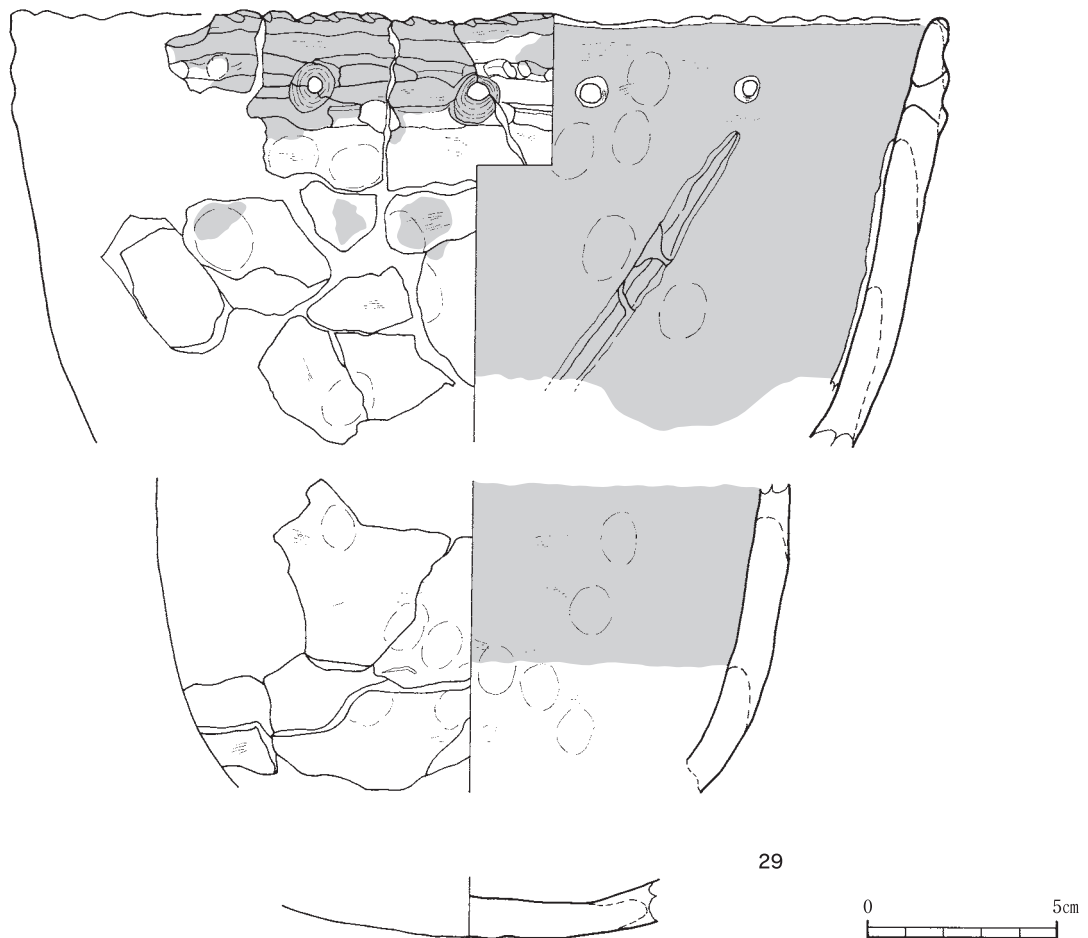
29は1-c類で、口縁部に隆線が3条が巡り、指頭による施文であるが、口唇部に刻み目が施され、47との関連が考えられる。また、内面に斜めの隆線がみら





第65図 縄文時代草創期の土器（2） 1-b類





第66図 縄文時代草創期の土器（3） 1-c類

れる。

### 2類土器（無文土器）30～33

器面調整は基本的に内外面ともにナデである。30・31は無文で、31は口縁部が外傾する。32は口縁部にヘラ状の工具で三角形の押圧痕を施すもので、3類土器42に類似した特徴をもつ。33は鋭い線刻を施すものである。

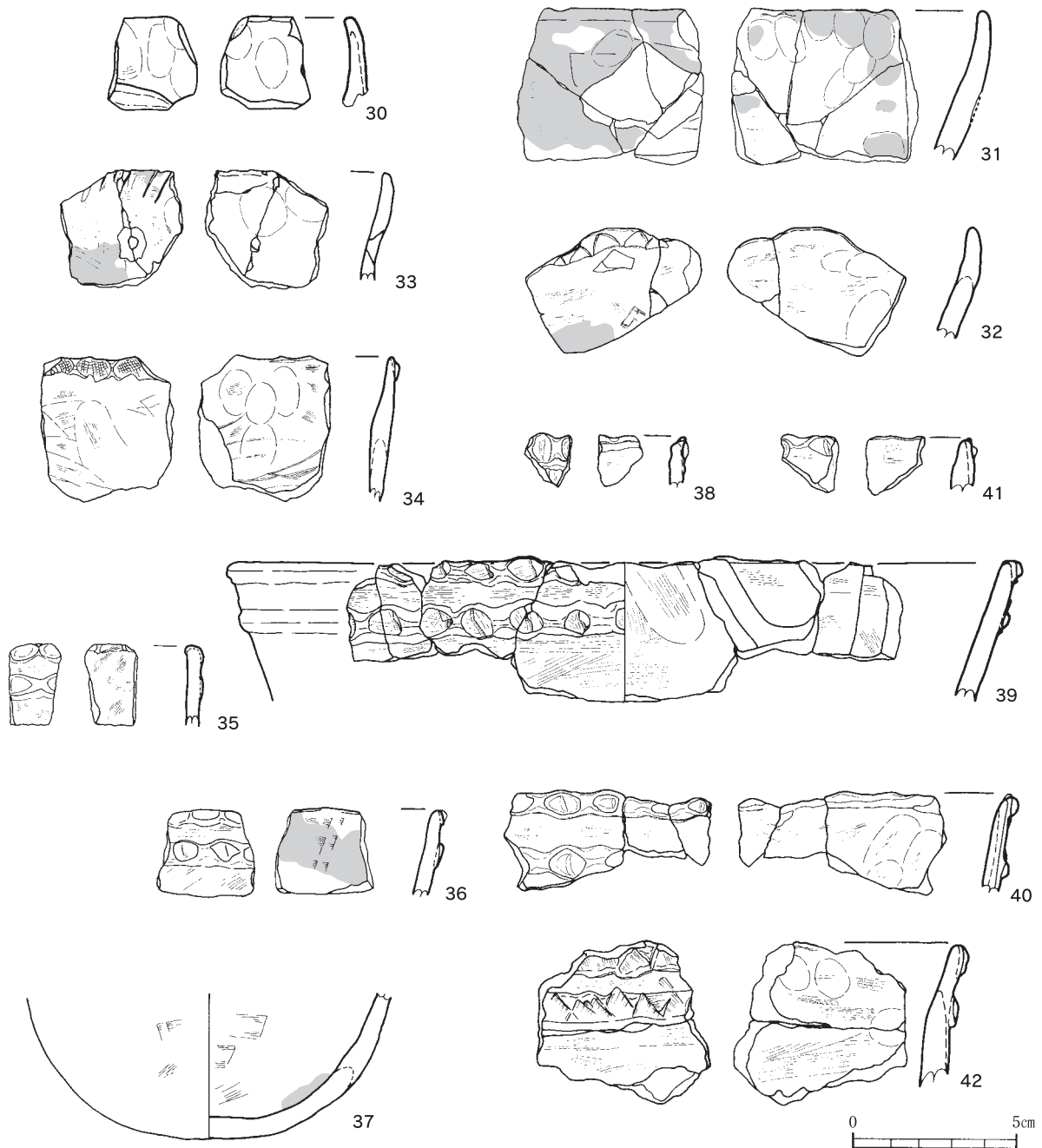
### 3類土器（隆帯文土器）34～50

34～45は3-a類で、薄い器壁をもち、口縁部を厚みの薄い隆帯がめぐる。34は貝殻、35・36・39・40は指頭にて施文している。35は隆帯2条の口縁部である。167・168と同一個体の可能性があり、その場合は丸底の鉢形土器となる。36も隆帯2条の口縁部で、やや外傾する。37は底部で丸底を呈する。胎土や器壁の厚さから、36と同一個体と考えられる。38・39・40は同一個体と考えられ、カマボコ形断面の隆帯2条を持つ。施文の間隔がやや広い。42はヘラ状の工具で三角形の押圧痕を施すもので、32との関連が考えられる。43・44は指頭にて施文している。

43は口縁部がかなり外傾し、底部を欠くが全体形は一見ラーメンどんぶりを思わせる。隆帯3条の土器で、隆帯のみ赤く発色する粘土で、本体の胎土と変えてある。44は小型の深鉢で、隆帯4条をもつ。輪積みに合わせ、ほぼ均等に隆帯間を広くとっている。底部中央を欠くが、残存部分の形状から尖底ではないかと考えられる。45～47は水分の多い粘土を使用したのか、隆帯がぶよぶよした印象を受ける。45は完形の鉢で、隆帯4条をもつ。枝を折ったような棒状工具の先端で施文している。この施文は鬼ヶ野遺跡（西之表市）や前三舟台遺跡（千葉県富津市）にも類例が見られる。

46～49は3-b類で、器壁がやや厚くなる。46は隆帯3条の中型鉢で、上面形が楕円の可能性がある。指頭にて施文している。47は鉢である。口唇部に刻み目が施され、その下に隆帯が3条がめぐる。指頭による施文であるが、爪の向きが斜めである。口縁部がゆるく外反するもので、器壁が厚く、中華鍋のような器形である。29との関連が考えられる。48は太い隆帯が3条が巡る。指頭による施文である。49は丸平の底部で、48と同一個体と考えられる。

50は3-c類で、3類と4類の中間的な特徴をもつ。



第67図 縄文時代草創期の土器（4） 2-a・2-b・2-c・3-a類

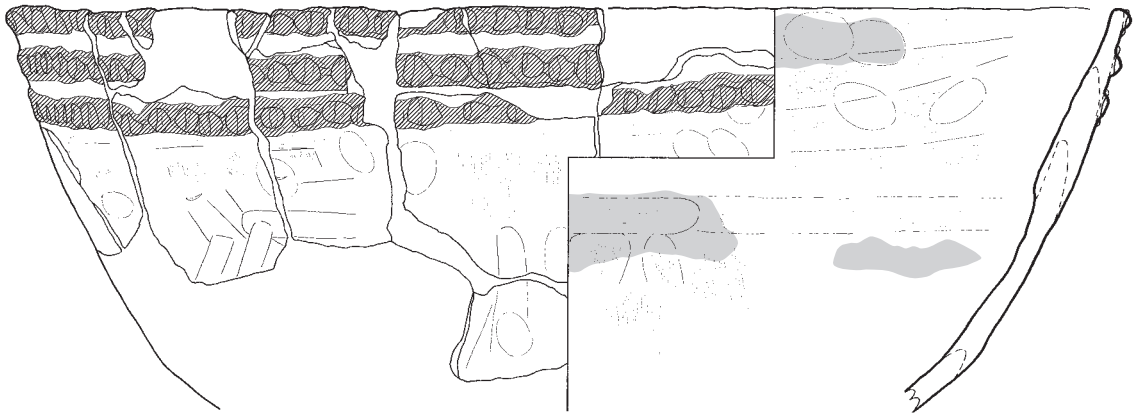
口唇部は尖っているが垂直に近くなり、全体が楕形となる。内面は蛇腹状が残るものの、指による削りが認められる。破片の状況から楕円形の鉢と思われる。隆帯は3条で指頭による施文である

**4類土器（隆帯文土器）51～67**

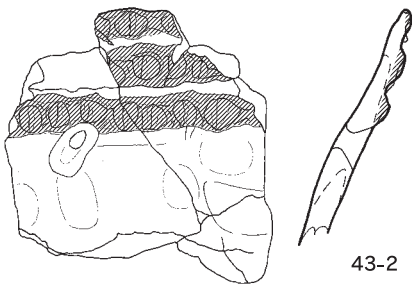
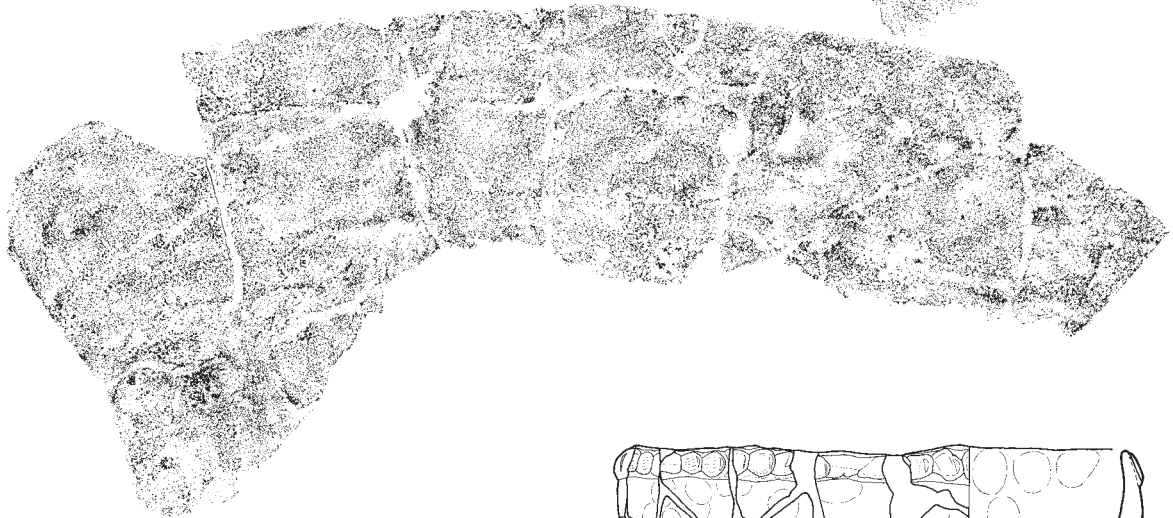
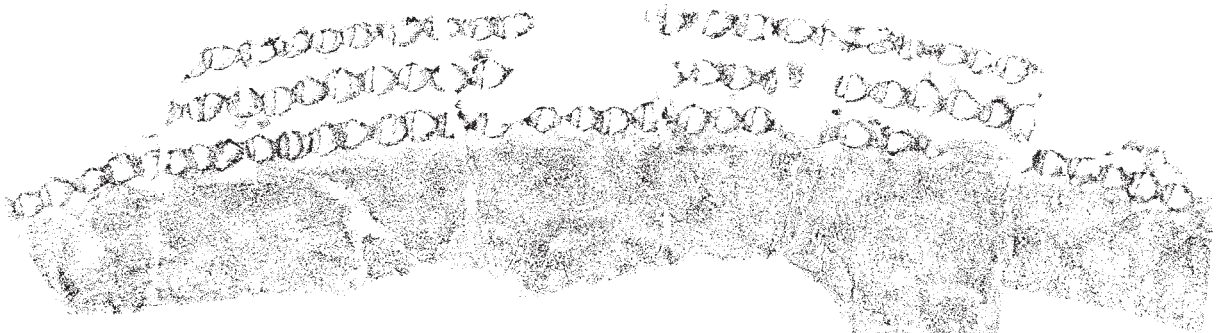
51～57は4-a類で、隆帯の断面が三角になり、口縁付近は垂直に近くなる。51・52はサラダボール状の鉢で、やや間隔をあけ2条の隆帯が巡る。両者はよく似ているが、51は貝殻と指頭、52は貝殻だが、2

段目の一部のみ指頭で施文される。53は51とは逆に指頭と貝殻で施文される。小破片に分かれ保存が良くないが、皿形土器のようである。54・55は深鉢である。指頭押圧の隆帯2条を持つが、55は垂下する隆帯が加わる。56は小破片に分かれ保存が良くないが、皿である。隆帯2条を貼り付け、ナテ整形のみで施文されない。57は小破片のため器形は不明であるが、胎土や器壁の薄さから、56に近い個体と考えられる。隆帯1条に楊枝状工具の押圧が施される。

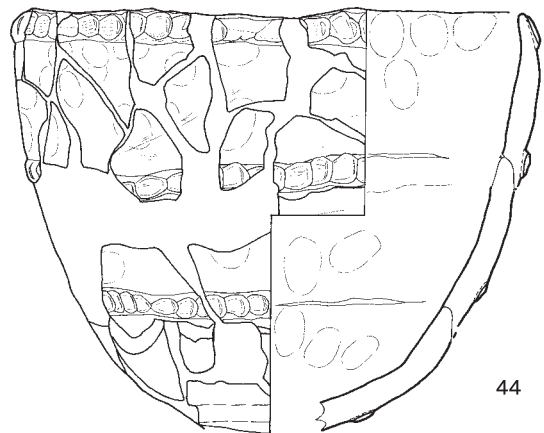
58～65は4-b類で、口唇部や隆帯間が意識的に整



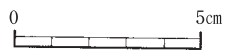
43-1



43-2

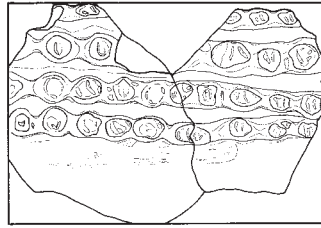


44



斜線部分は赤色の粘土

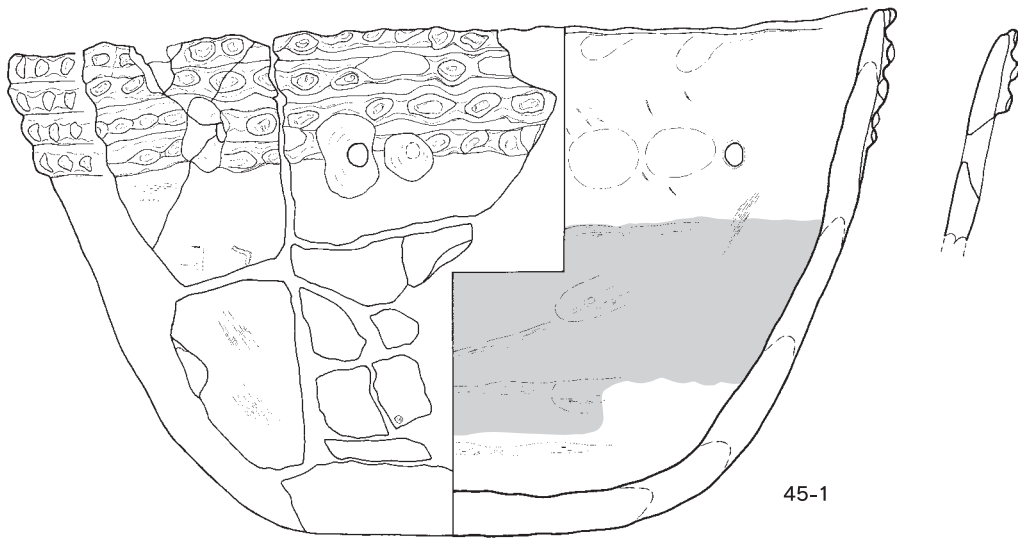
第68図 縄文時代草創期の土器（5） 3-a類



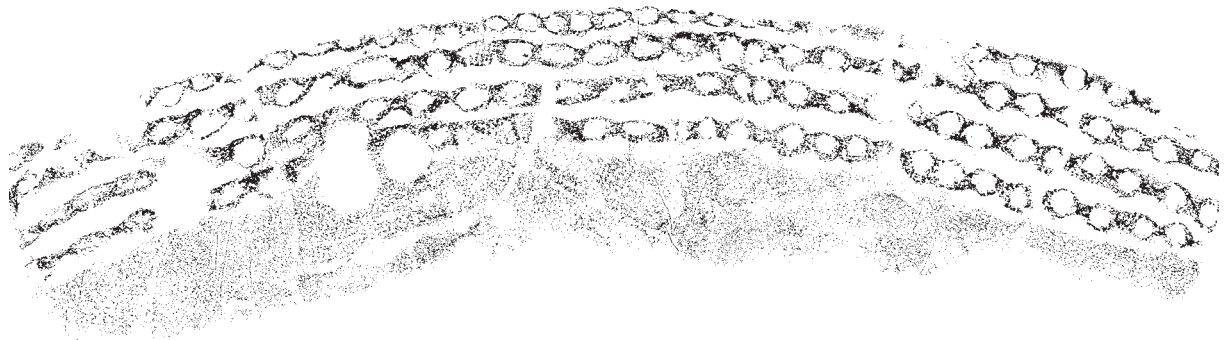
45-2



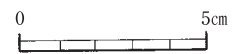
45-3



45-1

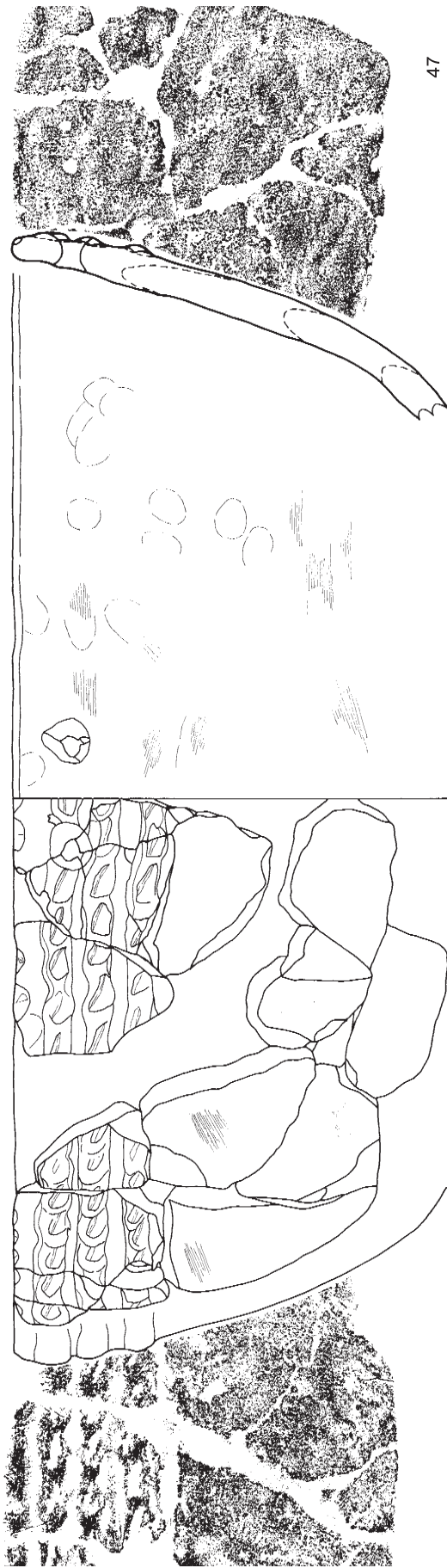
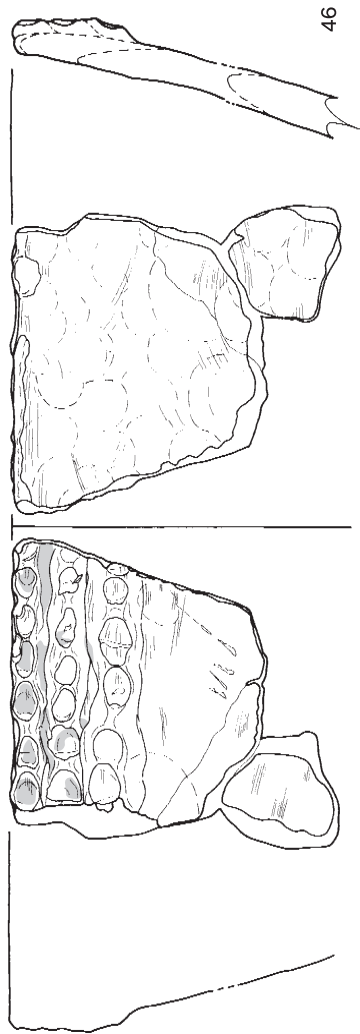


45



第69図 縄文時代草創期の土器（6） 3-a類



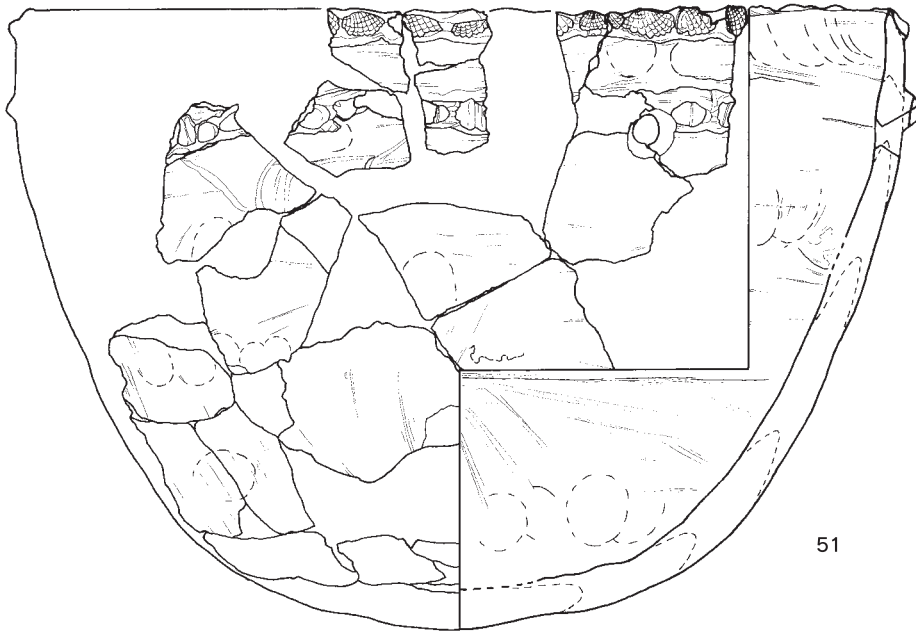


第70図 縄文時代草創期の土器(7) 3-b類

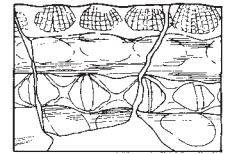
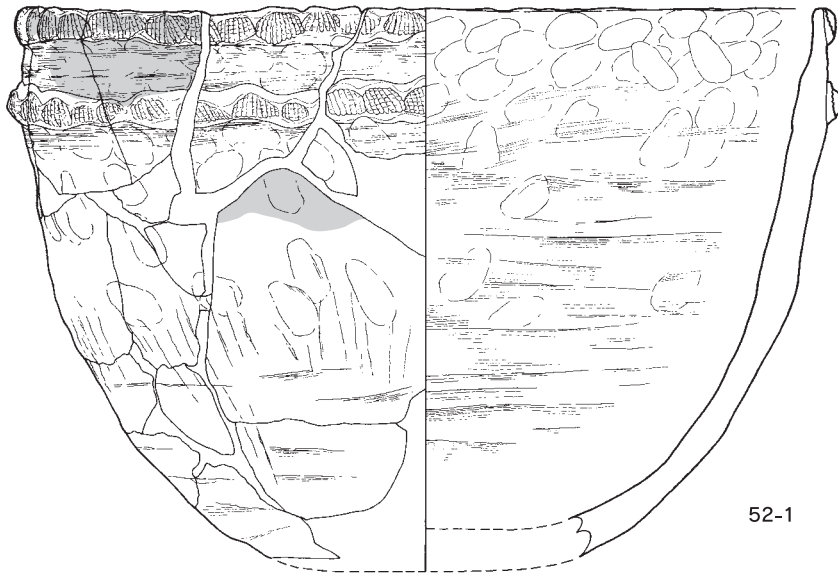


第71図 縄文時代草創期の土器（8） 3-b・3-c類



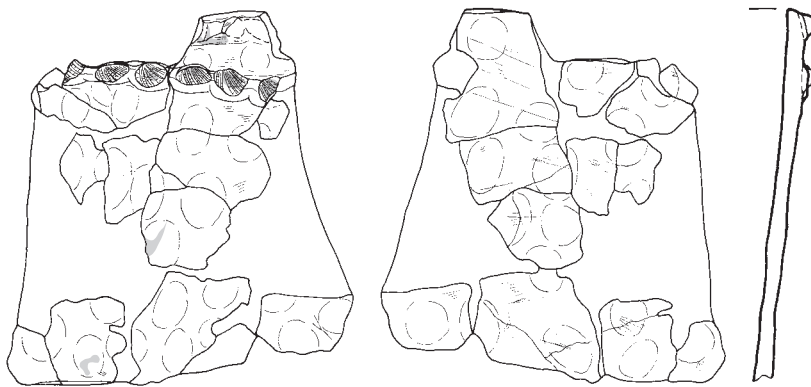


51



52-2

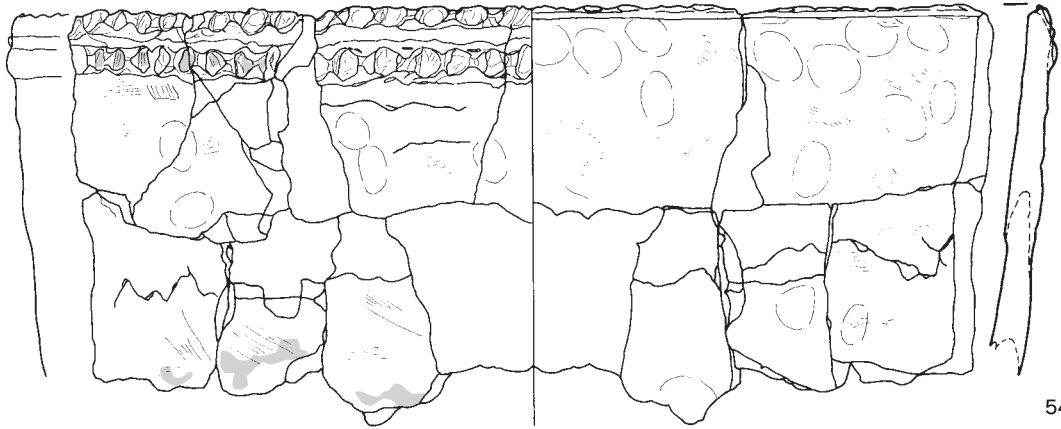
52-1



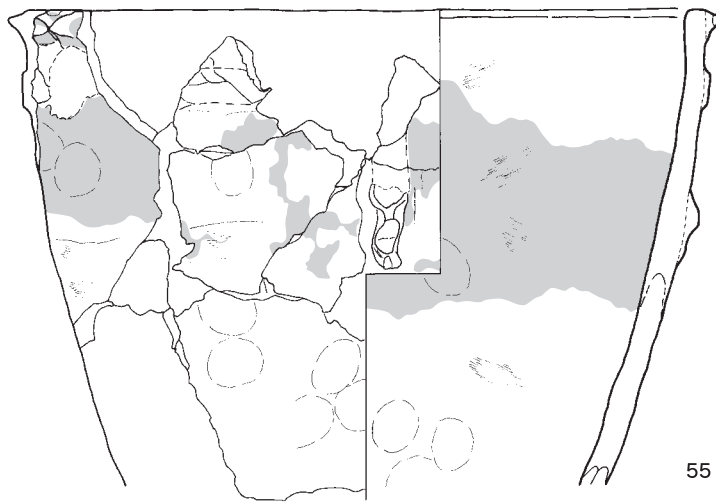
53



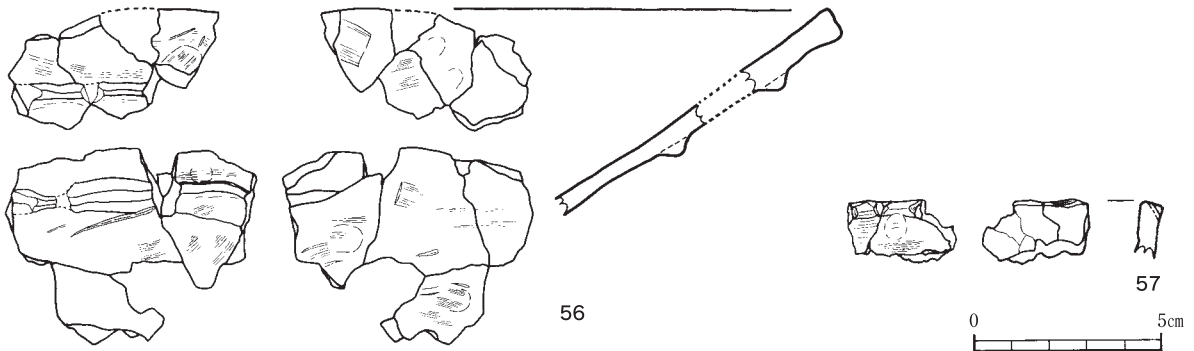
第72図 縄文時代草創期の土器（9） 4-a類



54



55



56

57

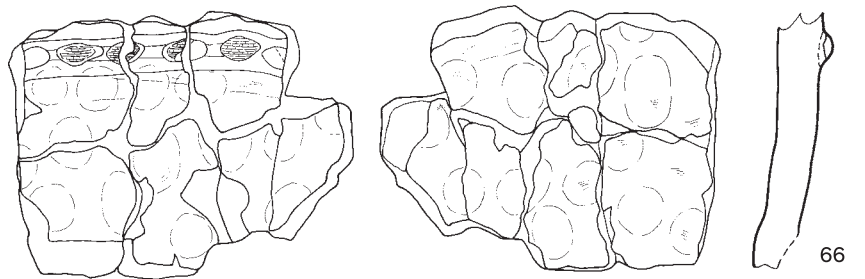
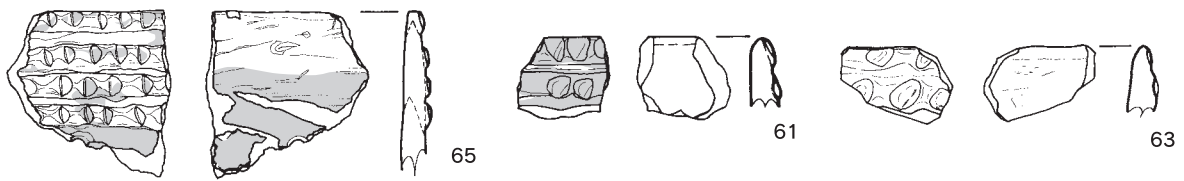
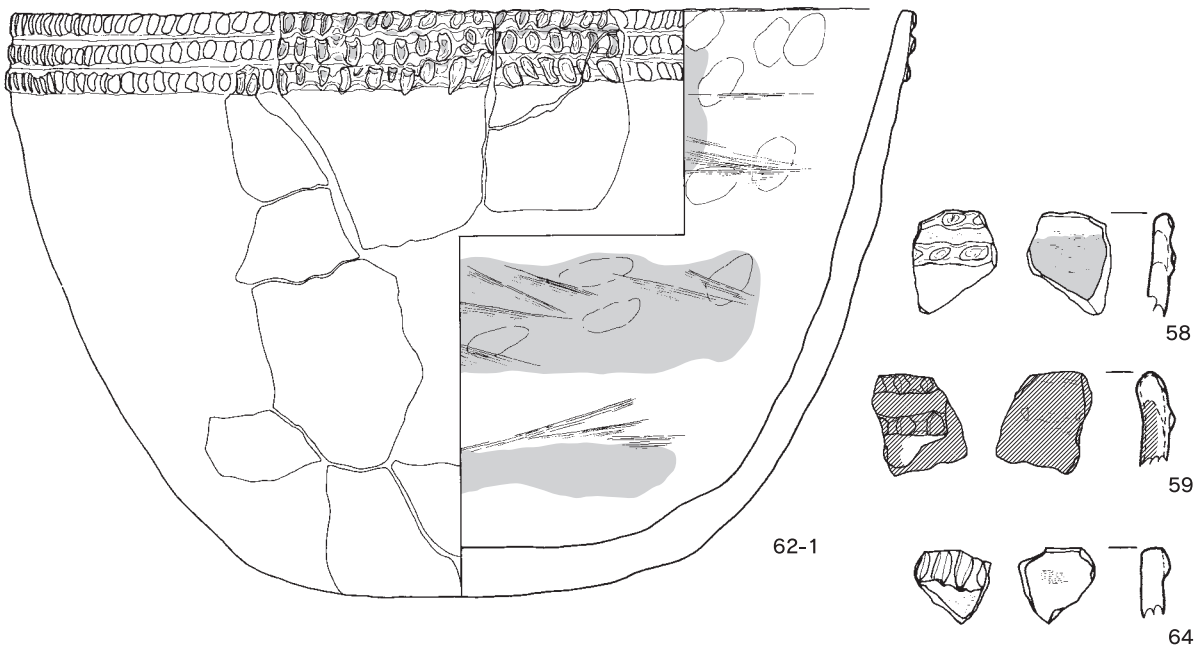
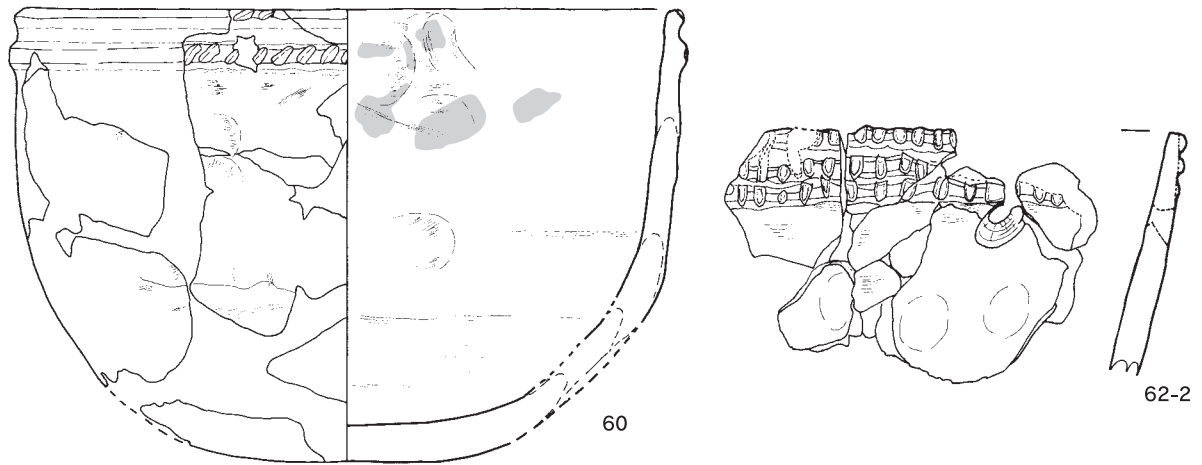
0 5cm

第73図 縄文時代草創期の土器 (10) 4-a類

形されるようになる。64は楊枝状工具の押圧隆帯が1条、58は2条施される。60は完形の鉢で、丸平底を呈する。61は2条で指頭押圧である。62は完形の鉢で、丸平底を呈する。隆帯3条で角棒状工具の押圧が施される。59・63は隆帯2条で指頭押圧である。65は隆帯4条で爪先押圧である。

66・67は4-c類で、極めて厚い器壁を持つ66は胴部である。隆帯は1条で、貝殻による施文である。保

存状態が悪く、全体形は明らかでない。67は大型の鉢である。口縁部外側に、間隔を開けずに隆帯を2条貼り付け、爪先にて右から左へ押圧施文している。輪積み接合部に工具による削り調整痕が認められる。また、口縁部胎土内に繊維痕があり、口縁部をぐるとほぼ一周している。補強のために入れられたのかもしれない。



斜線部分は赤色の粘土

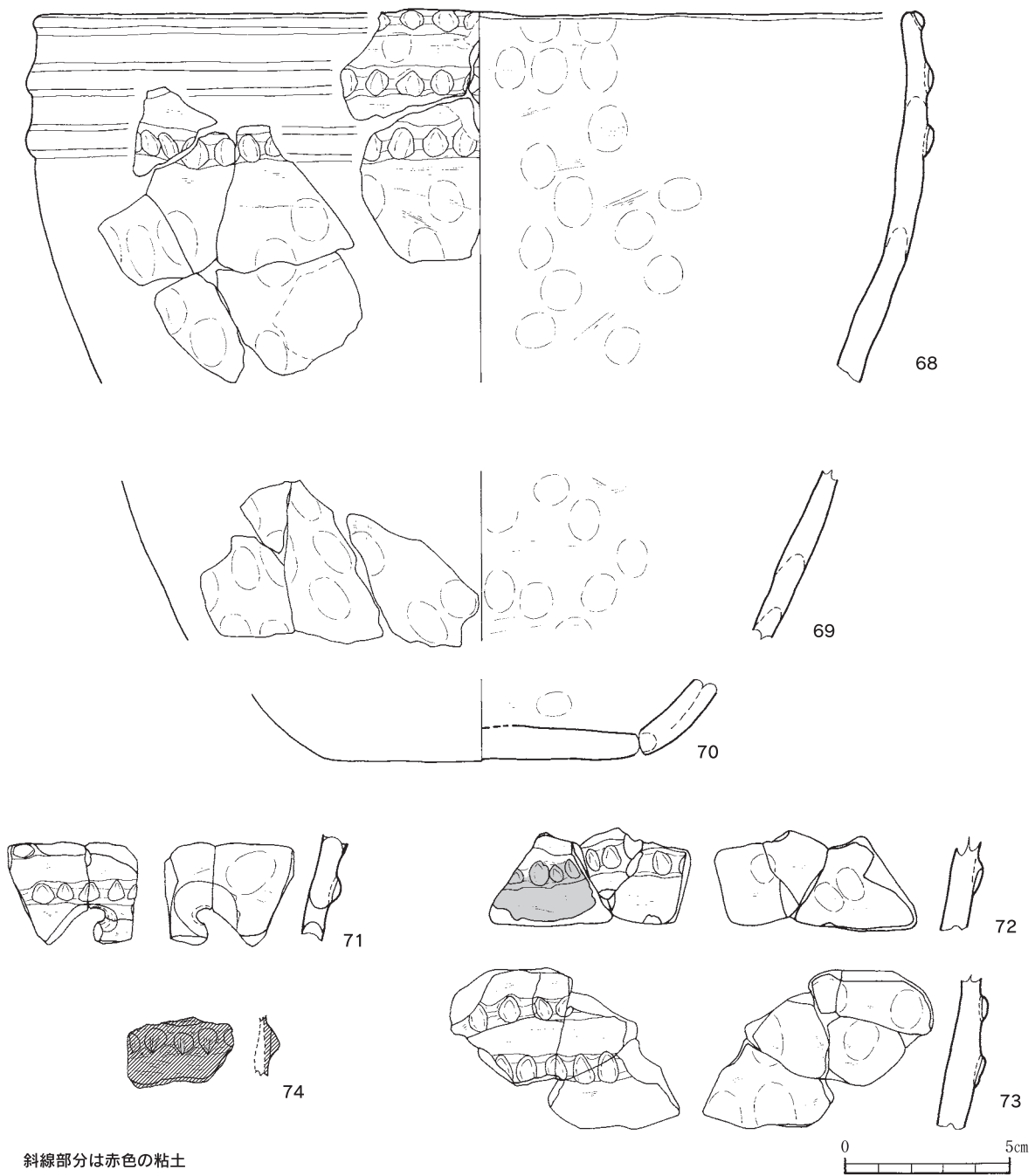
第74図 縄文時代草創期の土器 (11) 4-b・4-c類



0 5cm

67

第75図 縄文時代草創期の土器 (12) 4-c類



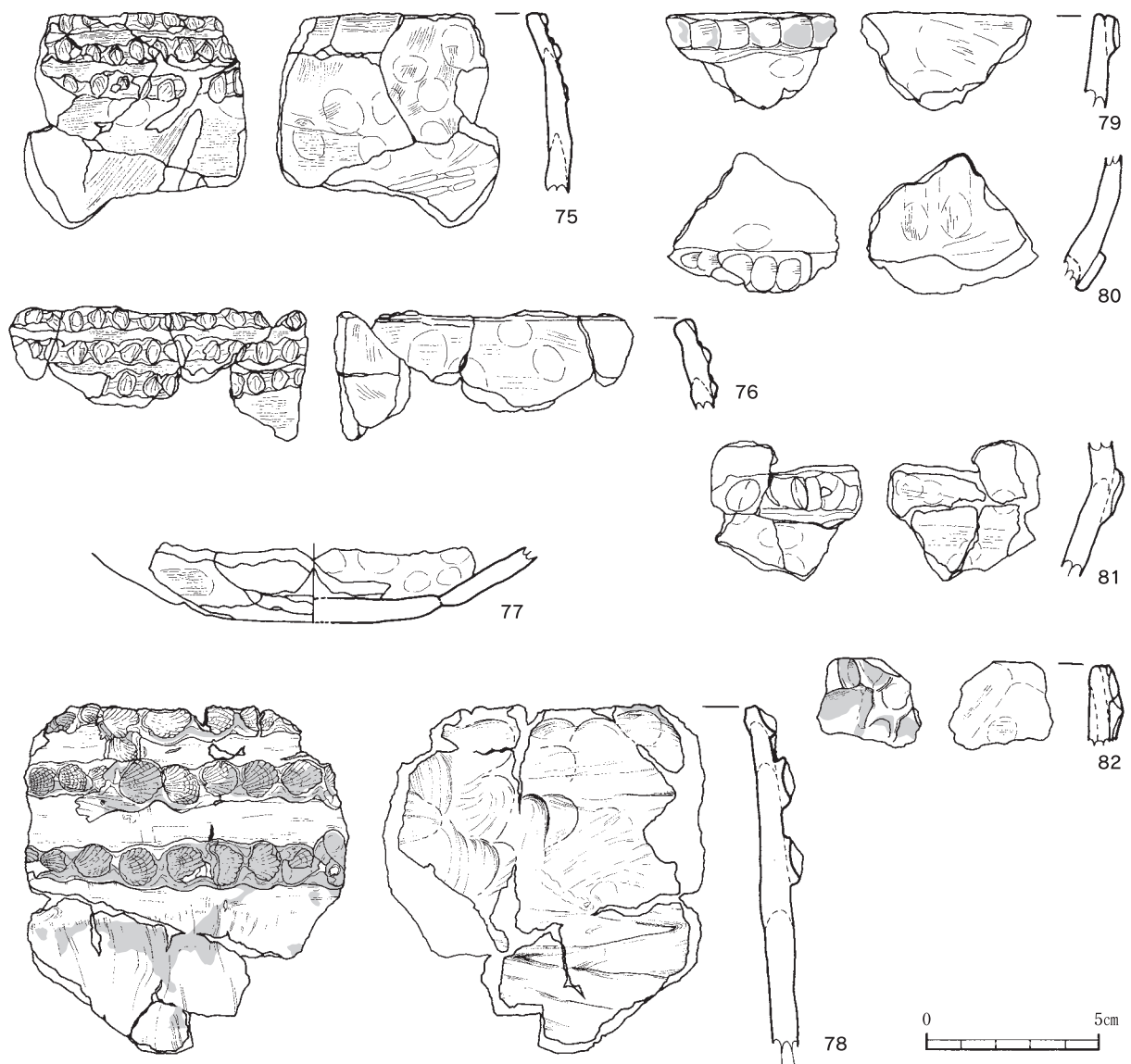
第76図 縄文時代草創期の土器 (13) 5-a類

5類土器 (隆帯文土器) 68~99

68~86は5-a類で、口縁部がやや内湾する。68~70は中型の鉢で平丸底である。口縁部外側に3条隆帯を貼り付け、丸石にて右から左へ押圧施文している。器壁はやや厚く、輪積み接合部にはナデ調整が認められる。71~73も同様の隆帯を持つ。74は68~73と似た文様であるが、赤い粘土の隆帯を持つ別個体である

と考えられる。75~77はやや小さい中型の鉢である。口縁部外側に、隆帯を3条貼り付け、丸小石にて右から左へ押圧施文している。78は口縁部外側に、少し間隔を開けて隆帯を3条貼り付け、貝殻殻頂部に右から左へ押圧施文している。1か所だけ縦に隆帯を施す。79~81は同一個体と思われる。44の様に隆





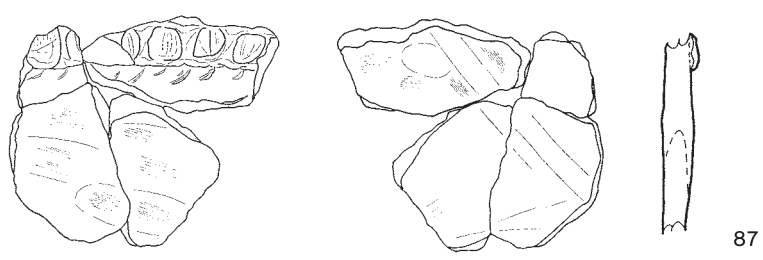
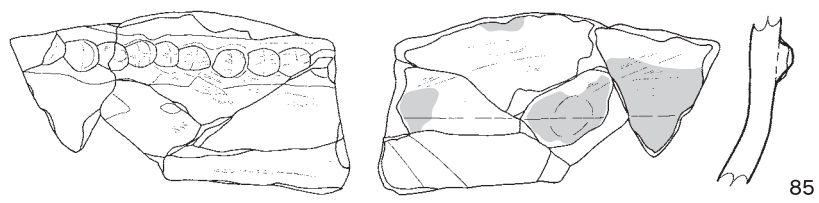
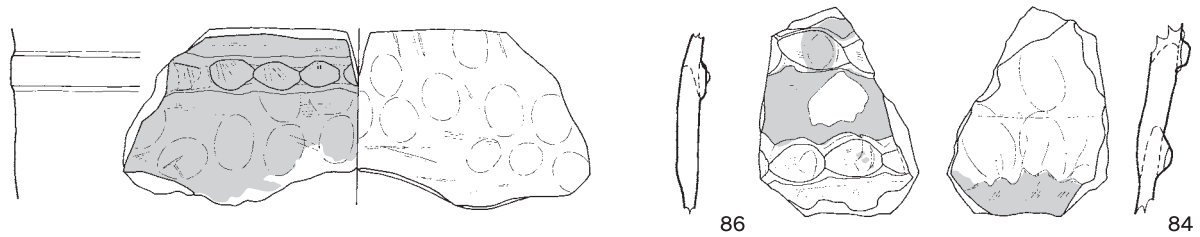
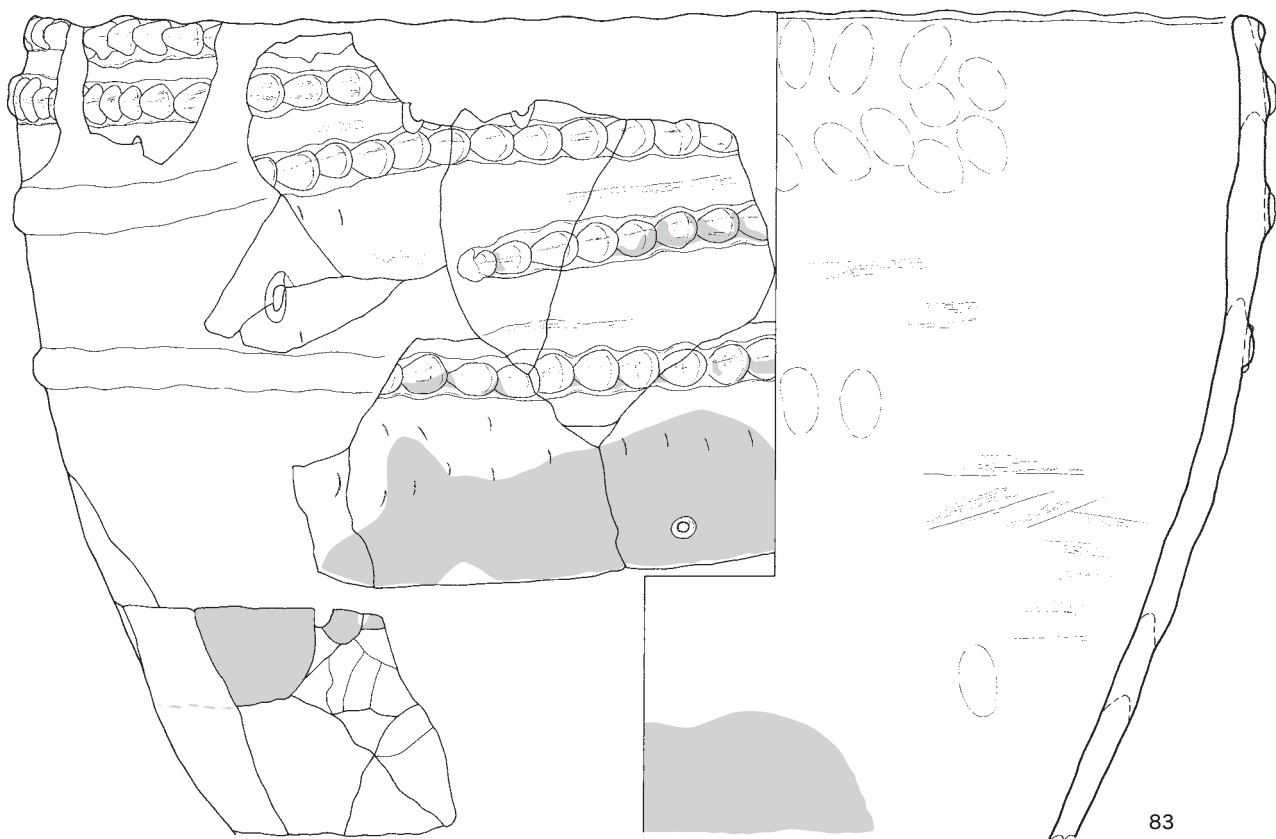
第77図 縄文時代草創期の土器 (14) 5-a類

帯間を広くとる深鉢の可能性もある。82は小片だが、隆帯は縦と横である。胎土は79～81に近い。83は大型の鉢である。口縁部外側に4条隆帯を貼り付け、指腹にて右から左へ押圧施文している。上から3条目は、結合しないですれ違う。器壁はやや厚く、輪積み接合部にはナデ調整が認められる。84・85・87は83と似た文様をもつが、器壁の厚みや胎土の違いから別個体と思われる。86は貝殻による施文である。

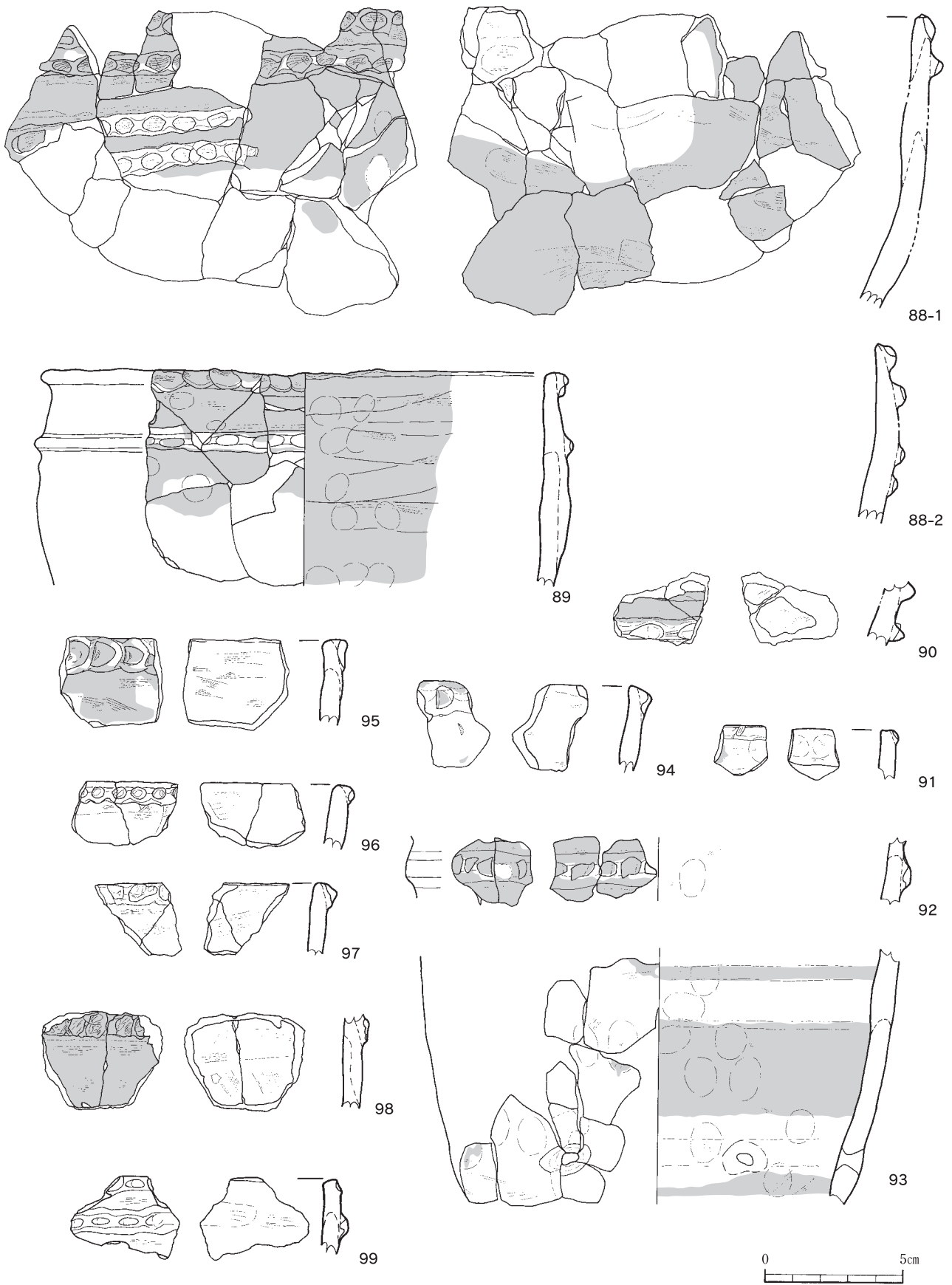
88～99は5-b類で、隆帯の盛り上がりが高くなり、口唇部が平らに整形されるものが多くなる。88は中型の鉢である。口縁部外側に、少し間隔を開けて隆帯を2条貼り付け、貝殻にて右から左へ押圧施文している。1か所だけ横に指腹押圧の隆帯2条を施す。また、

内外に炭化物が付着している。89は小型の鉢である。指腹押圧の隆帯2条を間隔をあけて施す。90も小片だが、同様である。91～93は深鉢で、同一個体の可能性がある。91は口縁部である。隆帯1条に楊枝状工具を押圧している。92は胴部で、隆帯1条に棒状工具を押圧している。93は補修孔がある。94～97は口縁部である。隆帯1条に棒状工具を押圧してから口唇部をなでている。98は胴部で、隆帯1条に奥歯のような稜を持つ工具を押圧している。99は口縁部で、隆帯2条に棒状工具を押圧してから口唇部をなでている。一見60に似ているが、口唇部の状態からこの類に含めた。





第78図 縄文時代草創期の土器 (15) 5-a類



第79図 縄文時代草創期の土器 (16) 5-b類



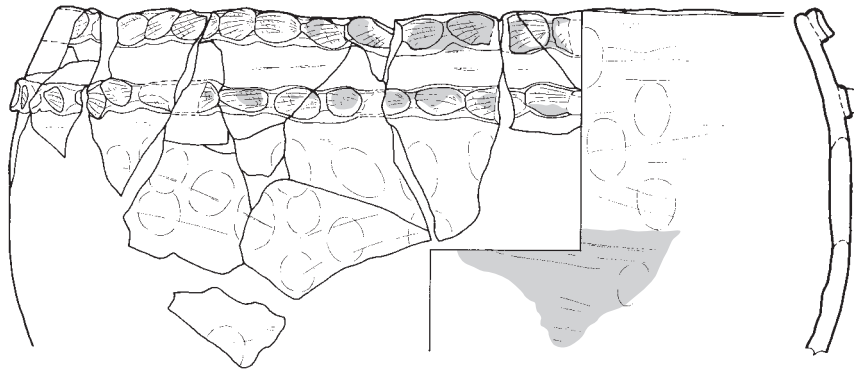
第80図 縄文時代草創期の土器 (17) 6-a類

**6類土器** (隆帯文土器) 100~124

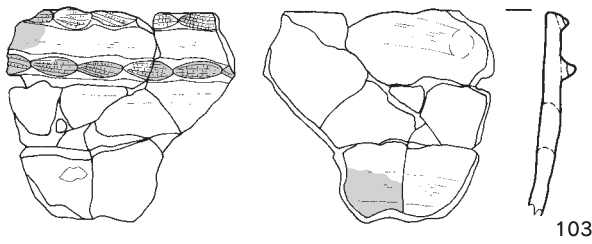
100・101は6-a類で、薄い器壁と隆帯を持つ。100は中型の鉢である。口縁部外側に2条、やや間隔をあけてさらに2条隆帯を貼り付けている。101は小片だが、3条の隆帯である。どちらも貝殻を押圧施文している。

102~117は6-b類で、口唇部が角丸平頂に整形される。102~105は貝殻を押圧施文している。104は隆帯1条だが、102・103・105はやや間隔をあけた隆帯2条を貼り付けている。102は19と同一個体の可能性があり、口縁部が内弯する。105は1と同様に胴部にも貝殻を押圧している。106は隆帯2条に角棒

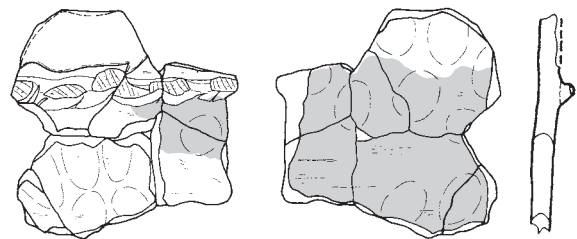
のような工具で押圧施文している。107・108は破損がひどく、全体形は明らかでない。2条隆帯に指腹による施文であるが、口縁内側にも線刻がある。108は下側の隆帯が中断されている様子が観察される。109は大型の鉢である。主に、1号2号両竪穴住居跡周辺を中心に広範囲に破片が散在していた。口縁部外側に4条、間隔を開けて腹縁部に2条隆帯を貼り付け、貝殻頂部にて右から左へ押圧施文している。部分的に押圧施文せずに三角断面を残し、下2条も指で貝殻痕をなで消した所があるが、内面は他と同様に隆帯等は見られない。器壁の厚さは普通で、輪積み接合部に工具



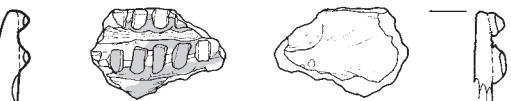
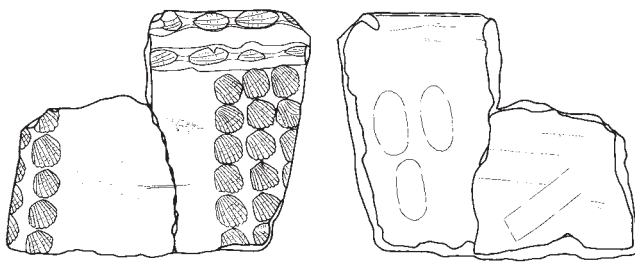
102



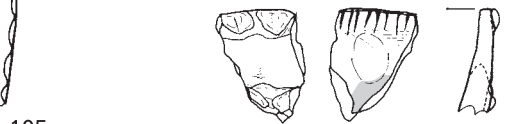
103



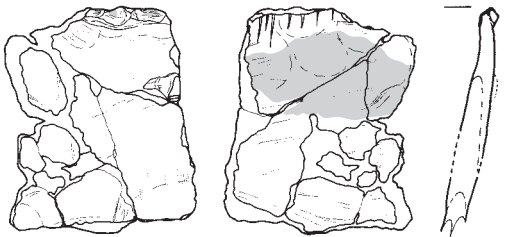
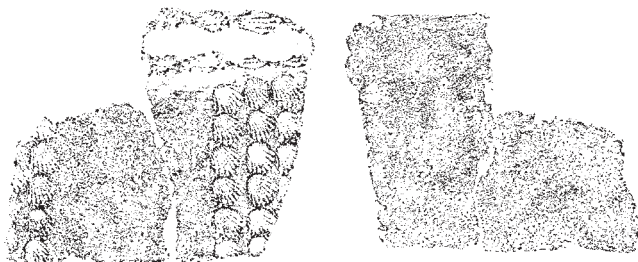
104



106



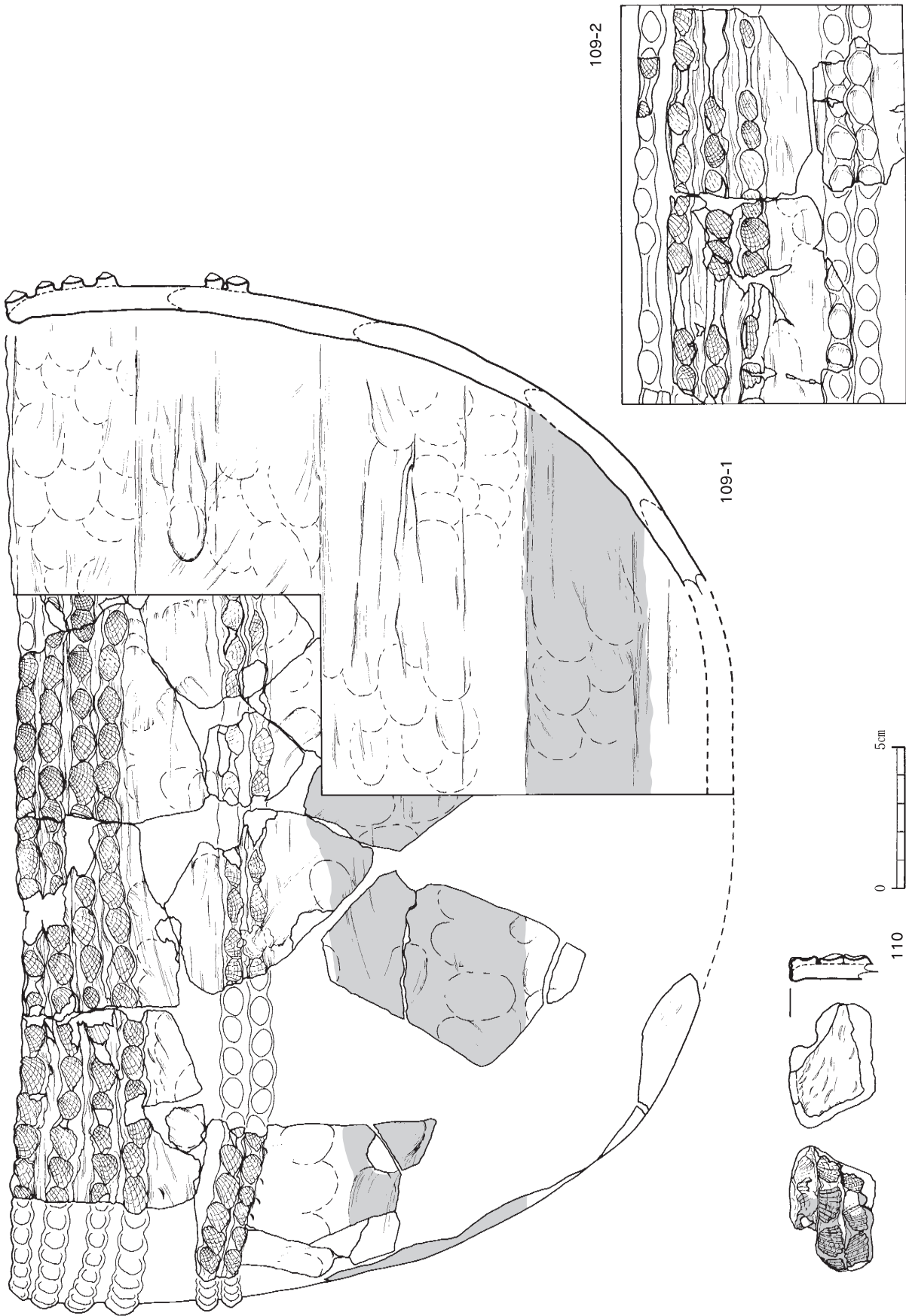
107



108

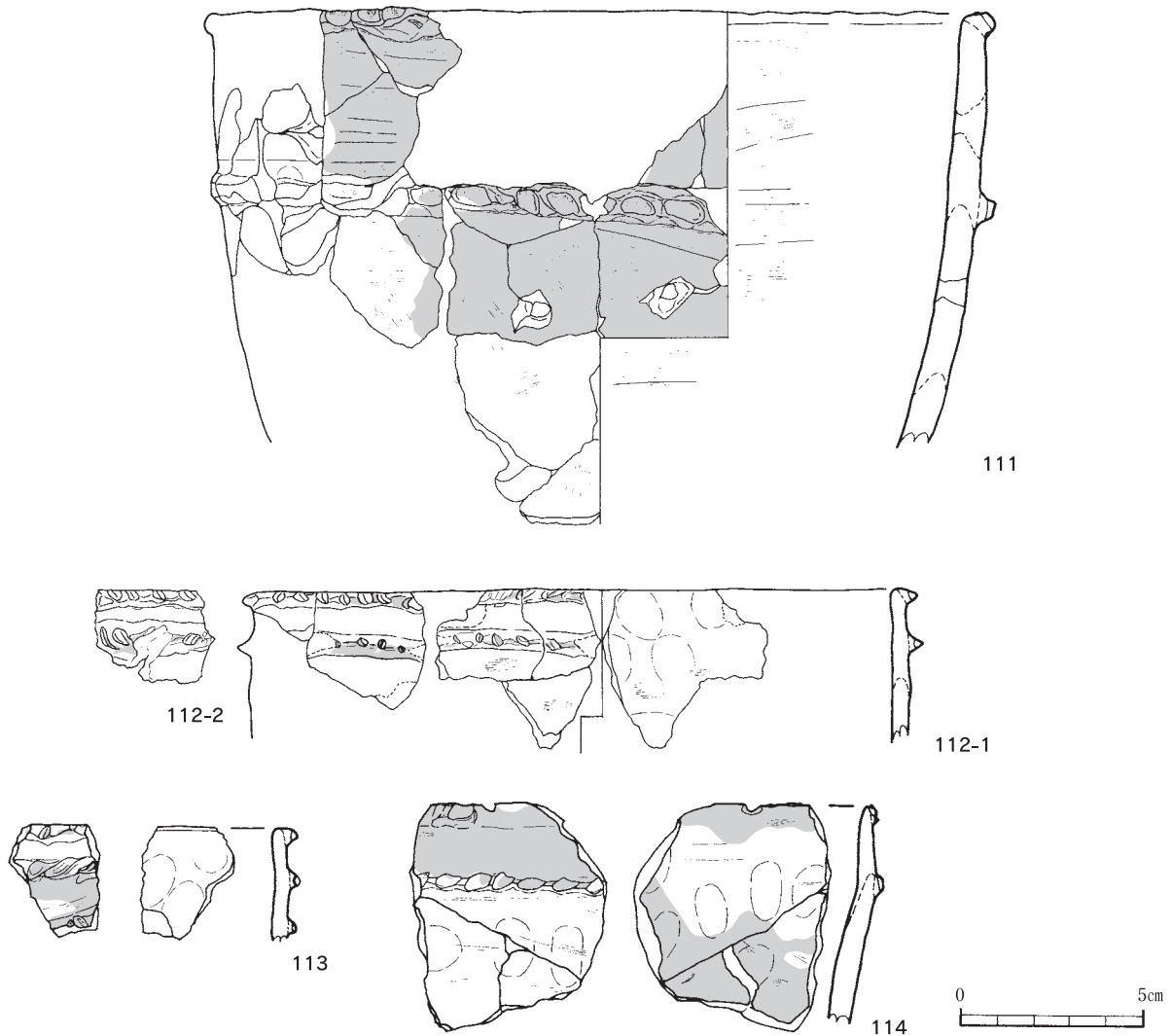


第81図 縄文時代草創期の土器 (18) 6-b類



第82図 縄文時代草創期の土器 (19) 6-b類



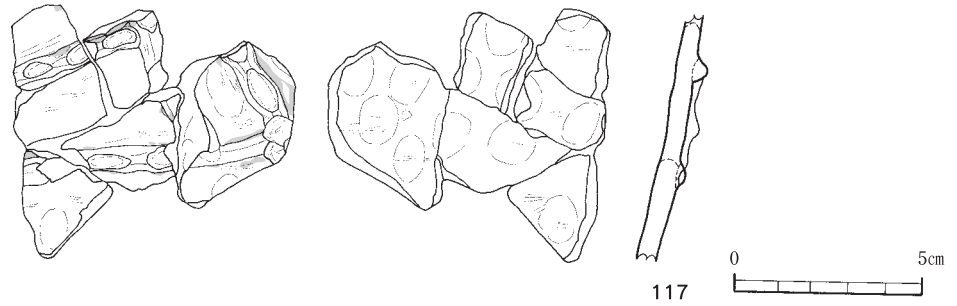
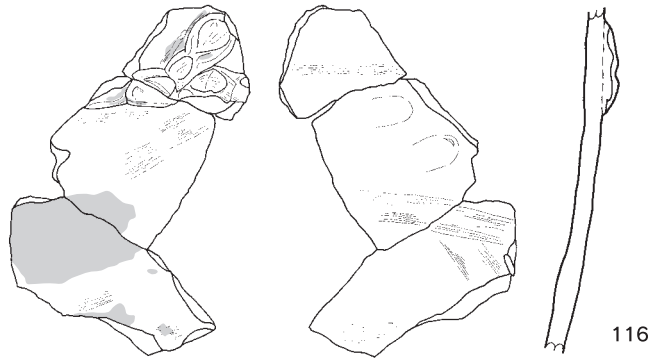
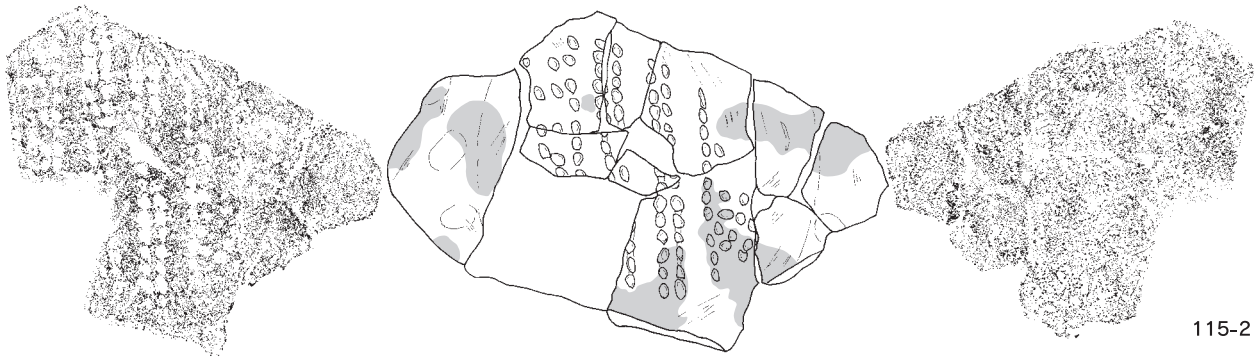
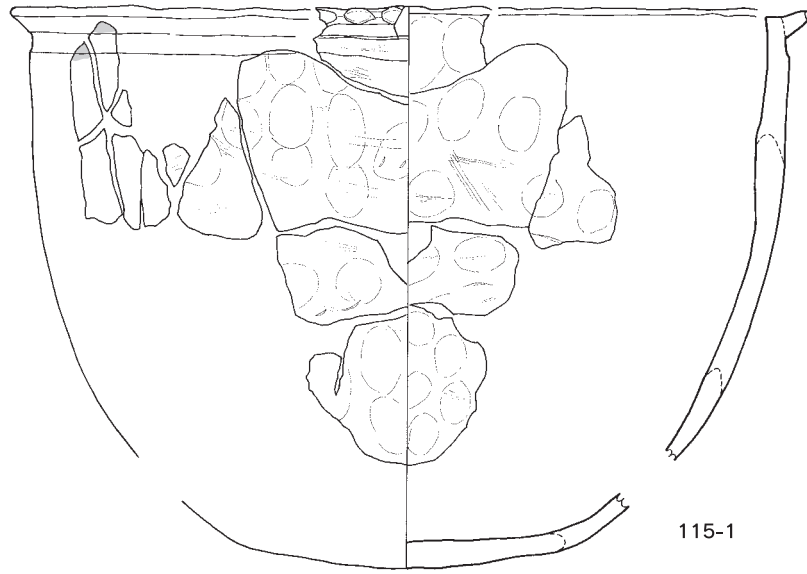


第83図 縄文時代草創期の土器 (20) 6-b類

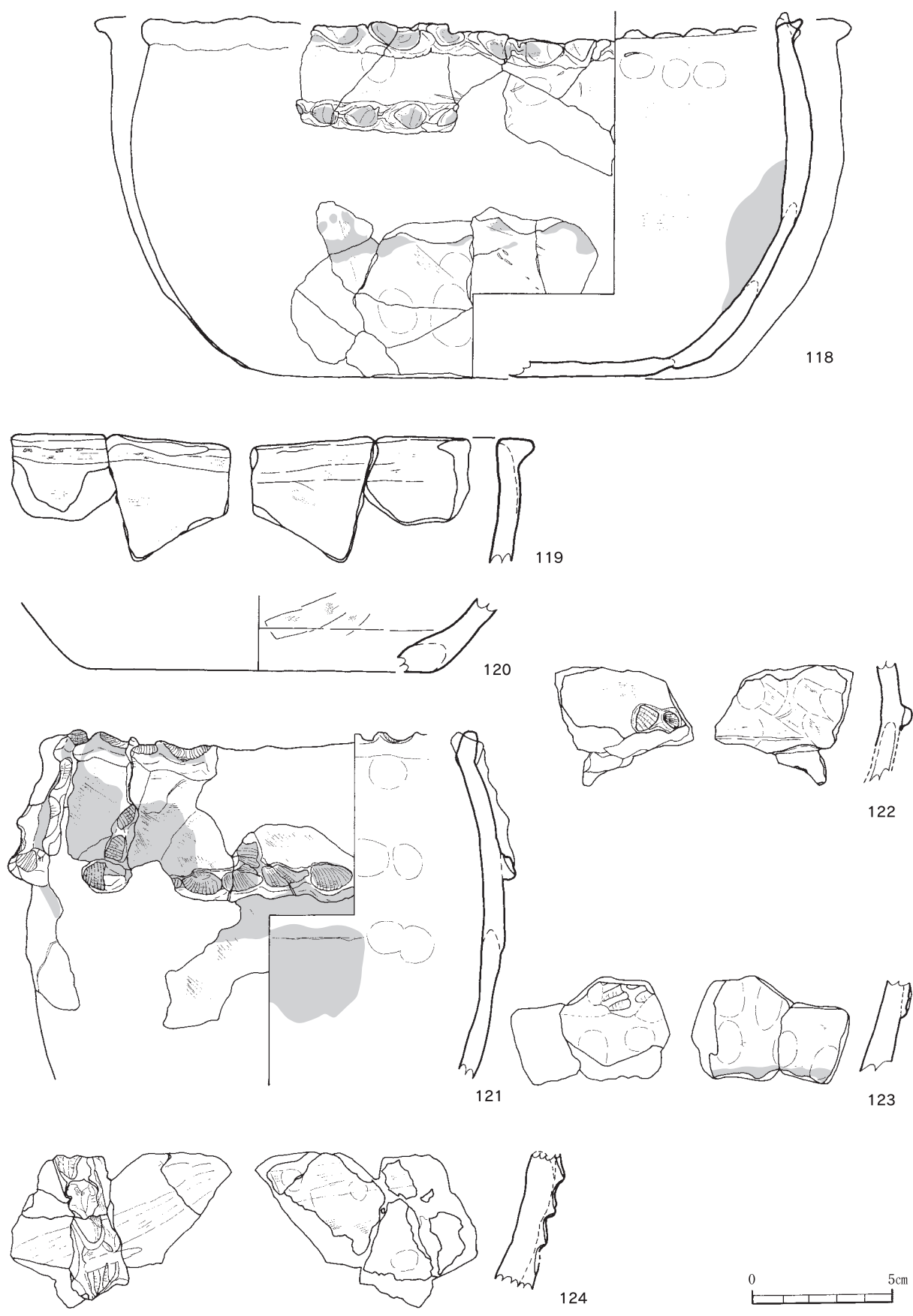
による削り調整痕が認められる。110も109と似た施文だが、多量の砂が胎土に入る。111は深鉢である。2条隆帯に指腹による施文であるが、隆帯間を広く取っている。補修孔は主に外面から開けられている。112～114は楊枝状の工具を押圧施文しているが、縄を表現しているようである。112・114は2条、113は3条で隆帯間は広めである。115～124は隆帯が大きく外側に張り出すものである。115は中型の鉢である。口縁部外側に1条突出して隆帯を貼り付け、貝殻腹部にて右から左へ押圧施文している。底部は丸平底で、特筆すべきはもじり編みと思われる圧痕がついていることである。116・117は胴部である。隆帯が縦横斜めに走り、指頭にて押圧施文している。胎土や器

壁の厚さから、同一個体と考えられる。118は平面が楕円形の完形土器で、底部はほとんど平らである。全体に鍋を思わせる鉢であるが、厚みのある隆帯と大胆な指跡が印象的である。隆帯は2条だが、下の方は一部分のみである。指頭にて右から左へ押圧施文している。119・120は胎土や器壁の厚さから、9と同一個体の可能性がある。119は隆帯は1条だが、押圧施文はない。121は中型の鉢である。やや内弯した口縁部外側に、少し間隔を開けて隆帯を2条貼り付け、さらに格子状に縦の隆帯でつなぐ。アナダラ属の貝殻で大胆に押圧施文している。122は隆帯が中断されている。123・124は風化が進み一部の隆帯が残る。施文具は寶貝と考えられるが、一種異様な印象を受ける。

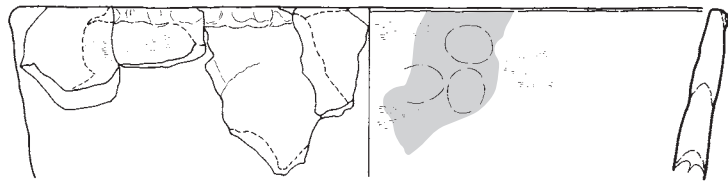




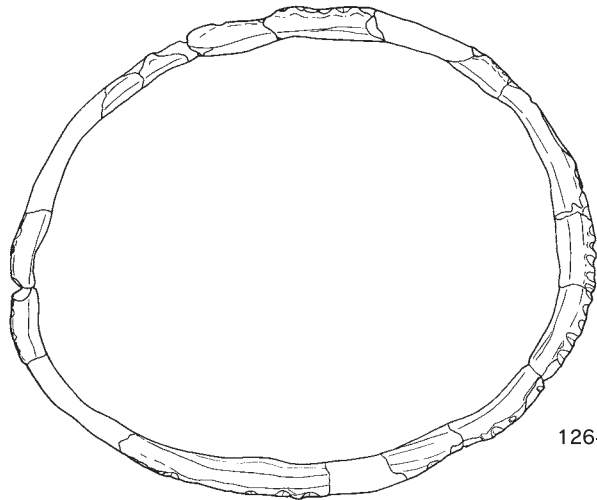
第84図 縄文時代草創期の土器 (21) 6-b類



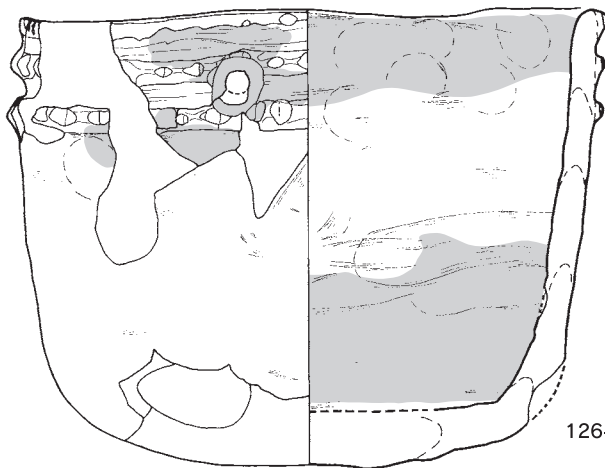
第85図 縄文時代草創期の土器 (22) 6-c類



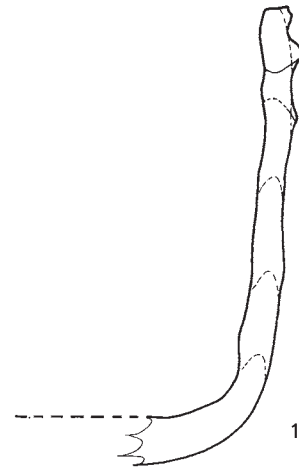
125



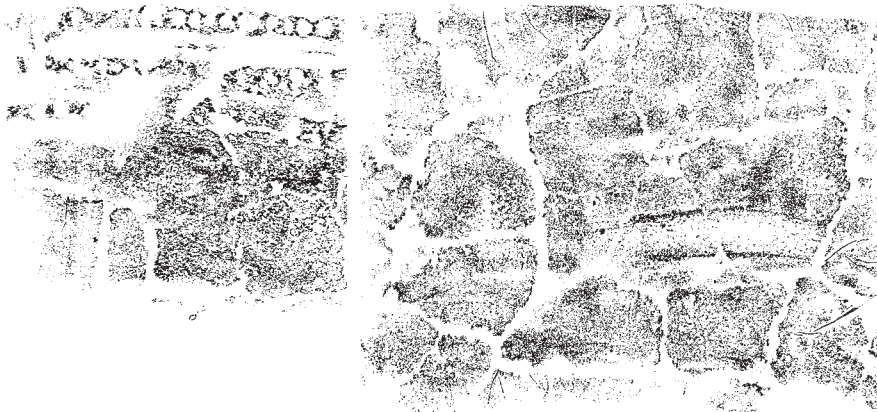
126-1



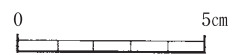
126-2



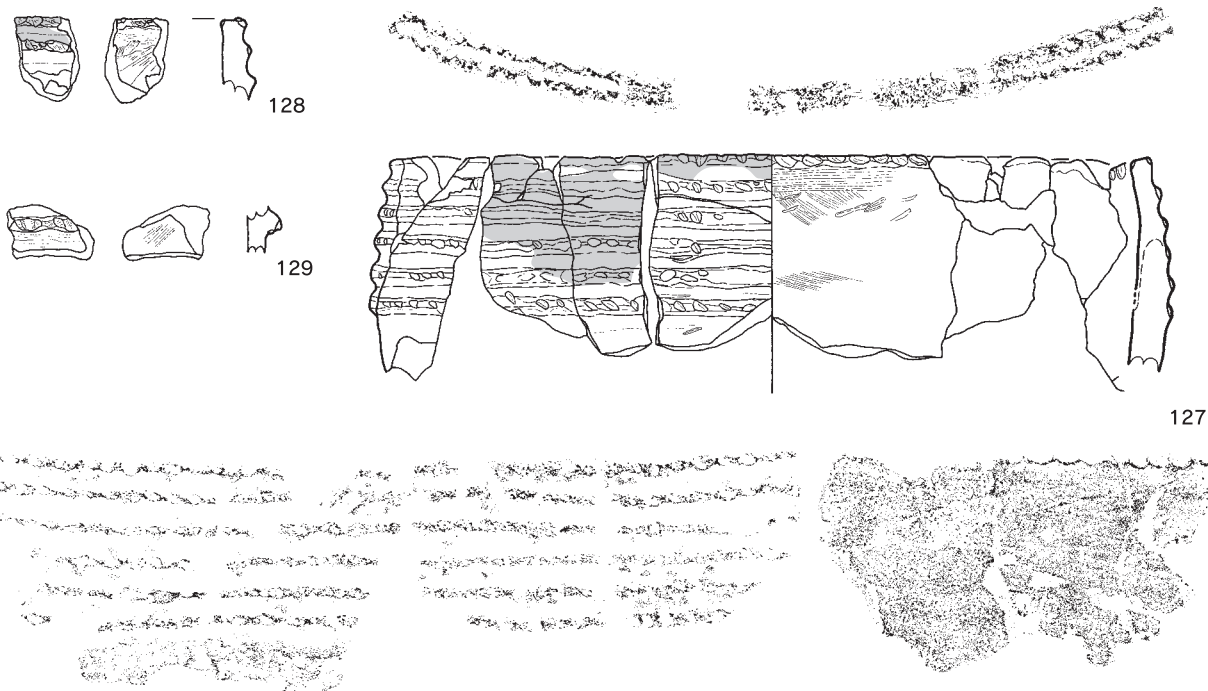
126-3



126



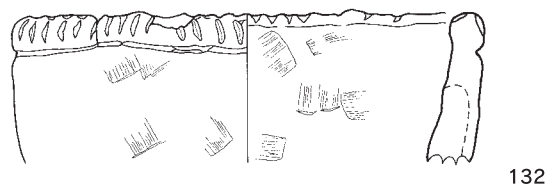
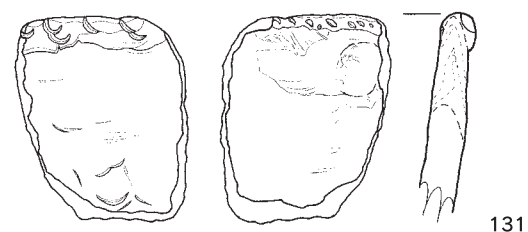
第86図 縄文時代草創期の土器 (23) 7-a類



**7類土器（隆線文土器）125～130**

この類は隆線が細く、ほとんどが楊枝状の工具を押圧施文している。125・126は7-a類で、器壁がやや外傾し、施文は楊枝状工具による。125は口縁部である。小片のため全体形は明らかでない。隆線は1条である。126は小型の深鉢であるが、楕円形の口径をしており、「飯ごう」のような印象を受ける。口縁部外側に、少し間隔を開けて隆帯を3条貼り付け、右から左へ押圧施文している。

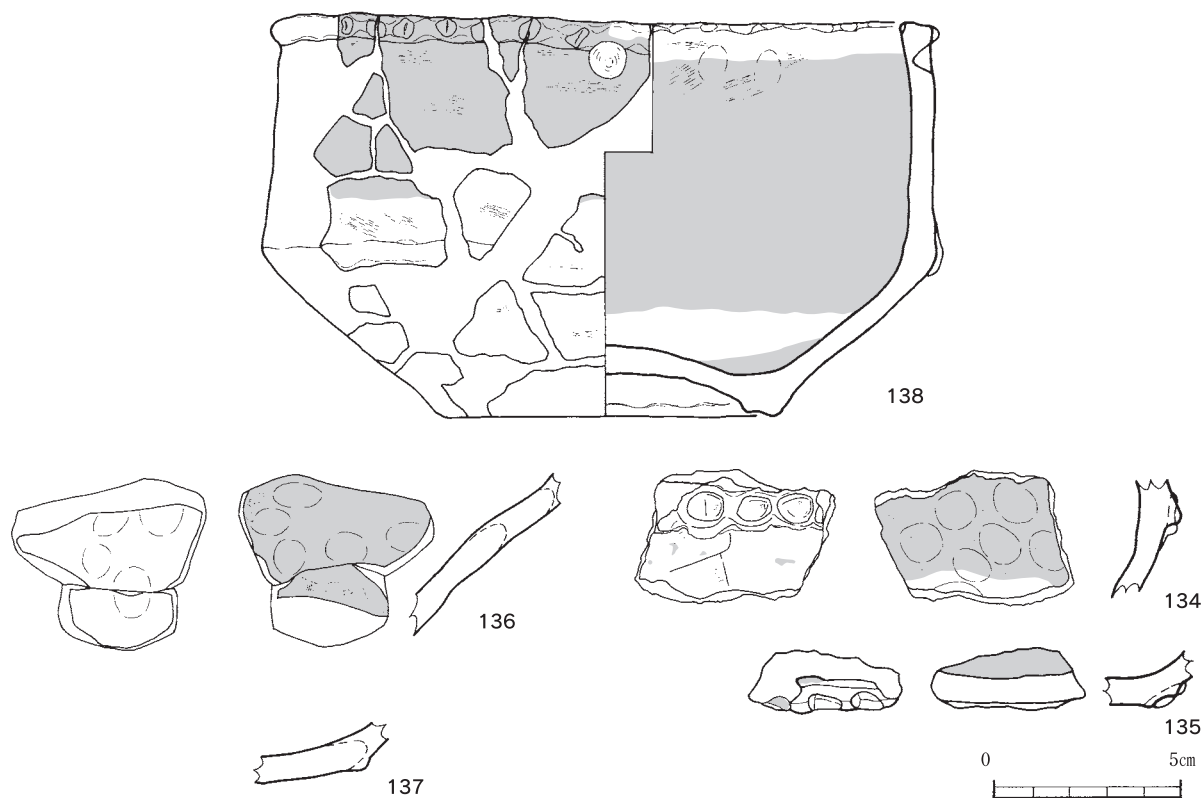
127～130は7-b類で、隆線がより細くなる。127・128は同一個体で、隆線は6条である。口縁部が内湾し、口唇部内側にも刻み目が施される。胎土に角閃石が多量に含まれ、島外からの移入品の可能性がある。また、内面には炭化物が付着している。<sup>14</sup>C年代測定の結果は、12080±70年BP（補正<sup>14</sup>C年代）であった。129・130は小片のため全体形は明らかでない。129は指頭で押圧施文している。130は楊枝状工具を押圧してから沈線を引き、隆線を2分している。輪積みの状況と器壁の傾きから蓋の可能性はある。



**8類土器（隆帯文土器）131～133**

この類は器の大きさの割に器壁が厚く、仕上がりがやや手捏ね風である。隆帯は1条である。131は竹管状工具で口縁部と口唇頂部に押圧施文している。132・133は小型の鉢で、同一個体と思われる。楊枝状工具で口縁部と口唇頂部に押圧施文し、さらに沈線を引き隆帯を強調している。

第87図 縄文時代草創期の土器（24） 7-b・7-c・8-a・8-b類



第88図 縄文時代草創期の土器（25） 9類

**9類土器**（隆帯文土器・志風頭タイプ）134～138

この類は胴部に屈曲部を持つコマ形の土器である。底部は平または上げ底で、器壁が斜めに立ち上がる。出土点数が割合に少なく、特殊な形状のため一括しているが、施文や胎土等の状況から他の類に含まれる可能性がある。134・136は胴部で、135・137は底部である。138と近い器形を持つ可能性があり、施文具は指腹と考えられる。胎土や器壁の厚さから、134と135、また136と137は同一個体と考えられる。138は中型の鉢である。やや内弯した口縁部外側に、少し間隔を開けて隆帯を1条貼り付け、さらに胴の屈曲部と底部に隆帯を施す。指腹で押圧施文しており、口唇部内側にも刻みがある。特筆すべきは、底部がドーム状の上げ底になっている点で、仕上げもていねいなナデであるが、祭祀との関連が考えられる。なお、未完の補修孔が口縁外面にある。また、内面には炭化物が付着している。<sup>14</sup>C年代測定の結果は、11660±70年BP（補正<sup>14</sup>C年代）であった。

**10類土器**（隆帯文土器）139～142

この類は「ハの字」状の押圧施文をしている。親指と中指の指頭を合わせて、押圧したものと思われる。底部は平底で、ほぼ垂直に立ち上がり、明確に胴部と

区別される。口縁部は見つかっていないが、9類と同様の器形である可能性がある。139～141は胴部で、隣接して隆帯を2条貼り付けている。胎土や文様から同一個体と考えられるものの、141は胴部の傾きが違う。また、外面には炭化物が付着している。141の<sup>14</sup>C年代測定の結果は、11050±70年BP（補正<sup>14</sup>C年代）であった。142は底部で、立ち上がり部分に押圧施文をしている。なお、6号礫群の21・22もこれらと同一個体と思われる。

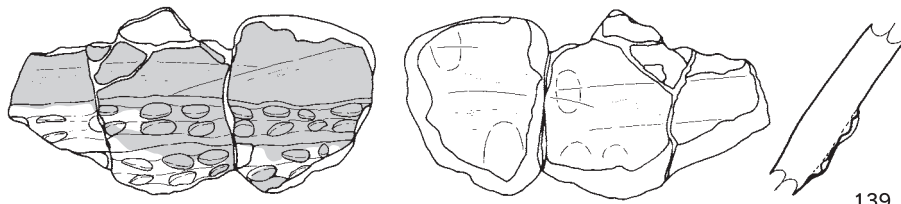
**11類土器**（隆帯文土器）143・144

この類は口唇部に隆帯を貼り付けず、直接刻み目を施す。隆帯の施文や胎土等の状況から他の類に含まれる可能性がある。143は隆帯1条に補修孔が外面から開けられている。144は小片のため全体形が明らかでないが、隆帯部分に沈線状の凹みがある。

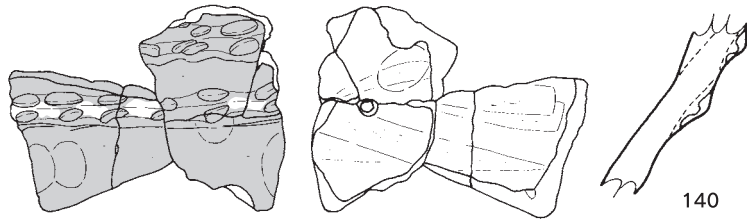
**12類土器**（隆帯文土器）145・146

この類は、指腹による押圧を2段、交互に施すものである。口唇頂部のナデにより、平坦面が顕著で断面は四角くなる。145は内面の指跡が顕著だが、146は良く撫でられている。

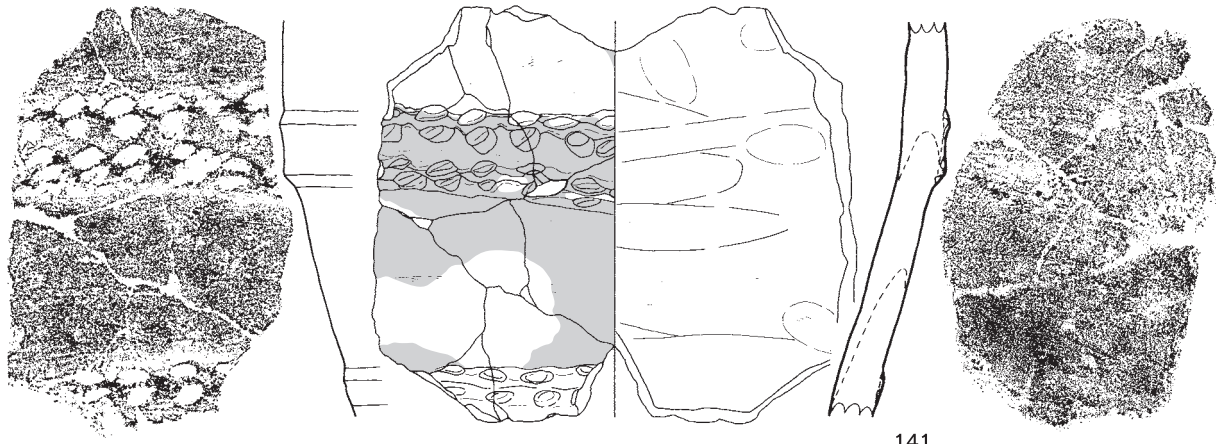




139



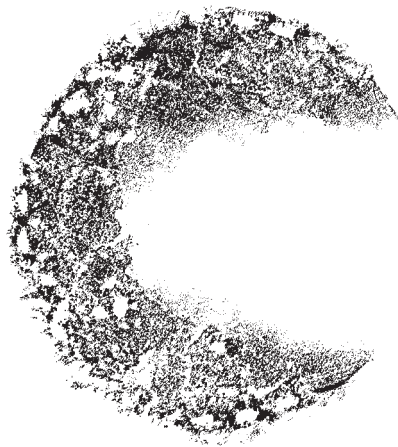
140



141

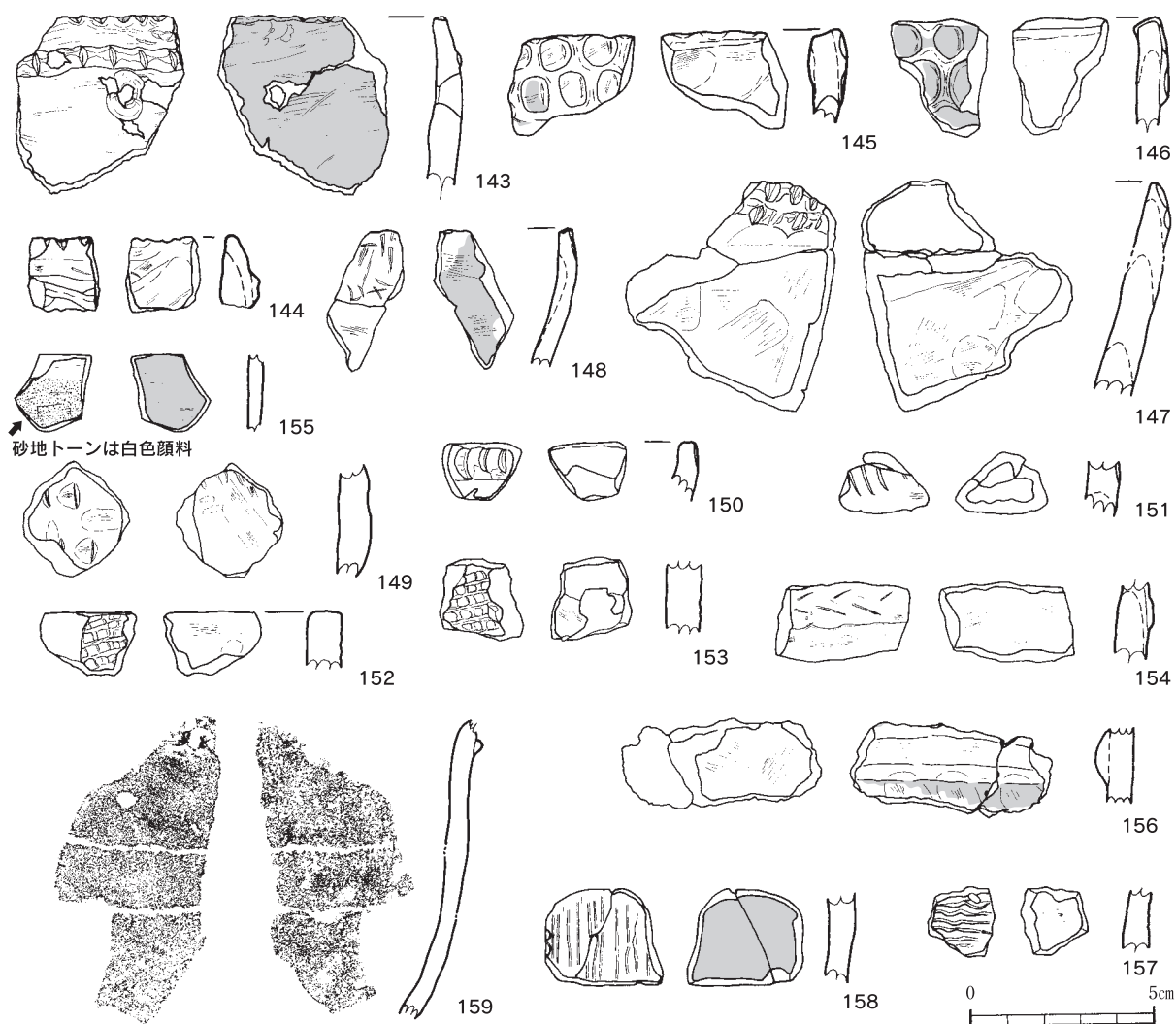


142



第89図 縄文時代草創期の土器 (26) 10類





第90図 縄文時代草創期の土器 (27) 11, 12, 13-a・13-b, 14類

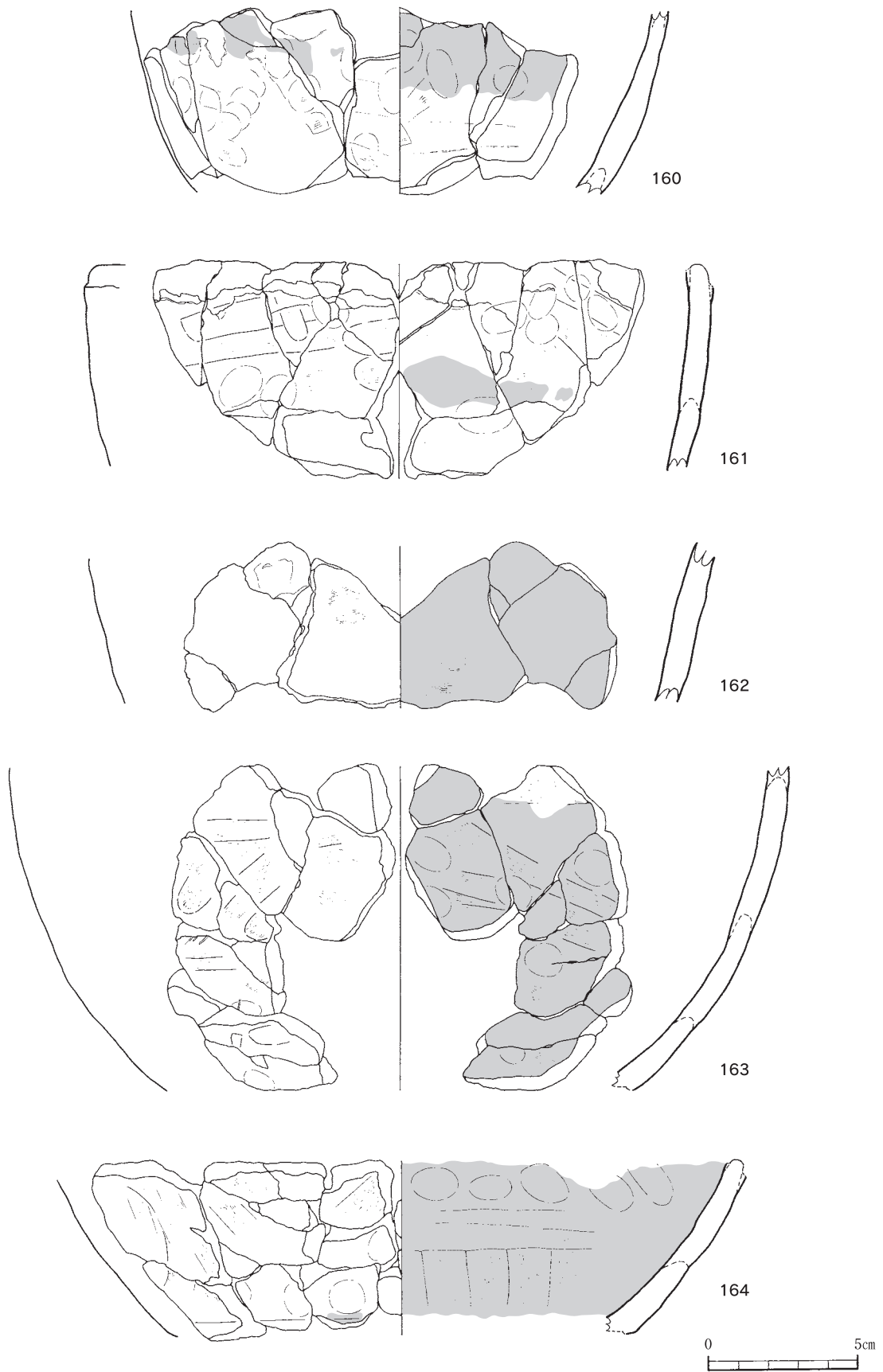
### 13類土器 (爪形文土器) 147~151

この類は、隆帯を施さずに直接爪で施文する爪形文土器である。13-a類は施文や胎土等の状況から他の類に含まれる可能性がある。147は口唇部断面が舌状で、爪の押圧が2段施される。148は浅い押圧で、頂部にも凹みがあるが、小片のため全体の特徴となるかは不明である。149は胴部で爪の押圧は2段である。小片のため器形等は不明である。

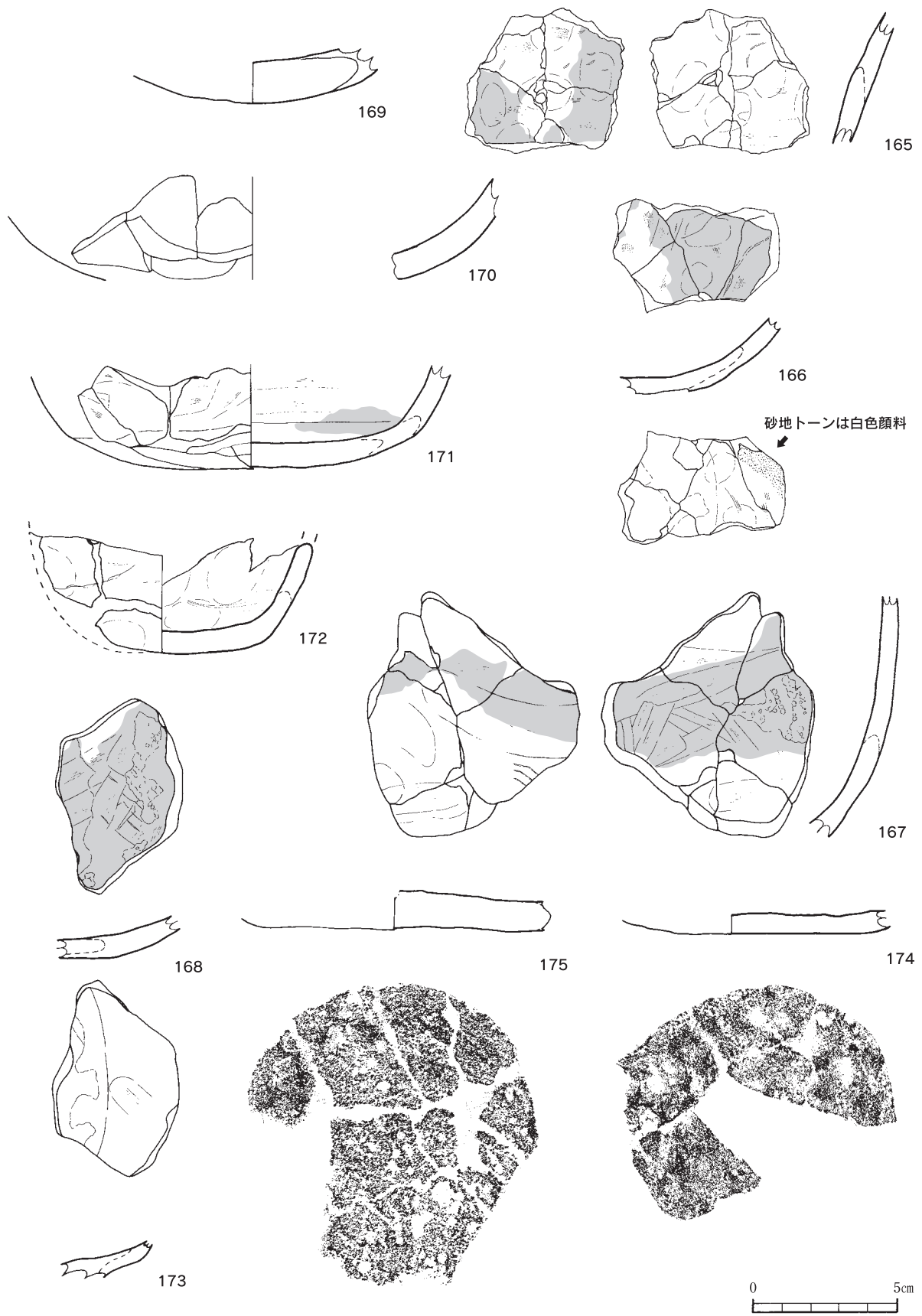
13-b類は口唇頂部のナデにより、平坦面が顕著で断面は四角くなる。150は口縁部で151は胴部である。いずれも小片のため器形は不明である。部分的ではあるが宮崎県椎屋形遺跡出土のものと似た印象を受ける。

### 14類土器 152~159

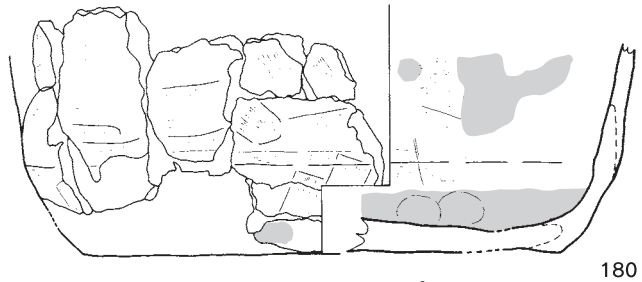
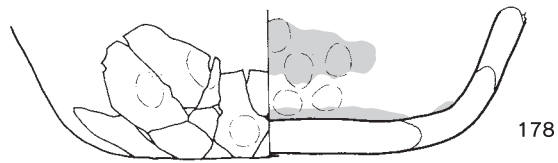
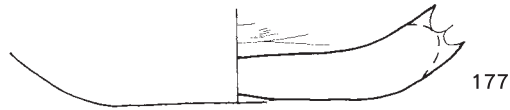
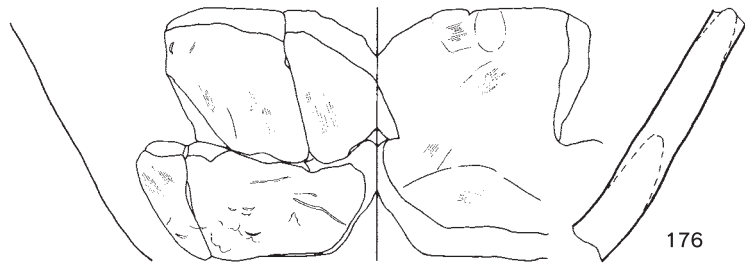
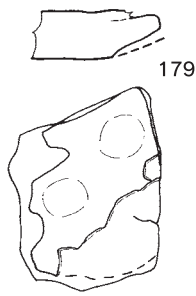
この類は、類を確定できない口縁部等を一括したものである。いずれも小片のため詳細は不明である。152・153は13-b類同様口唇頂部のナデにより、平坦面が顕著で断面は四角くなる。第1群では唯一の転がし縄文土器である。154は風化が著しいが、隆帯に「綾杉」状の凹部が認められる。10類と似たものだが、配列がやや異なる。155は片面に白色顔料が塗られている。器壁が非常に薄く、もう片方には炭化物が真っ黒に付着している。156は内面に太い隆帯を持つものである。157~159はV層出土ではあるが、樹根等の落ち込みにより混入した早期の土器の可能性はある。157・158は貝殻条痕や刺突が施される。159は器壁が薄くゆるやかなS字状の断面を持つ。隆線に楊枝状工具による押圧が施される。



第91図 縄文時代草創期の土器 (28) 15類



第92図 縄文時代草創期の土器 (29) 15類



### 15類土器 160~180

この類は、類を確定できない胴部と底部を一括したものである。器形は鉢形と深鉢がある。鉢形は、サラダボール状で、口縁部が垂直またはやや外反し、下にいくにつれて徐々にすぼまり丸平底となる。深鉢は、口縁部が垂直もしくはやや内弯し、底部に向かってすぼまっていくコマ形となるものと平底から急角度で立ち上がる擬似円筒形がある。製法や器壁の厚みは6類と同様である。底部は丸平底から平底までである160~162は深鉢で160は121と、161は124と同一個体の可能性がある。163・164は鉢形土器である。165・166は同一個体と思われるが、胴部がややねじれたようになっている。167・168は35と同一個体と思われるが、内面に炭化物が付着している。169・170は丸底である。171・172は丸平底である。172は小型の鉢形土器で平面形が二枚貝に似た印象を受ける。173はやや変わった底部だが、詳細は不明である。174・175は平底だが、175・177~180はやや上げ底となる。176・177は同一個体と考えられる。179は擬似口縁が観察されるが、小片のため全体形は明らかでない。180は底部に放射状の調整痕が残る深鉢である。胎土に大理石の角礫が多量に入っており、雲母も含まれることから、島外から持ち込まれた可能性が高い。また、内面には炭化物が付着している。

第93図 縄文時代草創期の土器 (30) 15類

## ② 石器

### (はじめに)

三角山 I 遺跡は広大な面積を占め、その微地形は複雑である。また、後世の開発等により包含層の残存状況は場所によって異なっている。このことを考慮して、石器についてはV層出土石器の分布状況から、三角山 I 遺跡をA・B・Cの3地区に分けて報告することにする。A地区はA～I-1～8区、B地区はA～I-9～14区、C地区はJ～Q-1～14区と区分した。

### (A地区)

A地区からは打製石鏃、楔形石器、磨製石斧、石核、石錘、磨石・敲石、砥石、石皿、礫石、ペットストーンが出土した。F・G-5区に最も石器が集中している。次に、C-8、D-7区となり、大まかに3か所の集中域がある。

#### 打製石鏃 (第94図181～200, 第112図279～281)

F-5区を中心に出土した短いものと、C-8区を中心に出土したものと分布が異なっている。

石材は頁岩、安山岩(サヌカイト)、ホルンフェルス、凝灰岩、黒曜石を素材としている。

181～186はF-5・6区から出土した。長さ1.4～1.6cm、長幅比が1～1.25で基部が平坦もしくはわずかに窪み、側縁はやや膨らみ気味である。

279、280はC-8区で出土した。いずれも長さ1.4cm、長幅比1.27で側縁は直線的で、基部がわずかに窪む。桑の木津留産黒曜石を素材とする。

187、188、191はF・G-5区から出土した。長さ1.7～2.0cm、長幅比1.21～1.54で基部がわずかに窪み、側縁はややふくらみ気味である。

189はF-5区で出土した。長さ1.3cm、長幅比1.00で基部がわずかにU字状に窪む。

190はF-6区から出土した。長さ2.3cm、長幅比1.28で基部がわずかに窪む。

193はF-5区から出土した。長さ1.8cm、長幅比1.20で、基部がやや鋭い。

194はC-7区から出土した。長さ1.6cm、長幅比1.23で、基部が大きく入りこんでいる。

281はC-8区で出土した。長さ1.2cm、長幅比0.80で短く、基部が大きく挟られているものである。

192は欠損品であるが、長幅比が比較的大きく、基部が大きく入りこむものと思われる。

195、196、198～200は欠損品が多いが、長幅比が大きく、細長い形状をなすものである。素材となる剥片は縦長、横長ともあるが、側縁を細かく調整して仕上げている。181～193までとは分布が異なっている。

197はC-8区から出土した。欠損品であるが、基部が大きく窪み、端部は鋭い。

#### 磨製石鏃 (第113図303, 304)

C-8区から出土した。厚さが2、3mmで極めて薄い。303はホルンフェルス製で表面の風化が著しいが、一部研磨痕が残っている。先端が欠損しているが、側縁がわずかに丸みをもち、基部付近で最大幅となる。基部はわずかに凹むが逆刺はわずかにみえる。304は頁岩製であるが、欠損しているが研磨痕が残っている。

#### 楔形石器 (第95図 201～203, 第96図207)

F・G-5区から出土した。石材は頁岩である。

201～203は2cm弱のものである。201は両端両側から調整しているが、202、203は片側のみの調整である。207は6cm程度のもので側縁も部分的に細かく調整している。

#### 磨製石斧 (第96図205, 206, 211)

F-5区から3点出土した。石材はいずれも頁岩である。いずれも基部と側縁をわずかに調整し、刃部を研磨して仕上げている。

205、206は長さ14cm以上で、長幅比2.76以上あり、長めの印象を受ける。

211は長さ10cm程度、長幅比1.94でやや短い。刃部がやや偏っている。

#### 石核 (第95図204, 第96図208, 209)

いずれもF-5区から出土している。石材は頁岩、凝灰岩である。

204は小形の石核である。1度の打面調整ののち、剥片をとり、さらに剥離面に対し垂直な調整剥離を施している。208は凝灰岩製で、上下から剥片を取っている。209は自然面を残している。石核の最終段階のものを2分割したものである。

#### パンチ (第96図210)

F-5区から1点出土した。砂岩製である。扁平で、わずかに楕円形を呈し、その長軸両端を数回打ち欠いている。重さは28.9gである。

#### 磨石・敲石 (第97～104図, 212～256)

長さが16cm程度以下(感覚的には手で握って使用できる大きさ・重さのもの)で、磨痕または敲打痕のあるものを一括している。大きさ(重さ)や長幅比によって細分できる。形状はほとんど不整形である。石材は砂岩が多く、花崗岩もある。

#### ア 長さ10～13cmで長幅比が1.50程度、重さが600g程度のもの (212, 214, 220, 218, 217, 231, 229)

212は断面方形で下面に敲打痕、1側面に磨痕がみられる。266の石皿と対になる。214は断面五角形で稜線部分に敲打痕がみられ、裏面のみに磨痕がみられる。220は隅丸三角形を呈し、下面と稜線部分に敲打



痕がみられ、2側面に磨痕が残る。218は不整な楕円形で、側面に敲打痕がみられる。表裏に芯のように残存する部分がみられる。217は断面四角形で、稜線部分に敲打痕がみられる。231は隅丸三角形を呈し下面と側面に敲打痕がみられる。229は平面が隅丸方形で、断面は方形を呈する。2端と稜線部分に敲打痕がみられ、表面に磨痕が残る。F-5区に多く、D-7区側にも出土している。

**イ 長さ14cm以上で長幅比が1.6~2.00程度、重さが600~800g程度のもの (213, 215)**

213は長楕円形を呈し、一端と稜線部分に敲打痕がみられ、2面に磨痕が残る。215は断面三角形を呈し、下端と稜線部分に敲打痕が残る。D-7, F-6区から出土している。

**ウ 長さ12cm程度、長幅比1.30程度、重さ600g程度で平面方形を呈するもの (216)**

216はF-5区から出土した。側面に敲打痕があり、1面に磨痕が残る。

**エ 長さ7cm程度で長幅比1~1.20、重さが100g程度のもの (225)**

225はD-7区から出土した。扁平で側面に敲打痕がみられ、1面に磨痕が残る。

**オ 長さ7cm程度で長幅比1~1.20、重さが250g程度のもの (226)**

226はF-5区から出土した。稜線部分に敲打痕が残る。

**カ 長さが10~13cmで平面がほぼ円形をなすもの (227, 228, 230)**

227は側辺1か所が欠損しているが、人為的なものではない。側縁に敲打痕、1面に磨痕が残る。228の1側面の欠損についても人為的なものではない。側縁に敲打痕、2面に磨痕が残る。230はほぼ正円形で側縁は面取りするような敲打痕が残る。また、2面に磨痕が残る。D-6・7区、G-4区から出土した。

237, 238もこの類に近い特徴をもつが、やや不整形である。237は1側が敲打により欠損したものであるが、1面に磨痕が顕著に残っている。238は1端に敲打痕が残るのみである。

**キ 長さ8~9cm程度、長幅比1.30~1.50で重さが100~200g程度のもの (232, 234, 235, 243)**

232はやや三角形を呈し扁平である。側縁に敲打痕がみられる。234も扁平で側縁のやや突出した部分2か所に敲打痕がみられる。235は方形を呈し、側縁1端に敲打痕がみられる。243もやや扁平で、側縁2か所に敲打痕がみられるD-8, E-7, F-5区と分散して出土している。

**ク 長さ5cm程度、長幅比1.00程度、重さ150~200gのもの (233, 236)**

どちらも側縁に敲打痕が残る。F-5区から出土した。

**ケ 長さ11~13cm、長幅比3.00以上、重さ120g程度のもの (241, 242)**

どちらも棒状の礫を素材とし、端部に敲打痕が残る。241は磨痕もみられる。F・G-5区から出土した。

**コ 長さが5cm程度より小さい小型のもの (244~256)**

244は5.8cmでやや大きいがこの類に位置づけた。両端に敲打痕がみられる。245~256は円礫のものが多くが不整形なものもある。端部に敲打痕がみられるものが多く、一部に磨痕がみられる。G-5区からの出土が多く、隣接のF-5区も続き、D-6区からも出土している。

**砥石 (第105, 106図257~265)**

いずれも砂岩製で、F-5区に集中するが、その形状は様々である。

257, 260, 262, 263はF-5区から出土した。257は断面三角形で上の2面と、下面に磨痕が残る。下面が顕著である。260は欠損しているが、上面と両側面に磨痕が残る。上面のものは光沢が出るほど磨かれている。262も欠損していると思われる。断面四角形で、上下と側面に磨痕が顕著に残る。263は断面四角形で、磨痕が残る面は狭く、細長いものである。

258はC-8区から出土した。丸みをもち膨らんでいる上面に磨痕が残る。

259はD-7区から出土した。断面は方形であるが、前後で高低差がある。上面と両側面に磨痕が残る。

261はG-5区から出土した。平面形は円形に近いが、断面は方形でその平坦面に磨痕が残る。

264はD-6区から出土した。断面がやや円形を呈しているが、その1面に磨痕が残る。その裏面と、上下に敲打痕が残る。

265はG-6区から出土した。断面は5角形状で、上下面に磨痕が残る。先端部側面に2~3cm程度の断面U字状の溝がある。

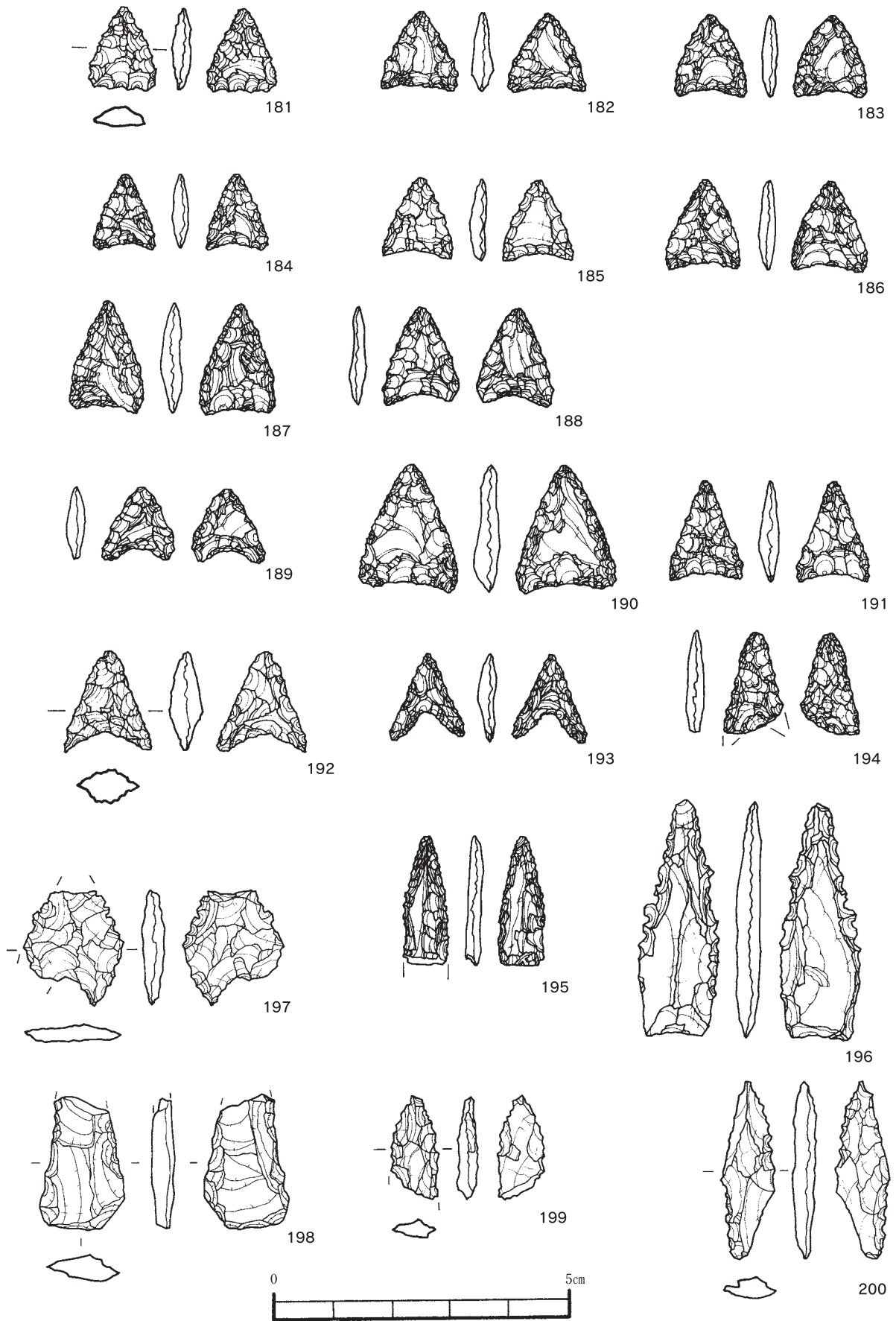
**石皿 (第107~110図266, 268~273)**

いずれも砂岩製である。

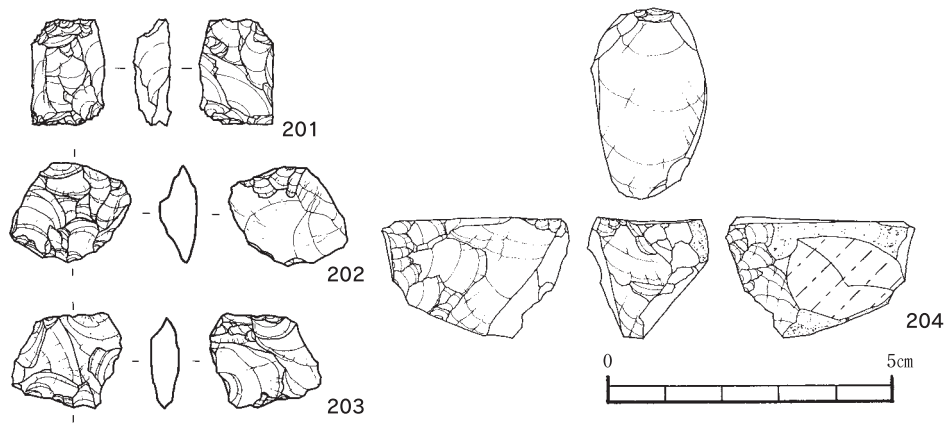
266, 269はD-7区から出土した。266は扁平な砂岩の板石を利用している。表裏に部分的に磨痕が残る。出土状況から212の磨石と対になると思われる。269は表面が丸みをもつ板石を用いている。やや丸みを帯びた表面と、裏面の一部に磨痕が残る。

268, 270, 271, 272, 273はF-5区から出土した。268は断面三角形で、表面の狭い1面と、裏面に磨痕が残る。270は板石を用いたもので、表面に磨痕が残っている。271は側辺部分のみの欠損品であるが、表裏に磨痕がみられる。272は断面が平行四辺形状の





第94図 縄文時代草創期の石器（1）



第95図 縄文時代草創期の石器（2）

板石で、表面に磨痕が広範囲に確認できる。273は熱により破碎したものと思われる欠損品であるが、表面の磨痕が明確に残っている。

**礫器**（第108図267、第111図274～278）

267、274は砂岩製で、F-7区から出土した。267はやや大きな自然角礫の鋭利な端部を細かく打ち欠いている。断面三角形で、表面の1面に磨痕が残っている。274は上端と下端を打ち欠いている。剥離面と自然面の境付近に磨痕がある。

275、277は砂岩製で、D-6区から出土した。275は下端の片側のみを打ち欠いている。さらに、その面に磨痕がみられる。277は角礫の下端を打ち欠いており先端はつぶれている。また自然面が残る、その中央部に敲打痕がみられる。

276は頁岩製で、F-5区から出土した。下端の両面から打ち欠いたと思われるが、その先端は敲打痕が顕著で、敲石のようである。

278は砂岩製で、C-5区から出土した。後述するB地点の接合資料または石核に類似するもので、円礫を片面から打ち欠いたものである。先端がつぶれていることと、A地点に接合資料がないことから礫器に分類した。

**ペットストーン**

図化しなかったが、15点確認した。砂岩の表面が光沢をもつほど磨かれている。1点だけ敲打痕のみみられるものがある。ほとんどが円礫であるが、円柱状の

もの、三角錐状のものもある。重さは0.9～47.3g（平均12.3g）である。F・G-5区に10点、D-6・7区に5点出土している。

**（B地区）**

B地区からは打製石鏃、磨製石鏃、接合資料となる石核と剥片、石核、礫器、石皿、砥石、磨石・敲石、研磨石製品が出土した。C-10区に最も集中し、なかでも石核と剥片が多い。このほかB-10・11区、C-11区に多く出土している。

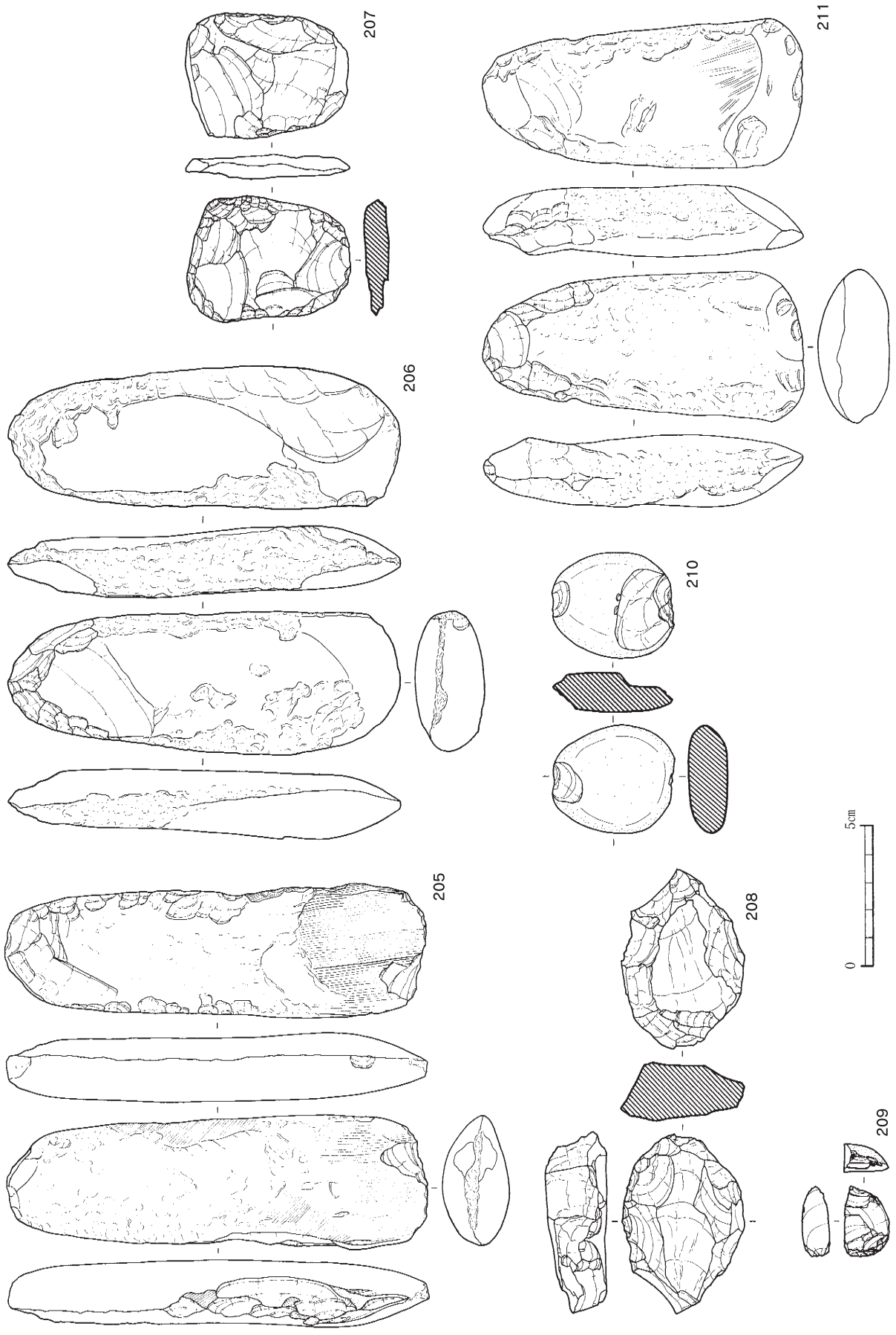
**打製石鏃**（第112図282～301）

B-10・11区、C-9～11区に出土した。特にB-11区、C-10区に多く出土している。石材は黒曜石、安山岩、頁岩、チャート、ホルンフェルス、凝灰岩、粘版岩と様々である。黒曜石も桑の木津留、姫島産と思われるものがある。長さ2cm程度を境に大きく2分される。

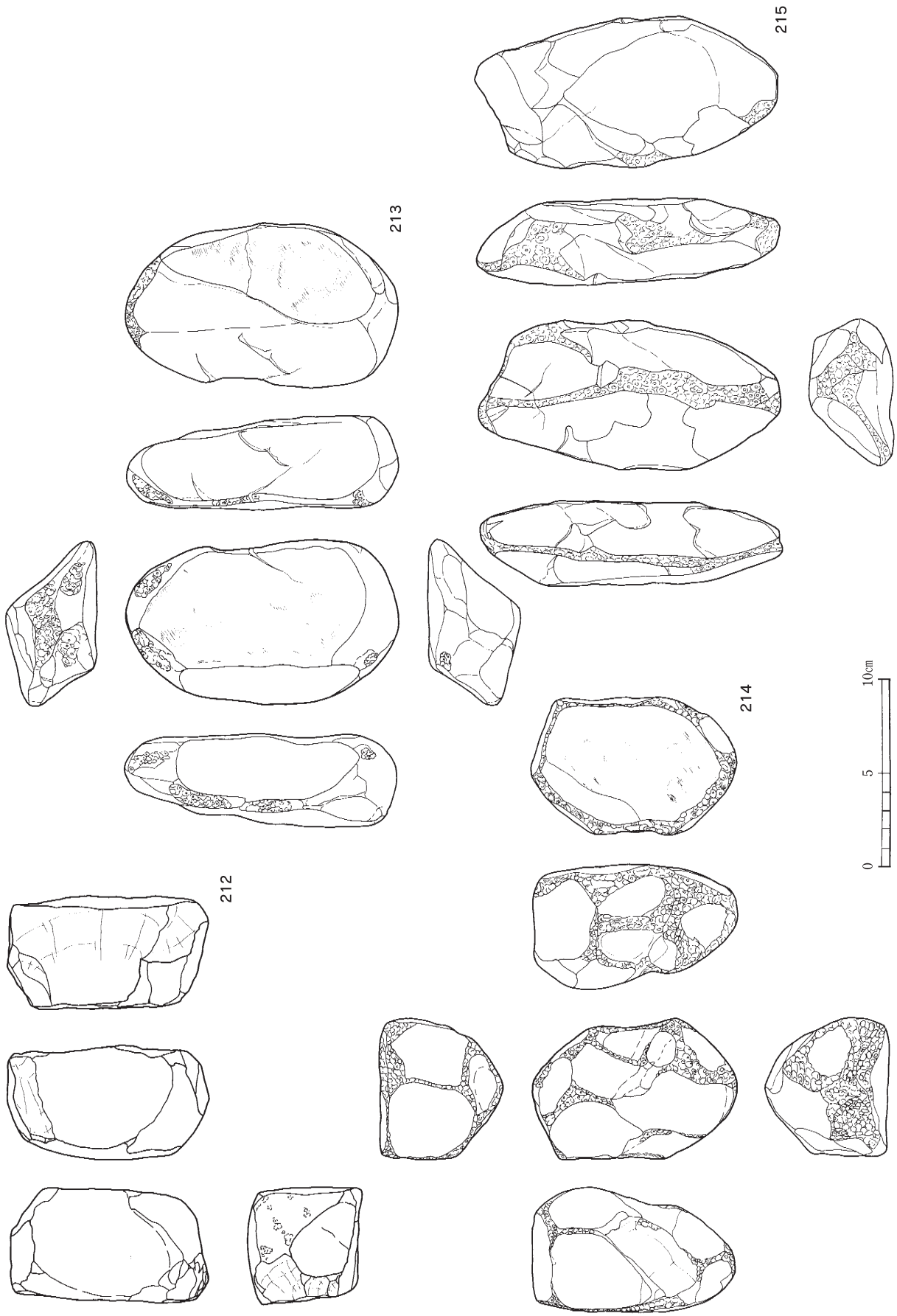
282は長さ1.3cm、長幅比1.18で、側縁がやや丸みを持ち、基部がやや挟りぎみのものである。

284は長さ1.7cm、長幅比1.31で、側縁は直線的、基部はわずかに窪むものである。

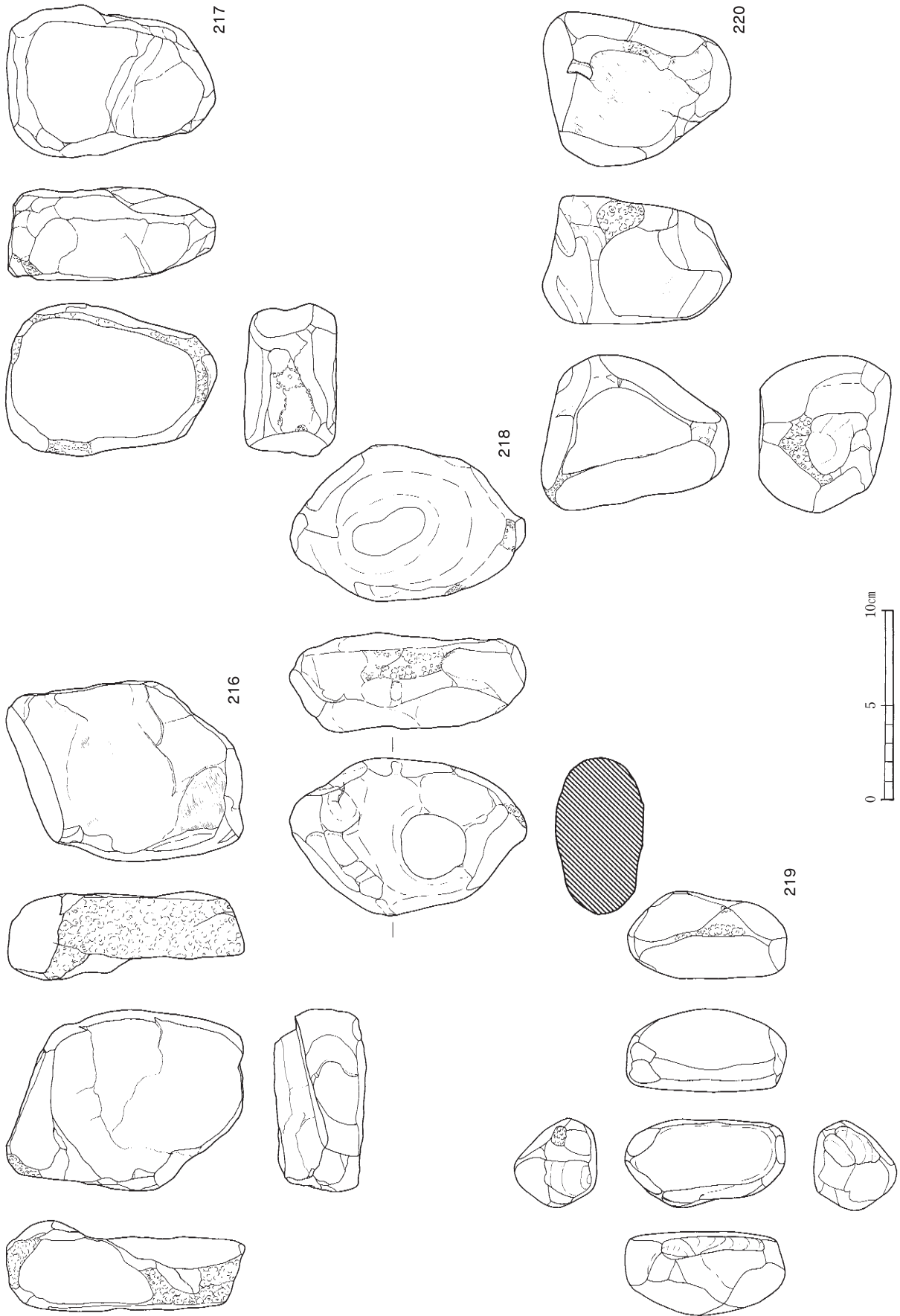
286、287は長さがわずかに異なるが、長幅比は1.00程度で側縁が丸みを持ち、基部がやや窪むものである。283は欠損品であるがこの類に当たる。



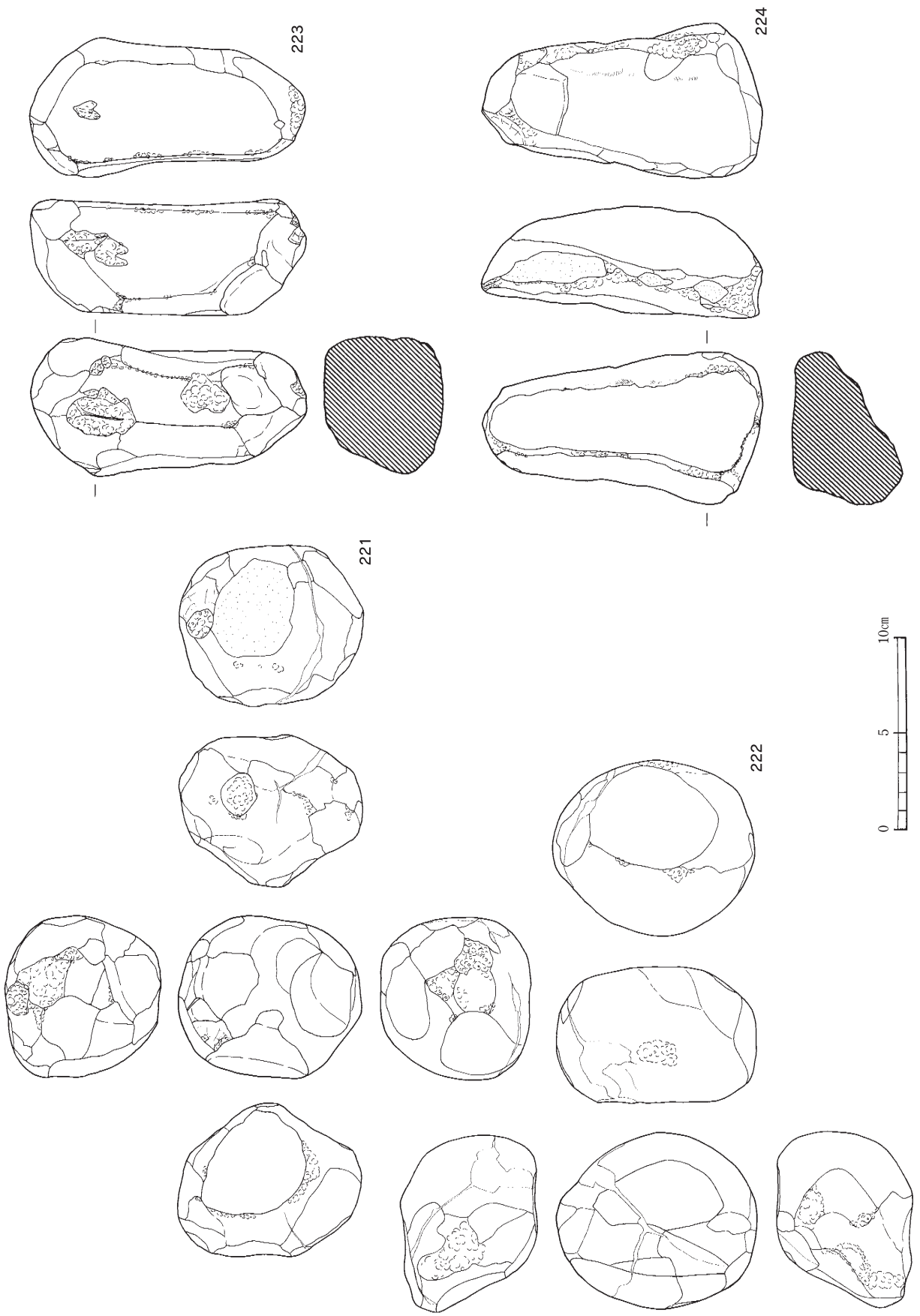
第96図 縄文時代草創期の石器 (3)



第97図 縄文時代草創期の石器（4）

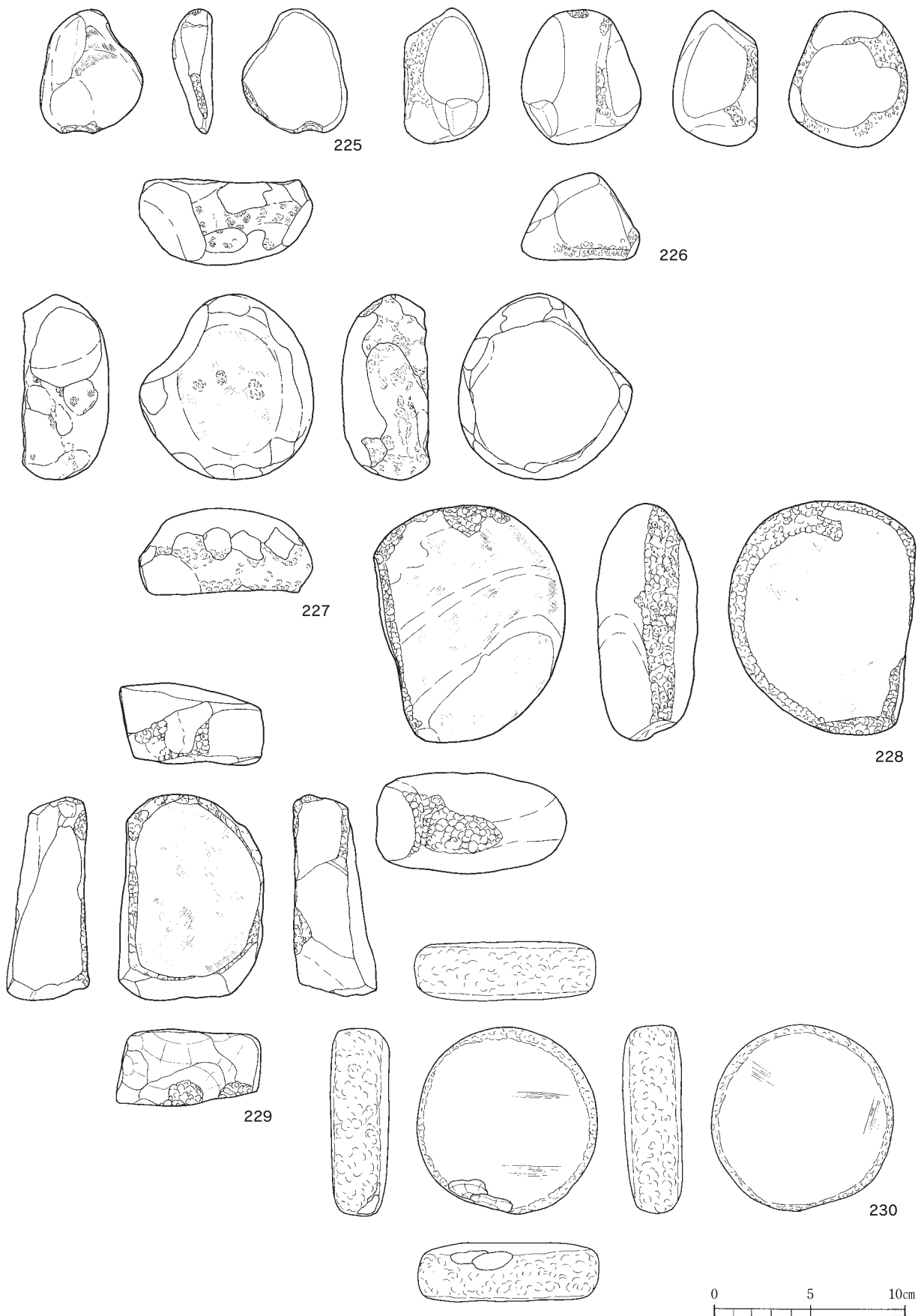


第98図 縄文時代草創期の石器（5）

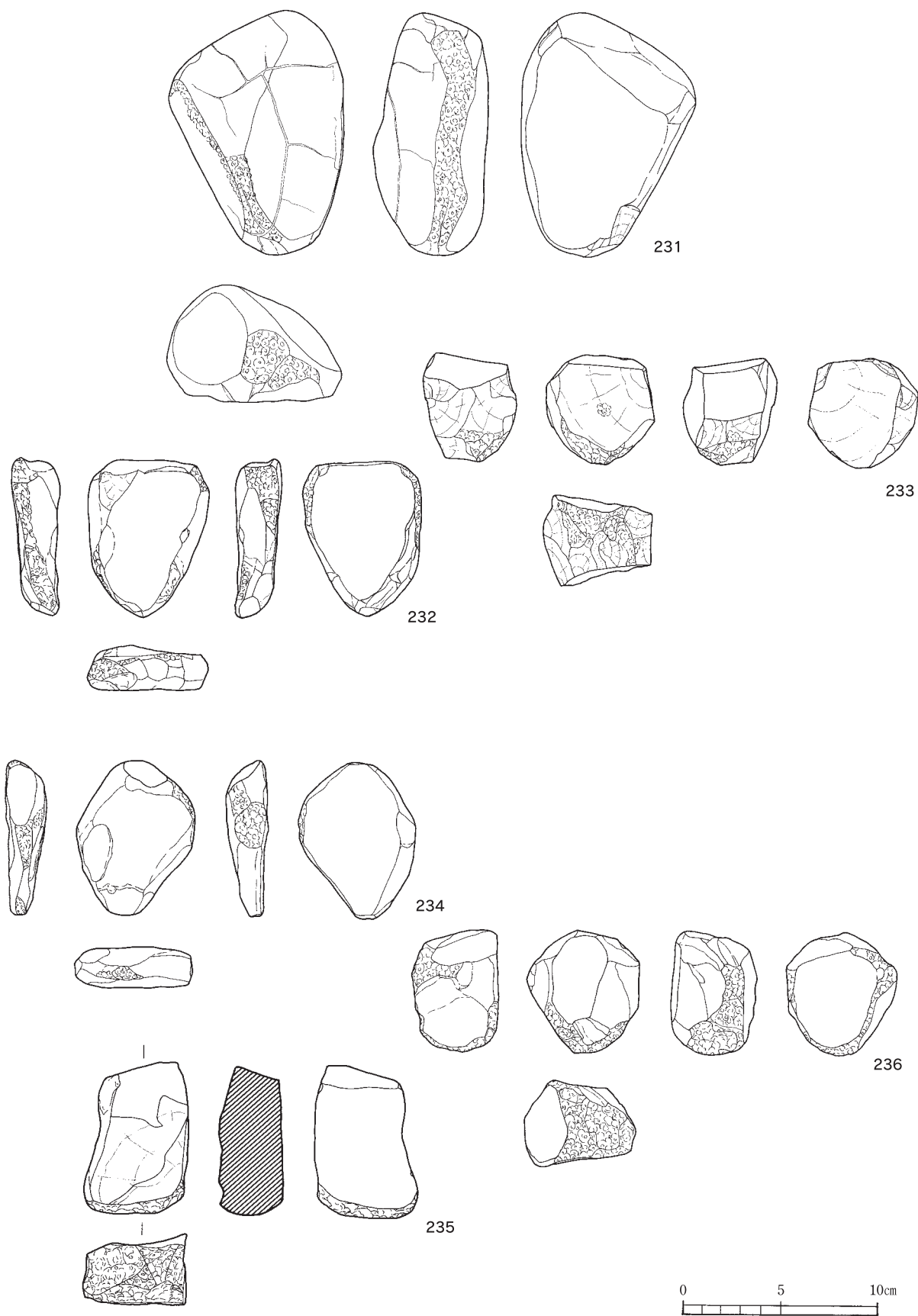


第99図 縄文時代草創期の石器（6）

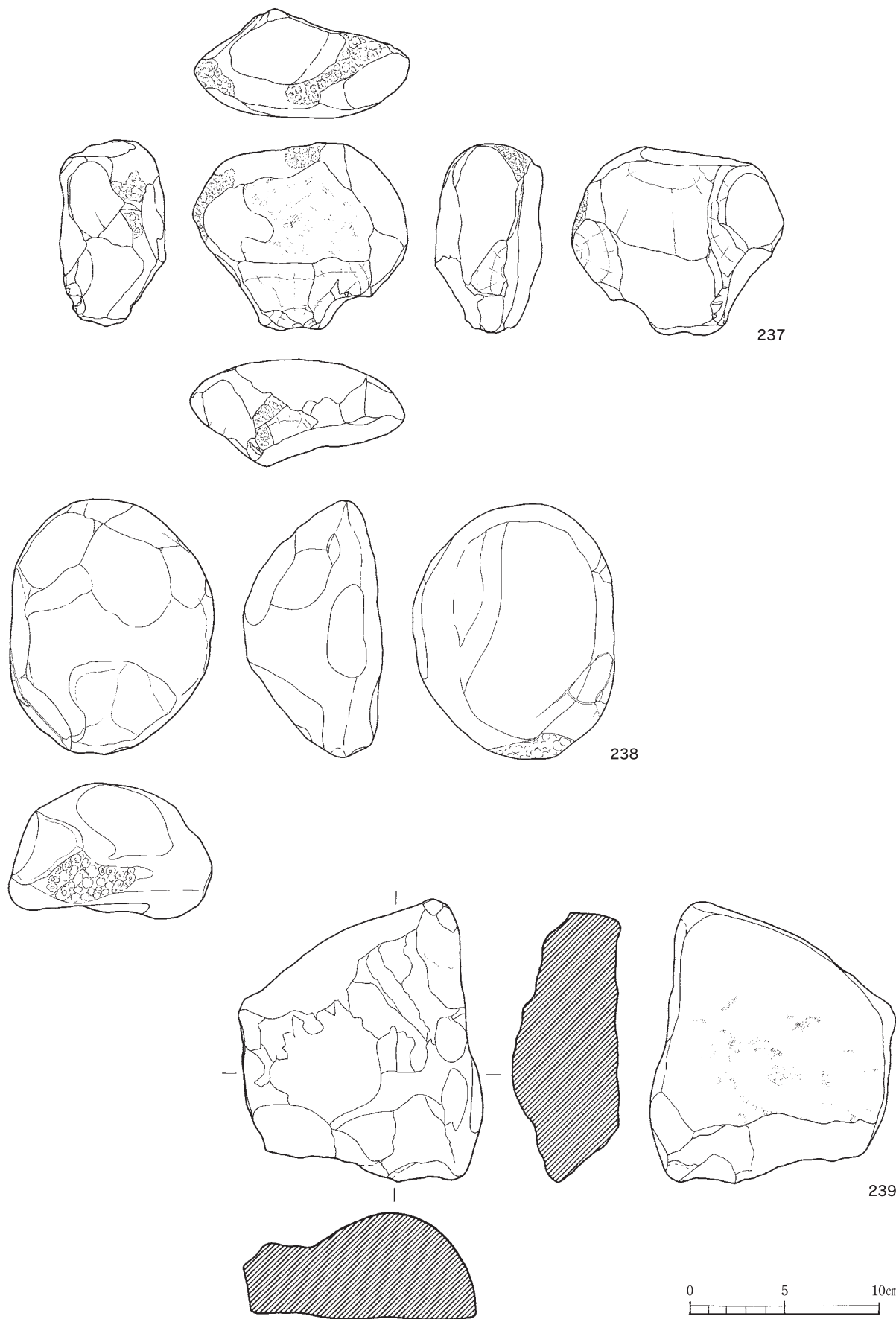




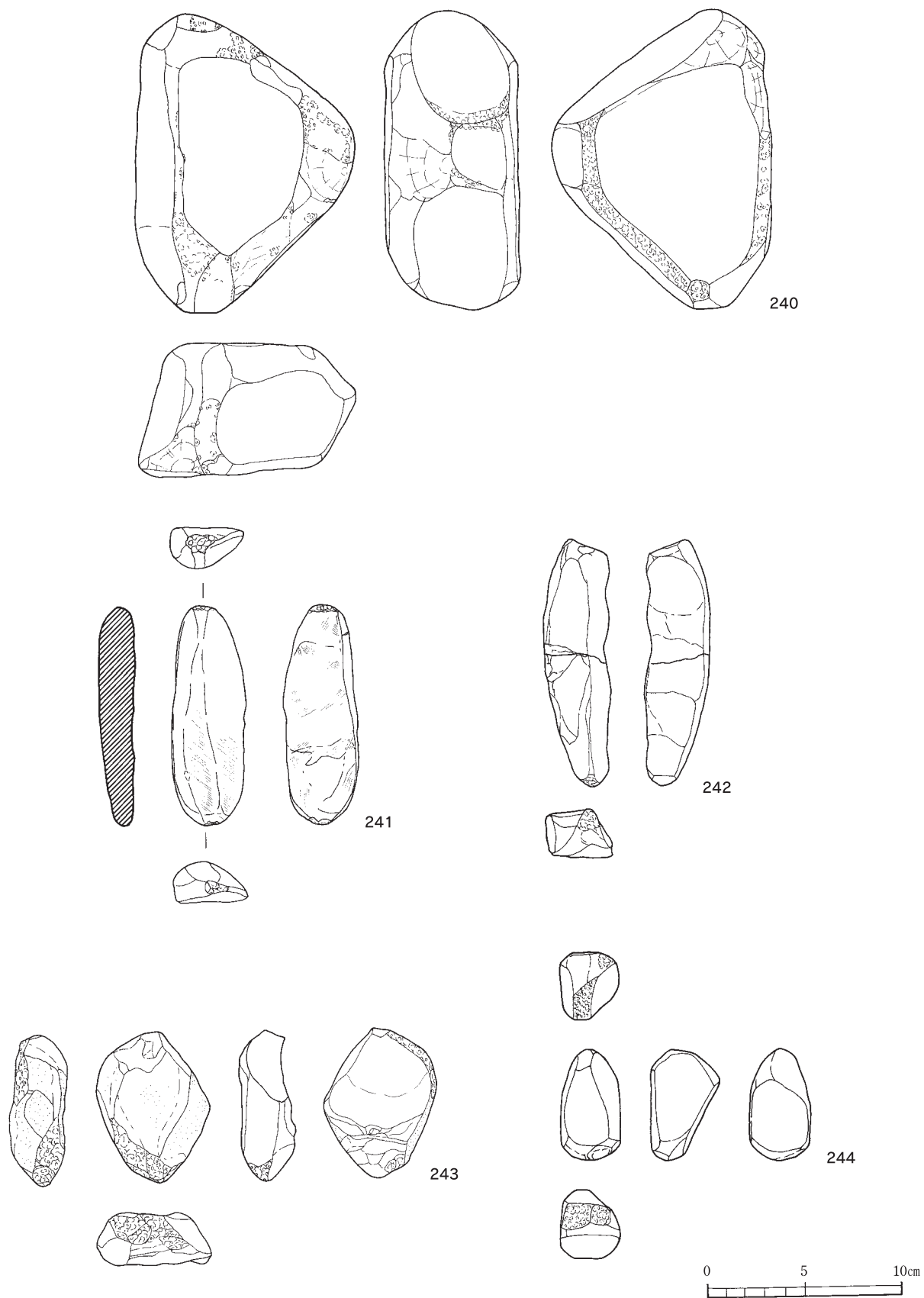
第100図 縄文時代草創期の石器（7）



第101図 縄文時代草創期の石器（8）



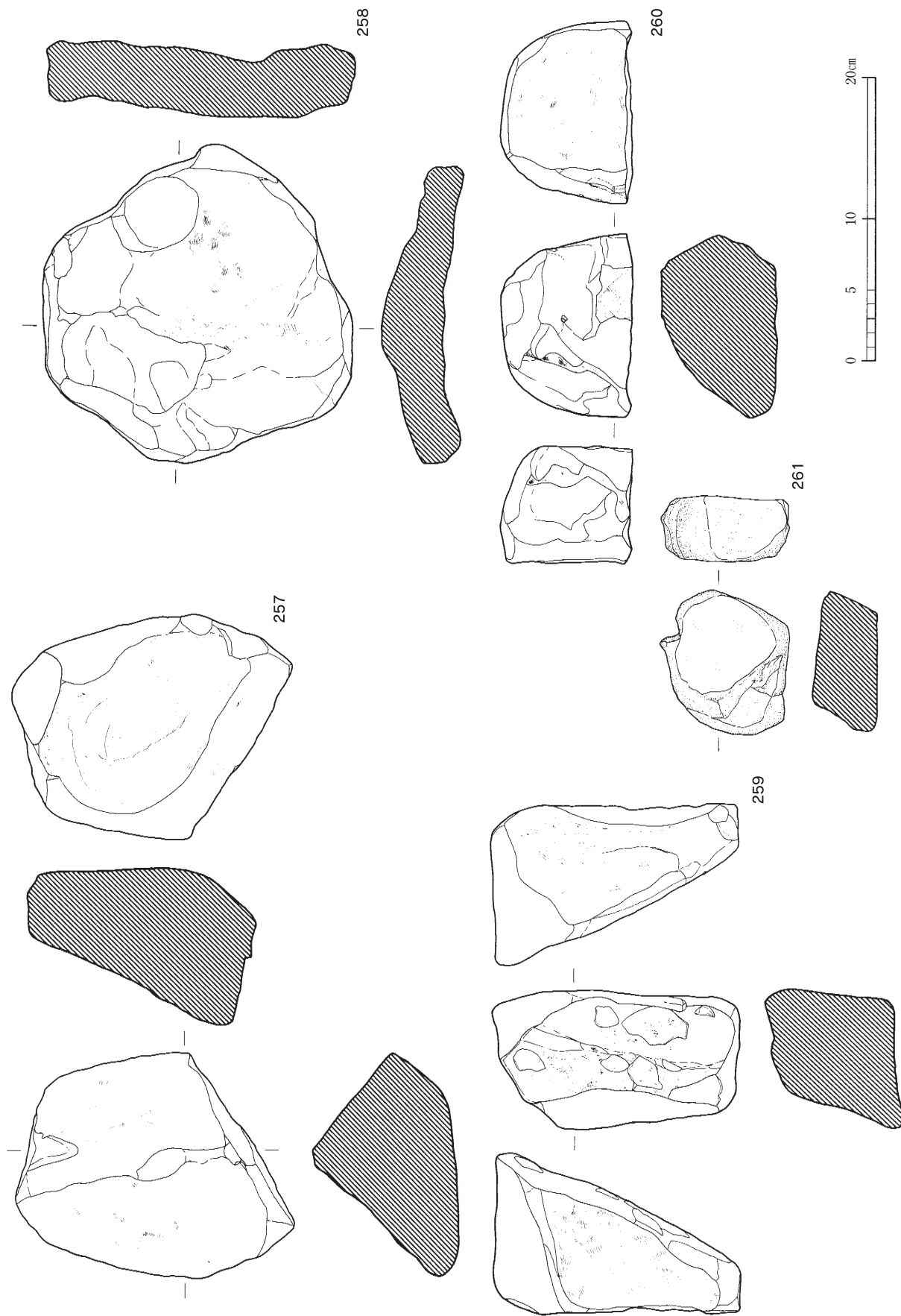
第102図 縄文時代草創期の石器（9）



第103図 縄文時代草創期の石器 (10)

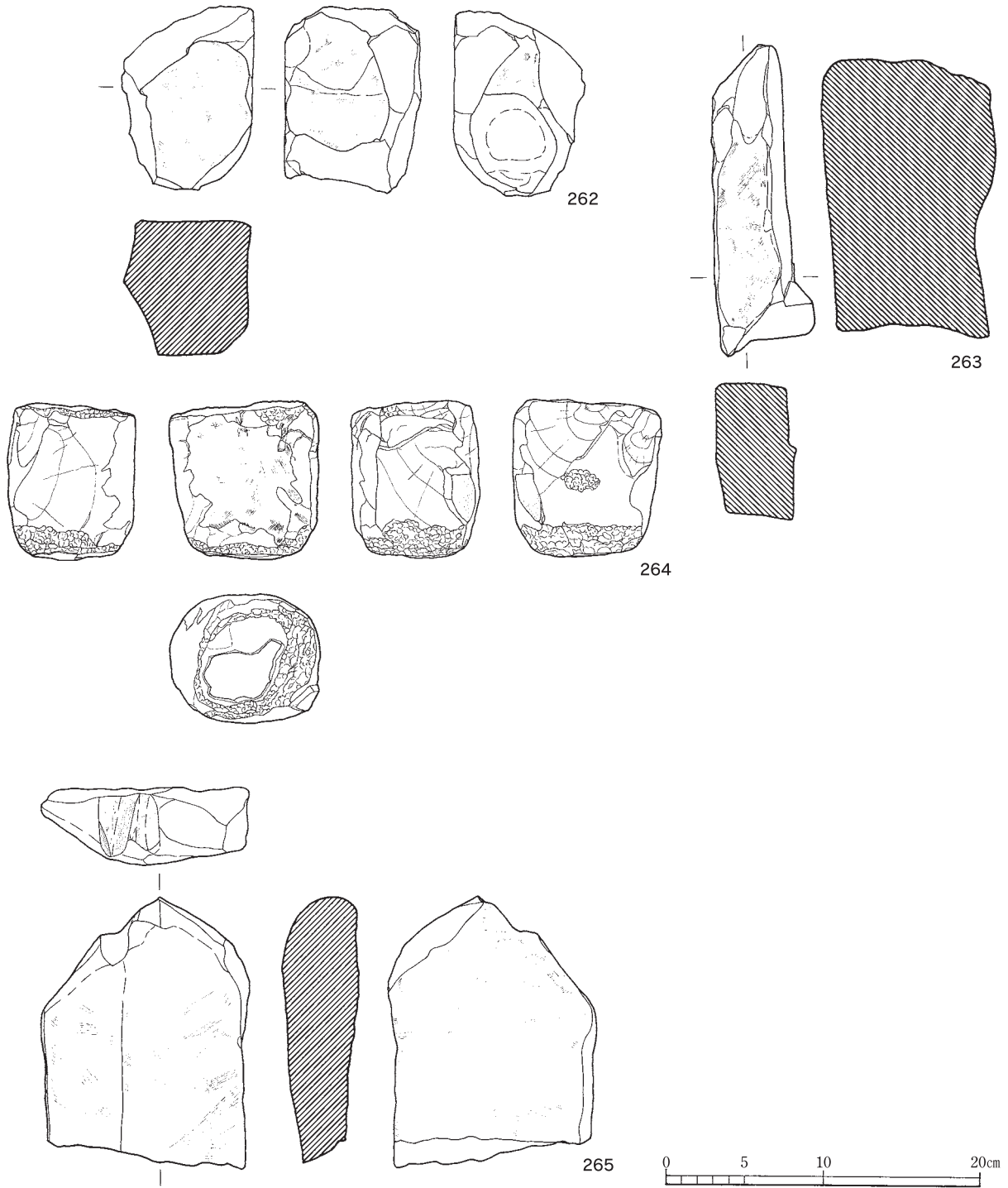


第104図 縄文時代草創期の石器 (11)

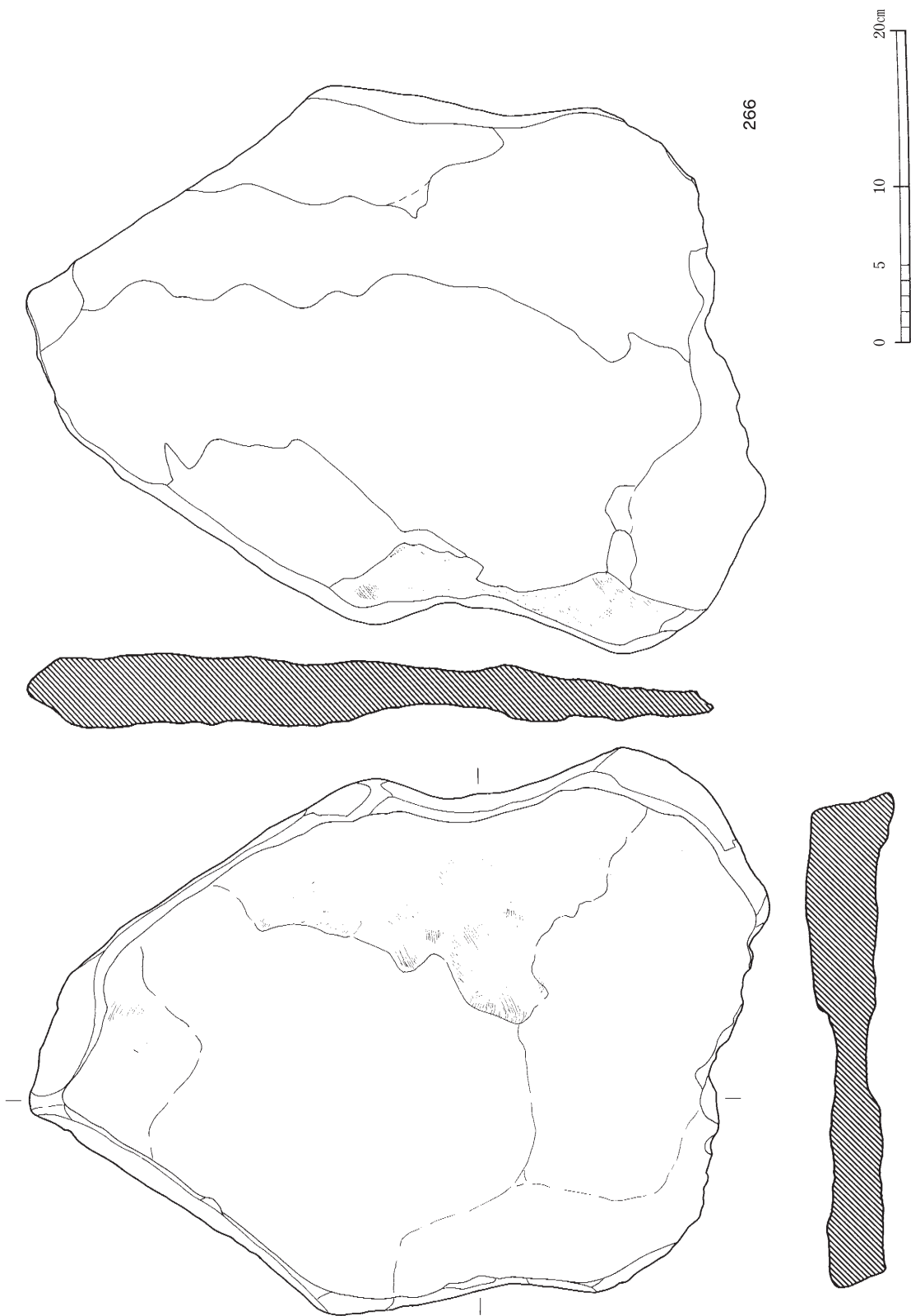


第105図 縄文時代草創期の石器 (12)

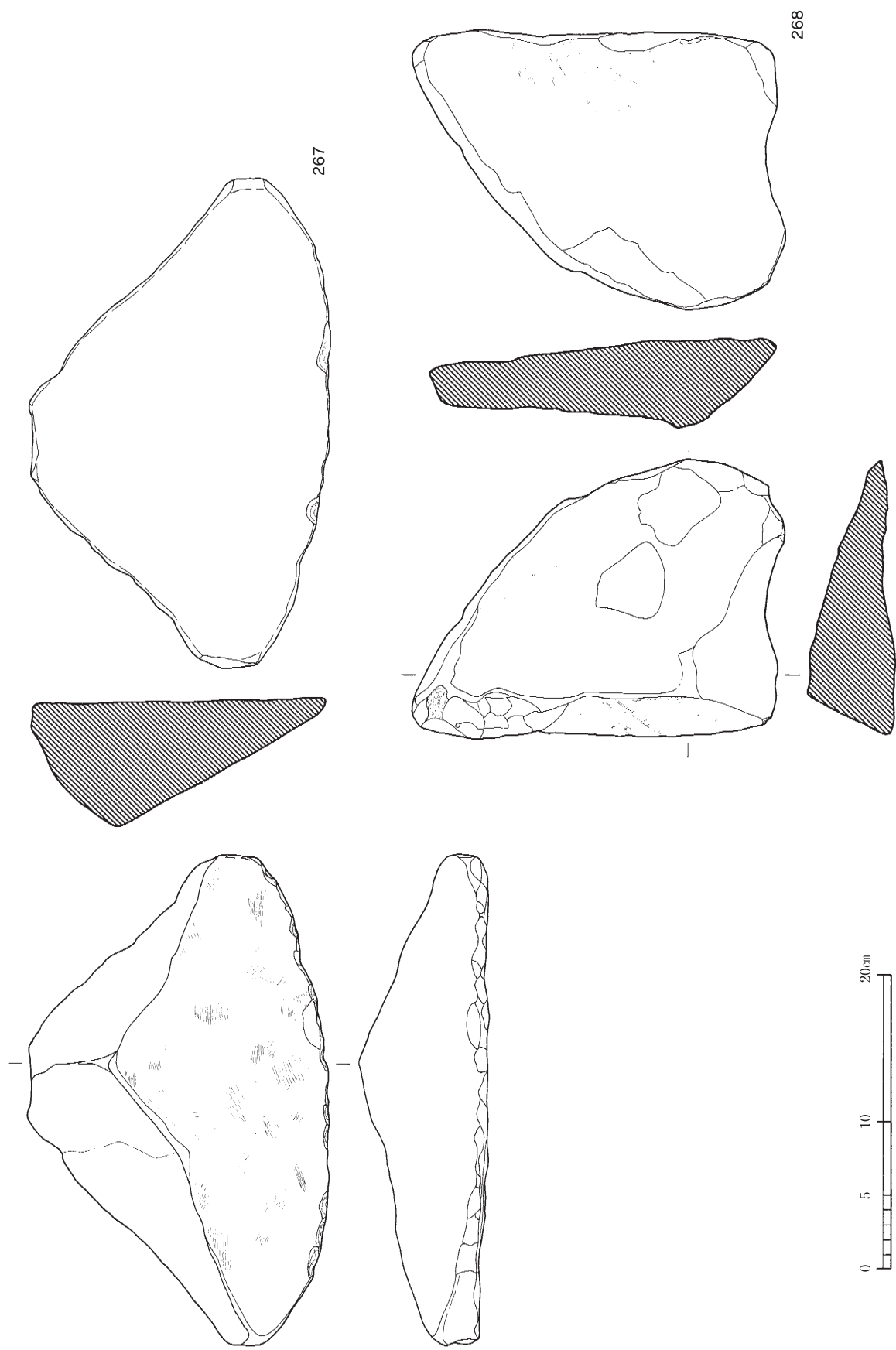




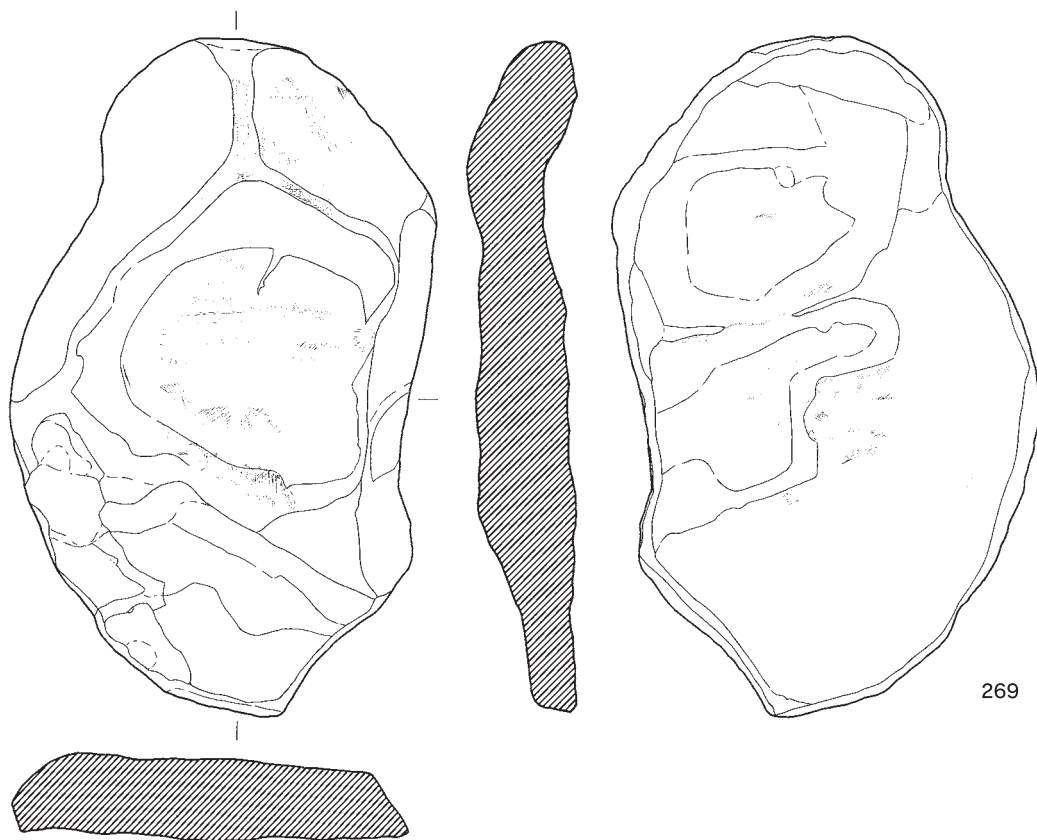
第106図 縄文時代草創期の石器 (13)



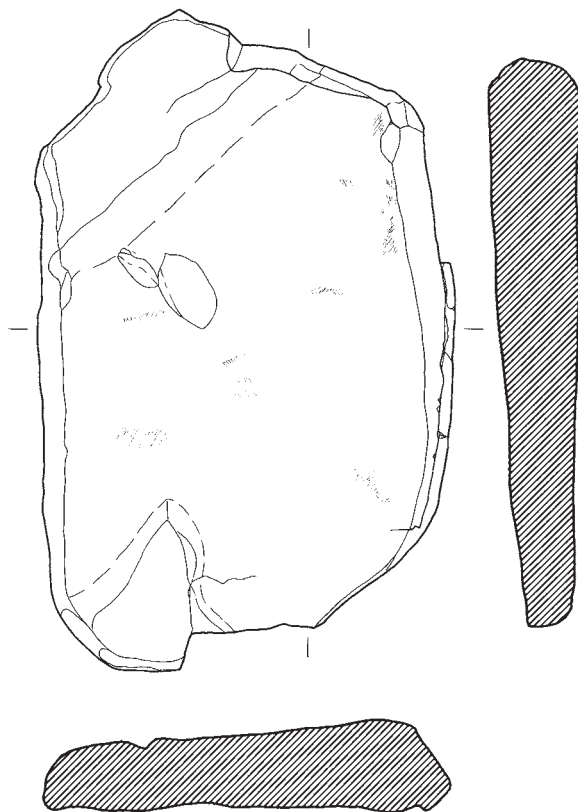
第107図 縄文時代草創期の石器 (14)



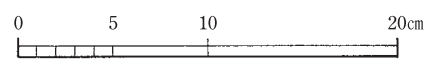
第108図 縄文時代草創期の石器 (15)



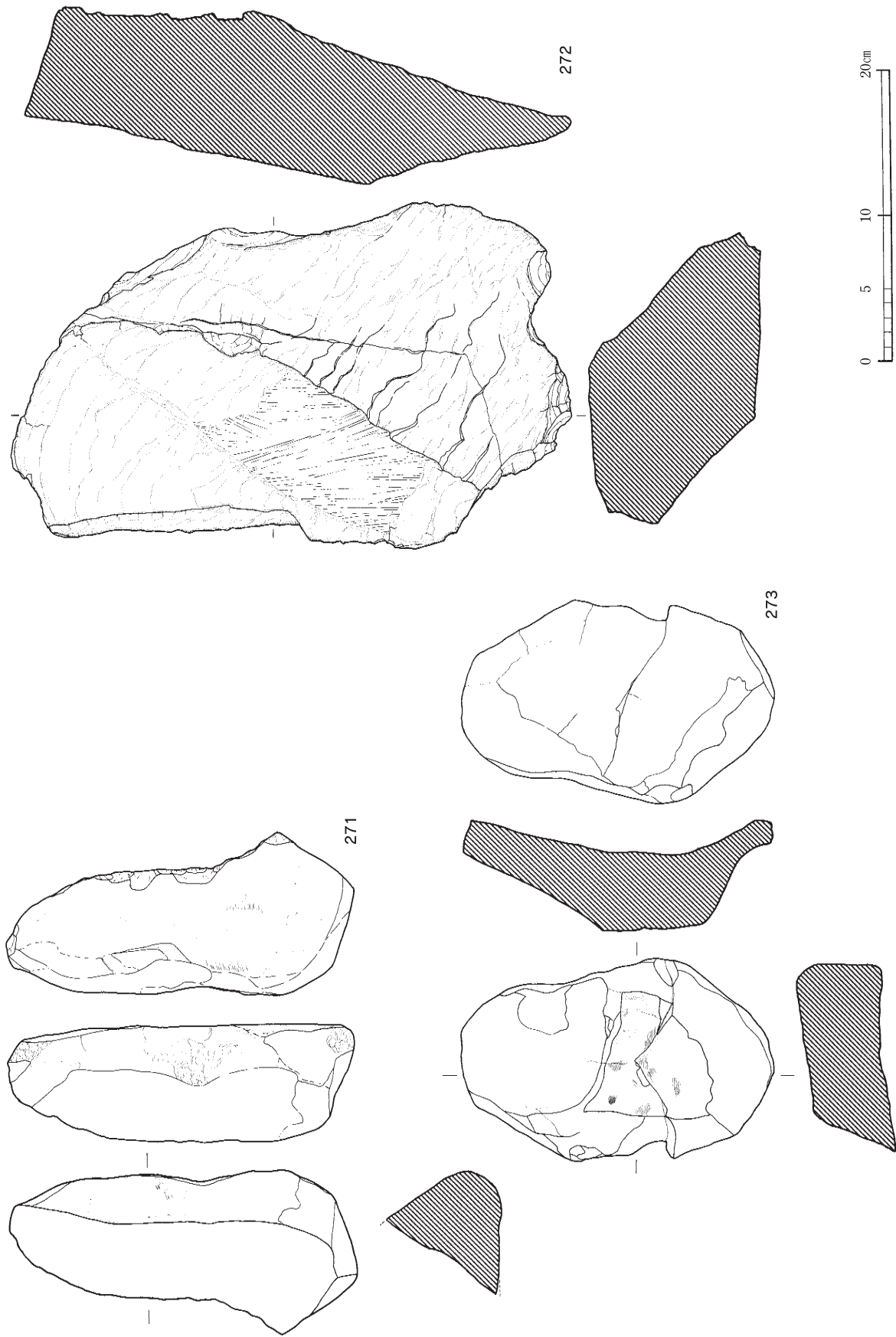
269



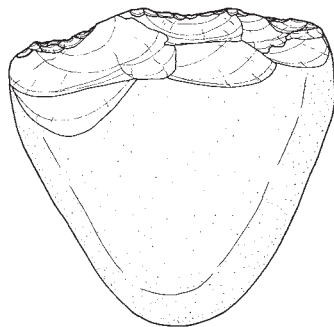
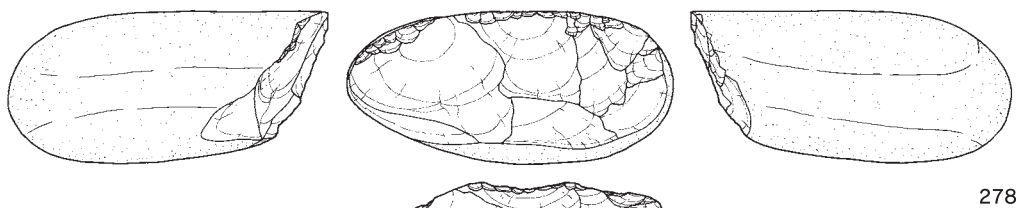
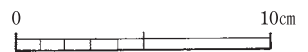
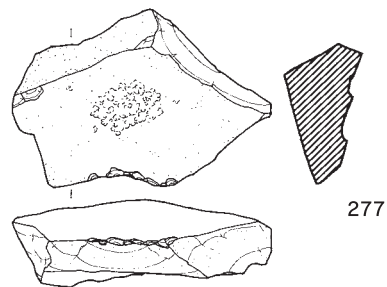
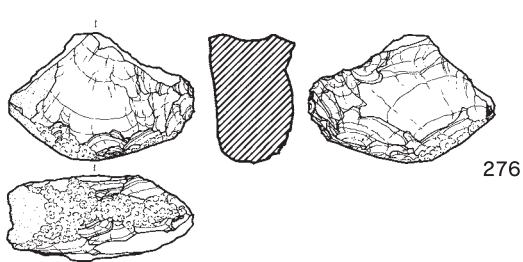
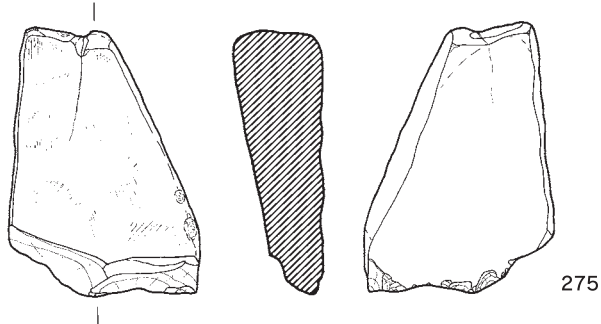
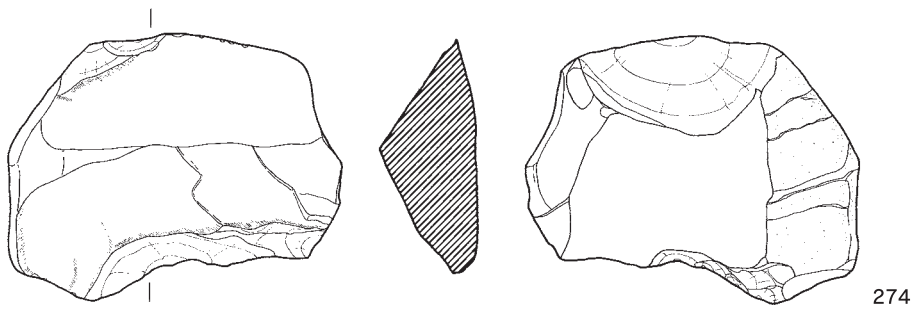
270



第109図 縄文時代草創期の石器 (16)



第110図 縄文時代草創期の石器 (17)



第111図 縄文時代草創期の石器 (18)



288は先端が欠損している。側縁は直線的であり、基部は大きく抉られ、逆刺は鋭利である。291はこれよりやや大きいと同じ形状である。姫島産の黒曜石を素材とする。289は先端、基部が欠損しているがこれらと同じ形状であろう。

290は欠損品である。磨製石鏃の未製品の可能性がある。

292～298は長さが推定2cm以上のもので、長幅比も2.00を超えらると思われ、槍状を呈している。側縁が丸みをもち、基部は平坦で、逆刺がない。B・C-10区に集中する。292はホルンフェルス製で素材の制約からか、大まかな剥離である。これ以外は側縁を比較的細かい調整を施している。301は欠損品である。

299, 300は未製品である。

#### 磨製石鏃 (第113図302, 305, 306)

B-10, C-11区から出土した。いずれも頁岩製である。厚さが2, 3mmで極めて薄い。

302は完形品で長さ3.6cm, 幅1.6cm (長幅比2.25)である。側縁が丸みをもち、中央付近で最大幅となる。基部はわずかに凹む程度である。正面は1方向からの研磨、裏面は2ないし3方向から研磨し、側縁付近は別に面取りしている。

305は先端が欠損しているが、側縁がわずかに丸みをもち、基部付近で最大幅となる。基部はわずかに凹むが逆刺はわずかにみえる。両面とも3方向以上から研磨している。側縁は明瞭な面取りはしていないが、細かく研磨し、断面も鋭くなっている。基部は面取りしている。

306は両面を研磨するが、側縁と基部を剥離して仕上げたものである。先端は欠損しているが、側縁がわずかに丸みをもち、基部はわずかに凹む。

#### 接合資料

硬質砂岩などの円礫で打ち欠かれたものと、その剥片が出土し、接合できた。剥片は当初、礫器をつくるために出た屑片とも思われた。しかし、礫器としたものには使用痕が認められなかったため、このことから石核と判断した。ただし、この剥片から製作された石器はなく、剥片そのものが石器として利用されたのではないかと考えられる。

#### 接合資料 a (第114図307～310)

C-10区から出土し、石核に3点の剥片が接合できた。石核(307)は打面調整をせず、素材元来の平坦面をそのまま打面としている。従って、剥片(308～310)には自然面が残る。308→310→309の順に剥離している。

#### 接合資料 b (第115図311, 312)

C-9区から出土し、石核に1点の剥片が接合できた。この石核(311)も打面調整をせず、平坦な自然

面をそのまま利用している。剥片(312)と接合した。

#### 接合資料 c (第116図313～315)

C-10区から出土し、石核に2点の剥片が接合できた。石核(313)は剥離面に対して右方向から加撃して打面を作っている。また、剥離面と反対側に細かな調整が施されている。314→315の順で剥離する。315は節理面で剥離している。

#### 接合資料 d (第117図316, 317)

B・C-10区から出土し、石核に1点の剥片が接合できた。石核(316)は平坦な礫を素材とし、自然面をそのまま打面としている。剥片(317)はやや側面から剥離しており、自然面を多く残している。

#### 接合資料 e (第117図318, 319)

C-9区Ⅲ層出土の剥片(319)とC-10区Ⅴ層出土の剥片(318)とが接合できた。元来Ⅴ層のものがⅢ層へ移動したものと判断した。石核は不明であるが、形状や自然面を多く残す特徴から先述のa, b, dと同様な素材であったと思われる。

#### 接合資料 f (第118図320～325)

C-10区から出土した剥片6点が接合できた。素材の礫はやや小さいものと思われる。また、打面は自然面のままである。321→324→320→323→322→325の順で剥離している。

#### 接合資料 g (第118図326, 327)

C-10区から出土した剥片2点が接合できた。327は縦長である。327→326の順で剥離している。

#### 接合資料 h (第119図328～331)

C-13区から出土した剥片4点が接合できた。角礫を素材としているため、上面と側面から剥離しているが、打面は自然面のままである。329→330→328→331の順で剥離している。

#### 接合資料 i (第119図332～334)

C-10区から出土した剥片3点が接合できた。石材は頁岩である。334を剥離し、332と333がついた状態のまま横方向から剥離された、さらに分割されたと思われる。333には細かい調整剥離がみられる。

#### 接合資料 j (第120図335～340)

C-9区で出土したもので、1点はⅢ層に浮き上がっていた。特徴的な模様のある硬質砂岩の円礫を母岩とする。その平坦面を打点とし、337→337・338・340→335・339と剥離したと思われる。

#### 接合資料 k (第120図341, 342)

C-10区から出土した剥片2点が接合できた。頁岩を素材とし、横長の剥片を取っているが、節理で剥離しやすい素材のため、自然の剥離の可能性もある。

#### 石核 (第121～128図343～362)

B-10～12, C-10・11, D-12区から出土した。特に、C-10区から最も多く出土している。石

材は362を除き、主に砂岩、頁岩及びホルンフェルスの扁平な円礫を利用し、打面調整は行わない。

343～356は砂岩製である。343は両側縁側からも剥片を取り、最終的には細かく調整したのち廃棄している。344も細かい調整がみられるが、正面観は比較的平坦であり、打面に対しほぼ直である。345は大き目の剥片をとったあとが残る。346は大きく3方向からの作業が行われた痕跡がある。側面観はやや鋭角である。347は断面三角形の礫を使用している。最終局面で細かい調整を行っている。348～350の側面観は鋭角である。348は細かい調整が残る。349は大きな剥片をとった状況である。350は左側面からの大きな剥離が残る。351は断面三角形の礫を利用しており、上面と右側面の2面が打面となっている。細かい調整が残り、剥離面は平坦である。352もやや断面三角形であるが、打面は上面のみで、細かい調整が残り、平坦である。353は大分、剥離している。上面からと左側面から細かい調整を行い、平坦面を残している。354も上面と側面からの細かい調整が残り、平坦である。355は左側面から大きな剥離がなされ、下面には自然面が残らない。左側面には細かい調整もみられる。356は下面のほうが平坦であるが、曲面をなす上面及び左側面を打面としている。細かい調整が残る。

357・358は頁岩製である。C-10区とD-12区からの出土で、散在している。357は細かい調整がみられ、平坦である。左下方からの剥離もなされている。358はより扁平な礫を使用し、大きな剥離が残り、側面観は鋭角である。

359・360はホルンフェルス製である。361は正面及び両側面から大きな剥離を行い、側面観はやや鋭角である。362は上面と右側面から剥離し、右側面からのものは下面を大きく剥離している。

361は頁岩製で、左側面には節理面がある。上面と右側面に細かい調整が残る。側面観は鋭角的である。表面（自然面）に敲打痕がみられる。

362は凝灰岩製でB-11区から出土した。当初は下面側から剥離したものであると思われるが、切断して上下を逆転し、打面を作り、剥離している。

#### 礫器 (第129図363, 364)

363は先述の石核と似た形状をしているが、剥離により、断面角度が鋭角であり、剥離面に敲打痕がみられたので礫器とした。ただし、敲打は自然的な潰れの可能性もある。出土地点がB-12区で石核としたものとやや異なった出土をしている。右側面も剥離している。

364はC-8区から出土した。自然面を残す大きな剥片を素材とし、下面からの大きな剥離や、調整がみられる。使用痕はみられない。

#### 石皿 (第130図365)

365はC-10区から出土した。砂岩製である。上面に磨痕が顕著にみられる。

#### 砥石 (第130図366)

366はC-8区から出土した。砂岩製である。断面四角形で、上面に磨痕があり、面をなす。

#### 磨石・敲打石 (第131図367～370)

整った円礫を使うものと、不整形な礫を使うものがある。

円礫を使うものはD-14区から出土している。砂岩製で、長さ8.6～10cm、幅6.3～7.5cm、長幅比1.15～1.59、重さ280～300gである。

367は磨痕のみがみられる小さいものである。368は磨痕と敲打痕がみられるもので、やや長楕円形で、両面に磨痕があり、片面中央に敲打痕が残る。

369と370は不整形な敲打石である。C-13区とD-14区から出土している。重さが250g程度である。

#### 研磨石製品 (第131図371, 372)

扁平で棒状の礫を研磨しているものである。

372はC-12区から出土したもので、安山岩製である。側縁が一部打ち欠かれている。373はC-10区から出土した。砂岩製である。

#### 2次加工剥片 (第132図373)

373はB-10区から出土した。砂岩で、節理面を残す剥片で、側面に剥離がみられる。

#### (C地区)

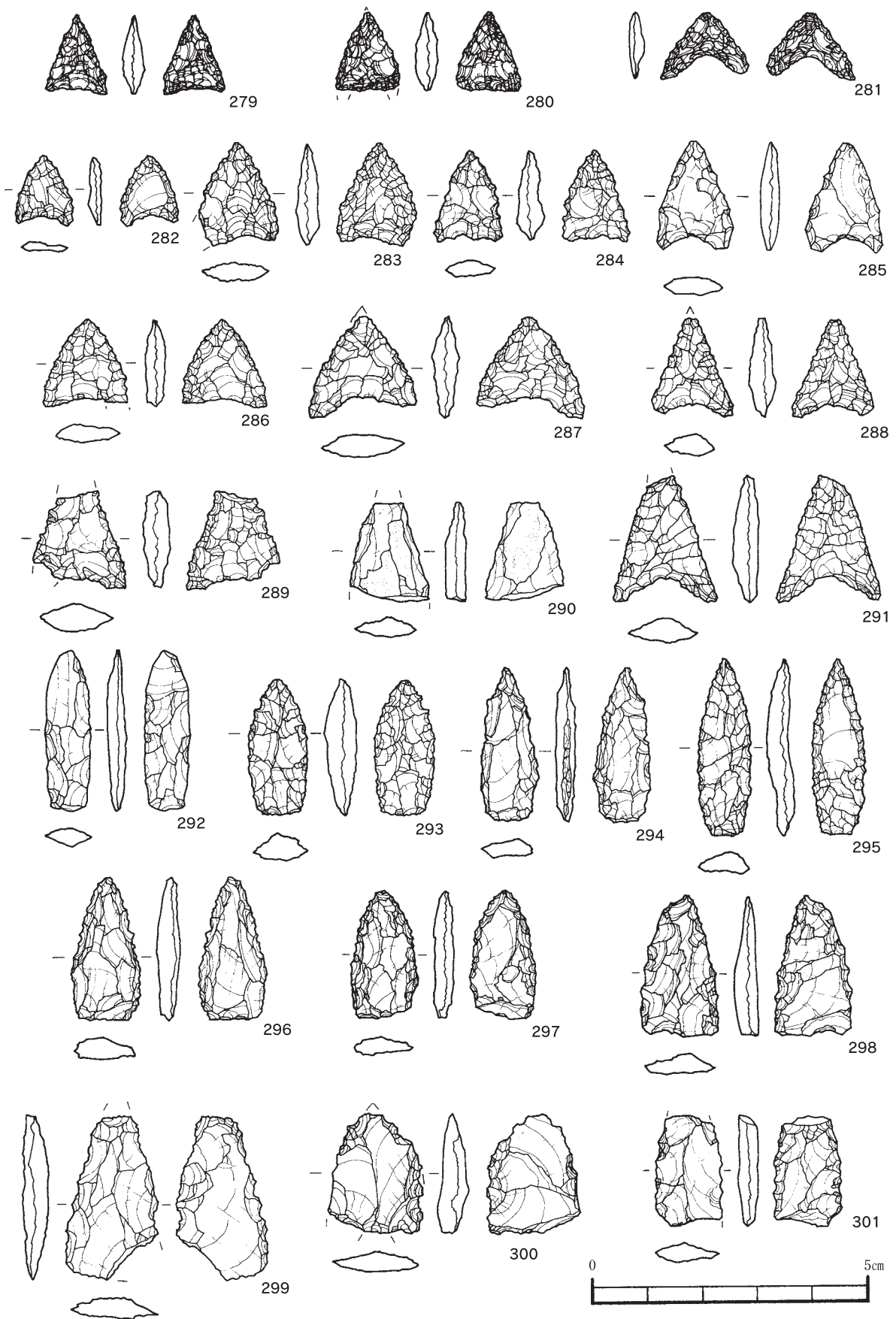
C地区からは少量であるが、磨石、礫器が出土した。

#### 磨石 (第132図374)

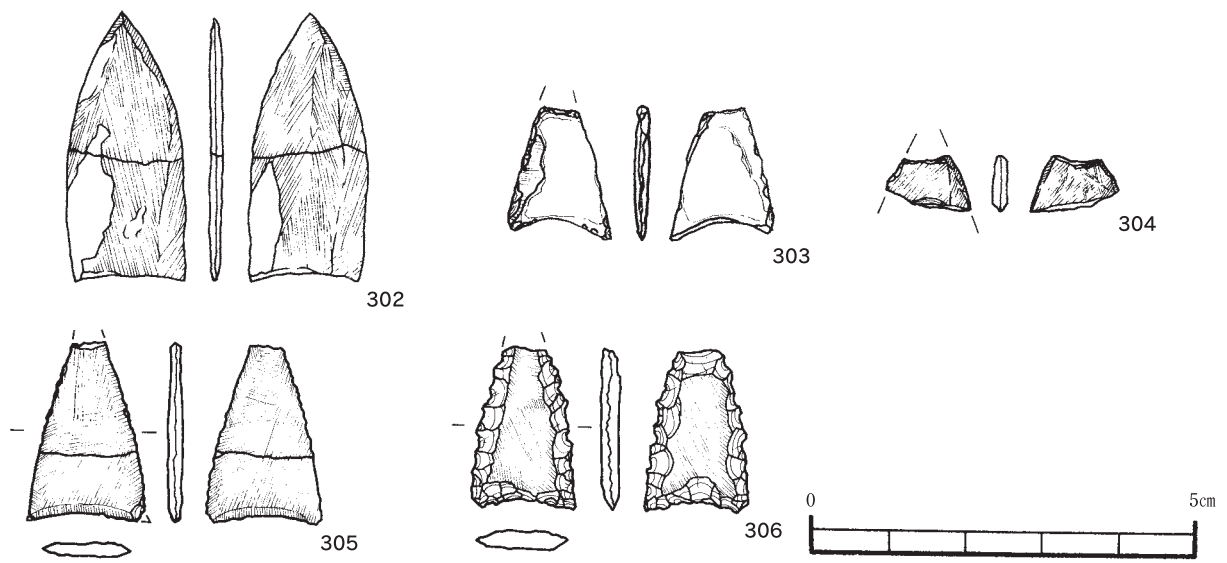
374はやや大きめの磨石で両面、側面に磨痕がみられる。砂岩製である。

#### 礫器 (第132図375)

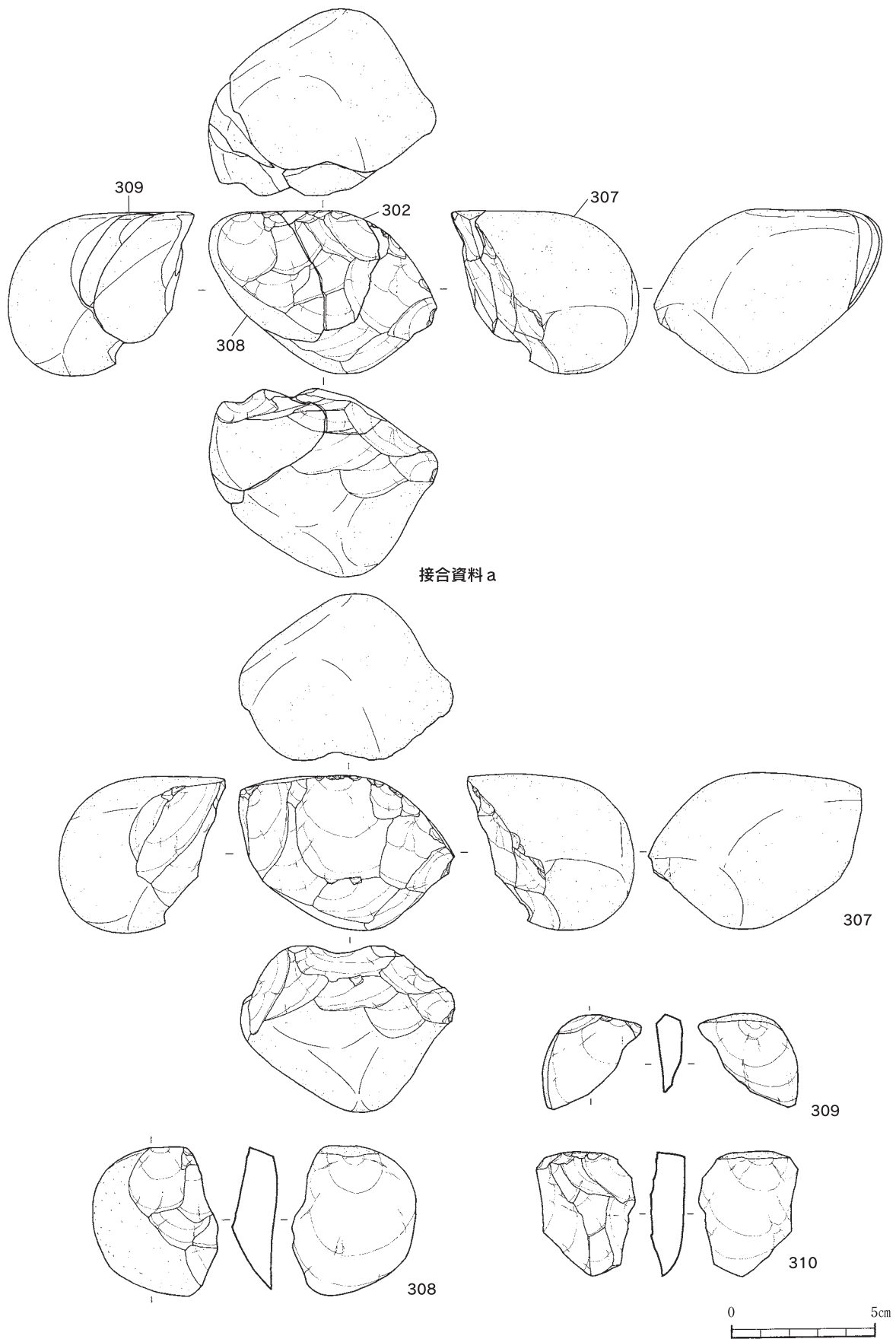
375は剥片を片面からさらに打ち欠いたものである。端部が一部つぶれている。また、両面が著しく擦られている。



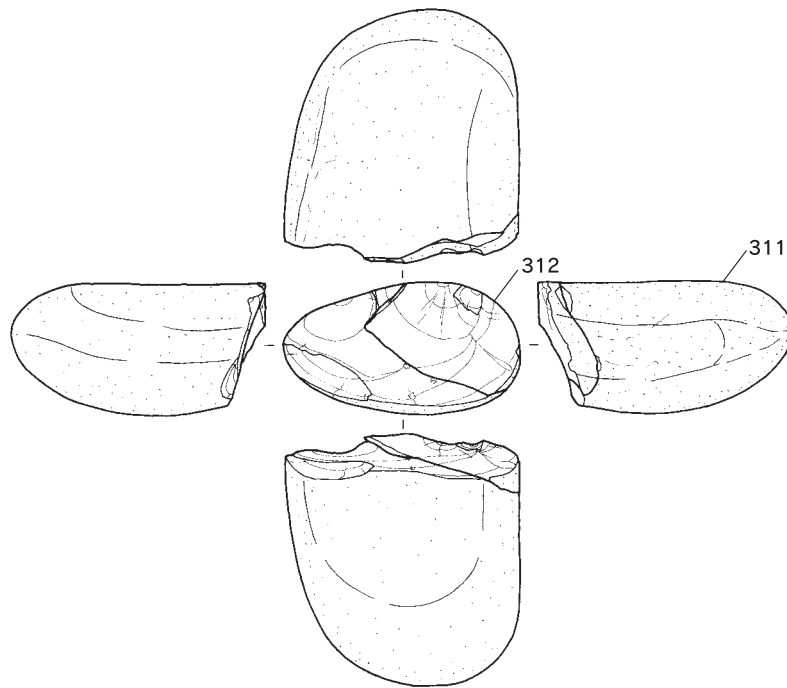
第112図 縄文時代草創期の石器 (19)



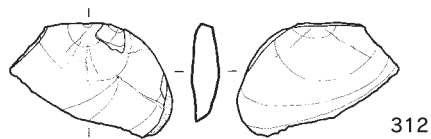
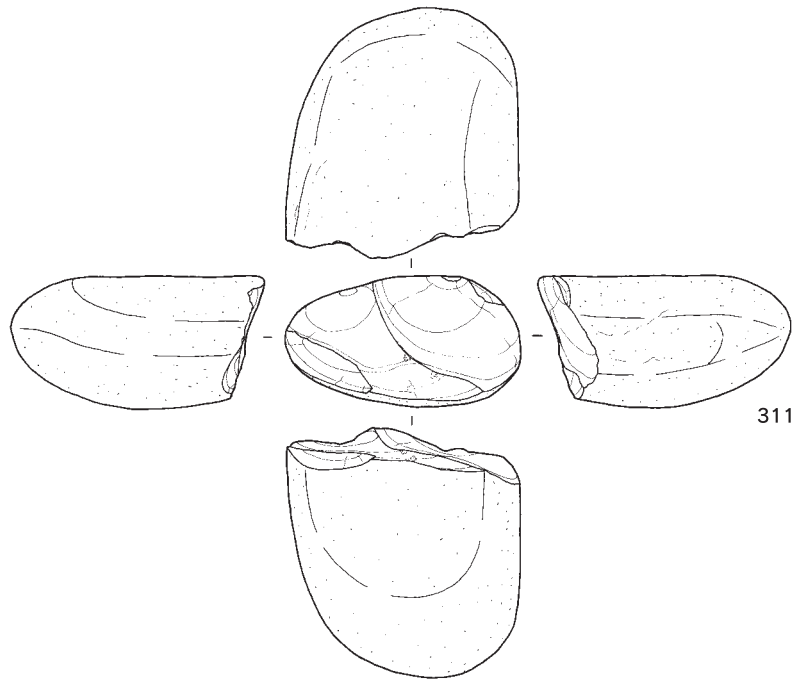
第113図 縄文時代草創期の石器 (20)



第114図 縄文時代草創期の石器 (21)

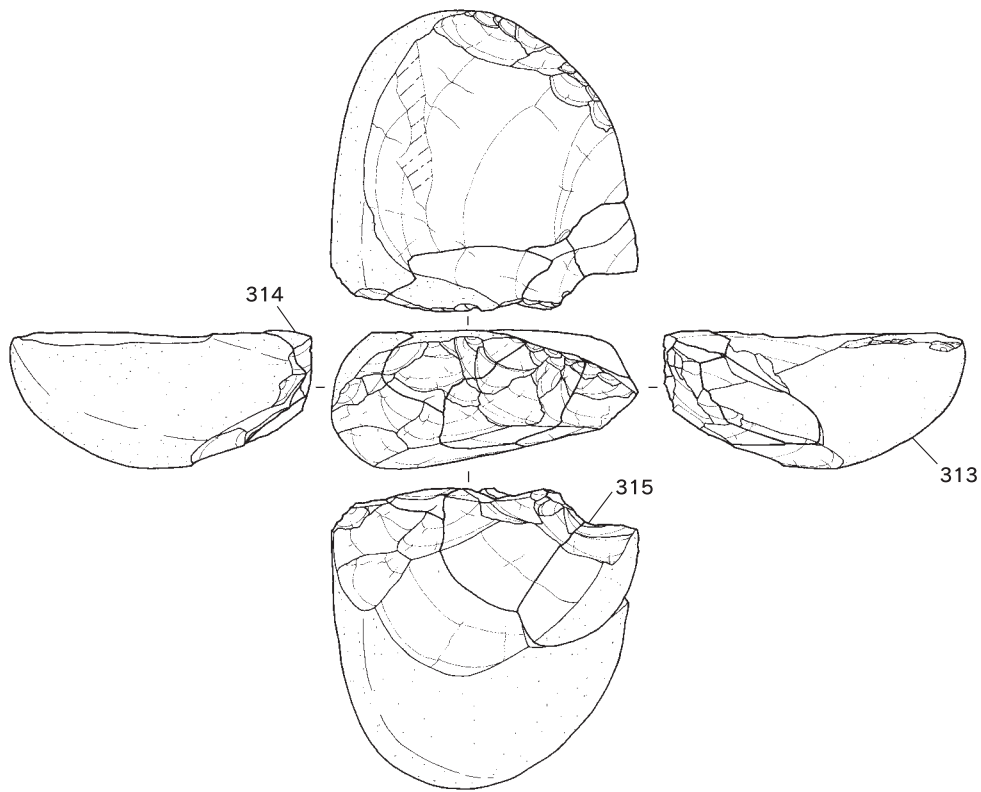


接合資料b

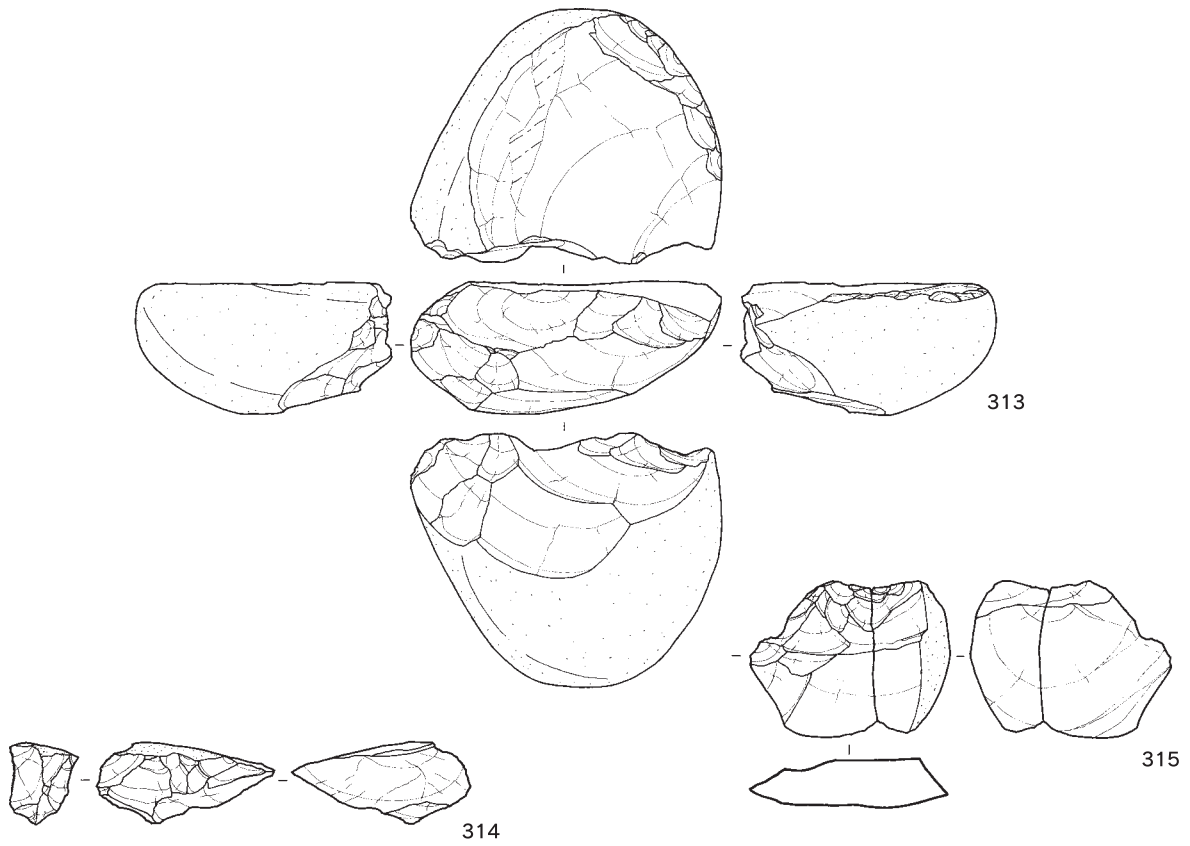


第115図 縄文時代草創期の石器 (22)

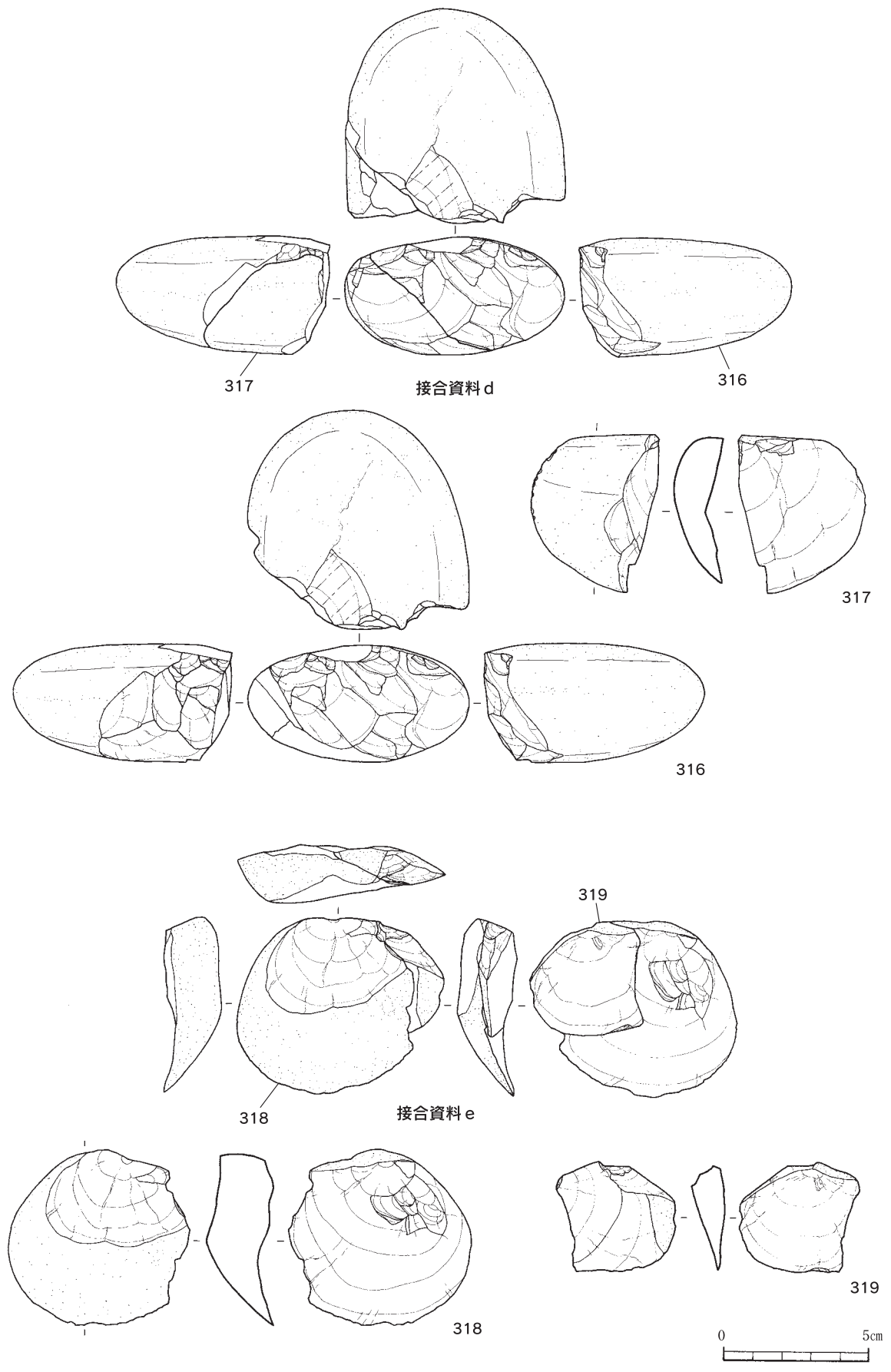




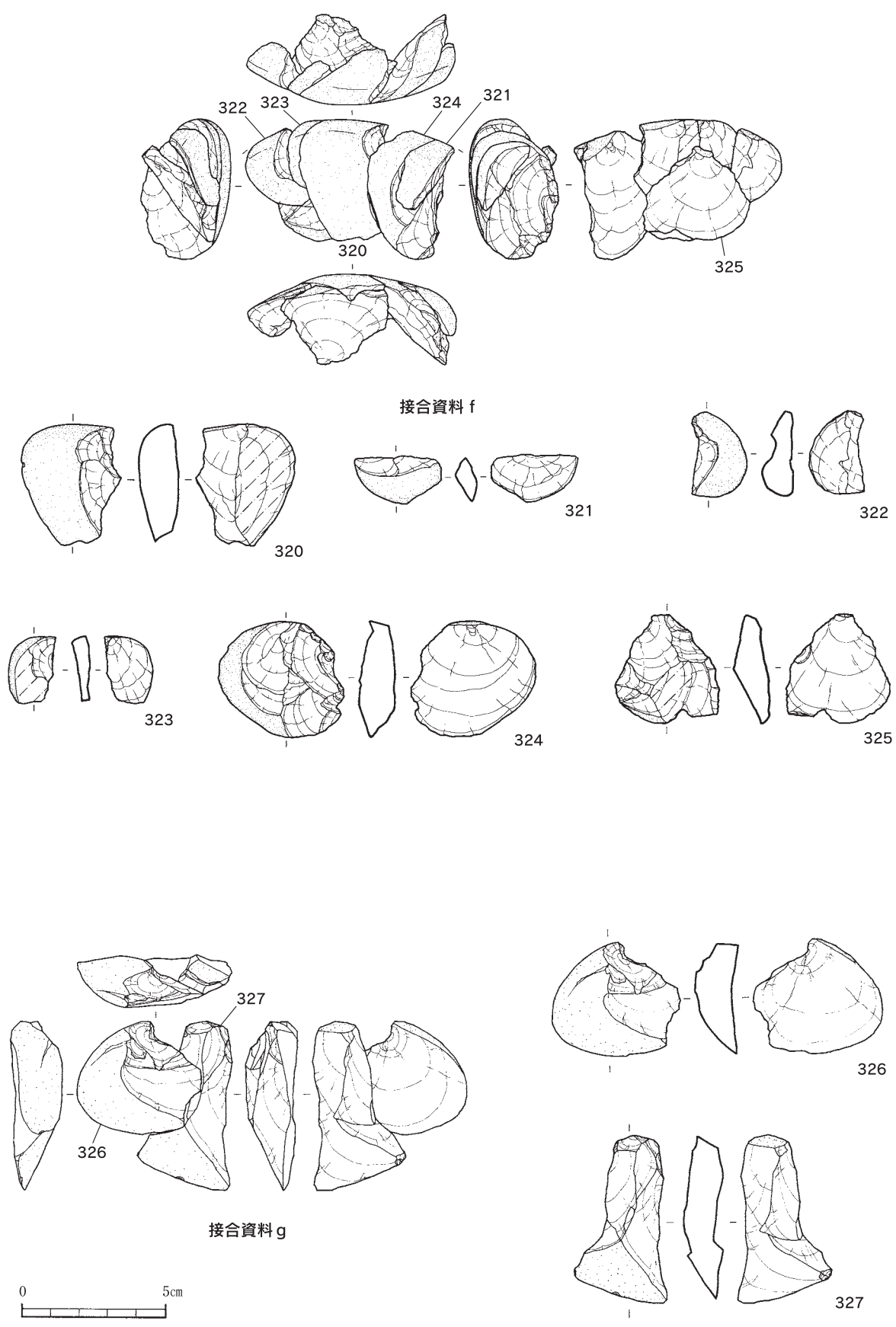
接合資料c



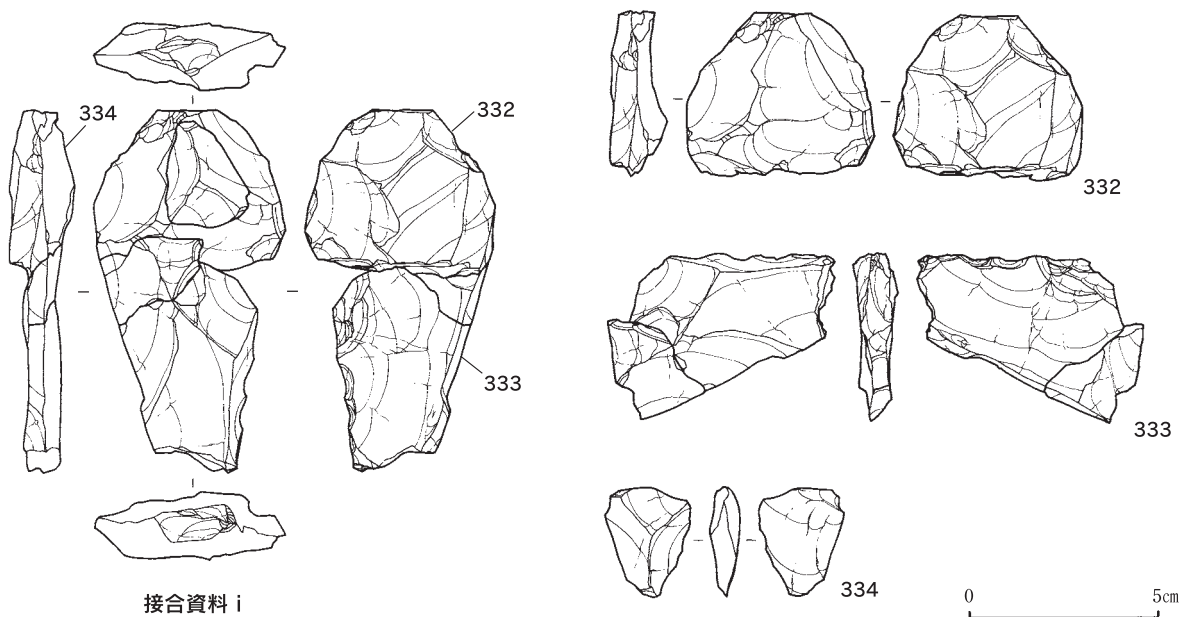
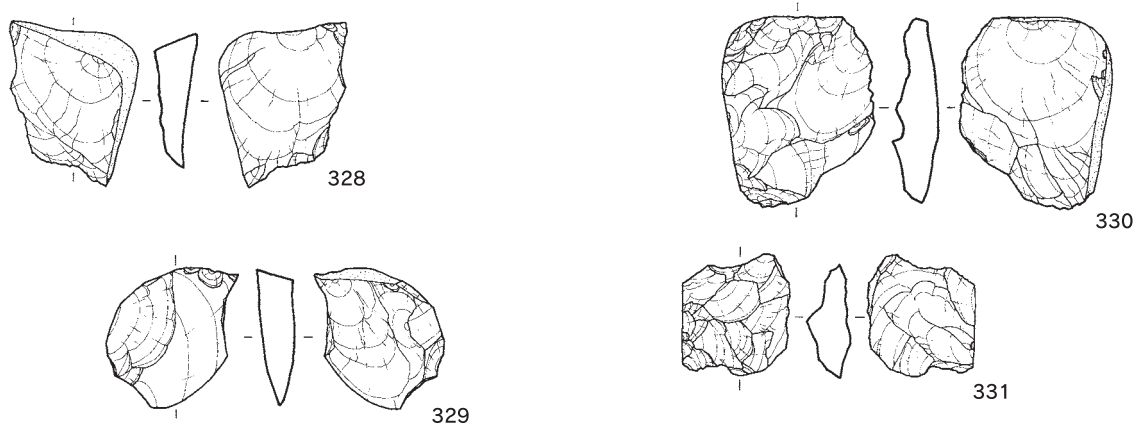
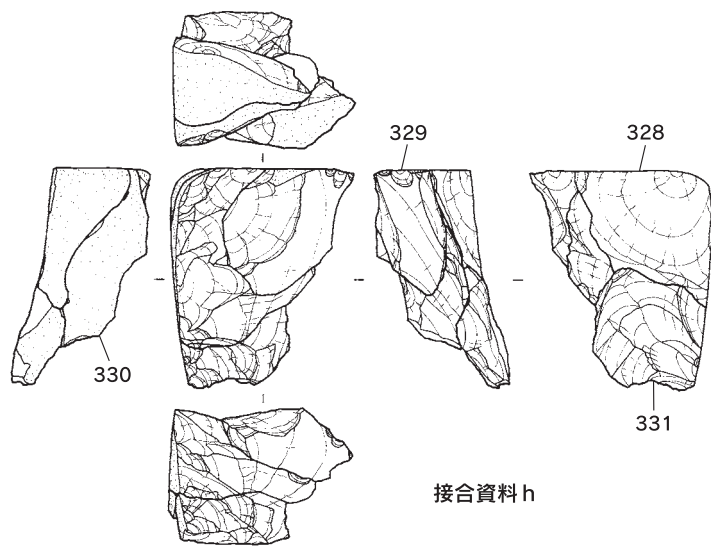
第116図 縄文時代草創期の石器 (23)



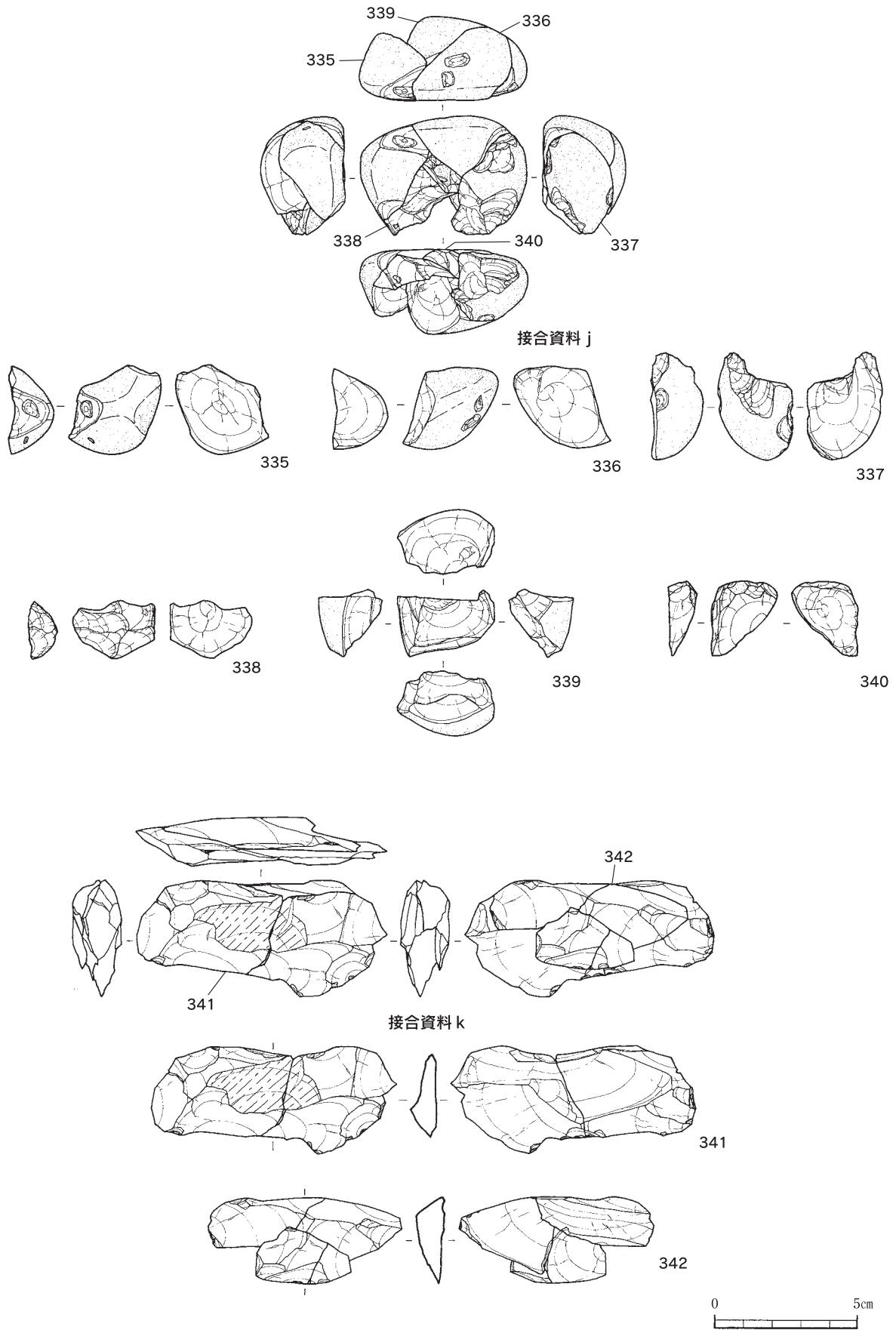
第117図 縄文時代草創期の石器 (24)



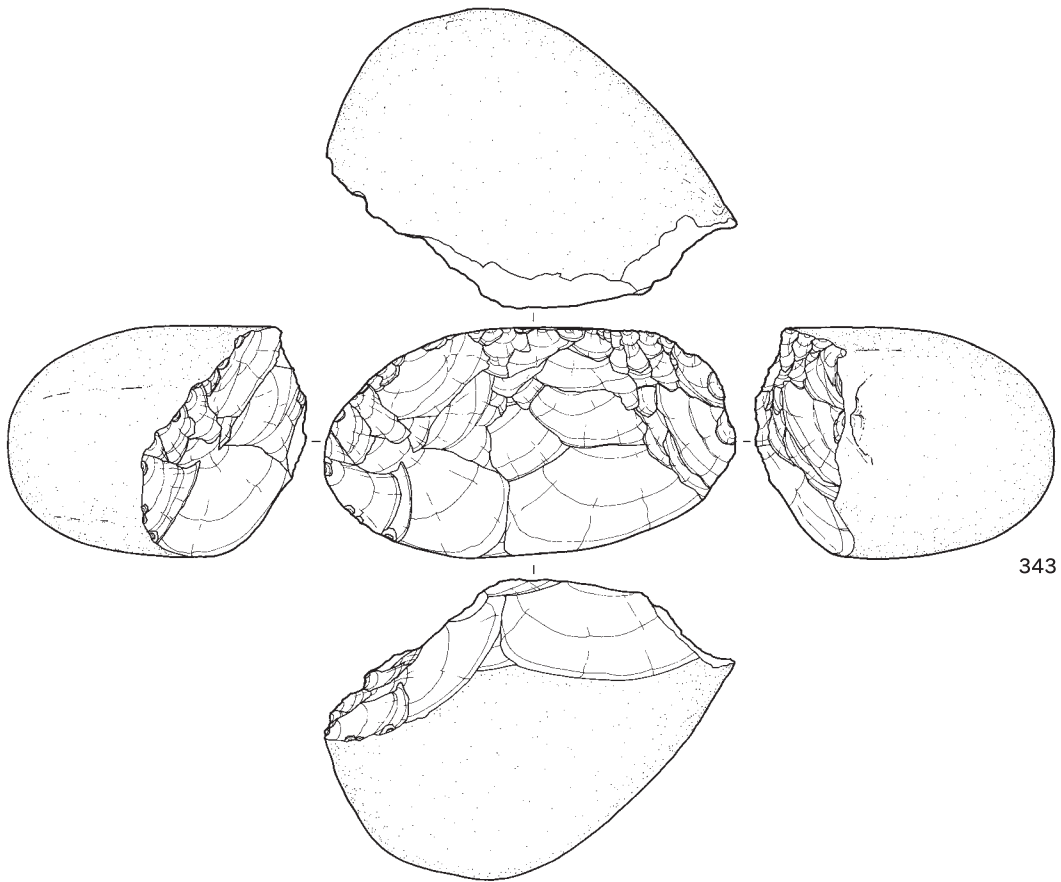
第118図 縄文時代草創期の石器 (25)



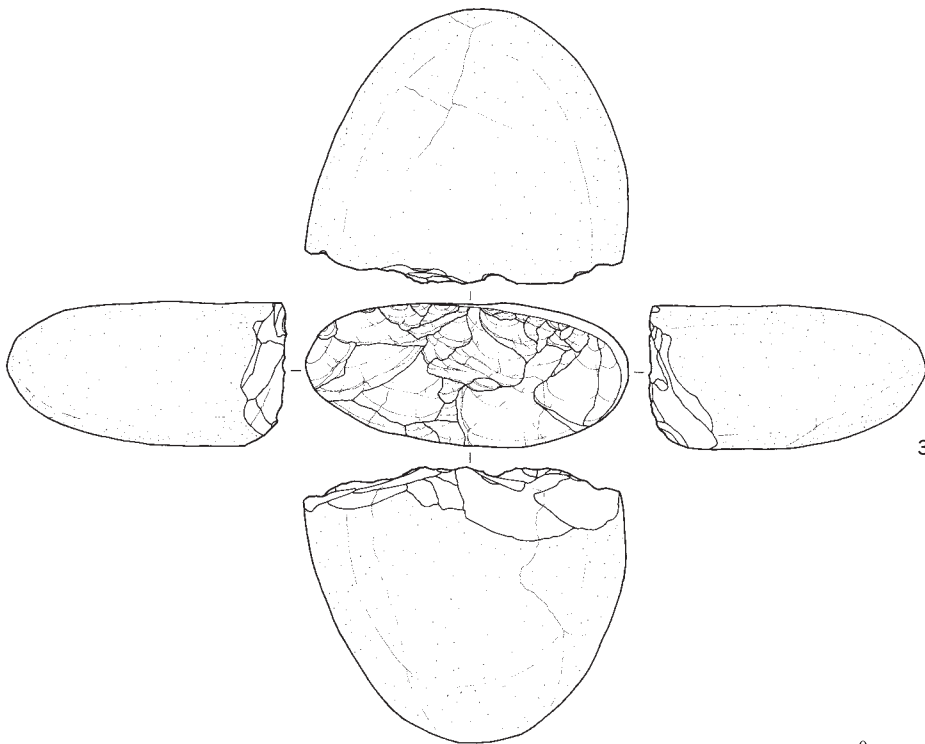
第119図 縄文時代草創期の石器 (26)



第120図 縄文時代草創期の石器 (27)



343

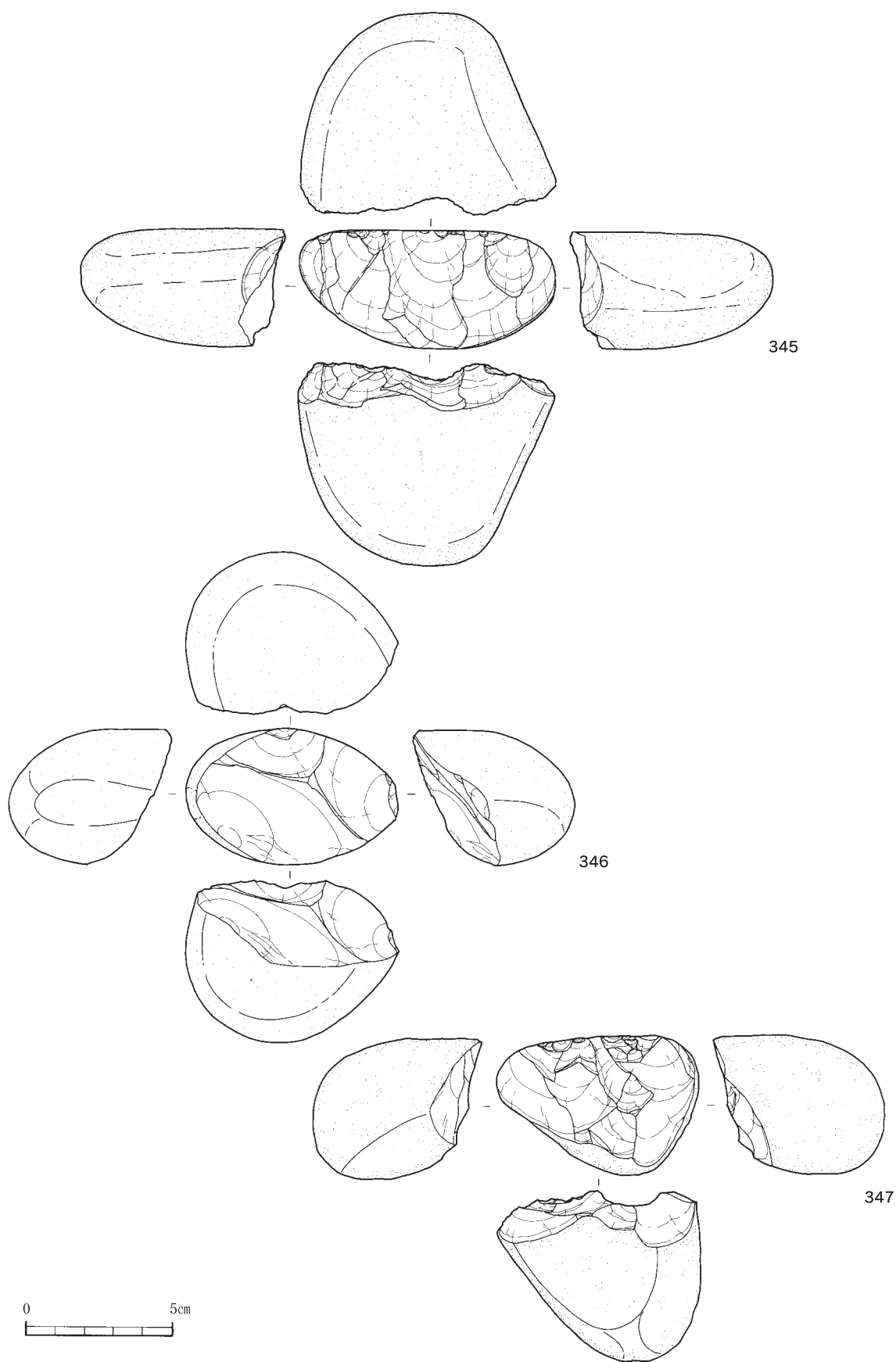


344

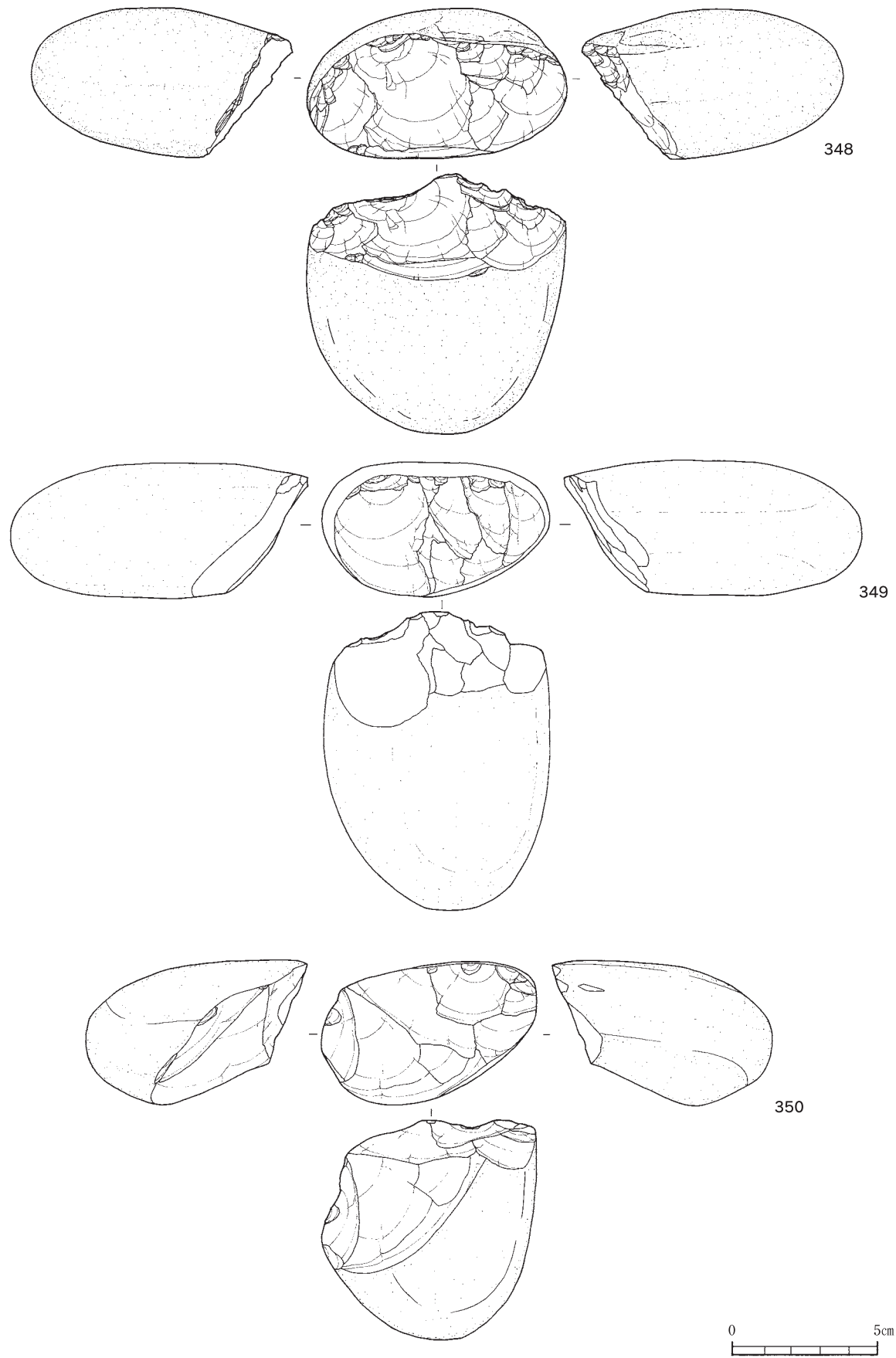


第121図 縄文時代草創期の石器 (28)

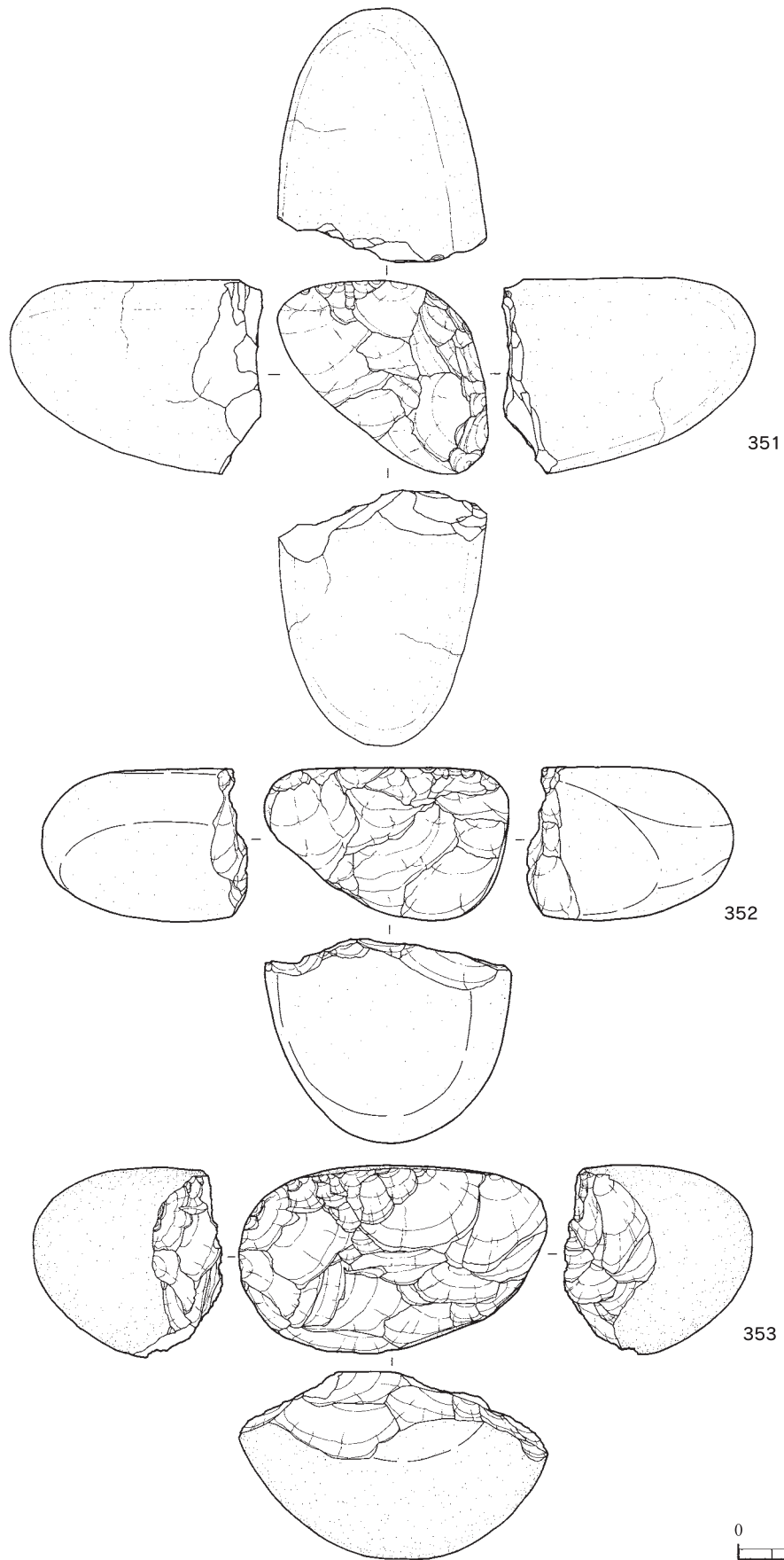




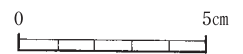
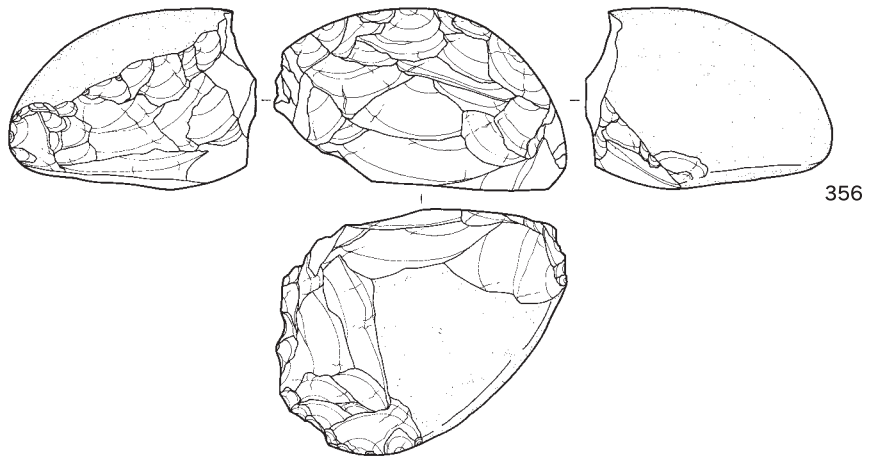
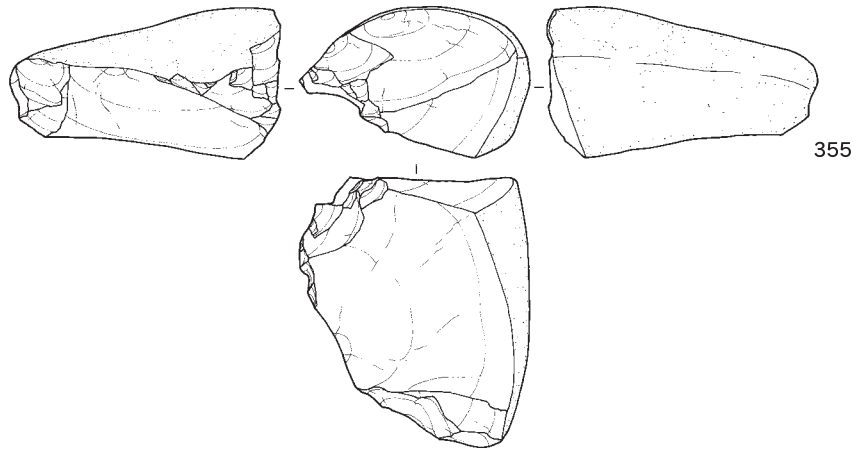
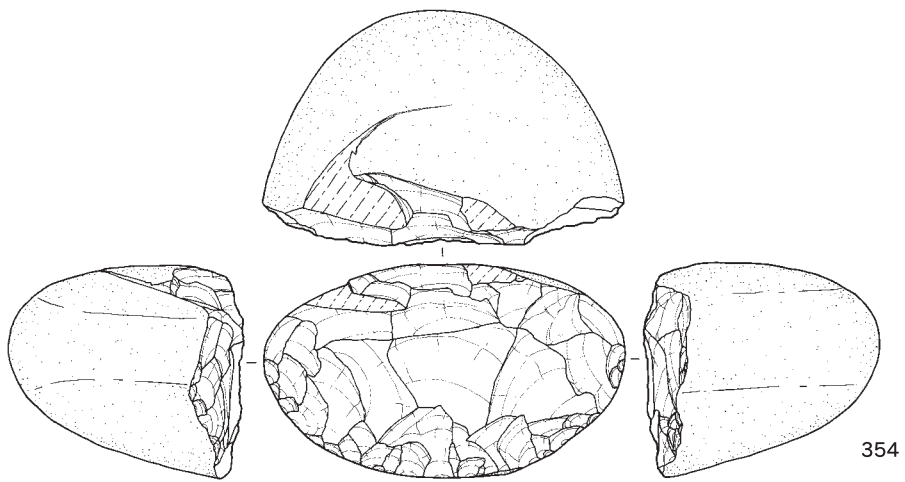
第122図 縄文時代草創期の石器 (29)



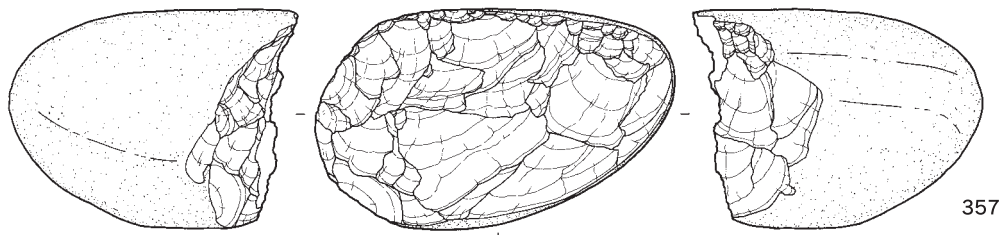
第123図 縄文時代草創期の石器 (30)



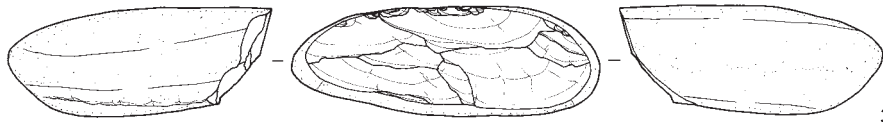
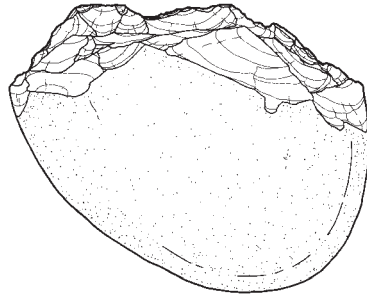
第124図 縄文時代草創期の石器 (31)



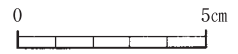
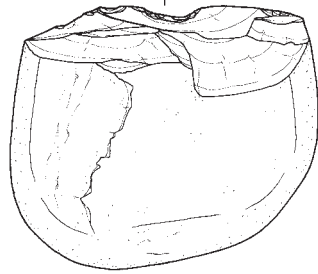
第125図 縄文時代草創期の石器 (32)



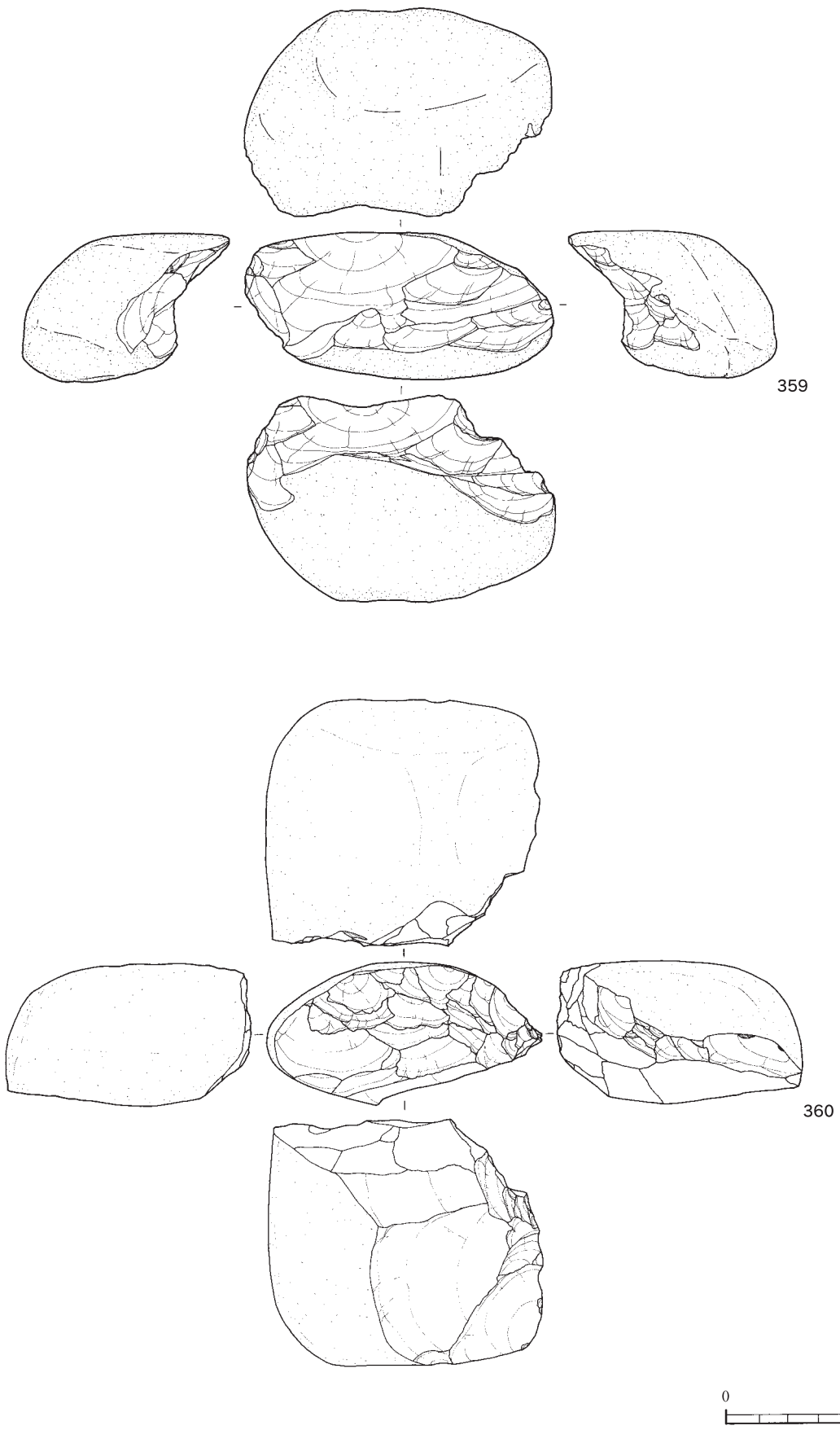
357



358

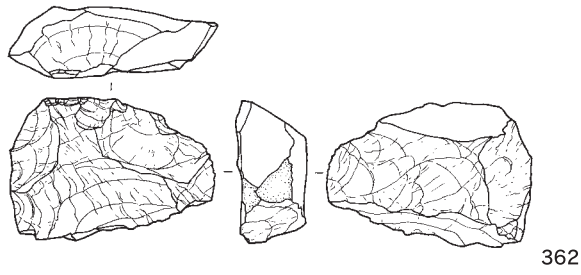
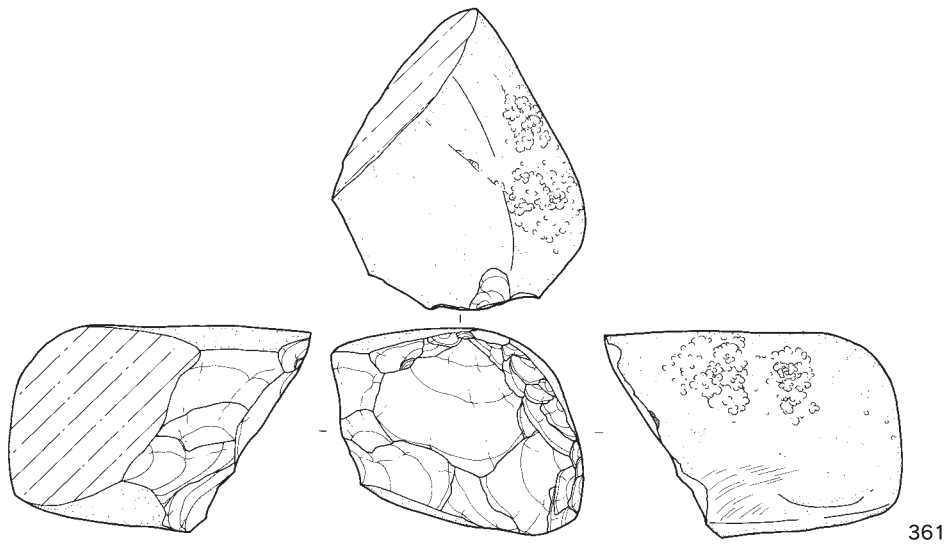


第126図 縄文時代草創期の石器 (33)

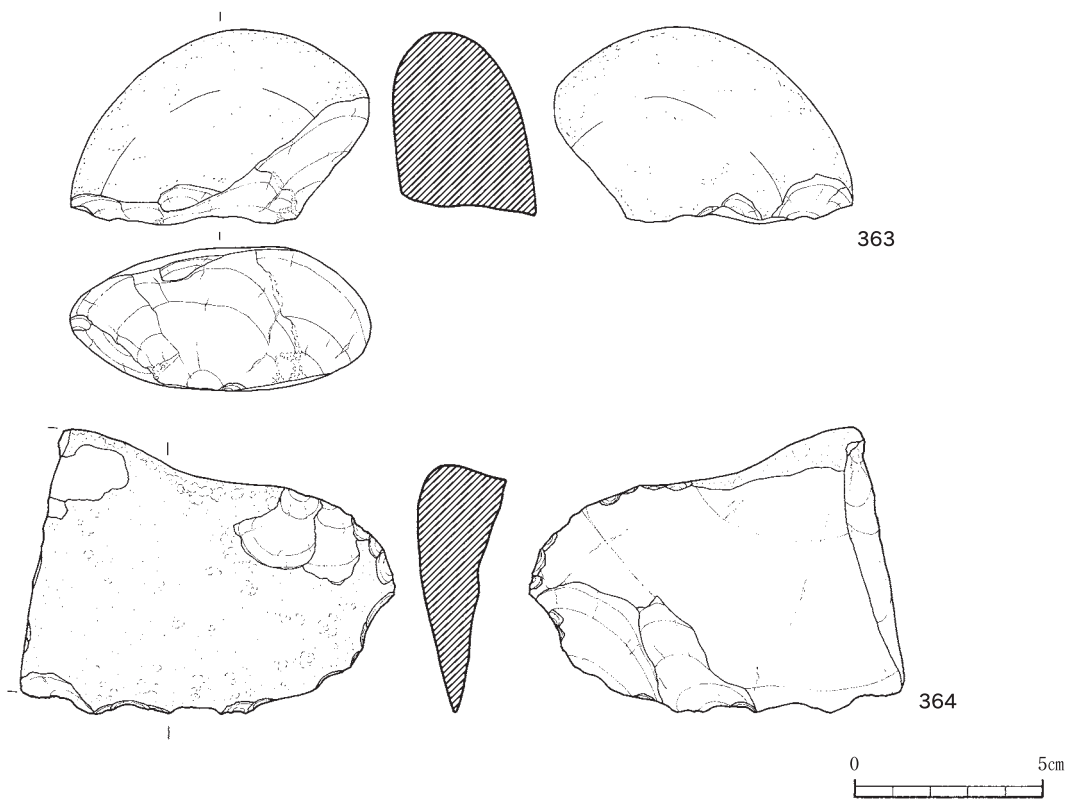


第127図 縄文時代草創期の石器 (34)

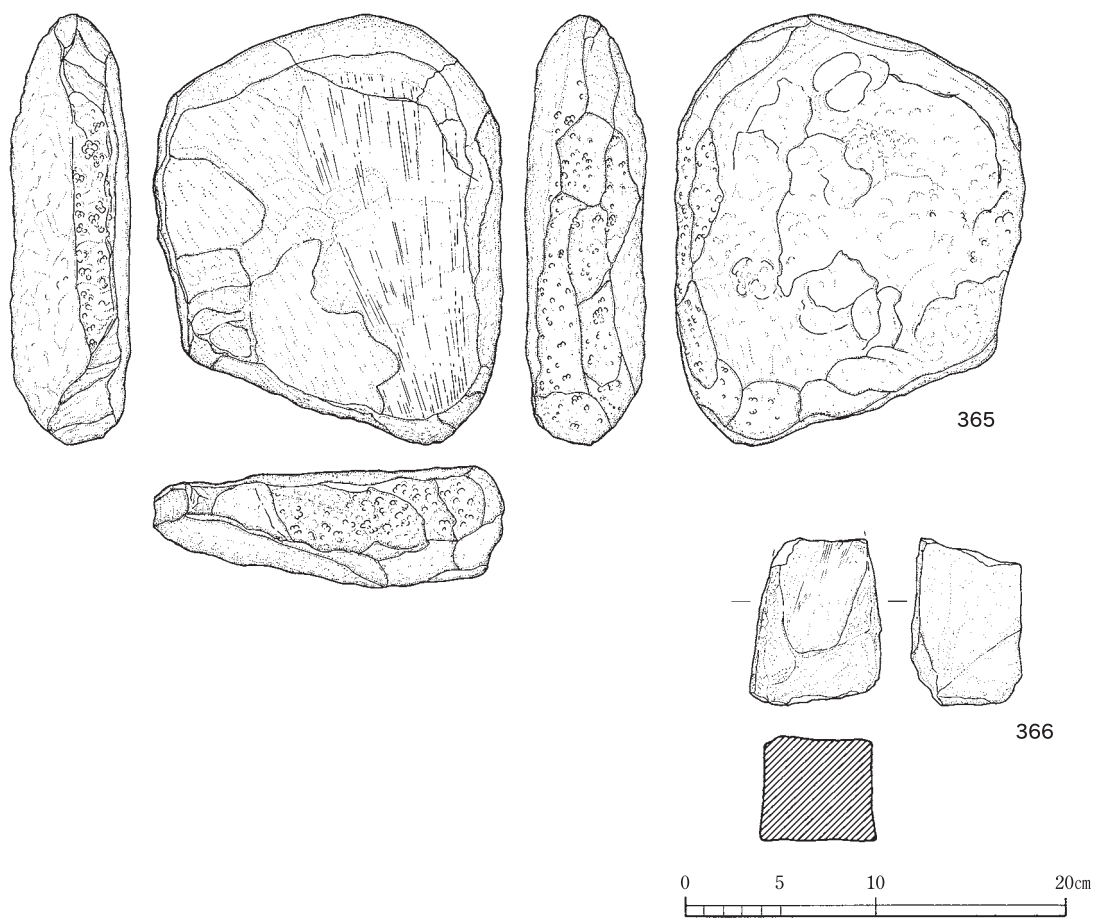




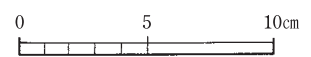
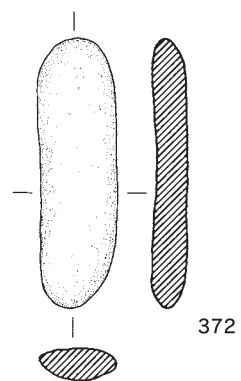
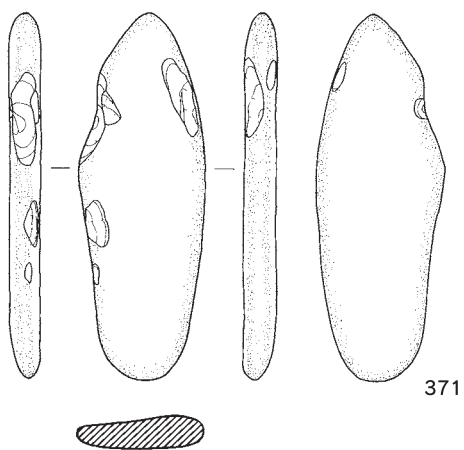
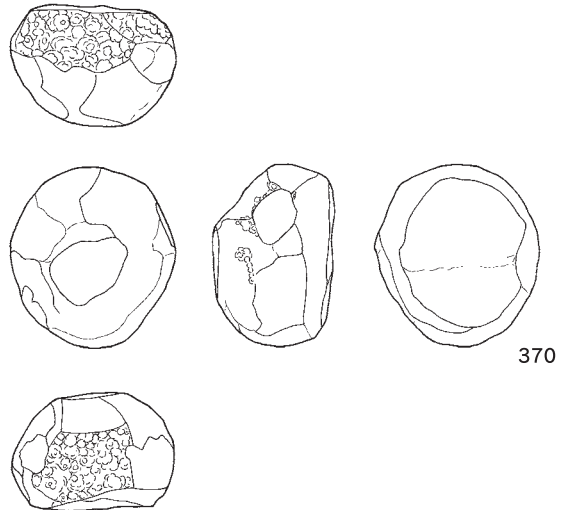
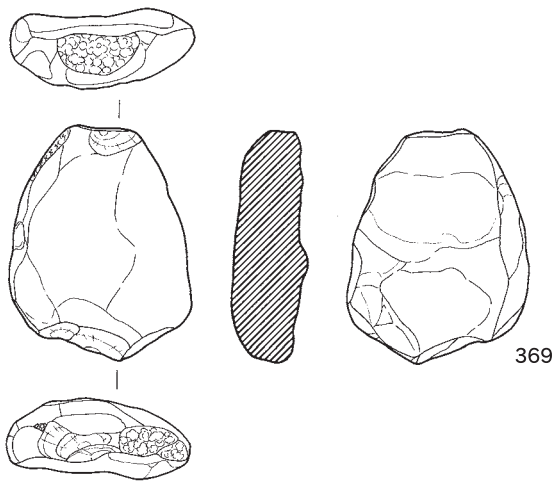
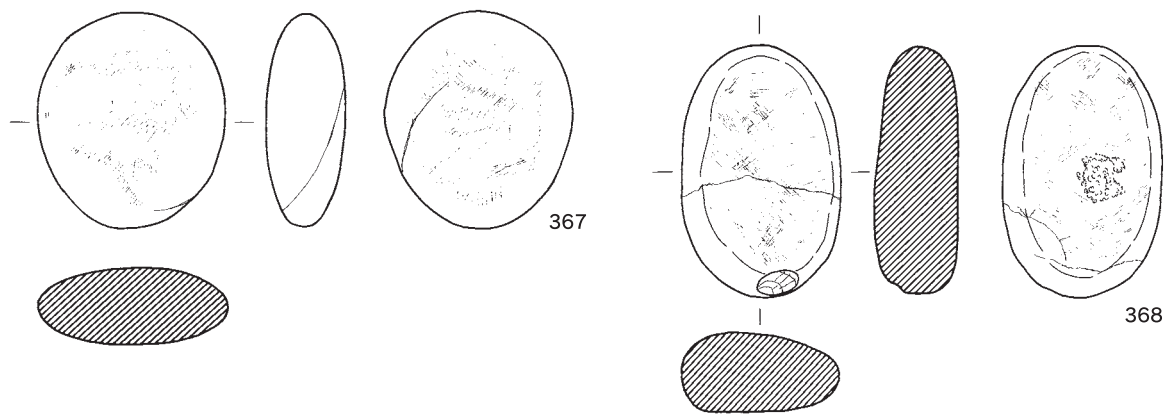
第128図 縄文時代草創期の石器 (35)



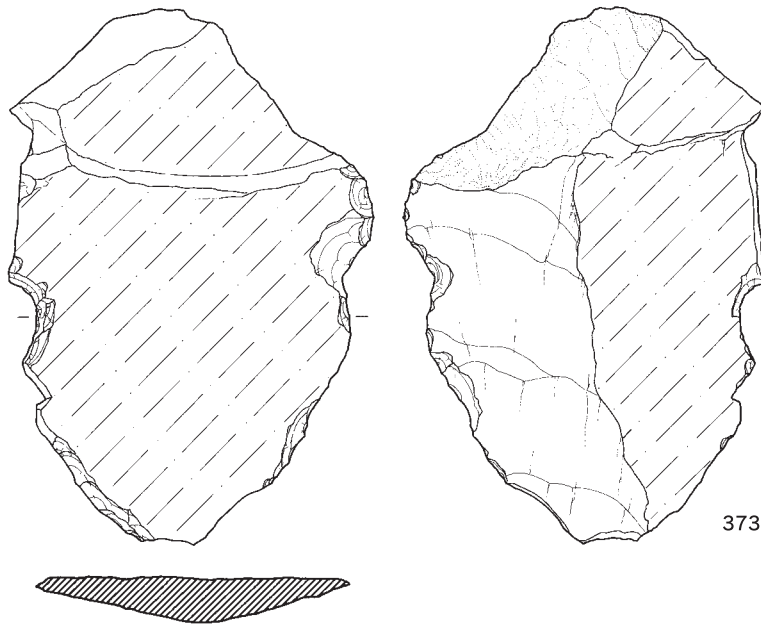
第129図 縄文時代草創期の石器 (36)



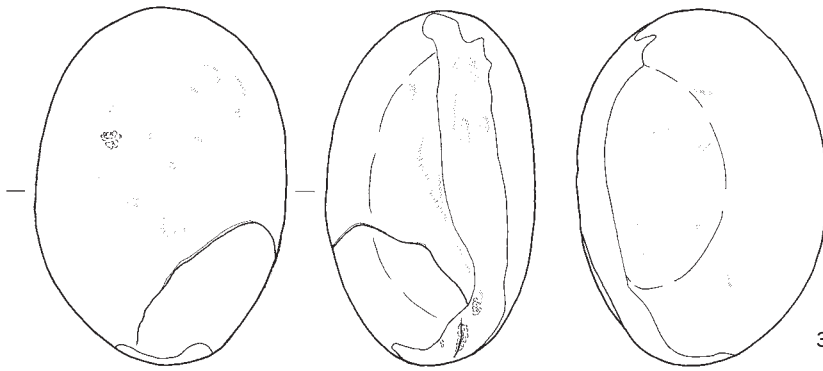
第130図 縄文時代草創期の石器 (37)



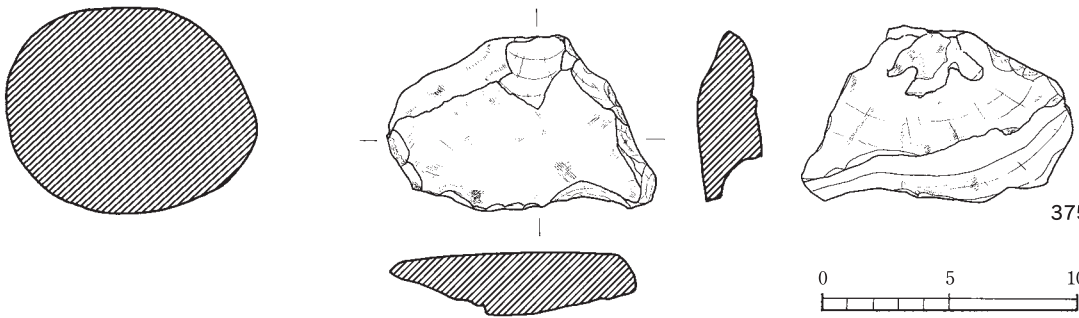
第131図 縄文時代草創期の石器 (38)



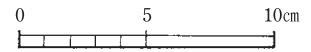
373



374



375



第132図 縄文時代草創期の石器 (39)

第7表 縄文時代草創期の土器観察表

◎ 多量 ○ 普通 △ 少く量

挿 図	地 区	区	番 号	類 別	器 種	部 位	調整・文様				色調		胎土				焼 成	備 考
							外 面	内 面	口 唇 部	底 部	外 面	内 面	石 英	長 石	角 閃	其 他		
64	B-1	B-11-12	27	1-a	やや楕円深鉢	完形	隆線3, ナテ, 指頭 押圧	蛇腹状, ナテ	舌状, 外反	丸平	灰褐～褐色	黒褐色	◎ ◎ ○	雲母, 白粒, 塵	普	内外に炭化物付着, 補修 孔有り		
65	B-1	B-C-11-12	28	1-b	深鉢	完形	隆線3, ナテ, 指頭 押圧	やや蛇腹 状, ナテ	舌状, 外傾	丸平	灰褐色	明灰褐～ 黒褐色	○ △ ○	白粒	普	内外に炭化物付着, 補修 孔有り		
66	B-1	B-C-10	29	1-c	鉢	胴	隆線3, ナテ, 工具刻 み, 指頭押圧	斜め隆線, ナテ	舌状, 刻み, 外傾	丸平	灰褐色	明灰褐～ 黒褐色	◎ ◎ ○	白粒	脆い	内外に炭化物付着, 補修 孔有り		
67	A	F-5	30	2-a		口縁	ナテ, 指押さえ	ナテ, 指 押さえ	舌状, 外傾	丸平	橙～赤褐色	赤褐～ 灰褐色	○ ○ ○	白粒, マーブル	普	48に近い胎土		
	A	D-8	31	2-a		口縁	ナテ	ナテ	舌状, 外傾		にぶい黄橙～ 灰黄褐色	にぶい黄橙 ～灰黄褐色	○ ○ ○	白粒, 赤粒	やや 脆い	外面に炭化物付着, 32に 近い胎土		
	A	E-8	32	2-b		口縁	ナテ, ヘラ状工具押 圧(鋸歯状)	ナテ	舌状, 外傾		にぶい黄橙～ 明黄褐色	にぶい黄橙 ～灰黄褐色	○ ○ ○	白粒, 赤粒	やや 脆い	31に近い胎土		
	A	G-5	33	2-c		口縁	ナテ, 線刻	ナテ	舌状, 外傾		赤～赤褐色	赤～ 暗赤褐色	○ ○ ○	白粒, 赤粒	普	内外に炭化物付着, 補修 孔有り		
	A	P地点	34	3-a		口縁	隆帯1, ナテ, 貝腹 押圧	蛇腹状, ナテ	舌状		橙～灰赤色	橙色	○ ○ ○	白粒, ガラス	普	P地点出土		
	A	F-5	35	3-a		口縁	隆帯1, ナテ, 指腹? 押圧	ナテ	やや平頂		にぶい黄橙～ 明黄褐色	にぶい黄橙 ～灰黄褐色	○ ○ ○	白粒, 赤粒	やや 脆い	167・168と同一個体?		
	A	G-5	36	3-a	小鉢	口縁	隆帯2, ナテ, 指腹 押圧	ナテ	舌状		浅黄褐色	隆帯2, ナテ, 指腹 押圧	にぶい黄橙 ～灰褐色	○ ○ ○	白粒	やや 脆い	37と同一個体	
	A	F-5-6	37	3-a	小鉢	底	ナテ	ナテ		丸	明黄褐色	にぶい黄橙 ～灰褐色	○ ○ ○	白粒	やや 脆い	36と同一個体		
	A	F-5	38	3-a	鉢	口縁	隆帯1, ナテ, 指頭 押圧	ナテ	舌状		橙～褐灰色	橙～にぶい 黄褐色	○ ○ ○	白粒, 赤粒	普	39と同一個体		
	A	F-5	39	3-a	鉢	口縁	隆帯2, ナテ, 指頭 押圧	ナテ	舌状, 外傾		橙～褐灰色	橙～にぶい 黄褐色	○ ○ ○	白粒, 赤粒	普	38と同一個体		
	A	F-5	40	3-a	鉢	口縁	隆帯2, ナテ, 指頭 押圧	蛇腹状, ナテ	舌状, 外傾		橙～褐灰色	橙～にぶい 黄褐色	○ ○ ○	白粒, 赤粒	普	39と同一個体?		
	A	F-5	41	3-a	鉢	口縁	隆帯2, ナテ, 指頭 押圧	ナテ	舌状		橙～にぶい 褐色	灰褐色	○ ○ ○		普			
A	D-8	42	3-a		口縁	隆帯2, ナテ, ヘラ状 工具押圧(鋸歯状)	蛇腹状, ナテ	舌状, 外傾		橙～にぶい 赤褐色	橙～灰褐色	○ ○ ○	白粒	普	32に近い胎土			
68	A	F-G-5	43	3-a	鉢	口縁～ 底	赤色隆帯3, ナテ, 指頭押圧	蛇腹状, ナテ	舌状, 外傾		赤～にぶい 黄褐色	赤～にぶい 黄褐色	○ ○ ○	白粒	やや 脆い	隆帯のみ赤色粘土, 補修孔 有り, <sup>14</sup> C補12090±70年		
	C-2	N-13	44	3-a	小深鉢	口縁～ 底	隆帯4, ナテ, 指頭押 圧	やや蛇腹 状, ナテ	舌状, やや垂直	尖底?	灰褐～ 明赤褐色	灰褐～ 暗褐色	○ ○ ○	白粒, 円礫	普	ほぼ完形の砲弾型, 底中 央部が欠けている		
69	A	F-5	45	3-a	鉢	完形	隆帯4, ナテ, 棒状 工具押圧	蛇腹状, ナテ	舌状, 外傾	丸平	明赤褐色	明灰～ 淡赤褐色	○ ○ ○	白粒	やや 脆い	補修孔有り, <sup>14</sup> C補12260 ±50年		
70	B-1	C-10	46	3-b	楕円鉢?	口縁～ 胴	隆帯3, ナテ, 指腹 押圧	やや蛇腹 状, ナテ	舌状, 外傾		橙～にぶい 黄褐色	にぶい黄橙 ～灰黄褐色	○ ○ ○	白粒	やや 脆い	外面に炭化物付着		
	A	F-G-5	47	3-b	鉢	口縁～ 胴	隆帯4, ナテ, 指頭刻 み, 指頭押圧	やや蛇腹 状, ナテ	舌状, 刻み, 外傾		橙～にぶい 褐色	橙～黒褐色	○ ○ ○	白粒, 円礫	やや 脆い	内外に炭化物付着, 補修 孔有り		
71	A	F-5	48	3-b	鉢	口縁～ 底	隆帯3, ナテ, 指頭 押圧	ナテ	舌状, 外傾		淡赤褐～ にぶい褐色	淡赤褐～ 灰黄褐色	△ △ ○	白粒, 赤粒, マーブル	脆い	層状に崩壊		
	A	F-5	49	3-c	鉢	底	ナテ	ナテ		丸平	淡赤褐～ にぶい褐色	橙色	△ △ ○	白粒, 赤粒, マーブル	脆い	層状に崩壊		
	A	F-5-6	50	3-c	楕円鉢	口縁～ 胴	隆帯3, ナテ, 指頭 押圧	ケズリ, ナテ	舌状, 垂直		橙～灰褐色	黄橙～ 灰褐色	○ ○ ○	白粒, 赤粒	脆い	内外に炭化物付着		
72	A	F-G-5	51	4-a	鉢	完形	隆帯2, ナテ, 貝腹・ 指頭押圧	ナテ	舌状, 垂直	丸平	橙～明黄褐色	にぶい黄橙 ～黒褐色	○ ○ ○	白粒, 赤粒	良	隆帯断面は三角, 補修孔 有り		
	A	F-G-5	52	4-a	鉢	口縁～ 胴	隆帯2, ナテ, 貝腹 押圧	ナテ	舌状, 垂直		橙～明黄褐色	にぶい黄橙 ～黒褐色	○ ○ △	白粒, ガラス	良	隆帯断面は三角		
	A	E-8	53	4-a	皿	口縁～ 胴	隆帯2, ナテ, 指頭・ 貝腹押圧	ナテ	舌状, やや外傾		にぶい黄橙～ 灰黄褐色	赤～ 灰黄褐色	○ ○ ○	白粒	脆い	隆帯断面は三角, 層状に 崩壊		
73	A	F-5	54	4-a	深鉢	口縁～ 胴	隆帯2, ナテ, 指頭 押圧	ナテ	やや平頂, 外傾		橙～褐灰色	橙～にぶい 黄褐色	△ △ △	白粒	脆い	隆帯断面は三角, 層状に 崩壊		
	A	D-7	55	4-a	深鉢	口縁～ 胴	隆帯2+縦1, ナテ, 指頭押圧	ナテ	平頂, 外傾		橙～灰黄褐色	橙～黒褐色	○ ○ ○	白粒	やや 脆い	隆帯断面は三角, 層状に 崩壊		
	A	D-8	56	4-a	皿	口縁～ 胴	隆帯2, ナテ, 押圧 なし	ナテ	平頂, 外傾		にぶい黄橙～ 褐色	にぶい黄橙 ～灰黄褐色	△ ○ ○	白粒, 赤粒	非常 に脆い	隆帯断面は三角, 層状に 崩壊		
	A	D-8	57	4-a	皿	口縁	隆帯1, ナテ, 工具 押圧	ナテ	舌状		明黄褐～ 褐灰色	明黄褐～ 黒褐色	○ △ ○	白粒	脆い	隆帯断面は三角, 層状に 崩壊		
74	A	F-5	58	4-b	鉢	口縁	隆帯2, ナテ, 工具 押圧	ナテ	舌状		明赤褐色	明赤褐～ 暗赤褐色	○ ○ ○	白粒, ガラス	普	60と同一個体?		
	A	F-5	59	4-b	鉢	口縁	隆帯2, ナテ, 指頭 押圧	ナテ	舌状		赤色	赤～褐色	△ △ ○	白粒, マーブル	やや 脆い	隆帯断面は薄い カマボコ状		
	A	F-5	60	4-b	鉢	完形	隆帯2, ナテ, 工具 押圧	ナテ	舌状	丸平	明赤褐色	明赤褐～ 暗赤褐色	○ ○ ○	白粒, 赤粒, ガラス	良	隆帯断面は薄い カマボコ状		
	A	F-5	61	4-b	鉢	口縁	隆帯2, 工具整形, ナテ, 指頭押圧	ナテ	舌状		赤～赤褐色	暗赤褐色	○ ○ ○	白粒, ガラス	良	隆帯断面は薄いカマボコ 状, 外面に炭化物付着		
	A	F-6-7	62	4-b	鉢	完形	隆帯3, 工具整形, ナテ, 角棒工具押圧	ナテ	舌状	丸平	淡赤褐～ 灰茶褐色	灰褐色	△ ○ ○	白粒	やや 脆い	隆帯断面は薄い カマボコ状		
	A	F-5	63	4-b	鉢	口縁	隆帯2, ナテ, 指頭 押圧	ナテ	舌状		赤褐～ 明赤褐色	赤～赤褐色	○ ○ ○	白粒, 赤粒, ガラス	良	隆帯断面は薄い カマボコ状		
	A	F-5	64	4-b	鉢	口縁	隆帯1, ナテ, 楊枝 状工具押圧	ナテ	やや平頂		にぶい赤褐～ 灰褐色	暗赤褐色	○ ○ ○	白粒	やや 脆い	隆帯断面は三角		
75	B-1	B-10	65	4-c		口縁	隆帯4, ナテ, 爪先 押圧	ナテ	やや平頂		にぶい黄橙～ 黒褐色	にぶい黄橙 ～黒褐色	○ ○ ○	白粒, ガラス	普	内外に炭化物付着, 補修 孔有り		
	B-1	C-13	66	4-c		胴	隆帯1, ナテ, 貝腹 押圧	ナテ			橙～極暗褐色	橙～ 暗赤褐色	○ ○ ○	塵, 厚い器壁	非常 に脆い	隆帯断面は三角		
75	B-1	B-C-10	67	4-c	鉢	完形	隆帯2, ナテ, 爪先 押圧	ケズリ, ナテ	やや平頂	丸平	橙～暗赤褐色	橙～黒褐色	○ ○ △	塵, 厚い 器壁	やや 脆い	補修孔有り, <sup>14</sup> C補12050 ±70年		
76	A	F-6-7	68	5-a	深鉢	口縁	隆帯3, ナテ, 円錐 工具押圧	ナテ	舌状, やや内湾		赤～赤褐色	橙～ 明赤褐色	○ ○ ○	白粒	やや 脆い	隆帯断面は三角, 外面に 炭化物付着		
	A	F-6	69	5-a	深鉢	胴	ナテ, 円錐 工具押圧	ナテ			赤～赤褐色	橙～ 明赤褐色	○ ○ ○	白粒	やや 脆い	68と同一個体		
	A	F-6-7	70	5-a	深鉢	底	ナテ	ナテ		平丸	橙～明赤褐色	橙～ 明赤褐色	○ ○ ○	白粒	やや 脆い	68と同一個体		



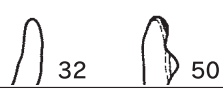
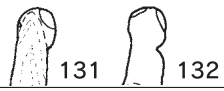


挿入	地区	区	番号	類別	器種	部位	調整・文様				色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	口唇部	底部	外面	内面	石英	長石	角閃	その他		
76	A	F-6	71	5-a	深鉢	胴	隆帯2, ナテ, 円錐工具押圧	ナテ			明赤褐色	明赤褐色	○	○		白粒	やや脆い	68と同一個体補修孔有り
	A	F-6	72	5-a	深鉢	胴	隆帯1, ナテ, 円錐工具押圧	ナテ			明赤褐～暗赤褐色	明赤褐色	△	○	△	白粒	やや脆い	68と同一個体
	A	F-6	73	5-a	深鉢	胴	隆帯2, ナテ, 円錐工具押圧	ナテ			橙～明赤褐色	橙～明赤褐色	△	△		白粒	やや脆い	68と同一個体
	A	D-7	74	5-a		胴	隆帯1, ナテ, 円錐工具押圧	(剥離)			赤色	(剥離)	△	△		白粒	やや脆い	隆帯のみ赤色粘土, 断面はカマボコ状
77	A	F-5	75	5-a	深鉢	口縁～胴	隆帯3, ナテ, 円錐工具押圧	ケズリ, ナテ	やや平頂, 内湾		橙色	明黄褐色～灰黄褐色	○	○		白粒, 石灰岩	やや脆い	隆帯のみ赤色粘土, 断面はカマボコ状
	A	G-5	76	5-a	深鉢	口縁	隆帯3, ナテ, 円錐工具押圧	ケズリ, ナテ	やや平頂		橙～にぶい褐色	橙～灰褐色	○	○		白粒, 石灰岩	やや脆い	75と同一個体
	A	F-5	77	5-a	深鉢	底	ナテ	ナテ		丸平	橙～明赤褐色	にぶい橙～灰褐色	○	○		白粒, 石灰岩	やや脆い	75と同一個体
	A	D-7	78	5-a		口縁～胴	隆帯3+縦1, ナテ, 貝殻頂押圧	ナテ	舌状		橙～灰褐色	橙～灰褐色	○	○		白粒, 赤粒, 石灰岩	普	隆帯断面は三角, 貼り付けは口唇隆帯・縦帯・2番目横帯の順
	A	N-12	79	5-a	小深鉢	口縁	隆帯1, ナテ, 指腹押圧	ナテ	やや平頂		黄橙～褐灰色	黄橙～にぶい黄褐色	○	○		白粒, 赤粒, 小礫	脆い	隆帯を貼り付けながら施文,
	C-2	N-12	80	5-a	小深鉢	胴	隆帯1, ナテ, 指腹押圧	ナテ	やや平頂		黄橙～褐灰色	黄橙～にぶい黄褐色	○	○		白粒, 赤粒, 小礫	脆い	79と同一個体
	C-2	N-12	81	5-a	小深鉢	胴	隆帯1, ナテ, 指腹押圧	ナテ	やや平頂		黄橙～褐灰色	黄橙～にぶい黄褐色	○	○		白粒, 赤粒, 小礫	脆い	79と同一個体
78	A	D-6-7	83	5-a	深鉢	口縁～胴	隆帯4, ナテ, 指腹押圧	ケズリ, ナテ	やや平頂, 内湾		橙～褐灰色	黄橙～黒褐色	△	△		白粒	やや脆い	隆帯を貼り付けながら施文, 上から3条目は「すれちがい」, 補修孔多数
	A	D-7	84	5-a		胴	隆帯2, ナテ, 指腹押圧	ナテ			赤橙～暗褐色	浅黄橙～褐色	○	○		白粒, 赤粒, ガラス	脆い	隆帯断面は三角, 内外に炭化物付着
	A	D-6	85	5-a		胴	隆帯1, ナテ, 指腹押圧	ナテ			浅黄橙～褐色	浅黄橙～灰褐色	○	○		白粒	良	内面に炭化物付着
	A	D-6	86	5-a		胴	隆帯1, ナテ, 指腹押圧	ナテ			褐灰色～黒褐色	明赤褐～暗赤褐色	○	○		白粒, 小礫	普	内面に炭化物付着
	B-1	B-9	87	5-a		胴	隆帯1, ナテ, 指腹押圧	ナテ			にぶい橙～灰褐色	橙～暗褐色	△	◎		白粒, 赤粒, 小礫	脆い	多量の砂と小礫が混入
79	A	B-C-8	88	5-b	鉢	口縁～胴	隆帯2+中絶2, ナテ, 貝殻・指腹押圧	ナテ	やや平頂		赤褐～黒褐色	淡赤褐～黒褐色	△	△		白粒	やや脆い	隆帯断面は三角, 内外に炭化物付着
	A	B-8	89	5-b		口縁～胴	隆帯2, ナテ, 指腹押圧	ナテ	やや平頂		橙～黒褐色	にぶい赤褐～黒褐色	△	△		白粒	普	隆帯断面は三角, 内外に炭化物付着
	A	B-8	90	5-b		胴	隆帯2, ナテ, 指腹押圧	ナテ			橙～黒褐色	橙～にぶい褐色	○	○		白粒, 小礫	普	隆帯断面は三角, 外面に炭化物付着
	A	D-6	91	5-b	深鉢	口縁	隆帯1, ナテ, 楊枝状工具押圧	ナテ	平頂		褐灰色～黒褐色	褐灰色～黒褐色	△	△		白粒	やや脆い	隆帯断面は三角, 92と同一個体
	A	D-6	92	5-b	深鉢	胴	隆帯1, ナテ, 棒状工具押圧	ナテ			暗灰黄～黒褐色	浅黄橙～暗灰黄色	○	○		白粒	やや脆い	内外に炭化物付着, 91と同一個体
	A	D-6	93	5-b	深鉢	胴	ナテ	ナテ			浅黄～暗灰黄色	黄橙～暗灰黄色	○	○		白粒, ガラス	やや脆い	補修孔有り, 91と同一個体, 内外に炭化物付着
	A	D-6	94	5-b		口縁	隆帯1, ナテ, 棒状工具押圧	ナテ	斜め平頂		橙～明赤褐色	明赤褐～赤黒色	○	○		白粒	普	隆帯断面は三角
	A	D-7	95	5-b		口縁	隆帯1, ナテ, 棒状工具押圧	ナテ	平頂		明赤褐～暗赤褐色	暗赤褐～黒褐色	◎	◎		白粒, 円礫	普	94に近い胎土, 内外に炭化物付着
	A	F-5	96	5-b		口縁	隆帯1, ナテ, 丸棒工具押圧	ナテ	平頂		橙色	灰褐色	◎	○		白粒	普	施文してから口唇部を整えている
	A	F-5	97	5-b		口縁	隆帯1, ナテ, 棒状工具押圧	ナテ	平頂		橙色	橙色	△	○		白粒, 赤粒, 円礫	普	施文は2度押さえの可能性がある
80	A	F-5	98	5-b		胴	隆帯1, ナテ, 奥歯状工具押圧	ナテ			明赤褐～暗赤褐色	にぶい赤褐色	◎	○		白粒, 円礫, ガラス	普	施文は凹み方が一定していない, 外面に炭化物付着
	A	F-5	99	5-b		口縁	隆帯1, ナテ, 棒状工具押圧	ナテ	平頂		赤褐色	赤褐～暗褐色	○	◎		白粒	普	60に近い胎土
	A	D-6-8 E-7	100	6-a	鉢	口縁～胴	隆帯2+2, ナテ, 貝腹押圧	ナテ	角丸平頂		橙～にぶい褐色	明黄褐～黒褐色	○	○		白粒, 赤粒	普	薄い器壁・隆帯厚
	A	B-8	101	6-a		口縁	隆帯3, 貝腹押圧	ナテ	角丸平頂		橙～黒褐色	黒褐色	○	○		白粒	普	隆帯断面は三角, 外面に炭化物付着
81	A	B-7-8 C-8-9	102	6-b	鉢	口縁～胴	隆帯2, ナテ, 貝腹押圧	工具ケズリ, ナテ	角丸平頂, 内湾		明赤褐～黒褐色	橙～黒褐色	○	○		白粒, 赤粒	普	19と同一個体?, 隆帯断面は三角, 赤色の主成分はアルミナ
	A	B-8	103	6-b		口縁～胴	隆帯2, ナテ, 貝腹押圧	ナテ	角丸平頂		黄橙～黒褐色	黄橙～黒褐色	○	○		白粒	普	隆帯断面は三角, 内外に薄く炭化物付着
	A	D-6	104	6-b		胴	隆帯1, ナテ, 貝腹押圧	ナテ	角丸平頂		明赤褐～赤黒色	明赤褐～黒色	○	○		白粒, 円礫, ガラス	普	隆帯断面は三角, 内外に炭化物付着
	A	B-8	105	6-b		口縁～胴	隆帯2, ナテ, 貝腹押圧, 胴部殻頂押圧	ナテ	角丸平頂		明黄褐～褐色	黄橙～灰褐色	○	○		白粒, ガラス, 小礫	良	隆帯断面は三角, 1に近い胎土だが器壁が厚い
	A	B-8	106	6-b		口縁	隆帯2, ナテ, 角棒工具押圧	ナテ	角丸平頂		赤褐～黒褐色	赤褐～黒褐色	○	○		白粒, 赤粒	普	隆帯断面は三角, 1に近い胎土
	A	B-8	107	6-b		口縁	隆帯2, ナテ, 指腹押圧	口縁線刻, ナテ	角丸平頂		橙～にぶい褐色	黄橙～黒褐色	○	○		白粒, 赤粒, ガラス	普	隆帯断面は三角
	A	C-8	108	6-b		口縁～胴	隆帯1+中絶1, ナテ, 指腹押圧	口縁線刻, ナテ	角丸平頂		橙～灰褐色	明黄褐～黒褐色	○	○		白粒, 赤粒, ガラス	やや脆い	隆帯断面は三角, 105と同一個体?
82	A	B-C-7-8 B-1 C-9-10	109	6-b	大鉢	口縁～胴	隆帯4+2, ナテ, 貝腹押圧, 一部指腹	ナテ	角丸平頂, 内湾		橙～黒褐色	橙～黒褐色	○	○		白粒, 赤粒, 円礫	普	隆帯断面は三角, 再検査「C補11370±70年」
	A	C-8	110	6-b		口縁	隆帯3, 貝腹押圧	ナテ	角丸平頂		灰黄褐～黒褐色	明黄褐～褐灰色	○	○		白粒, ガラス	脆い	
83	A	D-6-7	111	6-b	深鉢	口縁～胴	隆帯2, ナテ, 指腹押圧	ナテ	角丸平頂		橙～黒褐色	黄橙～黒褐色	○	○		白粒, 円礫, ガラス	やや脆い	隆帯断面は三角, 補修孔有り, 外面に炭化物付着
	A	B-8	112	6-b	小深鉢	完形	隆帯2, ナテ, 楊枝状工具押圧	ナテ	角丸平頂		黄橙～黒褐色	黄橙～黒褐色	○	○		白粒	良	隆帯断面は三角, 外面に炭化物付着
	A	B-8	113	6-b		胴	隆帯3, ナテ, 楊枝状工具押圧	ナテ	角丸平頂		黄橙～黒褐色	黄橙～黒褐色	○	○		白粒	良	隆帯断面は三角

挿 図	地 区	区 番号	類別	器種	部位	調整・文様				色調		胎土				焼成	備 考		
						外面	内面	口唇部	底部	外面	内面	石英	長石	角閃	その他				
83	A	C-7 B-7・8	114	6-b	皿?	口縁～ 胴	隆帯2、ナデ、楊枝 状工具押圧	ナデ	舌状		橙～褐灰色	にぶい赤褐 ～黒褐色	○	○		白粒、 赤粒	良	隆帯断面は三角	
84	A	D-6・7	115	6-b	鉢	完形	隆帯1、ナデ、指腹 押圧	ナデ	角丸平頂	丸平 庄痕	橙～黒褐色	黄橙～ 赤黒色	○	○		白粒、 ガラス	普	隆帯が外に突き出す、底 部に編み物の庄痕、外面 に炭化物付着	
	A	D-6	116	6-b		胴	隆帯1+斜1、ナデ、 指腹押圧	ナデ			にぶい赤褐 ～黒褐色	橙～灰褐色	○	○		白粒、赤 粒、円礫	脆い	隆帯断面は三角、外面に 炭化物付着	
	A	D-6・7	117	6-b		胴	隆帯2+斜2、ナデ、 指腹押圧	ナデ			にぶい赤褐 ～黒褐色	橙～黒褐色	○	○		白粒、赤 粒、円礫	脆い	隆帯断面は三角、内外に 炭化物付着、116と同一 個体	
85	A	D-7	118	6-c	楕円鉢	完形	隆帯1+中断1、ナデ、 指腹押圧	ナデ	角丸平頂	平丸	にぶい黄橙～ 黒褐色	橙～黒褐色	△			赤化礫	脆い	凹凸の激しい隆帯、補修 孔有り、内外に炭化物付着	
	A	B-7	119	6-c	鉢	口縁～ 胴	隆帯1、ナデ、押圧 なし	ナデ	角丸平頂		橙～にぶい 赤褐色	橙～ にぶい橙色	△	△	△	白粒	やや 脆い	隆帯が外に突き出す	
	A	B-7	120	6-c	鉢	底	ナデ	ナデ		平丸	橙～にぶい 赤褐色	橙～ にぶい橙色	△	△	△	白粒	やや 脆い	119と同一個体	
	A	D-6・7	121	6-c	深鉢	口縁～ 胴	隆帯2+縦8以上、 ナデ、貝腹押圧、	ナデ	角丸波状、 内湾			橙～黒褐色	橙～にぶい 赤褐色	○	○		白粒、赤 粒、ガラス	普	凹凸の激しい隆帯を横縦 の順に梯子状に貼り付け ている、外面に炭化物付着
	A	D-7	122	6-c		胴	中断隆帯1、貝腹押 圧、	ナデ				橙色	浅黄橙～ 橙色	○	○		白粒、 ガラス	普	厚い隆帯で断面は三角、 119に近い胎土
	B-2	D-13	123	6-c		胴	隆帯3、ナデ、タカ ラ貝口唇押圧	ナデ				橙～褐灰色	浅黄橙～ 橙色	○	○		白粒、 赤粒	普	厚い隆帯で断面は三角、 119に近い胎土
	B-2	C-12	124	6-c		胴	斜隆帯1、ナデ、 タカラ貝口唇押圧	ナデ				橙色	浅黄橙～ 灰褐色	○	○		白粒、 赤粒	普	123と同一個体
86	B-1	C-10	125	7-a		口縁～ 胴	隆帯1、ナデ、楊枝 状工具押圧	ナデ	平頂、 やや外傾		にぶい黄橙～ 橙色	淡黄～ 黒褐色	○	○	○	白粒、赤 粒、ガラス	やや 脆い	隆帯断面は三角	
	B-1	B-11	126	7-a	楕円鉢	完形	隆帯3、ナデ、楊枝 状工具押圧	ナデ	平頂、 やや外傾	平丸	橙～黒褐色	橙～黒褐色	○	△	◎	白粒、 赤粒、 ガラス	普	「飯盒」を思わせる器形、 補修孔有り、外面に炭化 物付着	
87	A	F-4・5 G-5・6	127	7-b		口縁～ 胴	隆帯6、ナデ、楊枝 状工具押圧	口縁キザ ミ、ナデ	平頂、 やや内湾		橙～黒褐色	にぶい赤褐 ～黒褐色	○	○	◎	白粒、赤 粒、円礫	やや 脆い	隆帯断面は三角、外面に 炭化物付着	
	A	注記 なし	128	7-b		口縁	隆帯3、ナデ、楊枝 状工具押圧	口縁キザ ミ、ナデ	平頂、 やや内湾		黒褐色	暗褐色	○	○	◎	白粒、 ガラス	普	127と接合	
	A	F-5	129	7-b		胴	隆帯1、ナデ、指腹 押圧	ナデ				橙～灰褐色	暗褐～ 極暗褐色	○	○		白粒、 赤粒	普	隆帯断面は三角、外面に 炭化物付着
	A	F-5	130	7-c	蓋?	胴	隆帯2、ナデ、楊枝 状工具押圧と沈線	ナデ				黄橙～ にぶい橙色	橙色	△	○		白粒	やや 脆い	隆帯断面は三角、大きく 内傾、皿か蓋かは判別し 難い
	A	F-5	131	8-b		口縁～ 胴	隆帯1、ナデ、竹管 状工具押圧	口縁連点、 ナデ	丸頂、 連点			黄橙～橙色	橙色	○	△	○	白粒	やや 脆い	隆帯の厚みは不安定、一 部マーブル状の胎土
88	A	F-5	132	8-a	小鉢	口縁～ 胴	隆帯1、ナデ、楊枝状 工具押圧と沈線	口縁キザ ミ、ナデ	丸頂、 やや外傾		橙～黒褐色	にぶい赤褐 ～黒褐色	○	○	△	白粒、 小円礫	脆い	口縁部隆帯と胴部との境 に沈線、	
	A	F・G-6	133	8-a	小鉢	底	ナデ	ナデ	平丸		橙～明赤褐色	にぶい赤褐 ～黒褐色	○	○	△	白粒、 小円礫	脆い	132と同一個体	
	A	D-7	134	9		胴	隆帯1、ナデ、指頭 押圧	ナデ			赤～赤褐色	明赤褐～ 黒褐色	○	○		白粒、 小礫	普	隆帯断面は三角、外面に 炭化物付着	
89	A	D-7	135	9		底	隆帯1、ナデ、指頭 押圧	ナデ	平		赤～赤褐色	橙～黒褐色	○	○		白粒	やや 脆い	隆帯断面は三角、内面に 炭化物付着	
	A	D-7	136	9		胴	ナデ	ナデ			明赤褐～ にぶい赤褐色	にぶい橙～ 黒褐色	○	○		白粒、 ガラス、 小礫	やや 脆い	外面に炭化物付着	
	A	D-7	137	9		底	隆帯1、ナデ、指頭 押圧	ナデ	平		赤～赤褐色	にぶい橙～ 黒褐色	○	○		白粒、 角礫	やや 脆い	隆帯断面は三角、内面に 炭化物付着	
	C-1	P-10	138	9	鉢	完形	隆帯3、ナデ、指腹 押圧	口縁キザ ミ、ナデ	平頂、 やや内湾	円丘状 上げ底	橙～黒褐色	にぶい赤褐 ～黒褐色	○	○		白粒、 円礫	やや 脆い	胴部屈曲、未完補修孔有 り、 <sup>14</sup> C補11660±70年	
	B-2	D-14	139	10		胴	隆帯2、ナデ、「ハ の字」押圧	ナデ				橙～黒褐色	にぶい橙～ 暗赤褐色	○	○		白粒、 赤粒、円礫	やや 脆い	胴部外反、隆帯断面はやや 薄い三角、21と同一個体?
90	B-2	D-14	140	10		胴	隆帯2、ナデ、「ハ の字」押圧	ナデ			暗赤褐～ 黒褐色	明赤褐色～ にぶい赤褐色	○	○		白粒、 赤粒、円礫	やや 脆い	胴部外反、隆帯断面はやや 薄い三角、21と同一個体?	
	B-2	D-14	141	10	深鉢?	胴	2隆帯融合×2、ナデ、 「ハの字」押圧	ナデ			赤～赤黒色	明赤褐色	○	○		白粒、 赤粒、円礫	やや 脆い	胴部やや屈曲、 <sup>14</sup> C補1105 0±70年、21と同一個体?	
	B-2	C-13	142	10	深鉢?	底	隆帯1、ナデ、「ハ の文」押圧	ナデ	平		明赤褐～ 暗赤灰色	橙～灰赤色	○	○	○	白粒、 赤粒、円礫	やや 脆い	胴部は底部から屈曲して 立ち上がる、21と同一個体?	
90	B-1	C-10	143	11	小鉢	口縁～ 胴	隆帯1、ナデ、 爪刻み	ナデ	平頂、 爪刻み、 やや内湾		明赤褐～ 橙色	黒褐色	○	○		白粒、 ガラス	普	薄い隆帯断面、補修孔あ り、内面に炭化物付着	
	A	C-7	144	11		口縁	隆帯1、ナデ、 工具刻み、沈線?	ナデ	舌状 刻み		橙～灰褐色	にぶい黄橙 ～灰黄褐色	○	○		雲母、 白粒	普	小片のため隆帯の施文具 は不明、断面は台形	
	A	F-5	145	12		口縁	2隆帯融合、ナデ、 指頭押圧	指跡全面	平頂		橙色	にぶい 黄褐色	△	△		白粒	普	薄い隆帯断面	
	A	F-5	146	12		口縁	2隆帯融合、ナデ、 指頭押圧	隆帯?、 ナデ	平頂		にぶい褐色	にぶい褐色	△	△		白粒	普	外面に炭化物付着、145 と同一個体	
	A	F-5	147	13-a		口縁～ 胴	2隆帯融合、ナデ、 指頭押圧	ナデ	舌状		赤褐～ 暗赤褐色	橙～ 暗赤褐色	○	◎		白粒、礫	普	ごく薄い隆帯断面	
	A	F-5	148	13-a		口縁	ナデ、爪刻み	ナデ	平頂、 爪刻み		赤～橙色	赤橙～ 暗赤褐色	○	○		白粒	普	薄い器壁	
	A	G-5	149	13-a		胴	ナデ、爪刻み	ナデ			赤褐色	赤褐色	△	△		白粒、赤粒	普	胴に直接施文	
	A	F-5	150	13-b		口縁	ナデ、爪刻み	ナデ	平頂		橙～にぶい 赤褐色	橙色	○			白粒、 マーブル	やや 脆い	爪形文	
	A	F-5	151	13-b		胴	ナデ、爪刻み	ナデ			橙～にぶい 赤褐色	橙色	○			白粒、 マーブル	やや 脆い	150と同一個体	
	A	F-7	152	14		口縁	転がし縄文	丁寧な ナデ	平頂			褐灰色	灰黄褐色	○	◎		白粒	脆い	ほとんど砂の胎土
A	G-6	153	14		胴	転がし縄文	丁寧な ナデ				褐灰色	灰黄褐色	○	◎		白粒	脆い	152と同一個体	
A	G-5	154	14		胴	隆帯1、「綾杉」状 施文	ナデ				黄褐色	にぶい 黄褐色	△	○	△	白粒、 ガラス	脆い	薄い隆帯断面、風化が 激しい	


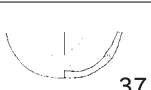

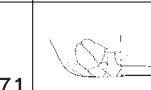

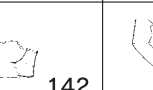
挿図	地区	区	番号	類別	器種	部位	調整・文様				色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	口唇部	底部	外面	内面	石英	長石	角閃	その他		
90	A	B-8	155	14	胴	ナデ	ナデ			橙～灰白色	黒褐色	△	△		白粒, 小礫	普	薄い器壁, 内面に炭化物	
	A	D-6	156	14	胴	ナデ	太い隆帯1, ナデ			灰褐色	にぶい黄橙～黒褐色	○	○	△	白粒, 赤粒, ガラス, 円礫	やや脆い	内面に炭化物付着	
	B-2	G-11	157	14	口縁近く	貝殻条痕3条	ナデ			明赤褐～暗赤灰色	赤褐色	○	○		白粒, 小礫	普	貝殻文, III層からの混入か?	
	B-1	B-11	158	14	胴	貝殻刺突, 条痕, ナデ	ナデ			赤褐色	黒褐色	○	○		白粒, 小礫	普	貝殻文, III層からの混入か?	
	B-2	D-14	159	14	胴	隆線1, ナデ, 楊枝状工具押圧	ナデ			橙～黒褐色	橙色	○	○		白粒, 赤粒, ガラス	普	III層からの混入か?	
91	A	D-6	160	15	胴	ナデ	ナデ			橙～灰褐色	橙～黒褐色	○	○	○	白粒, 赤粒, ガラス, 円礫	やや脆い	121と同一個体?	
	B-2	C-12	161	15	胴	ナデ	ナデ			橙～にぶい橙色	黄橙～にぶい橙色	△	○		白粒, 赤粒	やや脆い	124と同一個体?	
	A	D-7	162	15	胴	ナデ	ナデ			明赤褐～にぶい赤褐色	にぶい橙～黒褐色	○	○	△	白粒, 赤粒, 礫	やや脆い	内面に炭化物付着	
	A	D-6	163	15	胴	ナデ	ナデ			赤～橙色	赤褐～赤黒色	○	○	△	白粒, 赤粒, ガラス, 礫	脆い		
	A	D-6・7	164	15	胴	ナデ	ナデ			赤～橙色	赤褐～赤黒色	○	○	△	白粒, 赤粒, ガラス, 礫	脆い	163と同一個体	
92	A	E-7	165	15	深鉢 胴	ナデ	ナデ			橙～にぶい赤褐色	橙～灰褐色	○	○	○	白粒	普	ねじれたような印象, 42と同一個体?	
	A	E-7	166	15	深鉢 底	ナデ	ナデ	丸?		橙～にぶい赤褐色	橙～灰褐色	○	○	○	白粒	普	165と同一個体	
	A	F-5	167	15	胴	ナデ	ナデ			にぶい黄橙～明黄褐色	にぶい黄橙～灰黄褐色	○	○	○	白粒, 赤粒	やや脆い	内面に炭化物付着, 35と同一個体?	
	A	F-5	168	15	底	ナデ	ナデ	丸平		にぶい黄橙～明黄褐色	にぶい黄橙～灰黄褐色	○	○	○	白粒, 赤粒	やや脆い	内面に炭化物付着, 35と同一個体?	
	A	B-10	169	15	底	ナデ	ナデ	丸		橙～にぶい橙色	明赤褐～にぶい赤褐色	△	○	○	白粒, 赤粒	やや脆い		
	A	D-6	170	15	底	ナデ	ナデ	丸?		褐灰色～黒褐色	褐灰色～黒褐色	○	◎	○	雲母, 白粒	脆い	ほとんど砂の胎土, 風化が激しい	
	A	C-B-8	171	15	深鉢 底	ナデ	ナデ	丸平		橙～にぶい褐色	黄橙～黒褐色	○	○		白粒, 赤粒, 礫	やや脆い	内面に薄い炭化物付着, 胴部立ち上がりやや急	
	A	G-5	172	15	小鉢 底	ナデ	ナデ	丸平		にぶい橙～褐灰色	にぶい黄橙～灰黄褐色	△	△	○	白粒	普	手捏ね風だが輪積みの痕跡がある	
	B-1	C-10	173	15	底	ナデ	ナデ	変形丸平		橙～にぶい赤褐色	灰褐～褐灰色				白粒, 赤粒	脆い	マーブル状の胎土, 風化が激しい	
	A	F-5	174	15	底	ナデ	ナデ	平丸		橙色	黄橙～浅黄色	△			白粒, 赤粒, ガラス	脆い	ややマーブル状の胎土	
	注記なし	175	15	底	ナデ	ナデ	やや上げ底		にぶい橙～赤褐色	橙～褐色	○	○	○	白粒	脆い			
93	A	F-5	176	15	深鉢 胴	ナデ	ナデ			黄橙～灰褐色	橙～にぶい赤褐色	○	○	○	白粒, ガラス	普	小穴多数, 繊維の痕跡?	
	A	F-5	177	15	深鉢 底	ナデ	ナデ	平丸		黄橙	浅黄橙～橙色	○	○	○	白粒, ガラス	普	176と同一個体	
	A	D-6	178	15	深鉢 底	ナデ	ナデ	平丸		橙～にぶい橙色	橙～にぶい赤褐色	△	○		白粒, 赤粒, 小礫	やや脆い	外面に薄い炭化物付着, 胴部立ち上がりやや急	
	B-1	B-10	179	15	底	ナデ	ナデ	平丸		明赤褐～にぶい橙色	赤橙～橙色				白粒	普	ひびの入った疑似口縁を粘上で覆った痕跡	
	B-1	B-10, C-9・10	180	15	深鉢 胴～底	ナデ, 底部に放射状の調整痕	ケズリ, ナデ	やや上げ底		にぶい赤褐～灰褐色	灰褐～黒灰色	○	◎		雲母, 白粒, 角礫	脆い	大粒の角礫が多量に入った「洗い出し状」胎土, 内面に炭化物付着, 胴部立ち上がり急	

## 凡例

### 口唇部の分類

舌状	丸頂	角丸平頂	平頂
			
先端部が尖る	先端部が丸い	平らな面だが, 角が丸い	平らな面で, ほぼ四角い断面

### 底部の分類

尖底	丸	丸平	平丸	平	上げ底
					
尖る	球に近い	丸みが強い	一部が平らな面	ほぼ平ら	中央部が上がる

第8表 縄文時代草創期の石器観察表

挿図番号	番号	器種	出土区	層	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
94	181	打製石鏃	F-5	V	安山岩サ	1.5	1.2	0.3	0.46
94	182	打製石鏃	F-6	V	安山岩サ	1.4	1.4	0.4	0.50
94	183	打製石鏃	F-5	V	安山岩サ	1.4	1.3	0.3	0.40
94	184	打製石鏃	F-5	V	頁岩	1.4	1.1	0.3	0.31
94	185	打製石鏃	F-5	V	頁岩	1.4	1.2	0.3	0.40
94	186	打製石鏃	F-5	V	頁岩	1.6	1.3	0.3	0.54
94	187	打製石鏃	F-5	V	安山岩サ	2.0	1.3	0.4	0.82
94	188	打製石鏃	F-5	V	安山岩サ	1.7	1.4	0.3	0.48
94	189	打製石鏃	F-5	V	安山岩サ	1.3	1.3	0.4	0.34
94	190	打製石鏃	F-6	V	凝灰岩	2.3	1.8	0.5	1.30
94	191	打製石鏃	G-5	V	頁岩	1.8	1.3	0.4	0.52
94	192	打製石鏃	G-5	V	凝灰岩	1.8	1.1	0.4	0.29
94	193	打製石鏃	F-5	V	頁岩	1.8	1.5	0.6	0.83
94	194	打製石鏃	C-7	V	安山岩サ	1.6	1.3	0.3	0.27
94	195	打製石鏃	C-7	V	頁岩	2.3	0.8	0.3	0.54
94	196	打製石鏃	D-6	V	頁岩	4.2	1.4	0.5	2.23
94	197	打製石鏃	C-8	V	頁岩	1.9	1.7	0.4	1.18
94	198	打製石鏃	E-7	V	頁岩	2.3	1.5	0.4	1.30
94	199	打製石鏃	F-7	V	頁岩	1.7	0.9	0.4	0.44
94	200	打製石鏃	F-7	V	ホルンフェルス	3.0	0.9	0.4	0.84
95	201	楔形石器	G-5	V	頁岩	1.9	1.3	0.7	1.56
95	202	楔形石器	F-5	V	頁岩	1.8	2.2	0.7	2.30
95	203	楔形石器	F-5	V	頁岩	1.6	2.0	0.5	1.40
95	204	石核	F-5	V	頁岩	2.0	2.2	3.3	12.48
96	205	磨製石斧	F-5	V	頁岩	15.2	4.8	2.5	262.00
96	206	磨製石斧	F-5	V	頁岩	14.1	5.1	2.5	239.00
96	207	楔形石器	F-5	V	頁岩	5.9	4.5	0.9	26.00
96	208	石核	F-5	V	凝灰岩	6.4	4.4	2.2	65.40
96	209	石核	F-5	V	頁岩	1.6	2.6	1.0	4.69
96	210	パンチ	F-5	V	砂岩	4.4	3.9	1.4	28.90
96	211	磨製石斧	F-5	V	頁岩	10.5	5.4	2.6	222.00
97	212	磨石・敲石	D-7	V	砂岩	10.7	6.0	6.3	625.00
97	213	磨石	D-7	V	砂岩	14.6	8.7	5.0	760.00
97	214	磨石	D-7	V	砂岩	11.5	7.6	6.6	720.00
97	215	敲石	F-6	V	砂岩	16.2	8.0	5.1	625.00
98	216	敲石	F-5	V	砂岩	12.6	9.6	4.9	625.00
98	217	敲石	F-5	V	砂岩	11.1	8.1	4.8	625.00
98	218	敲石	F-5	V	砂岩	12.5	8.3	4.7	610.00
98	219	敲石	G-5	V	砂岩	8.5	4.3	4.5	228.00
98	220	磨石・敲石	F-5	V	砂岩	9.9	8.2	7.0	650.00
99	221	敲石	G-5	V	砂岩	9.6	8.5	8.0	760.00
99	222	磨石・敲石	G-5	V	砂岩	10.3	9.2	7.1	880.00
99	223	敲石	F-5	V	砂岩	14.5	7.3	6.2	870.00
99	224	磨石・敲石	D-7	V	砂岩	14.7	8.0	6.0	660.00
100	225	磨石	D-7	V	砂岩	6.6	5.5	2.2	80.00
100	226	敲石	F-5	V	砂岩	7.0	6.3	4.5	240.00
100	227	磨石・敲石	D-6	V	砂岩	9.8	9.1	4.5	530.00
100	228	磨石	D-7	V	砂岩	12.4	9.7	5.5	990.00
100	229	磨石・敲石	F-5	V	砂岩	10.7	7.2	4.4	485.00
100	230	磨石・敲石	G-4	V	花崗岩	9.9	9.6	3.1	485.00
101	231	敲石	F-5	V	砂岩	12.7	9.0	6.0	690.00
101	232	敲石	F-5	V	砂岩	8.1	6.2	2.4	155.00
101	233	敲石	F-5	V	砂岩	5.6	5.1	4.7	179.00
101	234	敲石	D-8	V	砂岩	8.0	6.1	2.2	125.00
101	235	敲石	E-7	V	砂岩	7.9	5.3	3.7	210.00
101	236	敲石	F-5	V	砂岩	5.4	5.8	4.5	190.00
102	237	磨石・敲石	D-7	V	砂岩	10.0	11.4	5.7	610.00
102	238	敲石	F-5	V	砂岩	13.4	10.7	7.4	1,210.00
102	239	敲石	F-5	V	砂岩	15.0	13.0	5.7	1,265.00
103	240	敲石	F-6	V	砂岩	15.5	11.4	7.0	1,570.00
103	241	敲石	F-5	V	砂岩	11.3	3.9	2.3	120.00
103	242	敲石	G-5	V	砂岩	12.7	3.4	2.3	120.00
103	243	敲石	F-5	V	砂岩	8.8	5.9	2.9	130.00
103	244	敲石	G-5	V	砂岩	5.8	3.1	3.3	70.00
104	245	敲石	G-5	V	砂岩	4.6	3.6	2.8	55.00

挿図番号	番号	器種	出土区	層	石 材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
104	246	小型磨石	F-5	V	砂岩	4.0	3.8	2.4	40.00
104	247	敲石	F-5	V	砂岩	4.9	4.1	1.9	45.00
104	248	敲石	G-5	V	砂岩	3.9	2.6	2.4	35.00
104	249	敲石	G-5	V	砂岩	2.9	2.7	2.1	20.00
104	250	磨石	G-5	V	砂岩	2.1	2.8	2.1	20.00
104	251	小型磨石・敲石	G-5	V	砂岩	4.5	3.3	3.2	50.00
104	252	小型磨石	F-5	V	砂岩	4.4	2.9	2.7	40.00
104	253	磨石	F-5	V	砂岩	3.6	3.9	2.8	45.00
104	254	磨石・敲石	B-8	V	砂岩	3.9	2.9	2.3	30.00
104	255	敲石	G-5	V	砂岩	3.3	2.3	2.5	44.05
104	256	敲石	G-5	V	砂岩	3.5	3.5	2.0	29.54
105	257	砥石	F-5	V	砂岩	19.9	16.0	11.3	2,900.00
105	258	砥石	C-8	V	砂岩	22.1	22.6	6.4	3,100.00
105	259	砥石	D-7	V	砂岩	17.7	9.9	11.5	2,100.00
105	260	砥石	F-5	V	砂岩	9.5	12.9	8.2	1,370.00
105	261	砥石	G-5	V	砂岩	10.3	9.1	4.6	557.00
106	262	砥石	F-5	V	砂岩	11.8	8.5	8.8	1,050.00
106	263	砥石	F-5	V	砂岩	20.0	11.3	6.5	1,800.00
106	264	砥石	D-6	V	砂岩	10.1	9.7	8.2	1,285.00
106	265	砥石	G-6	V	砂岩	17.4	13.3	5.0	1,400.00
107	266	石皿	D-7	V	砂岩	47.5	36.4	6.5	10,300.00
108	267	礫器	F-7	V	砂岩	20.5	33.3	9.0	4,400.00
108	268	石皿	F-5	V	砂岩	25.1	19.1	6.2	2,900.00
109	269	石皿	D-7	V	砂岩	35.7	24.1	5.3	4,800.00
109	270	石皿	F-5	V	砂岩	35.6	22.1	4.9	5,200.00
110	271	石皿	F-5	V	砂岩	24.0	11.4	8.1	2,100.00
110	272	石皿	F-5	V	砂岩	38.7	23.9	12.2	10,000.00
110	273	石皿	F-5	V	砂岩	21.5	13.4	5.9	2,100.00
111	274	礫器	F-7	V	砂岩	10.4	13.3	4.0	545.00
111	275	礫器	D-6	V	砂岩	10.5	7.5	3.2	350.00
111	276	礫器	F-5	V	頁岩	5.0	7.4	3.3	132.69
111	277	礫器	D-6	V	砂岩	7.0	10.3	3.4	179.68
111	278	礫器	C-5	V	砂岩	4.0	8.7	8.4	327.80
112	279	打製石鏃	C-8	V	黒曜石桑	1.4	1.1	0.4	0.31
112	280	打製石鏃	C-8	V	黒曜石桑	1.4	1.1	0.4	0.44
112	281	打製石鏃	C-8	V	安山岩サ	1.2	1.5	0.3	0.21
112	282	打製石鏃	B-10	V	頁岩	1.3	1.1	0.3	0.26
112	283	打製石鏃	B-11	V	チャート	1.9	1.5	0.5	1.04
112	284	打製石鏃	B-11	V	安山岩サ	1.7	1.3	0.5	0.72
112	285	打製石鏃	C-9	V	砂岩	1.9	1.4	0.3	0.84
112	286	打製石鏃	B-11	V	チャート	1.6	1.6	0.4	0.72
112	287	打製石鏃	C-11	V	チャート	1.8	2.0	0.5	1.24
112	288	打製石鏃	B-11	V	チャート	1.8	1.5	0.5	0.74
112	289	打製石鏃	B-11	V	チャート	1.8	1.7	0.6	1.29
112	290	打製石鏃	B-11	V	ホルンフェルス	1.8	1.4	0.4	0.98
112	291	打製石鏃	D-13	V	黒曜石姫	2.3	1.9	0.5	1.13
112	292	磨製石鏃	B-10	V	ホルンフェルス	0.3	0.9	0.4	0.96
112	293	打製石鏃	B-11	V	安山岩サ	2.5	1.1	0.6	1.43
112	294	打製石鏃	B-10	V	頁岩	2.8	1.1	0.4	1.06
112	295	打製石鏃	B-10	V	頁岩	3.3	1.0	0.6	1.12
112	296	打製石鏃	C-10	V	粘板岩	2.6	1.3	0.5	1.36
112	297	打製石鏃	C-10	V	凝灰岩	2.1	1.2	0.4	0.97
112	298	打製石鏃	C-10	V	頁岩	2.6	1.4	0.5	1.27
112	299	打製石鏃	C-10	V	頁岩	2.9	1.7	0.5	1.90
112	300	石鏃未製品	C-10	V	頁岩	2.2	1.8	0.6	1.62
112	301	打製石鏃	C-10	V	頁岩	2.0	1.3	0.3	0.94
113	302	磨製石鏃	B-10	V	頁岩	3.6	1.6	0.2	1.23
113	303	磨製石鏃	C-8	V	ホルンフェルス	1.8	1.4	0.3	0.44
113	304	磨製石鏃	C-8	V	頁岩	0.7	1.1	0.2	0.16
113	305	磨製石鏃	C-11	V	頁岩	2.4	1.5	0.2	0.69
113	306	局部磨製石鏃	D-13	V	頁岩	2.1	1.4	0.3	0.98
114	307	石核	C-10	V	砂岩	5.4	7.5	5.8	232.81
114	308	剥片	C-10	V	砂岩	5.2	4.3	1.6	34.36
114	309	剥片	C-10	V	砂岩	3.3	3.5	0.9	8.53
114	310	剥片	C-10	V	砂岩	4.3	3.5	1.2	17.82
115	311	石核	C-9	V	砂岩	3.5	6.3	6.7	200.72



挿図番号	番号	器種	出土区	層	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
115	312	剥片	C-9	Ⅲ	砂岩	3.0	4.3	0.7	9.70
116	313	石核	C-10	V	ホルンフェルス	3.5	8.2	6.8	237.37
116	314	剥片	C-10	V	ホルンフェルス	2.2	4.7	1.8	13.28
116	315	剥片	C-10	V	ホルンフェルス	4.1	5.3	1.3	32.77
117	316	石核	B-10	V	砂岩	4.1	7.7	7.6	32.78
117	317	剥片	C-10	V	砂岩	5.5	4.4	1.7	278.32
117	318	剥片	C-10	V	砂岩	6.1	6.3	2.4	62.74
117	319	剥片	C-9	Ⅲ	砂岩	3.8	4.1	1.2	14.25
118	320	剥片	C-10	V	砂岩	4.2	3.5	1.5	21.14
118	321	剥片	C-10	V	砂岩	3.1	1.7	0.9	3.31
118	322	剥片	C-10	V	砂岩	2.9	1.9	1.1	4.58
118	323	剥片	C-10	V	砂岩	2.3	1.7	0.6	2.25
118	324	剥片	C-10	V	砂岩	4.1	4.4	1.3	22.88
118	325	剥片	C-10	V	砂岩	3.8	3.7	1.2	11.80
118	326	剥片	C-10	V	砂岩	4.0	4.5	1.4	20.45
118	327	剥片	C-10	V	砂岩	5.8	3.3	1.9	17.19
119	328	剥片	C-13	V	砂岩	4.4	3.4	1.1	18.26
119	329	剥片	C-13	V	砂岩	3.8	3.5	1.0	13.92
119	330	剥片	C-13	V	砂岩	5.0	4.1	1.2	30.18
119	331	剥片	C-13	V	砂岩	2.9	3.2	1.2	11.83
119	332	剥片	C-10	V	頁岩	4.9	5.0	1.5	27.35
119	333	剥片	C-10	V	頁岩	4.4	6.0	1.2	21.86
119	334	剥片	C-10	V	頁岩	2.9	2.3	0.8	3.56
120	335	剥片	C-9	V	硬質砂岩	3.1	3.3	1.6	12.98
120	336	剥片	C-9	Ⅲ	硬質砂岩	2.9	3.4	2.0	15.95
120	337	剥片	C-9	V	硬質砂岩	3.8	2.6	1.9	18.33
120	338	剥片	C-9	V	硬質砂岩	2.0	2.9	1.0	3.54
120	339	石核	C-9	Ⅲ	硬質砂岩	2.4	3.4	2.3	17.32
120	340	剥片	C-9	V	硬質砂岩	2.6	2.3	1.0	4.50
120	341	剥片	C-10	V	頁岩	3.8	8.6	0.9	29.47
120	342	剥片	C-10	V	頁岩	3.0	6.8	1.0	14.40
121	343	石核	B-10	V	砂岩	6.1	10.9	7.9	546.00
121	344	石核	C-10	V	砂岩	3.8	8.6	7.3	328.63
122	345	石核	C-10	V	砂岩	4.0	8.7	6.8	298.21
122	346	石核	C-10	V	砂岩	4.6	7.1	5.5	188.66
122	347	石核	C-10	V	砂岩	4.7	6.8	5.7	214.70
123	348	石核	B-11	V	砂岩	5.2	9.0	9.0	540.00
123	349	石核	C-10	V	砂岩	4.7	7.8	10.8	490.00
123	350	石核	D-12	V	砂岩	5.0	7.5	7.6	271.79
124	351	石核	B-10	V	砂岩	5.8	6.3	7.6	300.00
124	352	石核	C-10	V	砂岩	4.6	7.4	6.2	254.26
124	353	石核	B-11	V	砂岩	5.6	9.2	5.7	350.00
125	354	石核	B-10	V	砂岩	5.6	9.6	6.7	400.00
125	355	石核	B-11	V	砂岩	4.0	6.2	7.2	147.00
125	356	石核	C-10	V	砂岩	4.8	7.8	6.6	280.28
126	357	石核	C-10	V	頁岩	5.8	9.5	7.7	480.00
126	358	石核	D-12	V	頁岩	2.9	8.2	7.0	229.28
127	359	石核	B-10	V	ホルンフェルス	4.8	10.0	6.7	313.41
127	360	石核	C-10	V	ホルンフェルス	4.7	9.0	8.0	440.00
128	361	石核	B-12	V	砂岩	5.4	6.8	8.0	288.00
128	362	石核	B-11	V	凝灰岩質	3.8	5.5	1.9	40.30
129	363	礫器	B-12	V	砂岩	5.2	7.9	3.8	187.28
129	364	礫器	C-8	V	砂岩	7.5	9.9	2.4	151.18
130	365	石皿	C-10	V	砂岩	22.9	18.6	6.5	3,530.00
130	366	砥石	C-8	V	砂岩	8.9	6.9	5.6	440.00
131	367	磨石	D-14	V	砂岩	8.6	7.5	3.2	280.00
131	368	磨石	D-14	V	砂岩	10.0	6.3	3.3	300.00
131	369	敲石	D-14	V	砂岩	9.3	7.3	3.2	250.00
131	370	敲石	C-13	V	砂岩	7.2	6.6	4.9	275.00
131	371	研磨石製品	B-12	V	安山岩	14.5	5.1	1.3	161.00
131	372	研磨石製品	C-10	V	砂岩	10.6	3.2	1.4	80.24
132	373	剥片	B-10	V	砂岩	21.0	14.4	18.0	615.00
132	374	磨石	K-9	V	砂岩	14.1	9.8	8.2	1,640.00
132	375	礫器	K-9	V	砂岩	6.9	10.6	3.0	185.00



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(96)  
新種子島空港建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

## 三角山遺跡群(3)

(三角山 I 遺跡)

### 第1分冊 縄文時代草創期編

発行日 2006年1月10日

発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-4318  
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号  
TEL (0995) 48-5811

印刷所 渕上印刷株式会社  
〒892-0845  
鹿児島県鹿児島市樋之口町6-6  
TEL (099) 225-2727